

石関西田Ⅱ遺跡

県立前橋工業高等学校移転整備工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

石関西田Ⅱ遺跡

県立前橋工業高等学校移転整備工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



遺跡上空から東城山南麓を望む（南西から）



B 2 区 2 面 4 号壁穴住居As-B堆積状況（西から）ペルト上層がAs-Bの一次堆積層



D 2 区 I 地点 Hr-FP泥流とHr-FA堆積状況（南東から）

序

群馬県は「坂東太郎」の異名をとる、流域面積日本一の「利根川」が南北に流れています。この利根川は今でこそ現在の位置を流れていますが、中世以前には、遺跡が所在する前橋市石関町を含めた幅約3km、長さ約30kmに及ぶ「広瀬川低地帯」を流れていたものと考えられています。

県内にはその他にも数多くの中小河川が網目状に大地を刻み、これら河川の豊かな水は、昔から県内外の農業や工業を支え、今でも私たちの日常生活になくてはならないものとなっています。

今回、群馬県教育委員会が県立前橋工業高等学校を移転建設することになり、その工事に先立って埋蔵文化財の発掘調査が実施されました。それが石関西田Ⅱ遺跡です。

古墳時代に降り積もった榛名山の火山灰の下からは、当時の人たちが歩いた道跡が、また平安時代に降った浅間山の火山灰の下からは、同時代の竪穴住居や水田跡が見つかりました。この他にも平安時代から中・近世にかけての畠、溝、土坑、井戸などの遺構も数多く発見され、当時の人々の広瀬川低地帯での生活を窺い知る貴重な資料が得られたのも大きな成果と言えます。

ここにこの成果を一日も早く公開するために今年度整理事業を実施し、その成果がまとまりましたので、本報告書を刊行する運びとなりました。

最後になりましたが、調査ならびに報告書作成に際してお世話になりました群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の方々には種々、ご指導、ご協力を賜りました。今回報告書を上梓するに際しまして、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、あわせて本報告書が群馬県の歴史を解明するための資料の一助として活用されることを願い序とします。

平成14年9月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野 宇三郎

例 言

1. 本書は県立前橋工業高等学校移転整備工事に伴う石関西田Ⅱ遺跡（いしぜきにしだⅡ、ISIZEKI-NISIDAⅡ SAITE）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 石関西田Ⅱ遺跡は、群馬県前橋市石関町76番地1、113番地、137番地1に所在する。遺跡名は、大字名に相当する「石関」と小字名に相当する「西田」に因んで「石関西田」と表記し、また、既に試掘調査が終了し「平成11年度 文化財調査報告書 第30集」の中に記載されている前橋市教育委員会届出の「石関西田遺跡」とを区別するために便宜的にローマ数字のⅡを付した。
3. 発掘調査と整理事業は、群馬県教育委員会の委託を受けて（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 調査及び整理の実施期間は以下のとおりである。

発掘調査 平成12年11月15日～平成13年6月30日

整理事業 平成14年4月1日～平成14年9月30日

5. 調査面積 19,772㎡（延べ面積 39,544㎡）

6. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団の当時の調査体制は以下のとおりである。

理事長 小野宇三郎

常務理事 吉田 豊

常務理事 赤山容造

管理部長 住谷 進

調査研究第1部長 水田 稔

総務課長 大島信夫

調査研究第1課長 真下高幸

調査担当 坂口 一〔平成12年度（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 主幹兼専門員〕

根岸 仁〔平成12・13年度 同 上 専門員〕

本間 昇〔平成13年度 同 上 主任調査研究員〕

小林 徹〔平成13年度 同 上 主任調査研究員〕

西原和久〔平成12年度 同 上 調査研究員〕

事務担当 笠原秀樹 須田朋子 大島信夫 小山健夫 吉田有光 森下弘美 片岡徳雄

7. 本書作成の担当は以下のとおりである。

編集 根岸 仁（編者以外の文責は文頭又は文末に記した）

本文執筆 根岸 仁 飯島静男（群馬地質研究会）（株）古環境研究所

遺構写真 坂口 一 根岸 仁 本間 昇 小林 徹 西原和久

遺物写真 佐藤元彦〔（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 主幹兼係長代理〕

遺物観察 根岸 仁（須恵器・土師器・石類他）〔（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 専門員〕

坂口 一（須恵器・土師器）〔（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 主幹兼専門員〕

遺物実測・図版作成 新井悦子〔整理嘱託員〕 大塚とし子〔整理補助員〕 萩原鈴代〔同〕

阿部幸恵〔同〕 武永いち〔同〕

委託関係 空測・空中写真＝技研測量株式会社 テフラ・植物建醜体分析＝（株）古環境研究所

地上測量＝株式会社横田調査設計 石材鑑定＝飯島静男氏〔群馬地質研究会〕

8. 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の諸機関、諸氏に御教示、御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。また、発掘作業に従事していただいた方々には、敬称を記しませんか感謝いたします。
群馬県教育委員会（管理部管理課・文化財保護課） 前橋市教育委員会 事務補助員・作業員各位
9. 出土遺物は一括して、群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。


凡 例

1. 本報告書に使用した地勢図及び地形図は、国土地理院発行20万分の1「宇都宮」「長野」、5万分の1「前橋」、前橋市都市計画区域図2千5百分の1を等倍及び縮小して使用した。
2. 挿図中の北方位は座標北を示す。
3. 挿図中の「L=○○m」は、遺構断面図の水糸標高を示す。
4. 本調査の記録に使用したグリッドは5m四方で、南東交点をその呼称としている。
5. 本書に記載の埴名山、浅間山を給源とする火山灰、軽石の正式名称、略称、降下年代及び土層断面図で使用したスクリーン・トーンは以下のとおりである。

埴名二ツ岳沓川テフラ(Hr-S) = FA+FPF-I 6世紀初頭(第1四半期頃) 

埴名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-I) = FP+FPF-II 6世紀中葉(第2四半期頃)

浅間C軽石(As-C) = 3世紀終末

浅間B軽石(As-B) = 天仁元年(1108年) 

浅間-粕川テフラ(As-Kk) = 大治3年(1128年、推定)

浅間A軽石(As-A) = 天明3年(1783年)

6. 調査における遺構確認面と遺構は以下のとおりである。

- 1面 浅間B軽石(As-B)及びAs-B混土下面(As-B混土下水田・As-B下水田・畠・溝・土坑・井戸・旧河道)
- 2面 浅間C軽石(As-C)混土下面(古墳時代の踏み分け道・平安時代の竪穴住居・畠・溝・土坑・井戸・旧河道)

7. 挿図の縮尺は以下のとおりである。

全体図(付図) = 1:500 平面図・断面図 = 1:30 1:40 1:60 1:80 1:120 1:160 1:180 1:400

8. 遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。なお、遺物写真の図版倍率は、実測図の縮尺に準じた。

土器 = 1:3 1:8 石類(砥石) = 1:3

9. 土層断面及び遺物観察表中の色調は、旧農林水産省農林水産技術会議事務局監修(財)日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」を参考にした。

10. 住居面積の計算には、1/30平面図において、プランニメーター(ローラー極式・レンズ式)による3回計測平均値を用い、小数点以下第2位を四捨五入して掲載した。

11. 遺構平面図・遺物実測図中で使用したスクリーン・トーンは以下のとおりである。

焼土・灰  硬化面  黒色土器  軸軸 

目 次

口 絵	◇B2区 7号溝	34
序	◇B2区 8・9・10号溝	35
例 言	◇B2区 11・12号溝	36
凡 例	◇B2区 13・14号溝	38
目 次	◇B2区 15・16号溝	39
挿図目次	◇B2区 17・18号溝	40
写真目次	◇B2区 19号溝	41
第1図	◇B2区 20・21号溝	42
第1章 発掘調査の経緯	◇B2区 31号溝	43
1. 調査に至る経緯	(4) 土坑	
2. 調査の方法と経過	◇B2区 2号土坑	44
3. 基本土層	(5) 井戸	
第2章 遺跡の環境	◇A3区 1号井戸	44
1. 遺跡の立地と環境	◇D4区 3号井戸	45
2. 周辺の遺跡と環境	3. 2面の調査(古墳時代～12世紀の遺構と遺物)	
周辺遺跡一覧	(1) 踏み分け道	
第3章 遺跡の概要	◆A2区 1号踏み分け道	47
◇=1面の遺構 ◆=2面の遺構	◆A3・D5区 2号踏み分け道、B2区 3号踏み分け道	48
1. 検出したテフラと調査面	(2) 竪穴住居	
2. 1面の調査(平安時代～中近世の遺構と遺物)	◆A2区 14号竪穴住居	50
(1) 水田	◆A3区 12号竪穴住居	51
◇A1区 1号As-B下水田	◆B1区 1号竪穴住居	52
◇B1区 2号As-B混土下水田	◆B2区 2号竪穴住居	54
◇D2区 3号As-B下水田	◆B2区 3号竪穴住居	56
◇D3区 4号As-B下水田	◆B2区 4号竪穴住居	59
(2) 畠	◆B2区 5号竪穴住居	61
◇A2区 1号畠	◆B2区 6号竪穴住居	63
◇B1区 2号畠	◆B2区 7号竪穴住居	65
(3) 溝	◆B2区 8号竪穴住居	69
◇A1区 24号溝	◆B2区 9号竪穴住居	70
◇A2区 25・26号溝	◆B2区 10号竪穴住居	73
◇A2区 27号溝	◆B2区 11号竪穴住居	75
◇B1区 1号溝	◆B2区 13号竪穴住居	77
◇B1区 2号溝、B2区 4号溝	◆D5区 16号竪穴住居	78
◇B2区 5号溝	◆D6区 15号竪穴住居	81
◇B2区 6号溝		

(3) 冢	
◆A 2 区 3 号冢	83
◆A 2 区 4 号冢	84
◆A 3・D 5 区 5 号冢	85
◆A 3 区 6 号冢、B 1 区 7 号冢	86
◆B 2 区 8・9 号冢	87
◆B 2 区 10・11 号冢	87
(4) 溝	
◆A 2 区 32・33 号溝	89
◆A 3・D 5 区 28 号溝	90
◆A 3・D 5 区 29・30 号溝	91
◆B 1・2 区 3 号溝、B 2 区 22 号溝	93
◆B 2 区 23 号溝	94
◆C 区 34 号溝、D 2 区 41 号溝	95
◆D 4 区 35・36 号溝	96
◆D 4 区 37・38 号溝	97
◆D 4 区 39・40 号溝	98
(5) 土坑	
◆A 2 区 3・4・5 号土坑	99
◆A 2 区 6・7・8・9 号土坑	101
◆A 2 区 10・11・12・13 号土坑	102
◆A 2 区 14・15 号土坑	103
◆A 2 区 16・17 号土坑、B 1 区 1 号土坑	104
◆D 2 区 22 号土坑、D 4 区 18・19 号土坑	105
◆D 4 区 20・21 号土坑	106
(6) 井戸	
◆A 3 区 2 号井戸、D 6 区 4 号井戸	107
4. 遺構外出土遺物	108
第 4 章 自然科学分析	
1. 石関西田Ⅱ遺跡の土層とテフラ分析	110
(株)古環境研究所	
2. 石関西田Ⅱ遺跡の植物珪酸体(プラント・オパール)分析	124
(株)古環境研究所	
3. 石関西田Ⅱ遺跡の旧河道跡について	139
飯島 静男(群馬地質研究会)	
第 5 章 まとめ	140

表 1 テフラ検出分析結果(1)	121
表 2 テフラ検出分析結果(2)	122
表 3 屈折率測定結果(1)	123
表 4 屈折率測定結果(2)	123
表 5 石関西田Ⅱ遺跡におけるプラント・オパール分析結果	130
表 6 石関西田Ⅱ遺跡における A 地点・B 地点の礫組成	139

遺物観察表

〈土器〉	147
〈石類〉	154

写真図版

〈遺構〉	写真図版 1
〈土器・石類〉	写真図版 31
報告書抄録	

挿図目次

第 1 図	石岡西田Ⅱ道路の開削範囲	
第 2 図	調査区・試験トレンチ設定図	1
第 3 図	A 1 区低地部基本土層柱状図	5
第 4 図	B 2 区低地部基本土層柱状図	5
第 5 図	D 2 区低地部基本土層柱状図	6
第 6 図	Hr-FA、Fr-PP、As-Bの降下範囲	7
第 7 図	遺跡位置図	8
第 8 図	石岡西田Ⅱ遺跡と周辺の遺跡	10
第 9 図	B 1 区 1 面 2号As-B混上下水田平面図	21
第 10 図	D 2 区 1 面 3号As-B下水田、2号畦平面図	22
第 11 図	D 3 区 1 面 4号As-B下水田、3号畦平面図・土層断面図	23
第 12 図	A 2 区 1 面 1号高平面図	24
第 13 図	B 1 区 1 面 2号高平面図・土層断面図	25
第 14 図	A 1 区 1 面 24号溝平面図・土層断面図	26
第 15 図	A 2 区 1 面 25号溝平面図・土層断面図	27
第 16 図	A 2 区 1 面 26号溝平面図・土層断面図	28
第 17 図	A 2 区 1 面 27号溝平面図・土層断面図	28
第 18 図	B 1 区 1 面 1号溝平面図・土層断面図	29
第 19 図	B 1 区 1 面 2号溝平面図・土層断面図	30
第 20 図	B 2 区 1 面 4号溝土層断面図	31
第 21 図	B 2 区 1 面 4号溝出土遺物	31
第 22 図	B 2 区 1 面 5号溝平面図・土層断面図	32
第 23 図	B 2 区 1 面 6号溝平面図・土層断面図	33
第 24 図	B 2 区 1 面 7号溝平面図	34
第 25 図	B 2 区 1 面 8・9号溝土層断面図	35
第 26 図	B 2 区 1 面 10・11号溝平面図・土層断面図	36
第 27 図	B 2 区 1 面 4・12号溝平面図・土層断面図・出土遺物	37
第 28 図	B 2 区 1 面 13・14号溝平面図・土層断面図・出土遺物	38
第 29 図	B 2 区 1 面 15・16号溝平面図・土層断面図	39
第 30 図	B 2 区 1 面 17・18号溝平面図・土層断面図	40
第 31 図	B 2 区 1 面 19号溝平面図・土層断面図	41
第 32 図	B 2 区 1 面 20号溝平面図	42
第 33 図	B 2 区 1 面 21号溝平面図・土層断面図・出土遺物	43
第 34 図	B 2 区 1 面 2号土坑平面図・土層断面図	44
第 35 図	A 3 区 1 面 1号井戸平面図・土層断面図	44
第 36 図	A 3 区 1 面 1号井戸出土遺物	45
第 37 図	D 4 区 1 面 3号井戸平面図・土層断面図・エレベーション図・出土遺物	46
第 38 図	A 3・D 5 区 2 面 2号踏み分け道平面図・土層断面図・Hr-FA下硬化面平面図	49
第 39 図	A 2 区 2 面 14号竪穴住居平面図・土層断面図・掘方平面図・出土遺物	50
第 40 図	A 2 区 2 面 14号竪穴住居カマド使用面・掘方平面図	
		51
第 41 図	A 3 区 2 面 12号竪穴住居平面図・土層断面図・カマド使用面平面図	52
第 42 図	B 1 区 2 面 1号竪穴住居平面図・土層断面図・カマド使用面平面図・出土遺物	53
第 43 図	B 2 区 2 面 2号竪穴住居平面図・土層断面図・掘方平面図	54
第 44 図	B 2 区 2 面 2号竪穴住居カマド使用面・掘方平面図・出土遺物(1)	55
第 45 図	B 2 区 2 面 2号竪穴住居出土遺物(2)	56
第 46 図	B 2 区 2 面 3号竪穴住居平面図・土層断面図・掘方平面図・カマド使用面・掘方平面図	57
第 47 図	B 2 区 2 面 3号竪穴住居カマド掘方平面図・出土遺物(1)	58
第 48 図	B 2 区 2 面 3号竪穴住居出土遺物(2)	59
第 49 図	B 2 区 2 面 4号竪穴住居平面図・土層断面図・カマド掘方平面図・出土遺物	60
第 50 図	B 2 区 2 面 5号竪穴住居平面図・土層断面図・掘方平面図	61
第 51 図	B 2 区 2 面 5号竪穴住居カマド平面図・出土遺物(1)	62
第 52 図	B 2 区 2 面 5号竪穴住居出土遺物(2)	63
第 53 図	B 2 区 2 面 6号竪穴住居平面図・土層断面図・カマド使用面・掘方平面図	64
第 54 図	B 2 区 2 面 6号竪穴住居出土遺物	65
第 55 図	B 2 区 2 面 7号竪穴住居平面図・土層断面図・掘方平面図・カマド使用面・掘方平面図	66
第 56 図	B 2 区 2 面 7号竪穴住居出土遺物(1)	67
第 57 図	B 2 区 2 面 7号竪穴住居出土遺物(2)	68
第 58 図	B 2 区 2 面 8号竪穴住居平面図・土層断面図・出土遺物	

物	69	第90図	D 4区2面	37・38号溝平面図・土層断面図	97			
第59図	B 2区2面	8号型穴住居カマド使用面・掘方平面図	70	第91図	D 4区2面	39・40号溝平面図・土層断面図	98	
第60図	B 2区2面	9号型穴住居平面図・土層断面図・カマド使用面平面図	71	第92図	A 2区2面	3号土坑平面図・土層断面図	99	
第61図	B 2区2面	9号型穴住居掘方平面図・カマド掘方平面図・出土遺物	72	第93図	A 2区2面	4・5号土坑平面図・土層断面図	99	
第62図	B 2区2面	10号型穴住居平面図・土層断面図	73	第94図	A 2区2面	6・7・10・11・17号土坑平面図・土層断面図	100	
第63図	B 2区2面	10号型穴住居掘方平面図・出土遺物・カマド使用面・掘方平面図	74	第95図	A 2区2面	8号土坑平面図・土層断面図	101	
第64図	B 2区2面	11号型穴住居平面図・土層断面図・掘方平面図	75	第96図	A 2区2面	9号土坑平面図・土層断面図	102	
第65図	B 2区2面	11号型穴住居カマド使用面・掘方平面図・出土遺物	76	第97図	A 2区2面	12号土坑平面図・土層断面図	102	
第66図	B 2区2面	13号型穴住居平面図・土層断面図・掘方平面図・カマド使用面・掘方平面図	77	第98図	A 2区2面	13号土坑平面図・土層断面図	103	
第67図	B 2区2面	13号型穴住居出土遺物	78	第99図	A 2区2面	14号土坑平面図・土層断面図	103	
第68図	D 5区2面	16号型穴住居平面図・土層断面図・掘方平面図	79	第100図	A 2区2面	15号土坑平面図・土層断面図	103	
第69図	D 5区2面	16号型穴住居カマド使用面・掘方平面図	80	第101図	A 2区2面	16号土坑平面図・土層断面図	104	
第70図	D 5区2面	16号型穴住居出土遺物	81	第102図	B 1区2面	1号土坑平面図・土層断面図・出土遺物	104	
第71図	D 6区2面	15号型穴住居カマド位置図・土層断面図・カマド使用面平面図	82	第103図	D 2区2面	22号土坑平面図・土層断面図・出土遺物	105	
第72図	A 2区2面	3号島平面図	83	第104図	D 4区2面	18号土坑平面図・土層断面図	105	
第73図	A 2区2面	4号島平面図	84	第105図	D 4区2面	19号土坑平面図・土層断面図	106	
第74図	A 3・D 5区2面	5号島平面図・土層断面図	85	第106図	D 4区2面	20号土坑平面図・土層断面図	106	
第75図	A 3区2面	6号島・B 1区2面	7号島平面図	86	第107図	D 4区2面	21号土坑平面図・土層断面図	106
第76図	B 2区2面	8号島平面図	87	第108図	A 3区2面	2号井戸平面図・土層断面図	107	
第77図	B 2区2面	9号島平面図・土層断面図	87	第109図	D 6区2面	4号井戸平面図・土層断面図	107	
第78図	B 2区2面	10号島平面図	88	第110図	遺構外出土遺物1)	108		
第79図	C区2面	11号島平面図	88	第111図	遺構外出土遺物2)	109		
第80図	A 2区2面	32号溝平面図・土層断面図	89	第112図	A・C・D地点の土層柱状図	117		
第81図	A 2区2面	33号溝平面図・土層断面図	89	第113図	F・G地点の土層柱状図	118		
第82図	A 3・D 5区2面	28号溝平面図・土層断面図	90	第114図	H・I地点の土層柱状図	119		
第83図	A 3・D 5区2面	29・30号溝平面図・土層断面図	92	第115図	J・K地点の土層柱状図	120		
第84図	B 1・2区2面	3号溝土層断面図	93	第116図	A地点における植物残骸体分析結果	131		
第85図	B 2区2面	22号溝土層断面図・出土遺物	94	第117図	C地点における植物残骸体分析結果	132		
第86図	B 2区2面	23号溝平面図・土層断面図	94	第118図	D地点における植物残骸体分析結果	133		
第87図	C区2面	34号溝平面図・土層断面図	95	第119図	F・B・E地点における植物残骸体分析結果	134		
第88図	D 2区2面	41号溝平面図・土層断面図	96	第120図	H・J地点における植物残骸体分析結果	135		
第89図	D 4区2面	36・38号溝平面図・土層断面図	96	第121図	I地点における植物残骸体分析結果	136		
				第122図	A地点・B地点における礫組成	139		
				第123図	A 1区	24号溝平面図	140	
				第124図	石岡西田Ⅱ遺跡の土器編年図	141		
				第125図	B 2区	4号型穴住居・土層断面図	142	
				第126図	浪志江中野面遺跡	A区41号住居・土層断面図	142	
				第127図	D 2区	低地部確認地点・土層断面図	143	

写真目次

〔口絵カラー〕

道跡上空から赤城山南麓を望む(南西から)	
B 2 区 2 画 4 号整穴住居As-B埋積状況(西から)	
D 2 区 1 地点 Hr-FP泥流とHr-F A埋積状況(南東から)	
基本土層写真(A 1 区低地部北壁)	5
基本土層写真(B 2 区低地部西壁)	5
基本土層写真(D 2 区低地部北壁)	6
《植物標本(プラント・オパール)の顕微鏡写真1》	137

1. イネ D地点 2	
2. イネ(側面) D地点 1	
3. キビ族型 A地点 6	
4. キビ族型 A地点 3	
5. コシ族 A地点 5	
6. スキ族型 C地点 1	
7. ウシクサ族 A C地点 3	
8. シバ族 A地点 6	
9. イネ科Aタイプ C地点 2	
10. ネザサ節型 A地点 1	
11. クマザサ属型 C地点 1	
12. ミヤコザサ節型 C地点 3	

《植物標本(プラント・オパール)の顕微鏡写真2》

13. 棒状粒標本 A地点 3	
14. 多角形板状(コナク属など) A地点 1	
15. 海綿骨針 A地点 7	
16. イネ I地点 12	
17. イネ J地点 3	
18. オオムギ族(類)の表皮細胞 I地点 2	
19. ヒエ属型 J地点 1	
20. ジュズダマ属 I地点 14	
21. コシ属 I地点 13	
22. ススキ属型 I地点 6	
23. シバ属 I地点 4	
24. ネザサ節型 H地点 1	

《遺構写真》

写真図版 1	1. 調査区から浅間山を望む(東から)
	2. 調査区から榛名山を望む(南東から)
	3. 調査区から正円寺古墳を望む(南西から)
	4. 重機による表土掘削作業風景(西から)
	5. B 1 区 1 画 全景(上志北から)
写真図版 2	1. D 2 区 1 画 2号堆積状況(西から)
	2. D 2 区 1 画 1号堆積状況(北西から)
	3. D 3 区 1 画 3号堆積状況(北西から)
	4. D 3 区 1 画 3号堆土層断面(北から)
	5. A 2 区 1 画 1号畚全景(南西から)
写真図版 3	1. B 1 区 1 画 2号畚全景(北西から)
	2. B 1 区 1 画 2号畚近景(北から)
	3. A 1 区 1 画 24号溝全景(北西から)
	4. A 1 区 1 画 24号溝全景(南東から)

写真図版 4	1. A 1 区 1 画 24号溝土層断面(南東から)
	2. A 1 区 北壁土層断面(南西から)
	3. A 2 区 1 画 25号溝全景(南から)
	4. A 2 区 1 画 25号溝土層断面(南から)
	5. A 2 区 1 画 26号溝全景(南から)
	6. A 2 区 1 画 26号溝土層断面(南から)
	7. A 2 区 1 画 27号溝全景(南から)
	8. A 2 区 1 画 27号溝土層断面(南から)

写真図版 5	1. B 1 区 1 画 1号溝全景(南西から)
	2. B 1 区 1 画 1号溝北壁土層断面(南から)
	3. B 1 区 1 画 2号溝全景(北西から)
	4. B 1 区 1 画 2号溝土層断面(南から)
	5. B 2 区 1 画 4号溝土層断面(南から)
	6. B 2 区 1 画 4号溝土層断面(南から)
	7. B 2 区 1 画 5号溝土層断面(北から)
	8. B 2 区 1 画 6号溝土層断面(南から)

写真図版 6	1. B 2 区 1 画 8号溝土層断面(南から)
	2. B 2 区 1 画 9号溝全景(北から)
	3. B 2 区 1 画 9号溝土層断面(南から)
	4. B 2 区 1 画 10号溝土層断面(西から)
	5. B 2 区 1 画 11号溝土層断面(南西から)
	6. B 2 区 1 画 13・14号溝土層断面(東から)
	7. B 2 区 1 画 15・16号溝土層断面(東から)
	8. B 2 区 1 画 17・18号溝土層断面(東から)

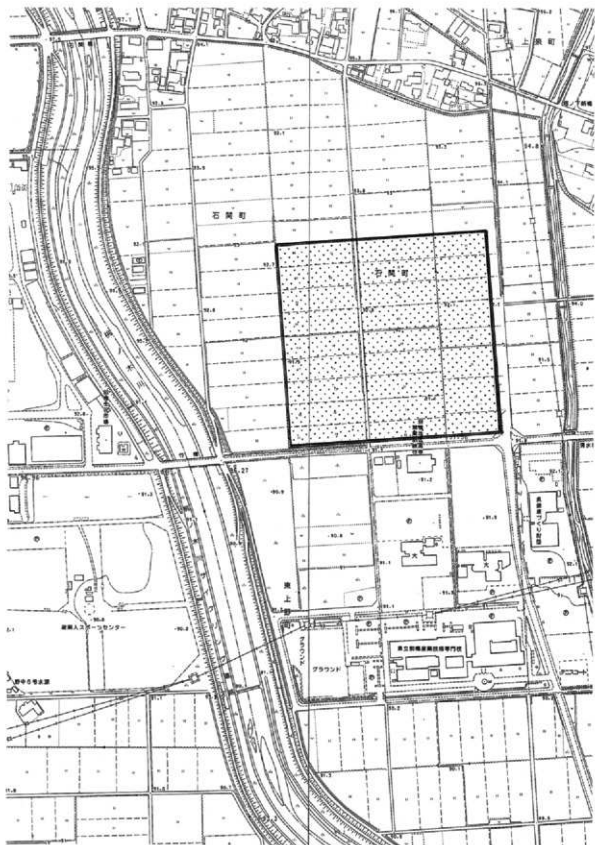
写真図版 7	1. B 2 区 1 画 19号溝土層断面(東から)
	2. B 2 区 1 画 21号溝土層断面(南西から)
	3. B 2 区 1 画 31号溝全景(北から)
	4. B 2 区 1 画 2号土坑全景(南から)
	5. B 2 区 1 画 2号土坑土層断面(南から)
	6. B 2 区 1 画 2号土坑遺物出土状況(南から)
	7. A 3 区 1 画 1号井戸土層断面(南西から)
	8. D 4 区 1 画 3号井戸全景(南から)

写真図版 8	1. A 2 区 2 画 1号踏み分け道全景(南東から)
	2. A 3 区 2 画 2号踏み分け道全景(南東から)
	3. A 3 区 2 画 2号踏み分け道土層断面(南から)
	4. D 5 区 2 画 2号踏み分け道土層断面(南から)
	5. D 5 区 2 画 2号踏み分け道換出状況(南東から)

写真図版 9	1. D 5 区 2 画 3号踏み分け道Hr-F A下硬化面換出状況(南東から)
	2. D 5 区 2 画 2号踏み分け道換出作業風景(南東から)
	3. B 2 区 2 画 3号踏み分け道全景(北西から)
	4. B 2 区 2 画 3号踏み分け道全景(南東から)
	5. B 2 区 2 画 円筒地輪片出土状況(南東から)

写真図版 10	1. A 2 区 2 画 14号整穴住居全景(西から)
	2. A 2 区 2 画 14号整穴住居カマド全景(西から)

	3. A 2区2面 14号竪穴住居カマド掘方全景(西から)	写真図版15	1. B 2区2面 6号竪穴住居凹み状況(西から)	
	4. A 2区2面 14号竪穴住居掘方全景(西から)		2. B 2区2面 6号竪穴住居全景(北西から)	
	5. A 3区2面 12号竪穴住居全景(東から)		3. B 2区2面 6号竪穴住居土層断面(北西から)	
	6. A 3区2面 12号竪穴住居土層断面(南から)		4. B 2区2面 6号竪穴住居カマド全景(北西から)	
	7. A 3区2面 12号竪穴住居カマド土層断面(南西から)		5. B 2区2面 6号竪穴住居カマド遺物出土状況(北から)	
写真図版11	8. B 1区2面 1号竪穴住居凹み状況(西から)		6. B 2区2面 6号竪穴住居カマド掘方全景(西から)	
	1. B 1区2面 1号竪穴住居全景(南西から)		7. B 2区2面 6号竪穴住居掘方全景(西から)	
	2. B 1区2面 1号竪穴住居土層断面(南西から)		8. B 2区2面 7号竪穴住居全景(北西から)	
	3. B 1区2面 1号竪穴住居遺物出土状況(西から)	写真図版16	1. B 2区2面 7号竪穴住居土層断面(北西から)	
	4. B 1区2面 1号竪穴住居カマド全景(南西から)		2. B 2区2面 7号竪穴住居カマド土層断面(東から)	
	5. B 1区2面 1号竪穴住居カマド土層断面(南西から)		3. B 2区2面 7号竪穴住居カマド掘方全景(北西から)	
	6. B 1区2面 1号竪穴住居カマド遺物出土状況(北西から)		4. B 2区2面 7号竪穴住居掘方全景(北西から)	
	7. B 2区2面 2号竪穴住居凹み状況(西から)		5. B 2区2面 8号竪穴住居全景(西から)	
	8. B 2区2面 2号竪穴住居全景(西から)		6. B 2区2面 8号竪穴住居土層断面(西から)	
		1. B 2区2面 2号竪穴住居土層断面(西から)		7. B 2区2面 8号竪穴住居カマド全景(西から)
写真図版12	2. B 2区2面 2号竪穴住居カマド全景(西から)		8. B 2区2面 8号竪穴住居カマド掘方全景(西から)	
	3. B 2区2面 2号竪穴住居カマド土層断面(北から)	写真図版17	1. B 2区2面 8号竪穴住居掘方全景(西から)	
	4. B 2区2面 2号竪穴住居カマド土層断面(南から)		2. B 2区2面 9号竪穴住居全景(北西から)	
	5. B 2区2面 2号竪穴住居掘方全景(西から)		3. B 2区2面 9号竪穴住居土層断面(北西から)	
	6. B 2区2面 3号竪穴住居全景(西から)		4. B 2区2面 9号竪穴住居カマド土層断面(南から)	
	7. B 2区2面 3号竪穴住居土層断面(西から)		5. B 2区2面 9号竪穴住居カマド掘方全景(南から)	
	8. B 2区2面 3号竪穴住居遺物出土状況(北西から)		6. B 2区2面 9号竪穴住居掘方全景(北西から)	
		1. B 2区2面 3号竪穴住居カマド全景(西から)	写真図版18	7. B 2区2面 10号竪穴住居全景(西から)
		2. B 2区2面 3号竪穴住居カマド土層断面(南西から)		8. B 2区2面 10号竪穴住居土層断面(南西から)
	写真図版13	3. B 2区2面 3号竪穴住居掘方全景(西から)		1. B 2区2面 10号竪穴住居カマド全景(西から)
4. B 2区2面 4号竪穴住居凹み状況(北西から)			2. B 2区2面 10号竪穴住居カマド土層断面(南西から)	
5. B 2区2面 4号竪穴住居全景(西から)			3. B 2区2面 10号竪穴住居カマド掘方全景(西から)	
6. B 2区2面 4号竪穴住居土層断面(西から)			4. B 2区2面 10号竪穴住居掘方全景(西から)	
7. B 2区2面 4号住居カマド全景(北西から)			5. B 2区2面 11号竪穴住居全景(西から)	
8. B 2区2面 4号竪穴住居貯蔵穴全景(西から)			6. B 2区2面 11号竪穴住居土層断面(西から)	
		1. B 2区2面 5号竪穴住居全景(西から)		7. B 2区2面 11号竪穴住居遺物出土状況(西から)
		2. B 2区2面 5号竪穴住居土層断面(西から)		8. B 2区2面 11号竪穴住居カマド全景(西から)
		3. B 2区2面 5号竪穴住居カマド全景(西から)	写真図版19	1. B 2区2面 11号竪穴住居掘方全景(西から)
		4. B 2区2面 5号竪穴住居カマド土層断面(北東から)		2. B 2区2面 13号竪穴住居全景(西から)
写真図版14	5. B 2区2面 5号竪穴住居カマド遺物出土状況(西から)		3. B 2区2面 13号竪穴住居土層断面(西から)	
	6. B 2区2面 5号竪穴住居カマド掘方全景(北西から)		4. B 2区2面 13号竪穴住居カマド掘方遺物出土状況(西から)	
	7. B 2区2面 5号竪穴住居貯蔵穴土層断面(北から)		5. B 2区2面 13号竪穴住居カマド掘方全景(西から)	
	8. B 2区2面 5号竪穴住居掘方全景(西から)		6. B 2区2面 13号竪穴住居掘方全景(西から)	
		7. D 5区2面 16号竪穴住居全景(西から)		



前橋市都市計画区域図1：5,000使用

第1図 石岡西田Ⅱ遺跡の調査範囲図

第1章 発掘調査の経緯

1. 調査に至る経緯

平成12年1月6日(木)、群馬県教育委員会文化財保護課に、群馬県教育委員会事務局管理部管理課より、前橋市石岡町76番地1、113番地、137番地1に所在する群馬県立前橋工業高等学校移転計画予定地内において、校舎及び付随する施設の移転整備工事の着工計画に伴う事前協議と、試掘調査の依頼があった。

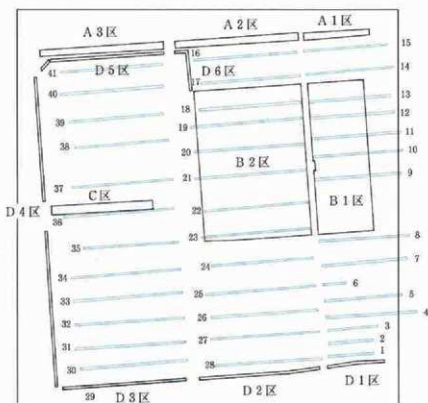
調査対象地は、地権者と群馬県教育委員会事務局管理部管理課との間で既に用地に関する売買契約が締結され、管理課長の依頼により群馬県教育委員会文化財保護課埋蔵文化財第1係が、同年2月28日(月)～3月24日(金)の約一ヶ月間をかけて現地での試掘調査を実施した。

その結果、対象地である75,097㎡の建設予定地に41本のトレンチを設定し、重機による掘削をしたと

ころ、浅間山を給源(1108年)とする浅間B軽石(As-B)直下から、平安時代に相当する水田に伴う畦畔、カマドをもつ竪穴住居跡、平安時代以降の旧河川跡が確認され、該期以外にも、遺構は伴わないものの古墳時代に属すると思われる土器がほぼ完形で出土した。

この試掘結果により対象地は遺跡地と認定され、移転工事に先立って埋蔵文化財の記録保存措置が必要となった。

試掘結果は、同年3月27日(月)付で文化財保護課長名で教育委員会事務局管理部管理課に伝えられ、同年4月に、教育委員会事務局管理部管理課、文化財保護課、埋蔵文化財調査事業団の三者合同の打ち合わせ会議が開催された。この会議の中で、経費算定をしたところ、調査期間は、同年11月から開始して翌年6月末日までの年度をまたいだ8ヶ月間の予定で本調査が開始されることになり、地元前橋市教育委員会の協力を得て、事業団の発掘調査班1班、担当者3名が本調査に対応することとなった。



第2図 調査区・試掘トレンチ設定図

2. 調査の方法と経過

調査の方法 調査は対象地をA区(道路)・B区(校舎)・C区(部室)・D区(防球ネット)の4区画に分割し、A・B・D区については、さらに調査区をA1・A2・A3区、B1・B2区、D1・D2・D3・D4・D5・D6区に細分割した(第2図参照)。

本調査は第一次調査(平成12年11月15日～平成13年3月31日)と第二次調査(平成13年4月1日～平成13年6月30日)の二回に分けて実施され、平成12年度は主として調査面積の大きいB区(16,099㎡)を中心にして調査し、平成13年度分についてはA区(1,828㎡)・C区(560㎡)・D区(1,285㎡)を対象にして調査した。なお、防球ネットの基礎が打設されるD区については、その設置規格が1.1×1.1mで4m間隔のために、現状での調査は危険を伴い不可能なため、掘削法面を考慮した2m幅のトレンチ掘りを行った。

調査面は、1面が浅間B軽石(As-B)及びAs-B混泥土下面で、平安時代(As-B)～中・近世に相当し、2面が浅間C軽石(As-C)混泥土下面の文化層で、古墳時代(As-C)～平安時代(As-B)に相当する延べ面積39,544㎡の2面調査である。

調査にあたっては、概ね以下の方法を踏襲した。

(1) 調査グリッドの基準点測量は、群馬県前橋市堀ノ下町4番地先の学校移転整備に伴う工事に先立って、平成2年に前橋土木部道路維持課が測量した2級基準点(22)H=94.75mを基準として、日本測地系に基づく国家座標系(X=43310.219, Y=-63691.860)と平行に設定した。

(2) 遺構測量には平板を使用し、水田・畠・住居・溝・土坑・井戸・道・遺物・セクション・エレベーション等は1/10・1/20・1/40作図を原則とした。また、広範囲に及ぶ測量は業者委託によるバルーンによる空中測量としたが、できる限り現場内の手実測を心掛けた。

(3) 遺構の写真撮影には中型カメラによる35mmサイズのモノクロリバーサル写真及びブローニー(6

×7)サイズのモノクロ写真を使用し、撮影対象にに応じて、バルーンによる空中写真を業者委託した。

(4) 遺構番号は、各調査面から種別に通し番号を付し、整理の段階で再度検討を加え、遺構として認定できないものについては欠番とし、新たな遺構番号を付した。また、遺物の取り上げは原位置をとどめるものについては、その都度番号を付し図面上に記録した。

(5) 本遺跡では2面の文化層を確認しており、各文化層の確認には、4種類の指標テフラ(As-B・Hr-FP・Hr-FA・As-C)を健層とした。

(6) 特に低地部の調査区法面は、壁面の崩落を防ぐために傾斜角を設け、排水・埋め戻しを含めた作業の安全には万全を期した。

調査の経過 調査は平成12年3月の試掘段階で得られた土層中の指標テフラ(As-B、Hr-FP、Hr-FA、As-C)を手掛かりにして、1面のAs-B及びAs-B混泥土下面までの表土掘削と2面のAs-C混泥土下面までの掘り下げ作業は(土層中の遺構、遺物に細心の注意を払いながら)、残厚約10cm程度を残して重機を用いて行い、精査を要する遺構確認作業と個別遺構の掘削等はすべて手作業で行った。

調査及び作業工程の概要は以下のとおりである。

《平成12年度》

11月 第3週

前遺跡からの調査器材等の搬入及び調査のための準備作業、調査区の設定、1面(As-B及びAs-B混泥土下面)遺構確認のための重機掘削。

11月 第4週

A区1面の遺構確認作業と重機による盛土除去作業、B区1面の盛土除去作業及び表土除去作業。

12月 第1週

B1区1面遺構確認作業、調査区名称の決定、B1区1面(As-B及びAs-B混泥土下面)より溝、畠、As-B混泥土下疑似畦を検出。

12月 第2・3週

B1区北半1面の遺構確認作業及びB1区南半1面の重機掘削作業、As-B下擬似水田調査、B1区北半2面(As-C混土下面)調査、B1区南半1面空測、B1区北半2面遺構確認作業及び住居、畠調査、B2区北半1面重機掘削及び遺構確認作業(4号溝、5号溝検出)。

12月 第4・5週

B1区1面1・2号溝、B1区2面1号住居・3号溝実測、B2区1面4号溝調査、B2区2面重機掘削作業、器材整備及び年末、年始に伴う作業、安全対策作業。

1月 第1・2週

調査再開に向けての準備、B2区1面重機掘削作業、4号溝調査及び実測、B1区2面A・B地点における石材鑑定(群馬地質研究会の飯島静雄氏に依頼)。

1月 第3週

B2区1面重機掘削、B2区1面4・5号溝調査、6・7・8・9・10・11号溝調査及び実測、2号土坑実測。

1月 第4週

B2区2面22・23号溝のAs-B除去作業、B2区1面調査終了及び空測。

1月 第5週

B2区2面(As-C混土下面)の重機掘削作業及び遺構確認作業(埴輪片集中箇所及びHr-FAによって埋没した3号踏み分け遺検出及び精査、4号住居調査)。

2月 第1週

B2区2面重機掘削及び遺構確認作業(10号畠検出)、4号住居実測。

2月 第2・3週

B2区1面8号溝調査、B2区2面の重機掘削及び遺構確認作業、2・3・4・6・8・9・10号住居調査、22・23号溝調査、B2区低位部西壁の基本土層実測、10号畠調査、B1区旧河道部の重機掘削、B2区2面の重機掘削終了。

2月 第4週

A1区1面の遺構確認調査(As-B下水田に伴う24号溝検出)、B2区2面の9・10号住居実測及び東半の遺構確認作業。

2月 第5週

B2区2面の遺構確認作業、A1区2面の重機掘削作業、A3区2面の遺構確認作業(12号住居検出)。

3月 第1週

A2区1面重機掘削及び遺構確認作業、B2区2面の10・11号住居実測、A1区全景写真撮影。

3月 第1・2週

A2区1面の重機による盛土除去作業、C区の重機による盛土除去作業、A3区2面の畠調査、A2区1面遺構確認作業(溝検出)及び重機掘削作業、A2区1面25・26・27号溝調査及び実測、B2区2面空測。

3月 第3・4・5週

B2区2面住居実測、A3区1面1号井戸、A3区2面の2号井戸調査及び28・29・30号溝実測、A1区2面北壁セクション実測、年度末に向けての器材整備及び安全対策、残務整理。

(平成13年度)

4月 第1・2週

調査開始に向けての準備及び新年度調査開始、C区2面調査及び遺構検出作業、D区の重機による盛土除去作業、A2区2面遺構検出作業(住居・畠・土坑・溝検出)及び14号住実測。

4月 第3週

A2区2面の3～17号土坑、14号住居、32・33号溝の実測及び写真撮影、C区2面より11号畠検出。

4月 第4週

C区2面の溝調査、北壁セクション実測、D区除草作業、D5区1面人力による表土掘削作業、D4区トレンチ設定、A2区2面・C区2面の空測。

5月 第1・2週

D区1・2・3区の重機による盛土除去作業、D4区1面及び2面の遺構確認作業、D5区2面の遺

構確認作業、A区埋め戻し作業、D5区2面の16号住居・畝・溝の調査、D4区2面35～41号溝の実測及び写真撮影。

5月 第3・4週

D4区1面3号井戸、D4区2面の溝・土坑の調査及び実測、D5区2面の道跡・畝・16号住居調査及び実測、D3区1面の重機による掘削作業及び人力による遺構確認作業、D3区2面の遺構確認作業、D4・5区2面の空測、D2区1面の遺構確認作業(As-B下水田に伴う畦畔を検出)及び実測、D4・5区の埋め戻し作業。

5月 第5週

D1区1面の遺構確認作業及び全体図作成、D3区2面の遺構確認作業、D2区2面の遺構確認作業、22号土坑の調査及び実測、D4区1面の3号井戸実測。

6月 第1・2週

D1区2面の全景写真撮影、D6区1・2面の遺構確認作業(井戸・旧河道検出)及び実測、D5区2面16号住居の床面確認調査、D2区2面の22号土坑・41号溝の実測、D3区の埋め戻し作業、テフラ分析。

6月 第3・4・5週

C区埋め戻し作業、D5区2面の16号住居実測、D5区埋め戻し作業、調査終了及び次調査地に向けての器材整備・準備、完全撤収に向けての安全対策・引越し作業、調査完了及び調査区の引渡し。

3. 基本土層

本遺跡は、旧利根川の氾濫原である広瀬川低地帯内の、桃ノ木川左岸にあたる自然堤防上に位置している。また、遺跡から東方約100mの地点には寺沢川が南流し、遺跡はこの両河川のほぼ中間地点に所在する。

土層の最下層面は、B1区中央部の南北を主軸とする西半を境にして、旧利根川によってもたらされた河床礫層と、東半の赤城山麓を源とする寺沢川によってもたらされた河床礫層を基盤としている(河

河川の礫組成については、第4章3参照)。本遺跡における基本的な微高地部の土層層序は、下位から上位に向かって暗褐色～黄褐色シルト(地山)、As-C混土の黒褐色土、榛名二ツ岳決川テフラ(Hr-FA)、黒褐色土(As-CとHr-FAに伴うバミスの混土)、浅間B軽石(As-B)、浅間-柏川テフラ(As-Kk)、暗褐色土(As-B混土)、As-Aを含む茶褐色土、現行水田耕土の暗褐色土の順に堆積している。

また、低地部の土層層序は、上位からAs-Bの一次堆積層まではほぼ微高地部と土層は同じであるが、その直下の黒色粘質土(As-B下水田耕土)から下位は、暗灰色シルト、黒褐色粘質土(黒泥)、黄褐色粘質土Hr-FAに伴う火山泥流堆積物、榛名二ツ岳決川テフラ(Hr-FA)、黒色泥炭層、灰色シルト、青灰色砂質土といったように河川の水の影響を受けた土質になっているのが特徴である。

なお、青灰色砂質土よりも下位の土層については、湧水による調査区壁の崩落の危険が生じたために確認はできていないが、少なくとも重機のバケット1つ分以上の深さを掘削しても、粘質土が堆積したままであり砂礫層は確認されていない。

本遺跡において確認された指標テフラについては、微高地部の黒褐色土の層中に、3世紀終末に浅間山を給源として降下堆積した浅間C軽石(As-C)が斑点状に攪拌され認められ、Hr-FAは主としてHr-FAに伴う白色バミスとして土層中に混入している。他に榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)、浅間A軽石(As-A)などもテフラ分析によって確認されており、本文でその詳細が報告されている(第4章1参照)。

本遺跡における基本土層柱状図は、A1区低地部(Bg-58グリッド)、B2区低地部(Cd-88グリッド)、D2区低地部(Cb-4グリッド)の3箇所を代表的なものとして抽出した(地点については付図2参照)。なお、低地部及び低地部の基本土層は、すべて微高地部の基本土層をも網羅している。

各層の説明は次頁のとおりである。

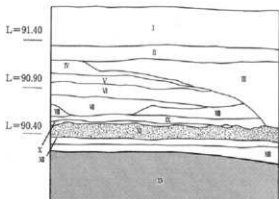
《基本土層》

< A 1 区低地部 >

- I 暗褐色土 表土。現行水田の畦(土地改良後)。
 II 茶褐色土 水田耕土(土地改良前)。鉄分沈着層多数あり。
 III 茶褐色土 客土。やや粘性あり。
 IV 茶褐色土 客土。φ1~5cmの礫を多量に含む。キャサリン台風後の客土。
 V 黄褐色洪水砂 キャサリン台風の洪水砂に比定。
 VI 褐色土 1~3mmの白色・黄褐色パミスを含む。
 VII 黄褐色洪水砂 色調の違う黄色ブロックを混入。しまりあり。
 VIII 茶褐色土 所々にM層をブロック状に含む。
 IX 淡黒色粘質土 粒子均一で緻密。As-Kk水田耕土。
 X As-Kk 灰色火山灰。浅間-船川テフラ(1128年)
 XI As-B 上位2cmが小豆色火山灰、下半は青灰色粗粒スコリア。下面はI面の遺構確認面。
 XII 黒色粘質土 As-B下水田耕土に比定。
 XIII 黒褐色土 Hr-FAに伴うパミス、As-Cを多量に含As-C混土。やや粘性あり。下面が2面の遺構確認面。
 XIV 暗褐色-黄褐色シルト 地山。下層が旧寺沢川の河床礫層。

< B 2 区低位部 >

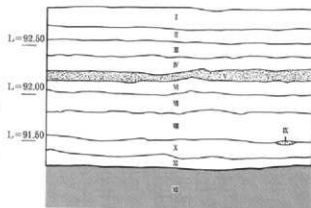
- I 暗褐色土 表土。現行水田耕土(土地改良後)。鉄分沈着層。
 II 暗褐色土 水田耕土(土地改良前)。I層の中・上層に色調が近似。As-Aを少量含む。
 III 茶褐色土 φ3mm程度の白色パミスとAs-Aを少量含む。鉄分沈着層を上層に残す。II層水田の床土。
 IV 暗褐色土 As-B混土。しまりあり。
 V As-B 小豆色火山灰と青灰色粗粒スコリアの混土。下面がI面の遺構確認面。
 VI 黒褐色土 Hr-FAに伴うパミスとAs-Cを混入。
 VII 茶褐色土 M層に土質が類似するが、Hr-FAに伴うパミスがやや少ない。固い。
 VIII 灰褐色土 Hr-FAに伴うパミスとAs-Cの混土。
 IX Hr-FA 固くしまりパミスを含む。
 X 黒褐色土 As-C混土。下面が2面の遺構確認面。
 XI 灰褐色シルト 粒子均一で上層にAs-C粒を少量含む。
 XII 黄褐色シルト 地山。礫粒均一。下層が旧利根川河床礫層。



第3図 A 1 区低地部基本土層柱状図



基本土層写真(A 1 区低地部北壁)



第4図 B 2 低位部基本土層柱状図



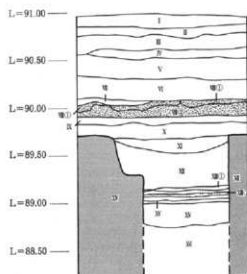
基本土層写真(B 2 区低位部西壁)

第1章 発掘調査の経緯

<D2区低地部>

- I 暗褐色土 表土。現行水田耕土(土地改良後)。
- II 茶褐色土 現行水田耕土の床土。鉄分沈着面が多数混入。
- III 暗褐色土 水田耕土(土地改良前)。As-Aを少量含む。
- IV 茶褐色土 置層水田耕土の床土。鉄分沈着層。As-Aを含む。
- V 暗褐色土 As-Aを少量含む。
- VI 暗褐色土 As-B混土。
- VII 黒色粘質土 As-Kk土水田耕土に比定。上層にAs-Kkの灰色火山灰をブロック状に含む。
- VII①As-B 小豆色火山灰。
- VII②As-B 青灰色粗粒スクリア。下面が1面の遺構確認面。
- IX 黒色粘質土 As-B下水田耕土に比定。
- X 暗灰色シルト 粘性が強く粒子均一で緻密。鉄分沈着面あり。
- XI 暗灰色土 粒子均一でやや砂質。鉄分沈着面あり。
- XII 黒褐色粘質土 粘性が強く粒子均一で緻密。φ10cm大の円礫一つを含む。黒泥。
- XII①黄褐色粘質土 Hr-FPに伴う火山泥流堆積物。下層にHr-FPの火山灰を残す。
- XII②黄褐色粘質土 Hr-FA
- XIII 黒色泥炭層 粒子均一で緻密。
- XIV 灰色シルト 粒子均一で緻密。
- XV 青灰色砂質土 φ1mm程度の砂からなる。粒子均一で緻密。

以下は湧水による壁崩落の危険が生じたため
確認不能。



第5図 D2区低地部基本土層柱状図



基本土層写真(D2区低地部北壁)

第2章 遺跡の環境

1. 遺跡の立地と環境

遺跡の位置と地形 関東平野の北西部に位置する群馬県は、中央部に二つの成層火山を有する。東に赤城山(1,827.6m)、西に榛名山(1,449m)、ともに活火山に指定されその裾野は長い。この両火山を分断する形で「坂東太郎」の異名をとる利根川が南流する。利根川は渋川市と赤城村に架かる大正橋の上流部付近で、北西方向から流れ込む吾妻川と合流し、今から遡ること約2万年前、浅間山の山体崩壊に起因する火山泥流堆積物(前橋泥流)の流下によって、扇状地の前橋台地(洪積台地)を形成した。

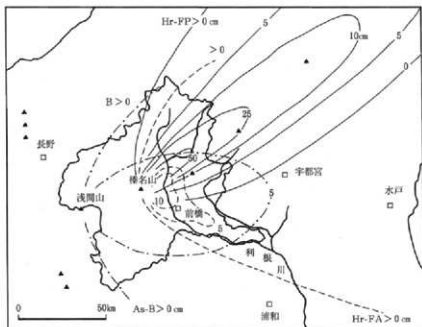
現在の利根川の流路は、前橋台地のほぼ中央部を不自然に南下しているが、15～16世紀頃に現在の位置に変流したと考えられている。それ以前は、赤城山の南斜面と前橋台地との中間にある幅約3km、長さ約30kmの沖積低地(広瀬川低地帯)が旧流路とされ、現在でも広瀬川をはじめとして多くの中小河川が網目状に流下している。この水利を利用して低地部で

は長閑な田園風景が延々と広がり、一方微高地部には集落が営まれている。

石関西田Ⅱ遺跡は、前橋泥流が赤城山麓の末端部と接し、さらに旧利根川によって浸食されてきた広瀬川低地帯内を北から南へと流れる桃ノ木川と、赤城山麓扇状地を南下する寺沢川にと挟まれた広瀬川低地帯東縁部の微高地上に位置する。

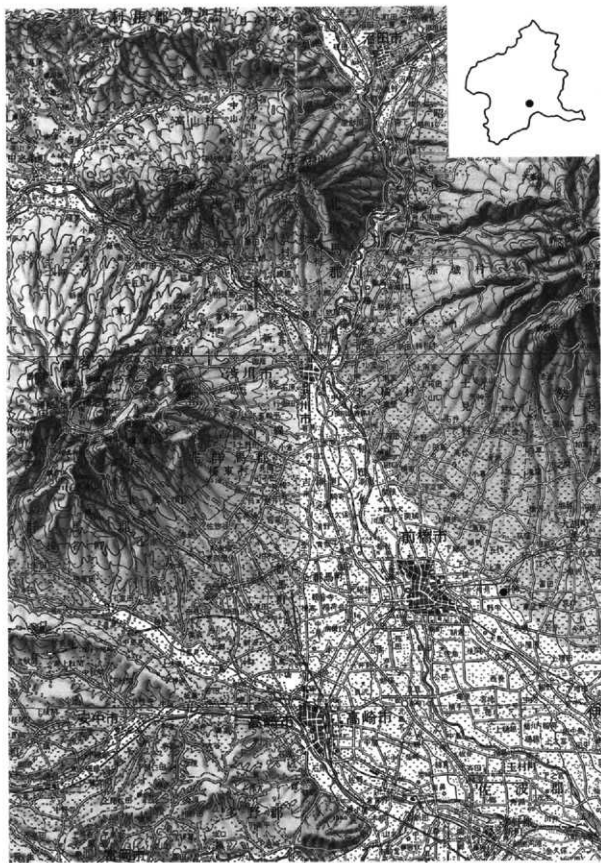
前橋市街地から東方約4kmにある本遺跡の標高は91.200m～92.800mを測り、調査区から北東方向に位置する榛名山二ツ岳山頂までは、直線距離にして約21.3km、また、As-BやAs-Kkを本遺跡にもたらした浅間山山頂までは、直線距離にして約53.5kmである。

榛名山は、今から約35万年前に活動を開始したとされる標高1,449mの複式火山である。噴出源は明らかでなく、火山灰の厚さも薄いために通常の路頭ではほとんど認めることはできないが、5世紀に白色軽石混じりの細粒火山灰の榛名有馬火山灰(Hr-AA)を榛名山の東側一帯に降下させていることが、子持村黒井峯遺跡、渋川市の有馬条里遺跡、有馬遺跡、高崎市日高遺跡での発掘調査で確認されている。



第6図 Hr-FA、Hr-PP、As-Bの降下範囲

(町田 洋・新井房夫「火山灰アトラス-日本列島とその周辺-」1992 一部加筆)



第7図 遺跡位置図

国土地理院 1:200,000【長野】「宇都宮」使用

また、6世紀には、二ツ岳の形成過程で二度(6世紀初頭・6世紀中葉)にわたって火砕流を伴う大爆發を起こしている。その驚異を象徴するかのよう、その後の復興に尽力した人々によって、標名山は「イカホ(怒る峰)」と呼ばれた。

その一度目の噴出物は、Hr-S(標名二ツ岳流川テフラ)=FA(二ツ岳アッシュ)+FPF-I(二ツ岳第一軽石流堆積物)と呼ばれ、主として県南東部へ、二度目の噴出物は、Hr-I(標名二ツ岳伊香保テフラ)=FP(二ツ岳パミス)+FPF-II(二ツ岳第二軽石流堆積物)と呼ばれ、主として県北東部へ飛散し、その距離は、Hr-FAは約240km離れた福島県相馬市で、Hr-FPは約280km離れた宮城県多賀城市にまでそれぞれ達していることが、発掘調査によって既に明らかになっている。なお、2つのテフラは本遺跡においてもその降下堆積が確認されている。

Hr-FAとHr-FPの噴火の季節は、Hr-FAが高崎市御布呂遺跡、Hr-FPが流川市有馬条里遺跡の埋没水田の状況から、ともに初夏(6月頃)と考えられており、Hr-FAとHr-FPの噴火の間隔は、新井房夫氏による尾瀬ヶ原における泥炭層の堆積速度の分析結果から、約20~30年と算出されている。

浅間山は、長野県と群馬県の県境にある標高2,568mの成層火山である。小浅間をはじめとして数個体の火山体から構成され、比較的新しい火山体は前掛山(2,524m)と呼ばれる。現在でも内部構造については不明な部分が多く、今なお噴煙を上げ続けている活火山である。過去において、プリニー式噴火に伴う大爆發によって大災害を本県にもたらした。天明3年の大噴火の驚異は、泥流下から屋敷跡が検出された玉村町「上福高中町遺跡」で知ることができる。

新しい方から浅間A軽石(As-A)=天明3年(1783)、浅間-粕川テフラ(As-Kk)=大治3年(1128、推定)、浅間B軽石(As-B)=天仁元年(1108)、浅間C軽石(As-C)=3世紀終末の4層の降下火砕堆積物が確認されており、本遺跡における指標テフラとなっている。

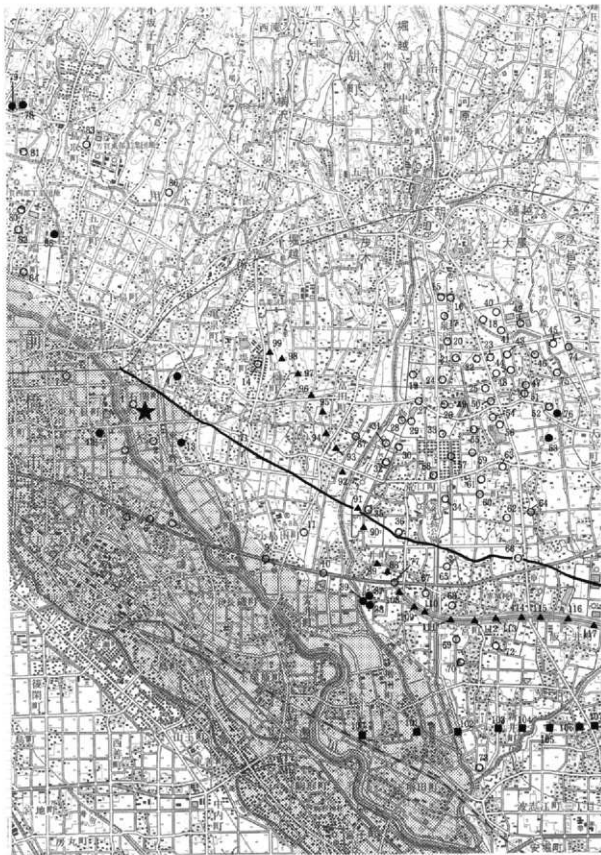
2. 周辺の遺跡と環境

本遺跡周辺地域での発掘調査は、水田地帯が広がる広瀬川低地帯内ではあまり行われなかったのが実情である。しかしながら、近年の開発に伴う用地確保の点から言えば、人口密度の高い市街地がのる前橋台地上では既に限界が生じており、特に広大な敷地面積を必要とする学校関係の施設建設には、郊外にある低地部の平坦地が必要不可欠のものとなった。実際に本遺跡に南接する区画には、いくつかの学園施設が集中して所在する。

本遺跡に先立って調査された遺跡には、平成6年12月から平成7年3月にかけて行われた県立前橋産業技術専門学校建設に伴う事前調査としての「石岡西築瀬遺跡」と、それに伴って移設する鉄塔部分の調査である「西片貝源田高遺跡」があり、ともに石岡西築瀬遺跡調査会によって調査されている。その結果、古墳時代中期から奈良時代にかけての集落の一部と中世の火葬跡などがそれぞれ検出された。また、平成11年度に公園整備事業として試掘調査された本遺跡の西側に隣接する「石岡西田遺跡」では、奈良時代の竪穴住居跡が遺跡調査会によって確認されている。

広瀬川低地帯内での遺跡数は、大規模な開発が少ないこともあって決して多いとは言えず、むしろ赤城山南麓末端部から広瀬川低地帯の東縁部にかけての地域に数多くの遺跡が存在する(第8回 周辺の遺跡参照)。しかしながら、従来遺跡が存在しないものと考えられていた広瀬川低地帯内でも調査数は少ないものの遺跡は皆無ではなく、河川の流路の影響によってつくられた後背湿地や微高地上には、本遺跡と同様の集落や天仁元年(1108)年の浅間山の噴火に伴う浅間B軽石(As-B)によって覆われた平安時代の水田が展開することが徐々に明らかになってきている。

さらに、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う発掘調査が、国道50号との合流点からの延長部分として平成12年度より開始され、荒砥川と寺沢川には



国土地理院 1 : 50,000 「前編」 使用

第8図 石岡西田Ⅱ遺跡と周辺の遺跡（スクリーントーンは広瀬川低地帯）

さまれた赤城山麓南端部を北西方向に向かって数多く調査され、現在でも継続して調査中の路線区がある。

本遺跡周辺地域における時代ごとの遺跡の概要は以下のとおりである。()内の番号は、地図・表番号に対応)

旧石器時代 該期の遺跡は希薄であり、ローム台地がのる飯土井町の飯土井中央遺跡(116)、富田町の富田高石遺跡(95)、江木町の江木下大日遺跡(98)で該期の石器集中地点が確認され、他に包含層が確認された遺跡として今井町の今井道上Ⅱ遺跡(88)、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡(89)、富田漆田遺跡(96)が挙げられる。また、富田町の富田西原遺跡(94)では、As-BP以降のものと思われる土坑状遺構が確認されている。

縄文時代 今井町の今井白山遺跡(10)、二ノ宮町の荒砥前原遺跡(73)で竈石住居が検出されており、富田町の宮田遺跡(11)、泉沢町の山崎遺跡(17)で遺物包含層が、江木町の萱野遺跡(14)、泉沢町の泉沢谷津遺跡(15)、丸山遺跡(19)、荒口町の荒砥宮田遺跡(32)、今井町の荒砥北原遺跡(35)、今井道上Ⅱ遺跡(88)、下大屋町の大道遺跡(42)、荒子町の下鶴谷遺跡(58)、二ノ宮町の荒砥上ノ坊遺跡(66)、二ノ宮町の荒砥前原遺跡(73)、勝沢町の九科遺跡(80)、小形町の小形神遺跡(81)、鳥取町・小坂子町・五代町の芳賀東部団地遺跡(83)、瑞気町の瑞気遺跡(84)、富田町の富田遺跡群(87)、富田漆田遺跡(96)、富田下大日遺跡(97)、江木町の江木下大日遺跡(98)で該期の竈穴住居がみついている。

また、土坑が確認された遺跡として、箕井町の箕井八日市遺跡(9)、泉沢町の前山遺跡(26)、今井町の荒砥北原遺跡(35)、今井白山遺跡(10)、今井道上Ⅱ遺跡(88)、荒子町の川籠菅戸遺跡(54)、柳久保遺跡(57)、下鶴谷遺跡(58)、荒砥前原遺跡(73)、飯土井町の飯土井中央遺跡(116)、鳥取町・小坂子町・五代町の芳賀東部団地遺跡(83)、富田町の富田宮下遺跡(93)、富田西原遺跡(94)、富田高石遺跡(95)、富田漆田遺跡(96)、富田下大日遺跡(97)、江木町の

江木下大日遺跡(98)などの数多くの遺跡が挙げられ、今井町の今井道上Ⅱ遺跡(88)、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡(89)、富田町の富田宮下遺跡(93)、富田西原遺跡(94)、富田高石遺跡(95)などでは陥し穴が見つまっていることから、該期の狩猟域との関係が想定される。

弥生時代 赤城山麓を南流する荒砥川流域に該期の遺跡が多くなり、荒砥川の西と東では様相を異にする。特に荒砥川以東では、弥生中期後半の集落が多い反面、荒砥川以西では稀有である。このことは、集落の変遷を考える上でとても興味深い。

土坑が検出された遺跡として、今井町の今井白山遺跡(10)が挙げられ、堅穴住居が検出された遺跡として荒口町・荒子町・二之宮町の鶴屋遺跡群(34)、頭無遺跡(59)、荒砥大日塚遺跡(65)、荒砥上ノ坊遺跡(66)、荒砥島原遺跡(70)、荒砥前原遺跡(73)、富田町の富田遺跡群(87)、富田宮下遺跡(93)、富田西原遺跡(94)などがある。

古墳時代 古墳時代中期以降、赤城山南麓地域での該期の集落が急激に増加し、本遺跡周辺地域でも、遺跡が数多く見受けられる。本遺跡から北東方向約600mの赤城山麓南端部に所在する正円寺古墳(4)は6世紀前半～中頃の築造であり、荒砥川の縁辺部には、5世紀後半の前方後円墳である今井神社古墳(39)が所在する。このことは、周辺遺跡での集落が5世紀代から急激に増加することと密接な関係があるものと思われる。

他に堅穴住居跡が確認されている石岡西築瀬遺跡(2)、野中町の藁遺跡(5)、野中天神遺跡(6)、箕井町の箕井八日市遺跡(9)、今井町の今井白山遺跡(10)、今井道上Ⅱ遺跡(88)、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡(89)、江木町の萱野遺跡(14)、泉沢町の泉沢遺跡(15)、谷津遺跡(16)、東原A遺跡(18)、東前田北遺跡(21)、東原西遺跡(22)、荒口町の北原遺跡(27)、諏訪西遺跡(30)、荒砥諏訪西遺跡(31)、荒砥宮田遺跡(32)、掘立柱建物も伴った荒砥前田Ⅱ遺跡(91)、荒口町・荒子町・二之宮町の鶴谷遺跡群(34)、今井町の荒砥北原遺跡(35)、荒砥北三木堂遺跡(36)、下大屋町の大道遺跡(42)、中山A遺跡(43)、中山B遺

跡(44)、山王遺跡(45)、阿弥陀井戸道上遺跡(46)、村主遺跡(48)、北田下遺跡(51)、明神山遺跡(52)、荒子町の大久保遺跡(55)、柳久保遺跡(57)、頭無遺跡(59)、荒砥下押切Ⅱ遺跡(61)、荒砥中屋敷遺跡Ⅰ(62)、荒砥中屋敷Ⅱ遺跡(63)、方形区画の居館も見つかった荒砥荒子遺跡(64)、二ノ宮町の荒砥大日塚遺跡(65)、荒砥宮西遺跡(67)、荒砥洗橋遺跡(68)、荒砥天之宮遺跡(69)、荒砥島原遺跡(70)、祭祀跡も見ついている荒砥前原遺跡(73)、飯土井町の飯土井中央遺跡(116)、掘立柱建物も確認された九科遺跡(80)と小明神町の湯気遺跡(82)、小明神町の小明神遺跡(81)、鳥取町・小坂子町・五代町の芳賀東部団地遺跡(83)、瑞気町の瑞気遺跡(84)、五代町の松嶺遺跡(86)、富田町の富田遺跡群(87)、富田宮下遺跡(93)、焼失住居の検出をみた富田西原遺跡(94)、富田高石遺跡(95)、富田漆田遺跡(96)、富田下大日遺跡(97)、江木町の江木下大日遺跡(98)などの数多くの遺跡があり、勝沢町の泉沢町の丸山遺跡(19)では円形周溝墓、環濠橋列、環濠居館が見つまっている。

土坑が検出された遺跡は、石岡西築瀬遺跡(2)、今井町の今井白山遺跡(10)、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡(89)、泉沢町の東原西遺跡(22)、荒口町の諏訪遺跡(29)、荒子町の下鶴谷遺跡(58)などであり、東原B遺跡(23)では該期の土器棺墓が確認されている。

溝が確認されている遺跡として、野中町の野中天神遺跡(6)、笈井町の笈井八日市遺跡(9)、今井町の今井白山遺跡(10)、荒砥北三木堂Ⅱ遺跡(89)、荒口町の諏訪遺跡(29)、荒砥宮田遺跡(32)、荒砥前田Ⅱ遺跡(91)、荒砥中屋敷遺跡Ⅰ(62)、富田町の富田細田遺跡(92)、江木町の壹野Ⅱ遺跡(99)などがある。

この頃から墳墓も数多く出現し、方形周溝墓が確認された遺跡として、泉沢町の谷津遺跡(16)、新山遺跡(24)、荒口町の荒砥諏訪遺跡(28)、諏訪遺跡(29)、荒砥宮田遺跡(32)、今井町の荒砥北原遺跡(35)、荒砥北三木堂遺跡(36)、下大原町の中山A遺跡(43)、二ノ宮町の荒砥島原遺跡(70)、瑞気町の瑞気遺跡(84)、甕棺墓も検出された富田町の富田高石

遺跡(95)などがあり、周溝墓と土器棺墓が確認された遺跡として泉沢町の東原B遺跡(23)が挙げられ、他に周溝墓が確認された堤東遺跡(56)、円形周溝墓が確認された荒口町の北原遺跡(27)、下大原町の明神山遺跡(52)、荒子町の川籠皆戸遺跡(54)などがある。

井戸が確認された遺跡は、泉沢町の寺前遺跡(20)であり、二ノ宮町の荒砥天之宮遺跡(69)では、溜井が見つまっている。

F A下水田が確認された遺跡は、富田町の富田漆田遺跡(96)が挙げられ、荒口町の荒砥諏訪西遺跡(31)、二ノ宮町の荒砥天之宮遺跡(69)では、As-C下畠が確認されている。また、今井町の荒砥北三木堂Ⅱ遺跡(89)では、As-C下水田も検出されている。

古墳では、本遺跡から北東方向約600mに位置する正円寺古墳(4)、桂堂大塚古墳(12)、木瀬村10号墳(13)、今井町の今井A号古墳(37)、今井B号古墳(38)、今井神社古墳(39)、下大原町の阿久山古墳(53)、二ノ宮町の伊勢山古墳(76)、勝沢町のオボ塚古墳(78)、オボ塚西古墳(79)、五代町の五代大日塚古墳(85)が挙げられる。

奈良・平安時代 奈良時代の堅穴住居が見つかった遺跡として、本遺跡西隣りの石岡西田遺跡(1)、石岡西築瀬遺跡(2)、上泉町の茶木田遺跡(7)、荒子町の荒砥下押切Ⅰ遺跡(60)、荒砥荒子遺跡(64)、井戸も見ついている二ノ宮町の荒砥大日塚遺跡(65)、荒砥上ノ坊遺跡(66)、荒砥島原遺跡(70)、荒砥青柳遺跡(72)、富田町の富田遺跡群(87)、富田宮下遺跡(93)などが挙げられる。

奈良・平安時代の堅穴住居と掘立柱建物が検出された遺跡として、小明神町の湯気遺跡(82)、土坑・井戸・鍛冶遺構・ビッドも検出された江木町の江木下大日遺跡(98)があり、他に、奈良・平安時代の道状遺構が検出された富田高石遺跡(96)が特筆される。また、平安時代の掘立柱建物が確認された遺跡として、二ノ宮町の二ノ宮宮東遺跡(114)が挙げられ、本遺跡以外での堅穴住居の検出は、野中町・上長磯町の野中天神遺跡(6)、伊勢遺跡(8)、今井町の今井白山遺跡(10)、掘立柱建物もみついている荒砥

北原遺跡(35)、富田町の宮田遺跡(11)、荒子町の大久保遺跡(55)、小鍛冶遺構も検出された堤東遺跡(56)、製鉄址や掘立柱建物も見つかっている京沢町の東原B遺跡(23)、荒口町の荒砥宮田遺跡(32)、鶴谷遺跡群(34)、下大屋町の大道遺跡(42)、中山A遺跡(43)、北田下遺跡(51)、明神山遺跡(52)、掘立柱建物も見つかっている中山B遺跡(44)、荒砥上西原遺跡(49)、井戸・須恵器窯・小鍛冶遺構も検出された上西原遺跡(50)、山王遺跡(45)、中畑遺跡(47)、村主遺跡(48)、炭窯も見つかっている下鶴谷遺跡(58)、荒子町の頭無遺跡(59)、荒砥下押切Ⅱ遺跡(61)、小鍛冶工房も見つかっている荒砥中屋敷Ⅱ遺跡(63)、荒砥荒子遺跡(64)、二ノ宮町の荒砥大日塚遺跡(65)、荒砥上ノ坊遺跡(66)、井戸・溝・土坑も見つかっている荒砥宮西遺跡(67)、荒砥洗橋遺跡(68)、荒砥天之宮遺跡(69)、荒砥青柳遺跡(72)、伊勢山古墳(76)、土壌も見つかっている飯土井町の飯土井中央遺跡(116)、勝沢町の九科遺跡(80)、富田町の富田宮下遺跡(93)、土坑・溝・窯跡が見つかっている富田漆田遺跡(96)、溝状遺構・小鍛冶跡が確認された富田下大日遺跡(97)、溝が確認された江木町の萱野Ⅱ遺跡(99)などの数多くの遺跡が挙げられる。

平安時代に編纂された『和名類聚抄』に勢多郡の郷名として「芳賀」「桂堂」の記載があり、実際に鳥取町・小坂子町・五代町の芳賀東部団地遺跡(83)での調査では、該期の竈穴住居420軒、掘立柱建物200軒が検出されていることから、現在の芳賀地区が芳賀郷の中核をなしていた可能性を示唆するものである。

As-B下水田が検出された遺跡では、野中町・上長磯町の野中天神遺跡(6)、「あずま道」の側溝も見つかっている筑井町の筑井八日市遺跡(9)、荒口町の荒砥宮田遺跡(32)、荒子町の荒砥中屋敷Ⅱ遺跡(63)、二ノ宮町の荒砥大日塚遺跡(65)、荒砥天之宮遺跡(69)、荒砥島原遺跡(70)、9世紀初めの水田も検出された富田町の富田細田遺跡(92)、富田宮下遺跡(93)、富田漆田遺跡(96)などがあり、野中町・上長磯町の野中天神遺跡(6)、上泉町の茶木田遺跡

(7)、上長磯町の伊勢遺跡(8)、今井町の今井白山遺跡(10)、荒砥北原遺跡(35)では、土坑も検出されている。

中・近世 中世を代表する用水路遺構として女堀(71)がある。女堀は赤城山南麓を抜ける全長13km、幅15～30m、深さ3～4mの未完成のまま放置され埋没していった灌漑用水路である。その「女堀」という名の由来は、女が響で一夜にして掘り上げたとか、推古天皇の時代や尼将軍の異名をとる北条政子の時代に掘られたなどの伝説によるものである。しかしながら、以前はそのほとんどが謎に包まれていたが、近年の発掘調査によってようやく土木工法の究明など、謎の解明が明らかとなってきた。本遺跡でも、北へ約350mの地点で北東-南東方向に向かって走る凹状の面影を看取することができ、これは、起点～荒砥川に至るルートの一部であり、集落の中の帯状水田となって今なお残存しているものである。

中・近世の遺構として本遺跡からは井戸・旧河道が検出されている。周辺遺跡においても、中世の火葬墓・集石が確認された西片貝町の西片貝源田高遺跡(3)、掘立柱建物・屋敷跡が確認された野中町・上長磯町の野中天神遺跡(6)、井戸・溝状遺構・ピットが認められた上泉町の茶木田遺跡(7)、溝が見つかった上長磯町の伊勢遺跡(8)、溝・井戸が確認された富田町の宮田遺跡(11)、墓が検出された荒口町・荒子町・二之宮町の鶴谷遺跡群(34)、荒砥北三木堂遺跡(36)、地下式土坑・土坑が見つかった鳥取町・小坂子町・五代町の芳賀東部団地遺跡(83)、中近世の溝が検出された荒口町の荒砥前田Ⅱ遺跡(91)、富田町の富田宮下遺跡(93)、大溝・堰が見つかった富田西原遺跡(94)、掘立柱建物・地下式坑・大溝・方形土坑・井戸がまとめて確認された富田高石遺跡(95)、富田漆田遺跡(96)、溝状遺構・土坑がみつかった富田下大日遺跡(97)などがある。

<参考文献>

『前橋市史』第1巻 前橋市 1971

第2章 道路の環境

『女塚』群馬県教育委員会 1979

『群馬県史』通史編1 原始古代1 群馬県 1981

『群馬県史』資料編3 原始古代3 古墳 群馬県 1981

原田恒弘・能登 健『火山災害の季節』『群馬県立博物館紀要』
第5号 群馬県立博物館 1984

『女塚』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984

『火の山はるな 火山噴火と黒井藩むらのくらし』群馬県立博物館
1990

『黒井藩遺跡発掘調査報告書』子持村教育委員会 1990

『笠野遺跡・下田中遺跡・矢場遺跡』群馬県企業局 1991

町田 洋・新井朋夫『火山防災トラス-日本列島とその周辺-』
東京大学出版会 1992

『箕井八日市遺跡』建設省・群馬県教育委員会、(財)群馬県埋蔵
文化財調査事業団 1994

新井朋夫編『火山災害考古学』古今書院 1996

『石岡西築瀬遺跡・西片貝沼田高遺跡』石岡西築瀬遺跡調査会
1996

『野中天神遺跡』建設省・群馬県教育委員会、(財)群馬県埋蔵文
化財調査事業団 1996

周辺遺跡一覧

●=古墳 ▲=上武道路関連遺跡 ■=北関東自動車道関連遺跡

No	遺跡名・所在地	時代	主な遺構	文献
★	石岡西田高遺跡 前橋市石岡町76番 地、113番地、137 番地1	古墳 平安 ～ 中近世	踏み分け道、旧河道 竪穴住居、As-B下 水田・畠・溝・土坑、 井戸・旧河道	本報 啓書
1	石岡西田遺跡 前橋市石岡町	奈良 世	竪穴住居	1
2	石岡西築瀬遺跡 前橋市石岡町121番 地地	古墳 奈良 不明	竪穴住居・土坑 竪穴住居 竪穴住居・土坑・溝	2
3	西片貝沼田高遺跡 前橋市西片貝町417 -4番地	中世	火葬跡・墓石	2
4	正門寺古墳 ●前橋市堀之下町	古墳	6世紀前半～中頃の 前方後円墳。両輪型石室 をもつ。	3 10
5	雲遺跡 前橋市野中町406- 2番地	古墳	竪穴住居	4 10
6	野中天神遺跡 前橋市野中町・上長 磯町	古墳 奈良・平 安 中世 近世	竪穴住居・溝 As-B下水田・竪穴住 居・土坑 竪穴住居、屋敷跡 土坑墓・溝	8 10
7	茶木田遺跡	奈良 世	竪穴住居	6

No	遺跡名・所在地	時代	主な遺構	文献
	前橋市上京町141- 3番地地	平安 中世	竪穴住居・土坑・柱状 礎ピット・礎土遺構 井戸・溝状遺構・ピット	10
8	伊勢遺跡 前橋市上長磯町296 -1番地地	平安 中世～ 近世	竪穴住居・土坑・ピット 溝 井戸	7 10
9	箕井八日市遺跡 前橋市箕井町字八 日市5-53番地、字 長藤63-86番地、小 島町字八日市524 番地、字窪田1-177 番地	縄文 古墳 平安	土塚 竪穴住居・古墳・方形 区画溝 As-B下水田「あづま 道」の側溝、弘仁9 年(818)の地震に伴う 噴砂	8 10
10	今井白山遺跡 前橋市今井町	縄文 弥生 古墳 奈良～ 平安	敷石住居・土坑・石 器・土器の集中出土 竪穴住居・溝・土坑 竪穴住居・土坑・溝・ ピット 弘仁9年(818)の地震 に伴う噴砂	8 10
11	宮田遺跡 前橋市富田町587- 1-588-1地	縄文 奈良・平 中世～ 近世～ 近代	遺物包含層 竪穴住居・竪立柱建物 溝・井戸 道・井戸・植栽土坑	9
12	桂賀大塚古墳 ●前橋市東片貝町	古墳	前方後円墳	71
13	木瀬村10号墳 ●前橋市東上野町	古墳	角閃石安山岩を使用し た横式石室をもつ前 方後円墳	71
14	笠野遺跡 前橋市江木町字中 六所地	縄文 古墳	竪穴住居 竪穴住居	11 10
15	泉沢谷津遺跡 前橋市泉沢町	縄文 古墳 近世	竪穴住居 竪穴住居・古墳 竪立柱建物	12
16	谷津遺跡 前橋市泉沢町	縄文 古墳	竪穴住居 竪穴住居・古墳・方形 周溝墓	13 14
17	山崎遺跡 前橋市泉沢町	縄文	遺物包含層	15
18	車原八遺跡 前橋市泉沢町	古墳	竪穴住居	46
19	丸山遺跡 前橋市泉沢町字丸 山	縄文 古墳	竪穴住居 竪穴住居・円形周溝 墓・環壕横列・環壕居 館	17 10 18
20	寺前遺跡 前橋市泉沢町	古墳	竪穴住居・井戸	15
21	東前田北遺跡 前橋市泉沢町	古墳	竪穴住居	15
22	車原西遺跡 前橋市泉沢町	古墳	竪穴住居・土塚	15
23	車原北遺跡 前橋市泉沢町	古墳 平安	竪穴住居・周溝墓・土 器積層 竪穴住居・製鉄址・竪 立柱建物	46
24	新山遺跡	古墳	方形周溝墓・方形周溝	13

2. 周辺の遺跡と環境

No	遺跡名・所在地	時代	主な遺構	文献
	前橋市泉沢町		状遺構・古墳	15
25	向原遺跡 前橋市泉沢町	古墳	径28mの両輪型石室をもつ円墳。	14
26	前山遺跡 前橋市泉沢町	縄文 古~平	土坑 溝	19 47
27	北原遺跡 前橋市荒口町	古墳	壱穴住居・円形周溝墓	18
28	荒砥津訪遺跡 前橋市荒口町	古墳	方形周溝墓	20
29	源訪遺跡 前橋市荒口町字源訪	弥古	方形周溝墓・溝・土坑・炭窯	10 21 48
30	源訪西遺跡 前橋市荒口町	古墳	壱穴住居・古墳	21
31	荒砥津西遺跡 前橋市荒口町	古墳	壱穴住居・As-C下島・古墳	20
		奈平	壱穴住居・As-B下島・火葬墓・掘立柱建物	
32	荒砥宮田遺跡 前橋市荒口町	縄文 古墳 平安	壱穴住居 壱穴住居・方形周溝墓・溝・古墳 壱穴住居・As-B下島	20 20 20
33	柳久保遺跡(塚) 前橋市荒口町	古墳 平安	壱穴住居・古墳 壱穴住居	21
34	鷲谷遺跡群 前橋市荒口町・荒子町・二之宮町	弥生 古墳 奈平 中世	壱穴住居 壱穴住居 壱穴住居 壱穴住居	10 31 31
35	荒砥北原遺跡 前橋市今井町字北原	縄文 古墳 奈平	壱穴住居・土坑 壱穴住居・方形周溝墓・円墳 壱穴住居・掘立柱建物・土坑	10 22 22
36	荒砥北三木堂遺跡 前橋市今井町字北三木堂、荒口町字前原	縄文 古墳 中世	壱穴住居・土坑 壱穴住居・方形周溝墓・古墳	10 23 49
37	今井A号古墳 前橋市今井町	古墳	自然石乱石積穴式石室をもつ小円墳。	24
38	今井B号古墳 前橋市今井町	古墳	壱穴式石室をもつ円墳。	24
39	今井神社古墳 前橋市今井町字宮原	古墳	6世紀前半の全長71mの壱穴式石室をもつ前方後円墳。	10 22 24
40	上諏訪山A遺跡 前橋市下大屋町	平安	As-B層のある地割れ	46
41	上諏訪山B遺跡 前橋市下大屋町	奈平	壱穴住居・掘立柱建物	46
42	大道遺跡 前橋市下大屋町	縄文 古墳 平安	壱穴住居 壱穴住居 壱穴住居	25
43	中山A遺跡 前橋市下大屋町	古墳 平安	壱穴住居・前方後方形周溝墓・方形周溝墓 壱穴住居	46
44	中山B遺跡 前橋市下大屋町	古墳 平安	壱穴住居 壱穴住居・掘立柱建物	17
45	山王遺跡	古墳	壱穴住居	25

No	遺跡名・所在地	時代	主な遺構	文献
	前橋市下大屋町	平安	壱穴住居	
46	阿弥陀井戸道遺跡 前橋市下大屋町	古墳	壱穴住居	26
47	中塚遺跡 前橋市下大屋町	平安	壱穴住居	17
48	村上遺跡 前橋市下大屋町	古墳 奈平	壱穴住居 壱穴住居	17
49	荒砥上西原遺跡 前橋市下大屋町	奈平	壱穴住居・掘立柱建物	12
50	上西原遺跡 前橋市下大屋町	奈平	壱穴住居・掘立柱建物・井戸・須恵器窯・小鍛冶遺構・基礎建物	12
51	北田下遺跡 前橋市下大屋町	古墳 平安	壱穴住居 壱穴住居	17
52	明神山遺跡 前橋市下大屋町	古墳 平安	壱穴住居・円形周溝墓 壱穴住居	25
53	阿久山古墳 前橋市下大屋町	古墳	全長28mの横穴式石室をもつ前方後円墳。	24
54	川籠野戸遺跡 前橋市荒子町	縄文 古墳 奈平	土坑 円形周溝墓 壱穴住居・掘立柱建物	21 26
55	大久保遺跡 前橋市荒子町	古墳 奈良 平安	壱穴住居 壱穴住居 壱穴住居・掘立柱建物	28
56	堤東遺跡 前橋市荒子町	古墳 奈平	周溝墓 壱穴住居・掘立柱建物・小鍛冶遺構	10 27
57	柳久保遺跡(市) 前橋市荒子町	縄文 古墳 奈良	土坑 壱穴住居・土坑 壱穴住居	28
58	下鷲谷遺跡 前橋市荒子町	縄文 古墳 奈平	壱穴住居・土坑 土坑 壱穴住居・炭窯	29
59	須加遺跡 前橋市荒子町	弥生 古墳 平安	壱穴住居 壱穴住居 壱穴住居	26
60	荒砥下押切丁遺跡 前橋市荒子町	奈良	壱穴住居	30
61	荒砥下押切E遺跡 前橋市荒子町	古墳 平安	壱穴住居・円墳 壱穴住居	30
62	荒砥中屋敷遺跡1 前橋市荒子町	古墳	壱穴住居・溝	30
63	荒砥中屋敷E遺跡 前橋市荒子町	古墳 平安	壱穴住居 壱穴住居・小鍛冶工房跡・As-B下島	30
64	荒砥荒子遺跡 前橋市荒子町	古墳 奈平	方形区画の居館・壱穴住居 壱穴住居	30
65	荒砥大目塚遺跡 前橋市二之宮町	古墳 奈良 平安	壱穴住居 壱穴住居 壱穴住居・井戸・As-B下島	50
66	荒砥上ノ坊遺跡 前橋市二之宮町	縄文 弥古	壱穴住居 壱穴住居・周溝墓・As-C下島	30
67	荒砥宮西遺跡 前橋市二之宮町字	古墳 奈良	壱穴住居 壱穴住居	10 32

第2章 遺跡の環境

No.	遺跡名・所在地	時代	主な遺構	文献
	中里	平安	壑穴住居・井戸・土坑・溝	
68	鹿嶋浅桶遺跡 前橋市二之宮町字洗桶	古墳 奈良 平安	壑穴住居 壑穴住居 壑穴住居	10 32
69	鹿嶋天之宮遺跡 前橋市二之宮町字五分一	古墳 奈良 平安	壑穴住居・甕井・As-C下泉 壑穴住居 壑穴住居・As-B下水田	10 33
70	鹿嶋鳥原遺跡 前橋市二之宮町字鳥原	弥生 古墳 奈良・平	壑穴住居 壑穴住居・方形周溝墓・古墳 壑穴住居・As-B下水田	10 34
71	女堀 前橋市上泉町・荒口町・二之宮町・佐藤郡赤堀町・家村西国定	中世	全長13km、幅15～30m、深さ3～4mの灌漑用水路・As-B上高・棒土運搬用の作業道・掘削痕・足跡	10 63 69
72	鹿嶋首輪遺跡 前橋市二之宮町	奈良・平 不明	壑穴住居 壑穴状遺構・土坑・井戸・溝	22
73	鹿嶋前塚遺跡 前橋市二之宮町字前原・新土塚	縄文 弥生 古墳	数石住居・壑穴住居・土坑 壑穴住居 壑穴住居・古墳・祭祀跡	10 37
74	小幡岡遺跡 前橋市西大室町	古墳	横穴式石室と竊石切組積石室をもつ古墳。	25 36
75	水口山遺跡 前橋市西大室町	古墳	古墳。一つは帆立貝式・方形周溝墓	25
76	伊勢山古墳 ●前橋市西大室町	古墳 平安	全長67mの横穴式石室をもつ前方後円墳。 壑穴住居	25
77	今井道土遺跡 前橋市今井町	古墳 奈良・平 中世	壑穴住居 壑穴住居・掘立柱建物・方形区画遺構 壑穴状遺構	10 61
78	オブ塚古墳 ●前橋市勝沢町	古墳	全長35mの自然石乱石積輪郭型横穴式石室をもつ前方後円墳。	24
79	オブ塚西古墳 ●前橋市勝沢町	古墳	墳丘をもたない小型の横穴式石室。	24
80	九科遺跡 前橋市勝沢町	縄文 古墳 奈良・平	壑穴住居 壑穴住居・掘立柱建物 壑穴住居	38 39 40
81	小明神遺跡 前橋市小明神町	縄文 古墳	壑穴住居 壑穴住居	39
82	湯気遺跡 前橋市小明神町	古墳 奈良・平	壑穴住居 壑穴住居・掘立柱建物	40
83	芳賀東部窪地遺跡 前橋市鳥取町・小坂子町・五代町	縄文 古墳 奈良・平 中世 近世	壑穴住居・土坑 壑穴住居・古墳 壑穴住居・掘立柱建物 地下式土坑・土坑 墓・土坑	10 16 41 42
84	瑞気遺跡	縄文	壑穴住居	43

No.	遺跡名・所在地	時代	主な遺構	文献
	前橋市瑞気町	古墳	壑穴住居・方形周溝墓	
85	五代大日塚古墳 ●前橋市五代町	古墳	7世紀前半の横穴式石室をもつ前方後円墳。	24
86	松等遺跡 前橋市五代町	古～平	壑穴住居	44
87	富田遺跡群 前橋市富田町	縄文 弥生 古墳 奈良・平	壑穴住居 壑穴住居 壑穴住居・古墳 壑穴住居	45
88	今井道土遺跡 ▲前橋市今井町	旧石器 縄文 古墳 不明	包含層 壑穴住居・陥し穴・円形土坑 壑穴住居 掘立柱建物	54
89	鹿嶋北三木堂Ⅱ遺跡 ▲前橋市今井町	旧石器 縄文 古墳	包含層 陥し穴 壑穴住居・方形土坑・溝・掘立柱建物・As-C下水田	53 54
90	鹿嶋北原Ⅱ遺跡 ▲前橋市今井町	縄文 不明	土器・石器が散在 溝・土坑・井戸	53 54
91	鹿嶋前田Ⅱ遺跡 ▲前橋市荒口町	縄文 古墳 平安 中近世	土器・石器が散在 壑穴住居・掘立柱建物・溝 女堀と盛り土の一部・洪水砂層下の水田・水路	63 54
92	富田細田遺跡 ▲前橋市富田町	古墳 平安 中近世	溝 9世紀初めの水田・As-B下水田 溝・掘立柱建物	52
93	富田下遺跡 ▲前橋市富田町	旧石器 縄文 弥生 古墳 奈良・平 中近世 不明	包含層 陥し穴・土坑 壑穴住居 壑穴住居 壑穴住居・As-B下水田 溝(掘堀?) 掘立柱建物・土坑・ピット	52 53
94	富田西塚遺跡 ▲前橋市富田町	旧石器 縄文 弥生 古墳 平安 中世	包含層・As-BP以降の土坑状遺構 陥し穴・円形土坑 壑穴住居 壑穴住居・喪失住居 As-B下水田・湖井大溝・堰	52
95	富田高石遺跡 ▲前橋市富田町	旧石器 縄文 古墳	石器が散在 陥し穴・袋状土坑 壑穴住居・方形周溝墓・甕塚墓 遺状遺構 掘立柱建物・地下式土坑・大溝・方形土坑・井戸	53 54
96	富田窪田遺跡	旧石器	包含層	53

2. 周辺の遺跡と環境

No	遺跡名・所在地	時代	主な遺構	文献
▲	前橋市富田町	縄文 古墳	竪穴住居・土坑・埋薬 竪穴住居・溝状遺構・ Hr-FA下木田	54
		平安	竪穴住居・土坑・溝状 遺構・遺跡・As-B下 木田・溝	
		中近世	掘立柱建物・張跡・溝 状遺構・土坑・井戸	
97	富田下大日遺跡 ▲ 前橋市富田町	縄文 古墳 平安	竪穴住居・土坑 竪穴住居・古墳 竪穴住居・溝状遺構・ 小殿治跡	53
		中世	溝状遺構・土坑	
98	江木下大日遺跡 ▲ 前橋市江木町	旧石器 縄文	洞片が散在 竪穴住居・土坑・ピット	54
		古墳 奈良・平	竪穴住居 竪穴住居・掘立柱建物 ・土坑・井戸・殿治遺 構・ピット	
99	笠野Ⅱ遺跡 ▲ 前橋市江木町	古墳 平安	溝	54
100	上増田島遺跡 ■ 前橋市上増田町・下 増田町	中近世	堀・井戸・溝・土坑・ 掘立柱建物	58
101	下増田常木遺跡 ■ 前橋市下増田町字 常木	弥古 奈良・平	竪穴住居・Hr-FPを 含む洪水層下木田 As-B下木田・竪穴住 居・井戸・溝	58
		中近世 不明	溝・洪水層下木田 掘立柱建物	
102	下増田越波遺跡 ■ 前橋市上増田町・下 増田町・二之宮町	古墳	方形周溝墓・As-C 混水田・Hr-FA下木 田・溝	56 57
		奈良・平	竪穴住居・As-B下木 田・溝	
		中近世	井戸・溝	
103	萩原遺跡 ■ 前橋市二ノ宮町・新 井町	縄文 古～平	石皿・凹石 竪穴住居・掘立柱建 物・As-B下木田・ 溝	52 56 57
		近世～	井戸・土坑・墓坑	58
104	新井大田園遺跡 ■ 前橋市五井町	古墳 平安	水田・溝 竪穴住居	56
105	渡志江中野面遺跡 ■ 伊勢崎市渡志江町	縄文 古墳	竪穴住居 竪穴住居・掘立柱建 物・方形周溝墓・井戸・ 溝・土坑	65
		奈良・平	竪穴住居・掘立柱建 物・As-B下木田・井 戸・溝・土坑	
		中世	土坑墓	
		近世	井戸・溝・土坑	
106	渡志江西屋敷遺跡 ■ 伊勢崎市渡志江町	古墳 奈良・平	掘立柱建物 竪穴住居跡・溝	62 56
		中近世	井戸・溝・土坑	
107	岡屋敷遺跡 ■ 伊勢崎市渡志江町	古墳 奈良・平	竪穴住居・土坑・溝・ 小殿治遺構	62 58
		中近世	竪穴住居 風敷跡・堀・土塁・掘	

No	遺跡名・所在地	時代	主な遺構	文献
			立柱建物・井戸・土坑・ 墓 土坑	
		近現代		
108	今井道上・道下遺跡 ▲ 前橋市今井町字道 上・道下	旧石器 縄文 古墳 平安	石器ブロック 遺物包含層 竪穴住居 掘立柱建物 鎖治遺構・方形区画 溝・井戸	66
		中世 ～近世	掘立柱建物・土壇墓	
109	二之宮谷地遺跡 ▲ 前橋市二之宮町字 谷地	古～平 近世	竪穴住居・掘立柱建 物・溝・土坑・井戸・ 溜井・堀め施設	10 62
110	二之宮洗橋遺跡 ▲ 前橋市二之宮町字 洗橋	古～平	竪穴住居・As-B下木 田	68
111	二之宮千足遺跡 ▲ 前橋市二之宮町千 足五分一	縄文 古墳 奈良・平	埋薬・土坑・陥し穴・ 集石 洪水堆積層下木田・水 路・水溜状遺構・溜井 竪穴住居・小殿治遺 構・竪穴遺構・As-B 下木田・Hr-FA上木 田	10 64
		中世 近世～	井戸 溜井・溝	
112	二之宮宮下西遺跡 ▲ 前橋市二之宮町字 宮下西・字五分一	旧石器 古墳 奈良・平	土坑 竪穴住居 竪穴住居	67
		中世 近世	溝・井戸・墓坑	
113	二之宮宮下東遺跡 ▲ 前橋市二之宮町宮 下東地	古墳 奈良・平	包含層・竪穴住居・溝 竪穴住居・水田・溝・ 溜井・包含層	60
		中世	堀・竪穴状遺構・井戸・ 土坑・墓・包含層	
114	二之宮宮下東遺跡 ▲ 前橋市二之宮町	平安	掘立柱建物・小殿治・ 水路・水田	35 59
		中世	堀・礎石建物・庭園・ 井戸	
		近世～ 現代	掘立柱建物・井戸・畚 ・土塚・池・墓	
115	飯土井上組遺跡 ▲ 前橋市飯土井町	縄文 古墳 平安	埋薬 竪穴住居 竪穴住居	70
		中近世 近世	畚 墓坑	
116	飯土井中央遺跡 ▲ 前橋市飯土井町	旧石器 縄文 古墳 平安	石器集中地点 土壇(陥し穴) 竪穴住居 竪穴住居・土溝	10 35 51
117	飯土井二本松遺跡 ▲ 前橋市飯土井町	旧石器 縄文 古墳 奈良・平	石器包含層 遺物包含層・陥し穴 竪穴住居 竪穴住居・掘立柱建 物・土坑	66
		中近世	方形区画溝・土坑・井 戸・溝	

＜参考文献＞（順道跡一覧の文献番号に対応）

- 1 『平成11年度文化財調査報告書 第30集』前橋市教育委員会 1999
- 2 『石岡西条遺跡跡-西片貝原田島遺跡』石岡西条遺跡調査会 1996
- 3 『群馬県史』資料編3群馬県史編さん委員会 群馬県 1981
- 4 『築道跡』前橋市教育委員会 1990
- 5 『野中天神遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996
- 6 『茶木田遺跡』前橋市教育委員会 1985
- 7 『伊勢遺跡』前橋市埋蔵文化財調査事業団 1990
- 8 『野中天神遺跡-箕井八日市遺跡-今井白山遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 9 『宮田遺跡』宮田遺跡調査会 1996
- 10 『群馬県遺跡大辞典』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団編集 上毛新聞社 1999
- 11 『霞野遺跡-下田中遺跡-矢場遺跡』群馬県企業局 1991
- 12 『年報4』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 13 『昭和61年度筑北北部遺跡群発掘調査概報』筑北北部遺跡群発掘調査会 群馬県教育委員会 1986
- 14 『上野原-向原-谷津昭和60年度筑北北部発掘調査報告』群馬県教育委員会 1985
- 15 『昭和60年度筑北北部遺跡群発掘調査概報』筑北北部遺跡群発掘調査会 群馬県教育委員会 1985
- 16 『群馬県史』通史編2 群馬県史編さん委員会 群馬県 1991
- 17 『丸山-北田下-中埜-村主-中山B』群馬県教育委員会 1988
- 18 『丸山-北原』群馬県教育委員会 1987
- 19 『群馬県前橋市前山遺跡発掘調査報告書』前橋市教育委員会 1987
- 20 『年報3』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 21 『昭和58年度筑北北部遺跡群発掘調査概報』筑北北部遺跡群発掘調査会 群馬県教育委員会 1984
- 22 『筑北北部遺跡-今井神社古墳-栗坂青柳遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 23 『年報1』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 24 『前橋市史』第1巻 前橋市 1971
- 25 『阿高北戸道上-伊勢山-大道-山王-明神山』群馬県教育委員会 1989
- 26 『昭和59年度筑北北部遺跡群発掘調査概報』筑北北部遺跡群発掘調査会 群馬県教育委員会 1985
- 27 『兜米遺跡』群馬県教育委員会 1985
- 28 『柳久保遺跡群Ⅲ』前橋市埋蔵文化財調査事業団 1988
- 29 『柳久保遺跡群Ⅳ』前橋市教育委員会 前橋市埋蔵文化財調査事業団 1987
- 30 『年報2』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 31 『鶴谷遺跡群Ⅱ』前橋市教育委員会 1982
- 32 『筑院洗橋遺跡-筑院宮西遺跡』群馬県教育委員会（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- 33 『筑院天之宮遺跡』群馬県教育委員会（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 34 『筑院鳥原遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 35 『年報5』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- 36 『群馬県前橋市小船荷遺跡発掘調査報告書』前橋市教育委員会 前橋市埋蔵文化財調査事業団 1987
- 37 『筑院前原遺跡-赤石城址』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 38 『小明神遺跡群』前橋市教育委員会 1983
- 39 『小明神遺跡群Ⅴ』前橋市教育委員会 1987
- 40 『小明神遺跡群Ⅳ』前橋市教育委員会 1986
- 41 『芳賀田地遺跡群 第2巻 芳賀東部団地遺跡-古墳-平安時代その2-』前橋市教育委員会 1988
- 42 『芳賀東部団地遺跡』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 前橋市教育委員会 1984・1988・1990
- 43 『瑞気遺跡群Ⅰ』前橋市教育委員会 1983
- 44 『松峯遺跡発掘調査報告書 昭和58年度』前橋市教育委員会 佐田建設株式会社 1982
- 45 『富田遺跡群-西大宮遺跡群 昭和56年度』前橋市教育委員会 1982
- 46 『筑北北部遺跡群発掘調査概報』筑北北部遺跡調査会 群馬県教育委員会 1988
- 47 『前山遺跡』前橋市埋蔵文化財調査団 1986
- 48 『柳久保遺跡群Ⅱ』前橋市埋蔵文化財調査団 1986
- 49 『筑院北三本堂遺跡』Ⅰ・Ⅱ（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 50 『年報1』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 51 『飯土井中央遺跡』建設省-群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- 52 『年報19』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000
- 53 『年報20』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001
- 54 『年報21』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002
- 55 『波志江中野部遺跡(1)』-古墳時代以降編-日本道路公団・伊勢崎市・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001
- 56 『年報16』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997
- 57 『年報17』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998
- 58 『年報18』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999
- 59 『二之宮宮東遺跡』建設省-群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 60 『二之宮宮下遺跡』建設省-群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 61 『今井道上遺跡』建設省-群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 62 『二之宮谷地遺跡』建設省-群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 63 『女廻』群馬県教育委員会 1979
- 64 『二之宮千足遺跡』建設省-群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 65 『今井道上-道下遺跡』建設省-群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995
- 66 『飯土井二本松遺跡』建設省-群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994
- 67 『二之宮宮下西遺跡』建設省-群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996
- 68 『一般道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財整理事業』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 69 『女廻』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 70 『飯土井上組遺跡-波志江中野部遺跡』建設省-群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996
- 71 『前橋市史』第1巻 前橋市 1971

第3章 遺跡の概要

1. 検出したテフラと調査面

本遺跡で検出されたテフラは6層である。上位から浅間山を給源とする浅間A軽石(以下「As-A」と記述)、同じく浅間山を給源とする浅間-粕川テフラ(以下「As-Kk」と記述)、浅間B軽石(以下「As-B」と記述)、浅間C軽石(以下「As-C」と記述)であり、それぞれの降下年代は、As-Aが天明3年(1783)、As-Kkが大治3年(1128、推定)、As-Bが天仁元年(1108)、As-Cが3世紀終末に比定されている。各テフラの平均的な層厚は、As-Aは軽石のみで層厚0cm、As-Kkは4cm、As-Bは23cm、As-Cは0cmである。これらのテフラのうち、残存状態が良く、しかも一次堆積が確認されたものは、3層のユニット(灰色火山灰・青灰色粗粒スコリア・小豆色火山灰)まで明瞭に確認できたAs-Bのみであり、他は攪拌され混土となって確認されたものである。

権名山を給源とするテフラは、権名流川テフラ(Hr-S)、権名伊香保テフラ(Hr-I)とこれに伴う泥流であり、それぞれのテフラの降下年代は、Hr-FAが6世紀第1四半期頃、Hr-FPが6世紀第2四半期頃に比定されており、それぞれの平均的な層厚は、Hr-FAが5cm、Hr-FP(泥流)が4cmである。

上記テフラと調査面との関係は、1面がAs-B及びAs-B混土下面、2面がAs-C混土下面である。

テフラのこの本遺跡の地形は、大きく次の三つに区分することができる。すなわち、①低地部(A1区北東側、B1区東側、D1区、D2区西半部、D3区東半部)、②低位部(B2区南西部・A3区西側・C区西端部)、③微高地部(①と②を除く大半)である。幸いにも本遺跡において広範囲に地形を把握できたのは、校舎建設予定地であるB1・B2区の調査面積が最大であったことばかりではなく、部分的でしかも狭小であったものの、防球ネット建設予定地が2m幅のトレンチ掘りで西側の南北、南側の東

1. 検出したテフラと調査面 2. 1面の調査

西を縦横にしかも長距離に調査できたためであり、このことが調査予定地内において地形の分布を網羅できた大きな要因である。

2. 1面の調査

概要 本調査区での平安時代～中・近世に相当する遺構確認面は、1面(As-B及びAs-B混土下面)の文化層であり、表土下約50cmのところまで重機掘削をしたところ、A1区・B1区の低地部とB2区の22・23号溝及び竪穴住居の埋設過程の凹みにおいて、層厚約20～25cmのAs-Bの一次堆積層が確認された。また、A1区とD2区の一部では、As-Bが下位から灰色火山灰、青灰色粗粒スコリア、小豆色火山灰の3ユニットが明瞭に認められ、As-Bの上位には約1cmの間層を挟んで浅間-粕川テフラ(As-Kk)の灰色火山灰の一部を明瞭に確認することができた。それ以外はAs-Bの粗粒スコリアは確認できるものの、そのほとんどが上位からの攪拌を受けており、As-B混土として残存している場合がほとんどである。

1面で検出された遺構をみてみると、As-B降下以降のAs-B混土下木田とAs-B下水田跡、それに畝跡、溝、土坑、井戸であり、出土した遺物から特定の年代を示すものは極めて少なく、時代が広範囲に及ぶものがほとんどである。また、形状が不完全でしかも途中で先端部分が定切れている溝や遺物を伴わない多くの土坑などは、遺構そのものの機能的な詳細が不明な場合が多い。

B1区から検出されたAs-B混土下木田の擬似畦畔については、当初これらはAs-B直下の水田と思われたが、調査の進行に伴ってAs-Bが一次堆積していた部分は全体の一部分に限られていることが判明し、大半はその後の攪拌によりAs-B混土となったものである。このことは、B1区で検出されたAs-B混土下面の水田の畦畔は、As-B直下の旧地表面としての畦畔ではなく、As-B降下以降の水田耕作によって生じた畦畔の痕跡(擬似畦畔)と判断でき

る。

また、As-Bの一次堆積が認められたB1区南側では、As-B直下の疑似畦畔はまったく確認することができなかったことから、この部分はAs-B直下では水田は存在しなかった可能性が高い。このことを裏付けるように、As-B混土となっていたC地点と、As-Bの一次堆積が認められたD地点の2点で採取した土壌のプラント・オパール分析の結果では、As-B混土下面及びAs-B直下の層位からはイネのプラント・オパールがほとんど検出されておらず、このことは上記の結論の傍証となるものである(第4章 自然科学分析参照)。これとは対照的に、D2区の西半の低地部とD3区東半の低地部においてAs-B直下の明瞭な畦畔が検出され、プラント・オパールの分析結果からも稲作が行われていた可能性が極めて高いことが証明されている(第4章 自然科学分析参照)。

B1区ではAs-B混土下面から畝間跡(2号畝)を検出した。これもB1区の2号As-B混土下水田の疑似畦畔と同様に、As-B降下以降の畝耕作によって生じたいわば「擬似畝」である。この畝間跡の年代は明らかでないが、畝間跡がAs-B混土で充填されていることと、この畝の耕作土であるAs-B混土より出土した土器などからみて、As-B降下以降で中世以降と考えられる。

検出された溝は、4・25・26・27号溝が溝幅、深さともに他の溝よりも規模が大きく、北から南に向けての基幹的な流水があったものと思われる。その他の小規模な溝は、4号溝に付随するものや独立した位置で検出されたものが多く、溝幅や深さのあまりない溝に限って言えば、本来は土手状に土を盛り上げて水流を確保したものと思われるが、上位からの削平によって溝幅は狭くなり、深さも浅い溝として残存している。ゆえに、引水構造や溝そのものの機能的な詳細は不明である。

寺沢川の現河道は、本遺跡地よりも約100m東の位置を北から南に流れているが、旧河道はA1区の東端部からB1区の東半を大きく蛇行しながら、D1

区のはとんどを侵食して南流していたことが確認された。また、D1区の深掘りによる確認調査でも、1面の層位と異なる河道面が、下位(2面)から確認され、D1区西端部では、微高地から低地及び旧河道に移行している旧地表面を確認している。おそらく寺沢川右岸に相当する旧河道の西限域は、微高地縁辺部の地形的な影響に左右され、1面、2面共に確認された位置とさほど大差はなかったものと思われる。このことは、本遺跡における河床礫の石材鑑定の結果と矛盾しない(第4章3参照)。

各区、各遺構の調査成果は以下のとおりである。

◇=1面の遺構 ◆=2面の遺構を表し、()mの数値は推定値、(-)mは計測不能を表す。

(1) 水田

◇A1区 1号As-B下水田

付図1 第3・14回 写真3

被覆層と残存状況 As-Bの一次堆積層が被覆し、24号溝以外の検出面には畦畔は認められない。

水田域の地形 24号溝の走向を境にして、微高地部から低地部への転換部にあたる。

畦畔の走向と区画 24号溝に併走する畦畔が北西-南東に走り、北東方向に向かって緩傾斜する。畦畔によって囲まれた区画は認められない。

水田区画の面積 四方を畦畔で囲まれた区画がないため計測不能。

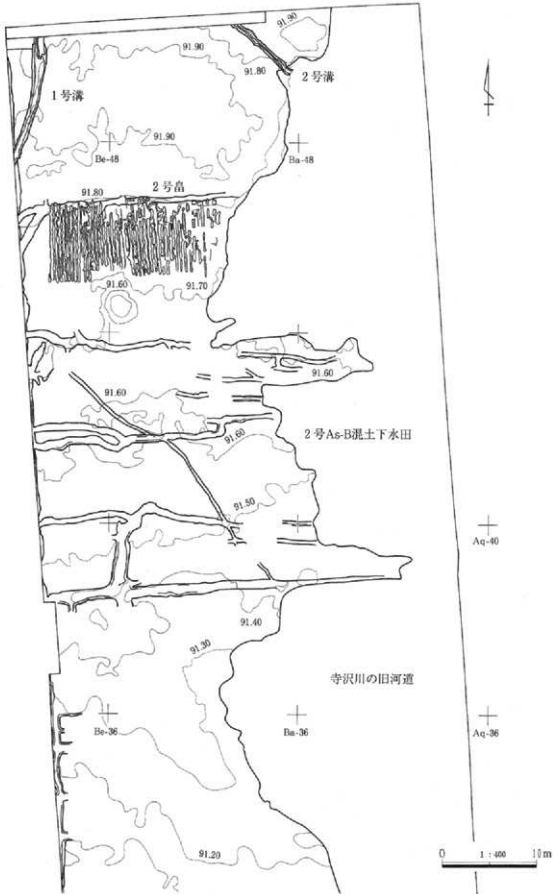
取配水の方法 北西から南東方向に傾斜をもつ24号溝東側畦畔の水口より引水する。

耕作土 黒褐色土

その他の遺構 なし。

水田面からの出土遺物 なし。

調査所見 比較的厚くAs-B一次堆積の粗粒スコリアが残存していたが、24号溝とそれに付随する土手状につくられた畦畔以外の遺構の検出はみられず、区画された水田面は確認されていない。西壁土層断面より採取した土壌のプラント・オパールの分析結果では、As-B直下層とその下層より密度が



第9図 B1区1面 2号As-B混土下水田平面図

5,100~5,900個/gと高いイネのプラント・オパールが検出されており、稲作が行われていた可能性が極めて高いことを裏付けている。なお、疑似畦畔を伴った2号As-B混土下水田とは明らかに時間的な差異があり、むしろAs-Bの一次堆積層によって被覆されていた3号As-B下水田と時期を同じくするものと考えられる。(第4章 自然科学分析参照)

◇B1区 2号As-B混土下水田

付図1 第9図 写図1

被覆層と残存状況 As-Bの粗粒スコリアが薄く被覆し、寺沢川の旧河道によって浸食されているものの、疑似畦畔が確認された。

水田域の地形 水田域の東側を、北から南へ蛇行して流れる寺沢川の旧河道まではほぼ平坦である。

畦畔の走向と区画 疑似畦畔はほぼ東西-南北方向であり、一部に北東-南西、北西-南東方向の疑似畦畔が認められる。区画は東西-南北方向の疑似畦畔によっては長方形の区画が看取できる程度である。

水田区画の面積 四方を畦畔で囲まれた区画がないため計測不能。

取配水の方法 1・2号溝が水田に伴うものであれば、水田面への引水は可能である。

耕作土 黒褐色土

その他の遺構 なし。

水田面からの出土遺物 なし。

調査所見 水田面の東側は、寺沢川の旧河道によって浸食されている。調査区の南側でも疑似畦畔は不明瞭であり、水田面には無数の凹凸が認められる。その一方で、B2区での疑似畦畔の検出は皆無であった。なお、1号As-B下水田と3号As-B下水田とは、明らかに時期を異にする。このことは、水田の被覆層がAs-Bの一次堆積か、それとも上位からの攪拌を受けているものかの違いであり、本水田は明らかに攪拌を受けたAs-Bの粗粒スコリアによって被覆されたものである。

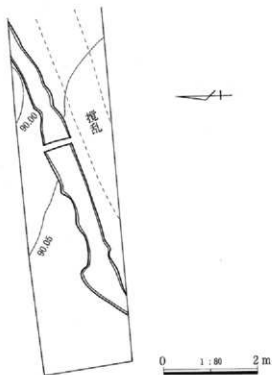
◇D2区 3号As-B下水田

付図1 第10図 写図2

被覆層と残存状況 As-Bの粗粒スコリアが厚く被覆するが、調査幅が狭いために広がりは追えない。水田面の残存状態は、湧水のため不良である。

水田域の地形 南東側の微高地から北西方向の低地に向かって、緩傾斜が認められる。

畦畔の走向と区画 低地内を東南東-西南西に走る2号畦畔と、微高地縁に北東-南西に走向する1号畦畔が確認された。調査区内での区画は認められないが、低地部から台地部への地形の傾斜変換点は確認することができた。なお、北壁より採取した土壌のプラント・オパールの分析結果では、As-B直下層で密度が3,000個/g以上、As-Bの下位でも密度が5,000個/g以上と高いイネの数値が得られており、稲作が行われていたことを裏付けている。また、As-Bよりも上位のAs-A直下層とAs-Kk上層の黒色粘質土、As-Bよりも下層のHr-PP上層及びHr-PP混層からも密度が5,000個/g以上と高いイネの数値が得られていることからみて、この低



第10図 D2区1画 3号As-B下水田、2号畦畔平面図

地ではHr-FP降下以降、継続して稲作が行われていた可能性が高いと言える(第4章 自然科学分析参照)。

水田区画の面積 四方を畦畔で囲まれた区画がないため計測不能。

取配水の方法 調査範囲が狭小のため不明。

耕作土 黒色粘質土

その他の遺構 なし。

水田面からの出土遺物 なし。

調査所見 はば東西に設定した調査区の西半分は低地であり、東半分は台地部分である。Bm-5、Bn-45グリッド内で検出された2号畦畔は、上部が削平され扁平であるが、畦の両側にもAs-Bの粗粒スコリアが入り込んでいる状況からみて、水田面を流れた水流によってえぐられたものと思われる。調査区幅が2mと狭小なために水田域の全容は明らかではないが、おそらく微高地と微高地に挟まれた比較的面積のある低地に営まれた水田であり、南方向或いは南西方向に連続して展開しているものと推測される。また、本調査区検出の2号畦畔とD3区より検出された3号畦畔の延長部が交差する走向を示すことから、4号As-B下水田と一連の水田と考えられ、A1区検出の1号As-B下水田と時期を同じくする。

◇D3区 4号As-B下水田

付図1 第11図 写図2

被覆層と残存状況 As-Bの粗粒スコリアが比較的厚く被覆する。水田面の残存状態は、湧水のため不良である。

水田域の地形 Ct-3グリッドを境にして、東側が低地部、西側が微高地部と移行する。

畦畔の走向と区画 はば南北方向に走る畦畔が1条検出されたのみである。

水田区画の面積 四方を畦畔で囲まれた区画がないため計測不能。

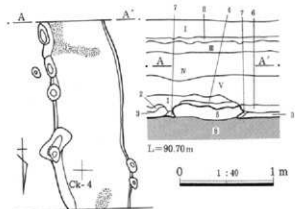
取配水の方法 調査範囲が狭小のため不明。

耕作土 黒色粘質土

その他の遺構 なし。

水田面からの出土遺物 なし。

調査所見 検出された3号畦畔は、削平によって上部が扁平である。畦の際より炭化物が確認されているが、水田面、畦畔との関係は不明である。調査区幅が2mと狭いために水田域の全容は明らかではないが、D2区の水田と同様に、おそらく台地と台地に挟まれた比較的面積のある低地に営まれた水田であり、さらに南、或いは南西方向に広がるのが推測される。また、D2区Cb~Cd-4グリッド内検出の2号畦畔と本調査区3号畦畔の延長部が交差する走向を示すことからみて、3号As-B下水田と一連の水田と考えられる。なお、北壁の土層断面より採取した土壌のプラント・オパール分析の結果では、As-B直下層及びAs-Bの下位層で密度が3,000個/g、As-Bの下層で密度が5,000個/gと高いイネの数値がえられており、D2区の3号As-B下水田と一連の稲作が行われていた可能性が高い。



D3区(1面) 4号As-B下水田、3号畦・土層断面

- | | | |
|-----|--------|-------------------------|
| I | 暗褐色土 | 現行水田耕土 |
| II | 茶褐色土 | 現行水田床土(鉄分沈着層) |
| III | 暗褐色土 | As-Aを少量含む。 |
| IV | 暗褐色土 | 層厚に比べ、As-A、As-Bを斑点状に含む。 |
| V | 暗褐色土 | As-Bを斑点状に含む。 |
| 1 | 黒褐色土 | やや粘質。 |
| 2 | As-B | 小豆色火山灰。 |
| 3 | As-B | 粗粒スコリア。 |
| 4 | 黄褐色土 | 鉄分沈着層。 |
| 5 | 黒色粘質土 | As-B下水田の畦土。下部に炭化物小片混入。 |
| 6 | 黒色土 | As-Bの小豆色火山灰を多量に含む。 |
| 7 | 黒褐色粘質土 | 粘性が6層に比べ高くなる。 |
| 8 | 黒色粘質土 | As-B直下の水田耕土。 |

第11図 D3区1面 4号As-B下水田、3号畦
平面図・土層断面図

(2) 畠

◇A2区 1号畠

付図1 第12図 写図2

位置 Bq-Br-56・57、Bs-57グリッド

重複 26号溝に先行するが、27号溝との新旧関係は不明である。

被覆層と残存状況 畠間にはAs-Bを含む暗褐色土が単層堆積する。残存状態は不良であり、畠間の耕作痕跡のみの検出である。

畠域の地形 調査区中央部の平坦な微高地上に位置する。

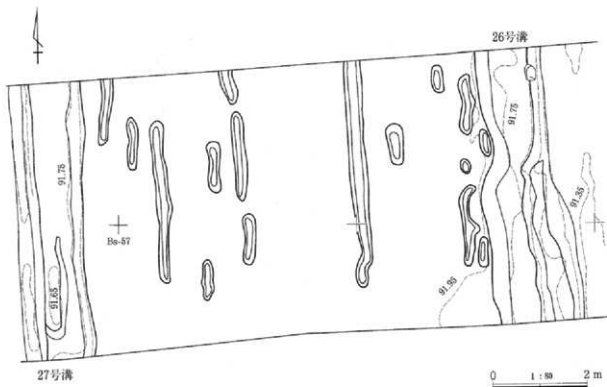
畠間の走向と数 南北方向の10条の畠間耕作痕を確認したが、26・27号溝にかかる部分については不明である。

耕作土 地山は暗褐色シルトであるが、上位からの攪拌を受けているために不明である。

出土遺物 なし。

調査所見 南北の走向をもつ26・27号溝に挟まれた一画より検出された畠である。東端の畠間の途中が26号溝によって削平を受けていることから、26号溝よりも古いことが窺え、また、27号溝には畠間の途中がかかっているために、溝との新旧関係は不明である。畠間に関して言えば、畠間列が等間隔な箇所と密接した箇所が見受けられるが、畠間の走向はほぼ南北方向で一致する。また、畠間の長さが長い箇所と途切れ途切れの短い箇所が混在する。

A2区1面での遺構の検出は、25・26号溝と本畠のみであり比較的希薄であるが、As-Bの粗粒スコリアの堆積が、A1区の低地部に向かう調査区東側ほど厚く、西に行くにしたがってAs-B混土となっていくのが看取できる。おそらくA1区24号溝の走向からみて、A2区の北側に北西から南東方向に向かう24号溝が走り、その北側にA1区に続く低地部が広がっている可能性が考えられる。



第12図 A2区1面 1号畠平面図

◇B1区 2号畠

付図1 第1300 写真1・3

位置 Bb-Bf-45・46グリッド

重複 2号As-B下水田の畦畔よりも新しい。

被覆層と残存状況 As-B・As-Kkの二次堆積物を多量に含んだ茶褐色土が単層堆積する。畝間は明瞭に残存するが、畝間の耕作痕跡のみの検出である。

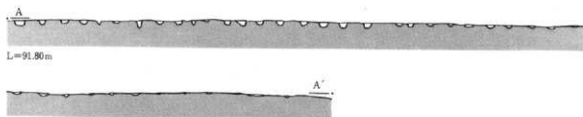
畠地の地形 平坦な微高地上に位置する。

畝間の走向と数 南北方向の畝間耕作痕が41条残存。

耕作土 地山は暗褐色シルトであるが不明。

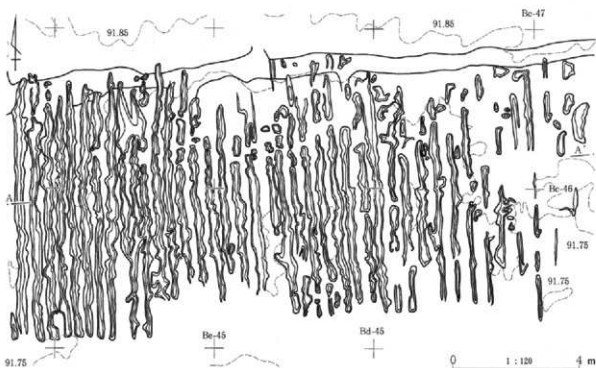
出土遺物 土器片

調査所見 畝間が密集している状況からみて、複数回の畝の造り替えが窺える。年代を示す遺物を伴わないために年代の特定は明らかではないが、比較的時期の新しい畠と思われる。また、上空からの空中写真を撮影したところ、地上では確認できなかった連続した畝間列の続きを確認することができた。それによると、B1区北半の2号As-B下水田の畦畔で囲まれた部分のほとんどに畝間列の耕作痕が認められ、南北方向に延びる畝間列をもつ比較的大規模な畠域であることが判明した。現行の土地利用は水田耕作であったが、それ以前は畠が行われていた。



B1区(1面) 2号畠・土層断面

1 茶褐色土 As-B・As-Kkの二次堆積物を多量に含む。



第13図 B1区1面 2号畠平面図・土層断面図

(3) 溝

◇A1区 24号溝

付図1 第14・123図 写図3・4

位置 Ba~Be-57, Bb~Bf-58グリッド

重複 なし。

走向 北西-南東方向

規模 調査長20.1m 幅1.60~2.45m

深さ0.05~0.41m

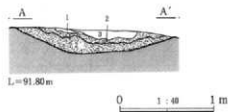
形状 (傾斜 北西端91.47m 南東端91.48m)

溝の幅は流水方向に向かって狭まり、緩やかに彎曲する。底面は半円形に緩やかに立ち上がる。

埋没土 上層にAs-Kk, As-Bが一次堆積する。

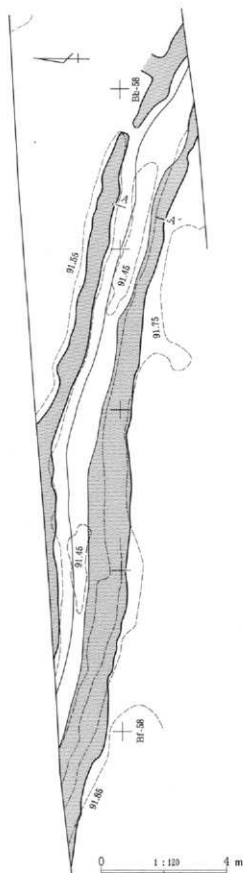
出土遺物 なし。

調査所見 As-B直下の溝である。流水方向は両端での高低差はあまりないが、北西から南東方向の低地縁辺を地形の傾斜変換点に沿って巡っているものと推測でき、1号As-B下水田に伴う水路と思われる。特に北東側の溝の立ち上がり部分には畦畔が併走し、その一部に水口と思われる切れ目が確認できる。これは用水路から水田面への取水口としての機能をもつものである。なお、As-B直下の黒色粘質土とAs-B直上の暗褐色粘質土から、高い数値のプラント・オパールが検出されており、As-B降下以降も水田が営まれたものと思われる。



A1区(1面) 24号溝・土層断面

- 1 As-Kk 浅岡-船川テフラの灰色火山灰。
- 2 As-B 小豆色火山灰。
- 2' As-B 粗粒スコリア。
- 3 黒褐色土 As-Bの小豆色火山灰との混土。



第14図 A1区1面 24号溝平面図・土層断面図

◇A 2区 25号溝

付図1 第15図 写図4

位置 Bj-56~58グリッド

重複 なし。

走向 北-南方向

規模 調査長6.00m 幅2.16~2.52m

深さ0.11~0.22m

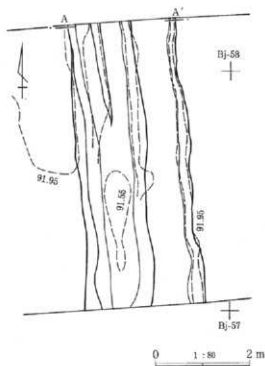
形状 (傾斜 北端91.61m 南端91.57m)

溝幅はほぼ均一で直線である。底面は幅広で平坦であり、法面はテラスをもって緩やかに立ち上がる。

埋没土 As-B・Hr-FAに伴うパミス・As-Cを含む暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 狭い調査区内での検出であるが、他の調査区内において合流が予想される同程度の規模をもつ溝は見当たらない。途中で溝が途切れている可能性は溝底面の流水状況からみて低く、おそらくはA 2区とB 2区の間で東方向に曲がるか、B 1区とB 2区の中間を抜けていることが考えられる。流水方向は北から南方向である。



◇A 2区 26号溝

付図1 第16図 写図4

位置 Bp・Bq-56・57グリッド

重複 4号溝よりも新しい。

走向 北-南方向

規模 調査長5.78m 幅4.24~4.56m

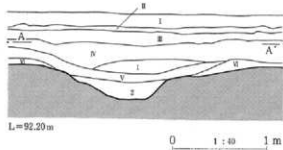
深さ0.35~0.55m

形状 (傾斜 北端91.34m 南端91.33m)

溝幅はほぼ均一で直線的に延びる。底面には凹凸はあるもののほぼ平坦で幅広である。法面は、テラスをもつて緩やかに立ち上がる。

埋没土 As-B・Hr-FAに伴うパミスを含む茶褐色土と暗褐色土・As-Cを含む黒褐色土・暗褐色土がレンズ状堆積する。

出土遺物 なし。

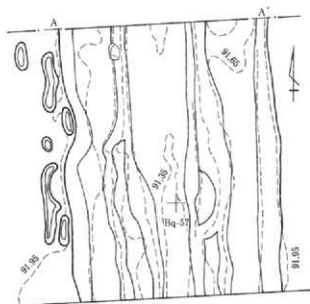


A 2区(1面) 25号溝・土層断面

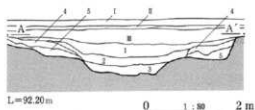
- I 暗褐色土 表土。
- II 茶褐色土 鉄分沈着層。現行水田床土。
- III 鈍暗褐色土 Hr-FAに伴う軽石とAs-Bを少量含む。硬い。
- IV 黄褐色砂質土 キャサリン台風の洪水砂礫に比定。
- V 暗褐色土 As-Bを斑点状に多量に含むAs-B混土。
- VI As-B 浅間日軽石
- 1 暗褐色土 IV層の洪水砂ブロックを斑点状に含む。しまりあり。As-B、As-Cも少量含む。
- 2 暗褐色土 As-C、Hr-FAに伴うパミス、As-Bを多量に含む混土。しまりあり。

第15図 A 2区 1面 25号溝平面図・土層断面図

調査所見 流水方向は北から南方向であり、B 2区の4号溝の北端部と走向方向・位置・規模等が近似していることからみて、おそらく合流して同一の溝となる可能性が高い。



第16図 A2区1面 26号溝平面図・土層断面図



A2区(1面) 26号溝・土層断面

- I 暗褐色土 表土。
- II 茶褐色土 鉄分沈着層。現行水田床土。
- III 鈍暗褐色土 Hr-FAに伴う軽石とAs-Bを少量含む。硬い。
- 1 茶褐色土 Hr-FAに伴うパミス。As-B混土。
- 2 暗褐色土 Hr-FAに伴うパミスを少量含む。As-Bを斑点状に混入。
- 3 茶褐色砂質土 Hr-FAパミス。As-B。As-Cの混土。
- 4 黒褐色土 As-Cを直立状に多量に含む混土。
- 5 暗褐色シルト 黄褐色ブロックを少量含む。粒子均一で細かい。

◇A2区 27号溝

付図1 第17図 写図4

位置 Bs-56・57グリッド

重複 なし。

走向 北-南方向

規模 調査長5.90m 幅2.80~3.10m

深さ0.36~0.40m

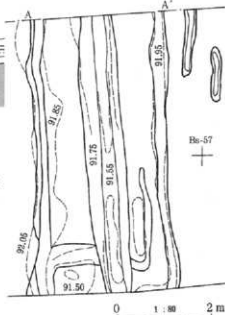
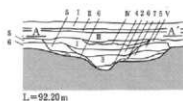
形状 (傾斜 北端91.51m 南端91.56m)

溝幅はほぼ均一で直線的に延びる。底面は中央部で幅約25cmの一段深い流路を残し、両法面はテラスをもって緩やかに立ち上がる。

埋没土 As-B・Hr-FAに伴うパミス・As-Cを含む茶褐色土・黄暗褐色土・黒褐色砂質土・にぶい黄褐色シルト・茶褐色砂層が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 狭い調査区内での検出であるが、比較的大きな溝幅をもつ。B2区の4号溝の北端部と走向方向・位置・規模等が同程度なことからみて、おそらく同一の溝と思われる。流水方向は若干南端部が北端部よりもレベルが高いが、南から北方向への流れは考えられず、北から南方向への流水が妥当と思われる。



A2区(1面) 27号溝・土層断面

- I 暗褐色土 表土。
- II 茶褐色土 鉄分沈着層。現行水田床土。
- III 鈍暗褐色土 Hr-FAに伴う軽石とAs-Bを少量含む。固い。
- IV 黄褐色砂質土 キャサリン台風の洪水砂層に比定。
- V 暗褐色土 As-Bを斑点状に多量に含むAs-B混土。
- VI As-B 浅間B軽石のスコリア。
- VII 暗褐色土 Hr-FAに伴う軽石とAs-C混土。
- 1 茶褐色土 Hr-FAパミスとAs-B。As-Cの混土。
- 2 黄褐色土 As-Cを少量含む。
- 3 鈍黄褐色砂礫層 φ5cm程度の礫を混入。
- 4 黒褐色砂質土 粒子均一で細かい砂質土。
- 5 茶褐色土 As-Bが多量。Hr-FAパミスが少量。
- 6 鈍黄褐色シルト 粒子均一で細かい。
- 7 茶褐色砂層 黒色砂層をラミナ状に挟む。

第17図 A2区1面 27号溝平面図・土層断面図

◇B1区 1号溝

付図1 第188回 写真1・5

位置 Bf-47~50グリッド

重複 2号As-B下水田の擬似畦畔よりも新しい。

走向 北-南西方向

規模 調査長(13.40)m 幅(0.70~1.54)m
深さ(0.04~0.18)m

形状 (傾斜 北端91.76m 南西端91.81m)

溝幅は彎曲部分に膨らみをもつ。底面は幅広ではほぼ平坦であり、両法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 As-B・Hr-FAに伴うバミスが単層堆積する。

出土遺物 なし。

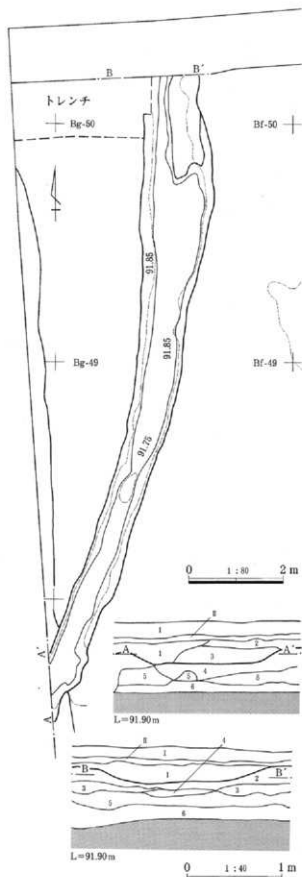
調査所見 As-B下水田の擬似畦畔を切って水田面を走向していることからみて、水田耕作に関係する溝と考えられる。流水走向は南西端と北端とは南西端の方がやや高く、A1区の調査で明らかになっている低地部への流入が考えられるが、現段階では不明である。

B1区(1面) 1号溝・西壁土層断面A-A'

- I 暗褐色土 非常に固く、ばさついている。As-Bを少量含む。(表土)
- II 茶褐色土 鉄分沈着層。非常に固い。As-Bを少量含む。
- 1 暗褐色土 As-BとHr-FAに伴う軽石を少量含む。しまりあり。
- 2 暗褐色土 1層に近似するが、やや色調が灰色味を帯びる。
- 3 暗褐色土 1層に近似するが、As-Cの量がやや多い。
- 4 黒褐色土 Hr-FAに伴う軽石とAs-Cとの混土。
- 5 黒褐色土 4層に近似するがAs-Cの量が多くなる。
- 6 黒褐色土 As-Cが上層に少量残り、粒子が細くなる。やや粘質。

B1区(1面) 1号溝・北壁土層断面B-B'

- I 暗褐色土 非常に固くばさついている。As-Bを少量含む。(表土)
- II 茶褐色土 鉄分沈着層。非常に固い。As-Bを少量含む。
- 1 暗褐色土 鉄分沈着層を所々に含む。As-Bを斑点状に多量に含む混土。しまりあり。
- 2 黒褐色土 Hr-FAに伴う軽石を含む。As-Cを多量に含む混土。しまりあり。
- 3 黒褐色土 As-C混土。
- 4 黒褐色土 3層に近似するが、As-Cの量がやや少ない。
- 5 暗褐色土 上層に少量As-Cを含む。粒子細かく均一。
- 6 黄灰色土 粒子細かく均一。やや粘質。



第18図 B1区1面 1号溝平面図・土層断面図

◇B1区 2号溝

付図1 第19図 写真1・5

位置 Ba-49・50、Bb-50グリッド

重複 寺沢川の旧河道面に先行する。

走向 北西-南東方向

規模 調査長(7.80)m 幅(0.44~0.74)m

深さ(0.11~0.29)m

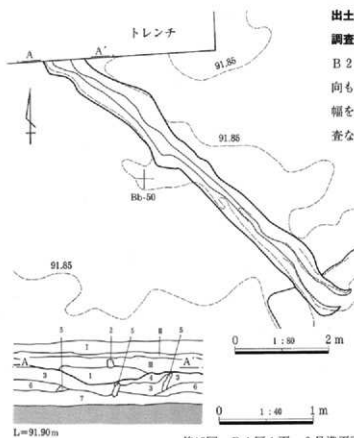
形状 (傾斜 北西端91.67m 南東端91.59m)

溝幅はほぼ均一で直線的に延びる。底面は多少の平坦面を残し、両法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 As-Bを少量含むブロックと砂層が単層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 流水方向は、北西から南東方向とみることができ、南東部には寺沢川の旧河道によって削られている。



L=91.90m

第19図 B1区1面 2号溝平面図・土層断面図

◇B2区 4号溝

付図1 第20・21・27図 写真5・31 観音表P147・154

位置 Bp-32~36、Bq-29~44、Br-26~31・39~49、Bs-25~27、46・48グリッド

重複 2面の19・22号溝よりも新しく、5・6・11号溝と接続する。

走向 北-南西方向

規模 調査長121.7m 幅1.38~5.25m

深さ0.10~0.60m

形状 (傾斜 北端91.59m 南西端90.56m)

溝幅は彎曲する部分では膨らみをもち、下流に向かって広がって先細る。底面は幅広く平坦であるが凹凸が激しく、部分的ではあるが、溝中央部に一段深い流路を残す箇所も認められる。両法面は緩やかに立ち上がる。

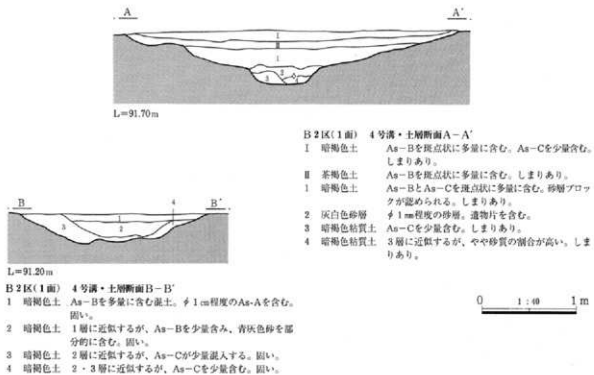
埋没土 As-A・As-Bを多量に含む暗褐色土・茶褐色土・灰白色砂層・As-Cを少量含む暗褐色粘質土が自然堆積し、底面には小円礫が多数散在する。

出土遺物 鋳器鉢・砥石

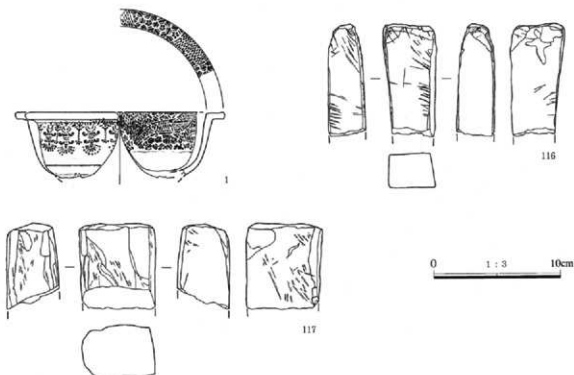
調査所見 A2区の27号溝と一連の溝と考えられる。B2区の調査区を北から南西方向に走向し、流水方向もそれに準じる。途中、11・5・6号溝に分水し溝幅を狭めるが、南西端の延長線が調査区外で未調査なため、機能的な詳細は不明である。

B1区(1面) 2号溝・北壁土層断面

- I 暗褐色土 非常に固く、ばきついている。(表土)
- II 茶褐色土 鉄分沈着層。非常に固い。As-Bを少量含む。
- III 暗褐色土 As-Bを少量含む混土。しまりあり。
 - 1 砂層 2層をブロック状に少量含む。φ1mmの黄・灰・白色砂からなる。
 - 2 砂層 茶褐色砂層ブロック。
- 3 黒褐色土 Hr-FAに伴う軽石とAs-Cとの混土。
- 4 暗褐色土 III層に近似するが色調がやや暗い。
- 5 暗褐色土 As-Cを少量含む。
- 6 黒褐色土 As-C混土。
- 7 黄灰色土 As-Cを少量含む。粒子均一でしまりあり。



第20図 B 2区1面 4号溝土層断面図



第21図 B 2区1面 4号溝出土遺物

◇B2区 5号溝

付図1 第22図 写真5

位置 Bo-26~28、Bp-27~32グリッド

重複 北端が4号溝に接続し、Bp-32グリッド内で7号溝と接続する。

走向 北-南方向

規模 調査長34.76m 幅0.64~1.44m

深さ0.08~0.24m

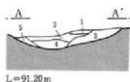
形状 (傾斜 北端91.12m 南端90.87m)

溝幅はほぼ均一で僅かに彎曲が認められる。底面はほぼ平坦であり、所々に落ち込みがみられる。法面は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

埋没土 As-B・As-Cを含む暗褐色土・青灰色砂層・黄褐色土が自然堆積する。

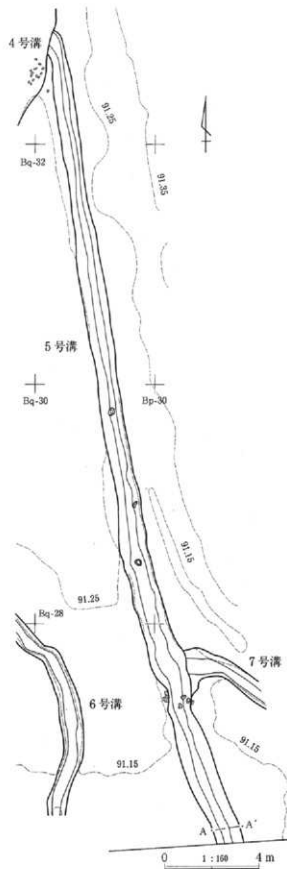
出土遺物 なし。

調査所見 Bp-32グリッド内で溝の北端が4号溝と接続し、Bo-27グリッド内で7号溝の西端と接続する。4号溝の接続部分底面の高低差は10cmであるが、流水方向は4号溝からの引水を受けて北から南西方向と思われる。また、7号溝との接続部分での高低差は14cmあり、接続付近で小円礫の集中箇所が認められるが、流水方向を操作する堰などの施設の痕跡は確認されておらず、機能的な詳細は他溝と同様に不明である。



B2区(1面) 5号溝・土層断面

- 1 暗褐色土 粒子細かく均一。ややしまりあり。
- 2 暗褐色土 As-Bを多量に含む。しまりあり。
- 3 暗褐色土 2層に近似するが、As-Cを少量含む。固い。
- 4 青灰色砂層 $\phi 0.5\text{mm}$ 程度の砂を多量に含む。
- 5 黄褐色土 As-B、As-Cを少量含む。固い。



第22図 B2区1面 5号溝平面図・土層断面図



◇B2区 6号溝

付図1 第23図 写真5

位置 Bp-26・27、Bq-27～29、Br-28・29グリッド

重複 北西端が4号溝に接続する。

走向 北西-南方向

規模 調査長17.86m 幅0.50～0.95m

深さ0.02～0.09m

形状 (傾斜 北西端91.11m 南端91.03m)

溝幅はほぼ均一であるが下流に向かうにしたがって彎曲し先細る。底面は平坦であり、両法面の立ち上がりはほぼ均等である。

埋没土 As-B・As-Cを含む黄褐色土が単層堆積する。

出土遺物 土師器片

調査所見 5号溝と同様にBr-29グリッド内で4号溝と接続する。4号溝の接続部分底面の高低差は22cmであるが、流水方向は傾斜からみて北西から南方向であり、4号溝から引水した溝と思われる。4号溝との接続部分での環跡・杭跡等の痕跡は認められない。また、近接する5号溝とは4号溝から引水している状況は同じであるが、5号溝がほぼ直線的な形状を示しているのに対して、大きく彎曲していることと、被覆層に含まれるAs-Bの粗粒スコリアが5号溝に比べて多いという点では違いがみられる。

B2区(1面) 6号溝・土層断面
1 黄褐色土 As-BとAs-Cを含む。

第23図 B2区1面 6号溝平面図・土層断面図

◇B2区 7号溝

付図1 第24図

位置 Bm-26、Bn-26・27、Bo-27グリッド

重複 西端が5号溝に接続する。

走向 西-南東方向

規模 調査長12.62m 幅0.58~1.36m

深さ0.05~0.09m

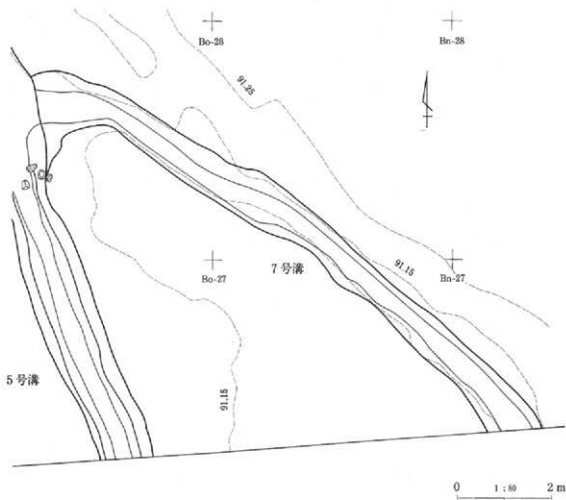
形状 (傾斜 西端91.06m 南東端91.09m)

溝幅は5号溝との接続部分で大きく影らみをもつが、それ以外は概して均一であり僅かに彎曲する。底面は幅広く平坦である。

埋没土 As-B・As-Cを含む暗褐色土・青灰色砂層・黄褐色土が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 Bo-27グリッド内で溝の西端が5号溝と接続する。5号溝の接続部分における底面の高低差は14cmであるが、流水方向は南東端のレベルが西端のレベルに比べ僅かに高くなっているもの、走向からみて5号溝から引水した溝と考えるのが妥当と思われる。また、5号溝との接続部分付近で、5号溝の底面に小円礫が集中している箇所が認められるが、本溝との因果関係やその他施設などの機能的な詳細は不明である。なお、本溝の東側に位置し南北の走向をもつ9号溝南端の延長部と、本溝の南東端の延長部が接続する可能性が考えられるが、共に延長部が調査区外であることと、2つの溝の年代が特定できないために、同時期に存在し一連の溝と認定するための確証は得られていない。



第24図 B2区1面 7号溝平面図

◇B2区 8号溝

付図1 第25図 写図6

位置 Cb-36~42グリッド

重複 なし。

走向 北-南方向

規模 調査長31.50m 幅0.40~0.46m

深さ0.02~0.14m

形状 (傾斜 北端91.61m 南端91.48m)

溝幅はほぼ均一で僅かに彎曲して残存する。底面は半円形に立ち上がる。

埋没土 As-Bを含む茶褐色土とAs-B・As-Cを含む暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 流水方向は北から南方向である。北端がCb-42グリッド内で、南端がCb-36グリッド内で不明瞭となる。17・18号溝が北端部の延長線上にあるが、機能的な詳細は不明である。

◇B2区 9号溝

付図1 第26図 写図6

位置 Bj-26~28、Bk-27~32、Bl-31~36、Bm-35~38、Bn-38~46グリッド

重複 21号溝にBn-43・44グリッド内で接続する。

走向 北-南方向

規模 調査長103.50m 幅0.36~0.86m

深さ0.04~0.13m

形状 (傾斜 北端91.81m 南端91.26m)

溝幅はほぼ均一であり緩やかな蛇行を繰り返す。底面は半円形で緩やかに立ち上がる。

埋没土 As-Bを大量に含む茶褐色土とAs-Cを多量に含む黒褐色土が自然堆積する。

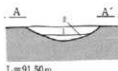
出土遺物 灰輪陶器片・須恵器壺片・土師器埴片

調査所見 4号溝と併走する。21号溝にBn-43・44グリッド内で接続し、接続部分での高低差は3cmである。流水方向は北から南方向であり、北端部はBn-46グリッド内で不明瞭となる。機能的な詳細は不明である。



B2区(1面) 8号溝・土層断面

- 1 茶褐色土 As-Bを多量に含む。しまりあり。
- 2 暗褐色土 As-BとAs-Cを含む。しまりあり。



B2区(1面) 9号溝・土層断面

- 1 茶褐色土 As-Bを多量に含む。しまりあり。
- 2 黒褐色土 As-Cを斑点状に多量に含む。しまりあり。

第25図 B2区1面 8・9号溝土層断面図

◇B2区 10号溝

付図1 第26図 写図6

位置 Br~Bt-34グリッド

重複 東端が11号溝に接続する。

走向 西-東方向

規模 調査長11.60m 幅0.22~0.58m

深さ0.02~0.09m

形状 (傾斜 西端91.38m 東端91.39m)

溝幅はほぼ均一であり僅かに彎曲が認められる。溝の断面形はほぼ半円形である。

埋没土 As-Bを多量に含む暗褐色土が単層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 溝中央部のレベルが高く、両端共にあまり高低差はない。Br-34グリッド内で11号溝に接続し、接続部での高低差は6cmであることから、流水方向は西から東方向と考えられるが、4号溝から11号溝を通しての引水を考慮すれば不明である。Bt-34グリッド内で西端部が途切れる。11号溝が4号溝と合流していることから、4号溝に付随した機能をもった溝と考えられる。11号溝との接続部分での渠跡、杭跡などの痕跡は確認できない。

◇B2区 11号溝

付図1 第26図 写図6

位置 Bq-34、Br-33・34、Bs-32・33グリッド

重複 10号溝にBr-34グリッド内で接続し、4号溝にBq-34グリッド内で接続する。

走向 東-南西方向

規模 調査長14.50m 幅0.36~0.73m

深さ0.12~0.18m

形状 (傾斜 東端91.41m 南西端91.33m)

溝幅はほぼ均一で4号溝との接続部分で僅かに彎曲する。底面は半円形に立ち上がる。

埋没土 As-Bを含む暗褐色土・青灰色砂層・As-B・As-Cを含む暗褐色土がレンズ状堆積をする。

出土遺物 土師器片

調査所見 4号溝の接続部分底面と東端部との高低差は34cmであるが、流水方向は4号溝からの引水を受けて東から南西方向と考えられる。4号溝との接続部分での埋跡、枕跡等の痕跡は認められない。



第26図 B2区1面 10・11号溝平面図・土層断面図

◇B2区 12号溝

付図1 第27図 写図31 観望表P147

位置 Br-44~49、Bs-46・48グリッド

重複 4号溝に伴走しBr-44グリッド内で合流する。

走向 北-南方向

規模 調査長26.00m 幅1.20~1.65m

深さ0.12~0.37m

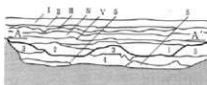
形状 (傾斜 北端91.66m 南端91.43m)

溝幅はほぼ均一で直線的に延びる。底面は幅広で平坦であり、両法面は緩やかに立ち上がる。底面には4号溝と同様に小円礫が多数散在する。

埋没土 As-B・As-Cを含んだ暗褐色土・黒褐色土・暗褐色砂質土・灰褐色砂質土・黒褐色土が自然堆積する。

出土遺物 灰軸陶器皿・土師器甕

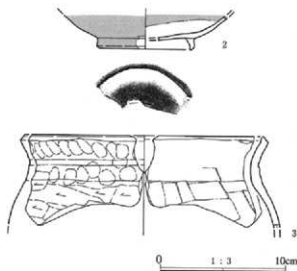
調査所見 4号溝に併走しBr-44グリッド内で合流することからみて、A 2区で検出された26・27号溝の延長部が、それぞれ4・12号溝と同一である可能性も否めない。流水方向は4号溝同様に北から南方向であるが、機能的な詳細は不明である。4号溝との接続部分での履跡、枕跡等の痕跡は認められない。



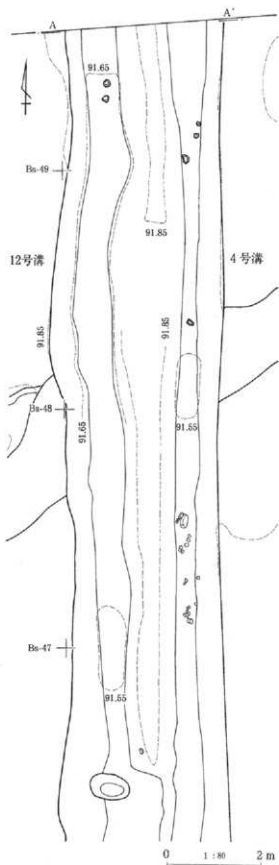
L=92.00m

B 2区(1面) 4・12号溝・土層断面

- | | | |
|-----|--------|----------------------------------|
| I | 灰褐色土 | 粘りのある表土。 |
| II | 灰褐色土 | I層よりやや色調が薄くなる。下層にAs-B粒を含む。固い。 |
| III | 茶褐色土 | 鉄分沈着痕を多量に含む。As-B混じり。しまりあり。 |
| IV | 茶褐色土 | III層よりも色調が明るい。固い。 |
| V | 茶褐色土 | As-B粒を多量に含み、鉄分沈着痕が多量認められる。しまりあり。 |
| 1 | 暗褐色土 | As-B、As-C混じり。固い。 |
| 2 | 暗褐色砂質土 | I層に近似するが、多量の砂を混入する。しまりなし。 |
| 3 | 黒褐色土 | As-C混土。固い。 |
| 4 | 茶褐色土 | 粒子均一で細かい。φ5~15cm大の礫を含む。しまりあり。 |
| 5 | 黄褐色シルト | 粒子細かく均一。φ10cm大の礫を含む。地山。 |



0 1:3 10cm



第27図 B 2区1面 4・12号溝平面図・土層断面図・出土遺物

◇B2区 13号溝

付図1 第28回 写図6・31 観察表P147

位置 Bs-Ce-48グリッド

重複 14号溝とCc・Cd-48グリッド内で接続する。

走向 西-東方向

規模 調査長27.10m 幅0.44~0.92m

深さ0.06~0.14m

形状 (傾斜 西端91.82m 東端91.86m)

溝幅はほぼ均一であるが、14号溝との接続部分で僅かに膨らみをもつ。底面は幅広で平坦であり、両法面は傾斜をもって立ち上がる。

埋没土 As-Bを多量に含む暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物 灰釉陶器皿・須恵器甕片・須恵器埴片・土師器甕片

調査所見 Cc・Cd-48グリッド内で14号溝と交差する。底面の西端と東端の高低差はあまりないが、流水方向は西から東方向とするのが妥当と考えられる。東端部はBs-48グリッド内で途切れるが、機能的な詳細は不明である。

◇B2区 14号溝

付図1 第28回 写図6

位置 Bs-Ce-48グリッド

重複 13号溝とCc・Cd-48グリッド内で接続する。

走向 西-東方向

規模 調査長27.90m 幅0.18~0.50m

深さ0.02~0.08m

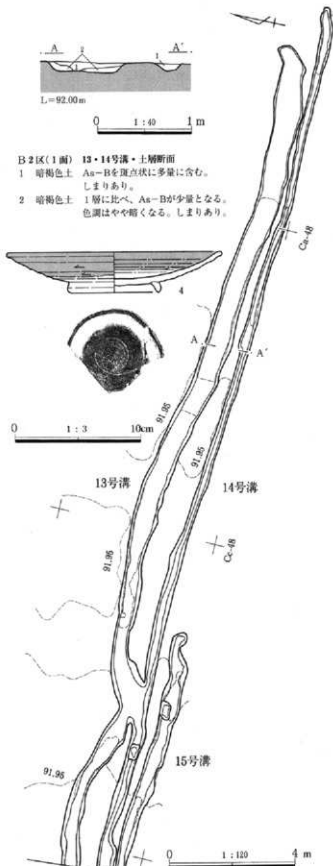
形状 (傾斜 西端91.86m 東端91.84m)

溝幅は比較的狭く直線的に延びる。底面は平坦であり、両法面は傾斜をもって立ち上がる。

埋没土 As-Bを多量に含む暗褐色土が単層堆積。

出土遺物 須恵器埴片

調査所見 Cc・Cd-48グリッド内で13号溝と交差する。底面の西端と東端の高低差はあまりないが、流水方向は西から東方向とするのが妥当とみられる。東端部が途切れるが、機能的な詳細は不明である。



B2区(1面) 13・14号溝・土層断面
 1 暗褐色土 As-Bを重点的に多量に含む。しまりあり。
 2 暗褐色土 1層に比べ、As-Bが少量となる。色調はやや暗くなる。しまりあり。

第28回 B2区1面 13・14号溝平面図・土層断面図・出土遺物

◇B2区 15号溝

付図 第29図 写真6

位置 Cc・Cd-47・48、Ce-48グリッド

重複 14号溝とCd・Ce-48グリッド内で接続する。

走向 西-東方向

規模 調査長7.80m 幅0.28~0.60m

深さ0.06~0.14m

形状 (傾斜 西端91.89m 東端91.81m)

溝幅は一定ではなく不規則に膨らむ。底面はほぼ平坦であり、両法面は傾斜をもって立ち上がる。

埋没土 As-Bの粗粒スコリアと小豆色火山灰を含む暗褐色土が単層堆積する。

出土遺物 土師器残片

調査所見 Ce-48グリッド内で途切れる。13・14号溝と併走し、流水方向も同様に西から東方向である。確認面から溝底面までの高低差は10cmであり、途中に1箇所深く落ち込む凹みが認められる。溝そのものの機能的な詳細は不明である。

◇B2区 16号溝

付図1 第29図 写真6

位置 Cb-46・47、Cc-Ce-47グリッド

重複 23号溝よりも新しい。

走向 西-南東方向

規模 調査長12.62m 幅0.68~1.22m

深さ0.09~0.19m

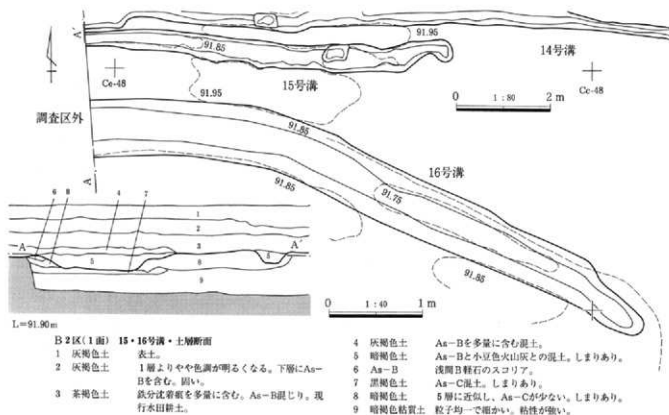
形状 (傾斜 西端91.76m 南東端91.76m)

溝幅はほぼ均一であり流水方向に向かって先細る。底面は幅広く平坦であり、法面は傾斜をもって立ち上がる。

埋没土 As-Bと小豆色火山灰を含む暗褐色土が単層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 Cb-46グリッド内で南東端が途切れる。流水方向は西から南東方向である。南東部の延長線上に20号溝があり、北西端との走向方向が一致し、埋没土も同じことからみて、本来は同一の溝であった可能性が極めて高い。機能的な詳細は不明である。



第29図 B2区1面 15・16号溝平面図・土層断面図

◇B2区 17号溝

付図1 第30図 写真6

位置 Bs-Ca-43、Ca-Cc-44グリッド

重複 なし。

走向 北西-南東方向

規模 調査長18.24m 幅0.48~0.72m

深さ0.06~0.09m

形状 (傾斜 北西端91.72m 南東端91.71m)

溝幅はほぼ均一であるが、Cb-46グリッド内で膨らみをもつ。底面は半円形に立ち上がる。

埋没土 As-Bと小豆色火山灰を含む暗褐色土が単層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 Cb-44グリッド内で溝の中央部がやや幅広で不明瞭となり、Bs-43グリッド内で南東端が途切れる。本溝に南接して18号溝が併走するが、途切れた溝の先が18号溝と接続する可能性も埋没土が同じことからみて否めない。流水方向は溝の中央部でやや高くなるが、北西から南東方向と考えるのが妥当と思われる。また、18号溝と併走するが、同一の溝であったかは不明である。

◇B2区 18号溝

付図1 第30図 写真6

位置 Cb-Cc-44グリッド

重複 なし。

走向 北西-南東方向

規模 調査長3.30m 幅0.32~0.42m

深さ0.11m

形状 (傾斜 北西端91.72m 南東端91.72m)

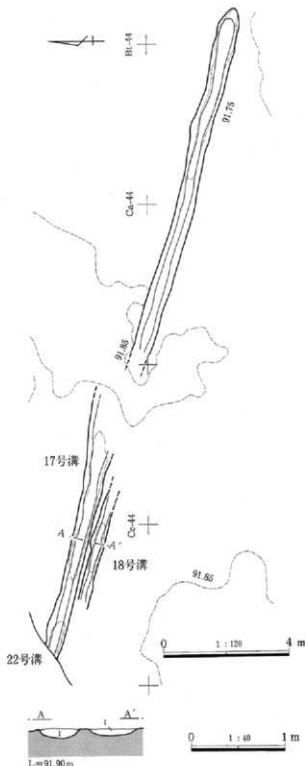
溝幅はほぼ均一で直線的に延びる。底面は半円形に立ち上がる。

埋没土 As-Bと小豆色火山灰を含む暗褐色土が単層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 Cc-44グリッド内で北西端が、Cb-44グリッド内で南東端が途切れる。17号溝に併走し、

17号溝の途切れた先が本溝のものである可能性も否めない。17号溝と同様に機能的な詳細は不明である。



L=91.90m

B2区(1面) 17・18号溝・土層断面

1 暗褐色土 As-Bと小豆色火山灰との混土。しまりあり。

第30図 B2区1面 17・18号溝平面図・土層断面図

◇B2区 19号溝

付図1 第31図 写図7

位置 Bs-Ca-47、Bs-48グリッド

重複 2面の22号溝の覆土上位で溝底面が終了していることからみて、22号溝よりも新しく12号溝に近接する。

走向 西-東方向

規模 調査長10.50m 幅1.30~1.42m

深さ0.10~0.17m

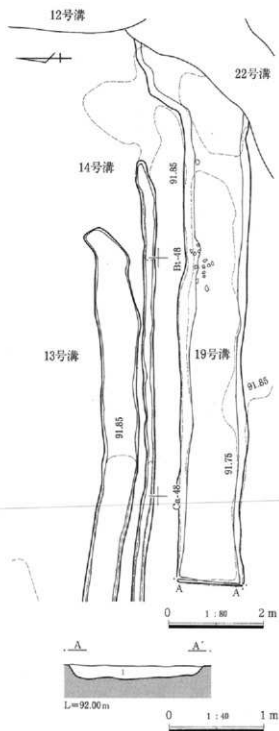
形状 (傾斜 西端91.76m 東端91.70m)

溝幅は均一でありほぼ直線的に延びる。また、Bs-47・48グリッド内では溝幅が大きく膨らみをもつ。溝の底面は幅広く平坦であり、法面は傾斜をもって浅く立ち上がる。

埋没土 As-Bの粗粒スコリアと小豆色火山灰を含む暗褐色土が単層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 ほぼ直線的に走向し、流水方向は西から東と考えるのが近接する溝の走向からみて妥当と思われる。Ca-47グリッド内で西端部が突如途切れ、Bs-48グリッド内で東端部が12号溝と近接する。また、B2区で検出された溝は、計19条であるが本溝を含めて13・14・15・17・18・20号溝が走向をほぼ同じくして密接している。このことからみて、これらの溝がすべて同時期に機能していたとは考えられず、むしろ13・14・15号溝を含めた溝が、一つの溝であった可能性が高い。しかしながら、溝そのものの残存状態は不良であり、僅かな底面からの立ち上がりも溝として検出したに過ぎず、このことは、前述したように溝を掘った残土を溝の両側に盛って流水を可能にした構造であるならば、さほど深さを要しなくても溝としての機能は十分に果たせたであろうし、このことがかえって上位からの攪拌を受けて、両側の盛り土部分を消滅させ、溝底面だけを残す結果となったものと思われる。本溝に限らず幅の狭い浅い溝は、このような状況下で検出されたものと推測される。



B2区(1面) 19号溝・土層断面

1 暗褐色土 As-Bの粗粒スコリアと小豆色火山灰との混土、しまりあり。

第31図 B2区1面 19号溝平面図・土層断面図

◇B2区 20号溝

付図1 第32図

位置 Bs-44~46、Bt-45・46、Ca-46グリッド

重複 22号溝よりも新しい。

走向 北西-南東方向

規模 調査長18.46m 幅0.74~1.44m

深さ0.06~0.18m

形状 (傾斜 北西端91.68m 南東端91.69m)

溝幅は一定の箇所のみみられるが、流水方向に向かってほぼ直角に曲がって先細る。底面は幅広く平坦であり、法面は傾斜をもって立ち上がる。

埋没土 As-Bと小豆色火山灰を含む暗褐色土が単層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 Bs-45・46グリッド内で直角に折れ曲がる。北西部の延長線上に16号溝があり、南西端との走向方向が一致し、埋没土も同様であることからみて、本来は同一の溝であった可能性が極めて高い。確認面から溝底面までの高低差は最大で10mであり、両側面の盛土は上位から攪拌によって既に失われているものとおもわれる。溝そのものの機能的な詳細は不明である。

◇B2区 21号溝

付図1 第33図 写0331 観察表P147

位置 Bk-46、Bl-45・46、Bm-44・45、Bn-43・44グリッド

重複 南西端が9号溝に接続する。

走向 北東-南西方向

規模 調査長17.00m 幅0.66~1.68m

深さ0.02~0.12m

形状 (傾斜 北東端91.76m 南西端91.74m)

溝幅は不規則である。底面は平坦であり、両法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 As-Bを含む暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物 陶器擂鉢片・須恵器羽釜片・土師器碗片



第32図 B2区1面 20号溝平面図

調査所見 9号溝とBn-43・44グリッド内で接続する。流水方向は9号溝の接続部底面と南西端との高低差が3cmであることからみて、北東から南西方向と考えられる。9号溝との接続部分での塚跡、枕跡等の痕跡は認められず、先端部は上位からの埋拵による先細りが認められる。

◇B2区 31号溝

付図1 写図7

位置 Bi-38・46・47、Bj-38～46グリッド

重複 なし。

走向 北東-南東方向

規模 調査長44.35m 幅0.29～1.03m

深さ0.31～0.42m

形状 (傾斜 北東端91.46m 南東端91.41m)

溝幅は不規則であり小刻みに蛇行する。底面はほぼ平坦であり、両法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 As-Bを含んだ灰黒色土・灰黄色土が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 北東端はBi-48グリッド内で、南東端はBi-38グリッド内で不明瞭となる。途中、Bj-43・44グリッド内でも接続部分が途切れ、小門礫が散在する。流水方向は北東から南東方向であり、溝そのものの機能的な詳細は不明である。



第33図 B2区1面 21号溝平面図・土層断面図・出土遺物

(4) 土坑

◇B2区 2号土坑

付図1 第34回 写図7

位置 Bo-32・33グリッド

重複 なし。

規模 1.55m×1.31m 深さ0.15m

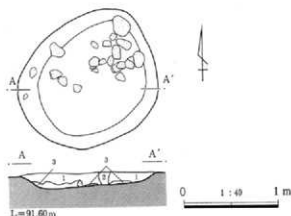
形状 平面形 歪んだ楕円形

断面形 凹凸をもつ底面は、東側がやや高く、
法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 ϕ 5~20cm大の円礫を多量に含んだ暗褐色
土・灰褐色土・黒褐色土が堆積する。

出土遺物 土師器残片

調査所見 5~20cm大の円礫が底面一面に残存し、
焼土、炭化物、人骨などの痕跡は認められない。明
らかに人為的な礫の投入が窺え、土壌墓などの埋葬
に関係した施設が考えられるが、機能的な詳細は不
明である。



- B2区(1面) 2号土坑・土層断面
- 1 暗褐色土 As-B粒とAs-Bアッシュ、茶褐色土との混土。
 ϕ 10~20cmの円礫を多量に含む。しまりあり。
 - 2 灰褐色土 粒子均一で細かい。As-B粒を多く含む。 ϕ 10~
20cmの円礫を多量に含む。しまりあり。
 - 3 黒褐色土 As-C粒を斑点状に含む。 ϕ 10~20cmの円礫を多
量に含む。ややしまりあり。

- A3区(1面) 1号井戸・土層断面
- 1 暗褐色砂礫層 ϕ 5~30cm大の円礫を中・下層に多量に含む。
 - 2 暗褐色砂質土 粒子均一で細かい。やや砂質。
 - 3 黄褐色砂質土 粒子均一で細かい。
 - 4 砂礫層 ϕ 10~50cm大の円礫に灰色砂層を含む砂礫層。
沼川根川の河床礫。

第34図 B2区1面 2号土坑平面図・土層断面図

(5) 井戸

◇A3区 1号井戸

付図1 第35・36回 写図7・31 観察表P147・154

位置 Cm・Cn-55・56グリッド

重複 なし。

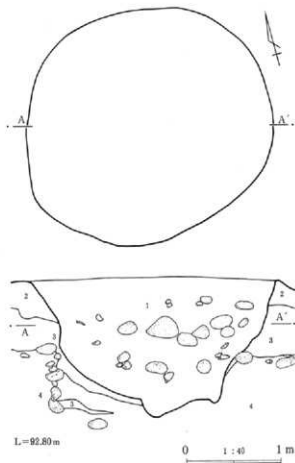
規模 2.64m×2.40m 深さ1.45m

形状 平面形 ほぼ円形

断面形 底面中央部に円形状の最深部をもち
法面は確認面に向かって傾斜をもつ
て立ち上がる。

埋没土 ϕ 5~30cm大の円礫を多量に含む暗褐色砂
礫層が単層堆積する。

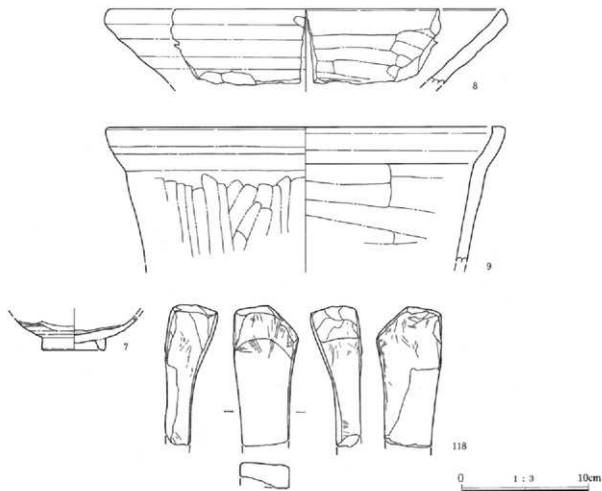
出土遺物 陶器碗・軟質陶器指鉢片・軟質陶器内耳
鍋片・砥石



第35図 A3区1面 1号井戸平面図・土層断面図

調査所見 井戸は旧利根川の河床礫層を掘り抜いている。3号井戸と形状等が近似していることからみ

て、両者は期的にも近く、遺物からみて中世頃と思われる。



第36図 A 3区1面 1号井戸出土遺物

◇D4区 3号井戸

付図1 03370 7/087・31 観察表P147

位置 Dh-34・35、Di-34・35グリッド

重複 なし。

規模 2.37m×(-)m 深さ1.27m

形状 平面形 (ほぼ円形)

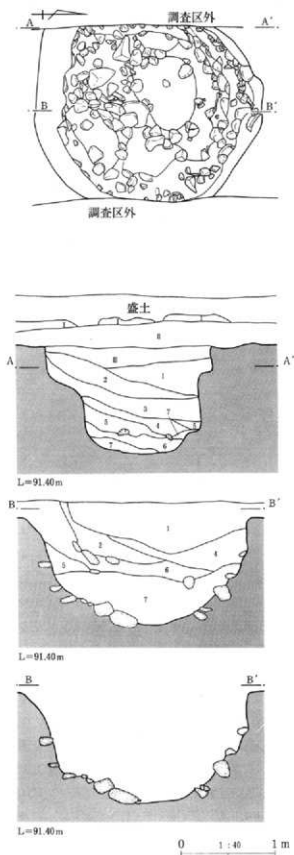
断面形 底面中央部に円形状の最深部をもち、
法面は確認面に向かって傾斜をもって立ち上がる。

埋没土 As-B・As-Cを少量含む暗褐色土・暗褐色砂礫層・暗褐色土・黄褐色シルト・暗褐色砂礫層・

茶褐色砂礫層が自然堆積する。

出土遺物 青磁碗片

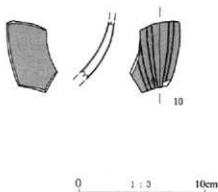
調査所見 井戸は旧利根川の河床礫層を掘り抜いている。1号井戸と掘り方の形状等が近似していることからみて、期的にも極めて近く、出土遺物からみて共に中世頃と推測される。また、埋没土の堆積状況から見て、南側から徐々に埋没していったことが窺われる。東側と西側の一部が調査区外と農業用用水路にかかっているために、井戸の全形は明らかではないが、灌漑に伴った溜井等の施設ではないことは、堀の戻し時点において配水溝がないことを確認済である。



本遺跡より検出されている井戸は、A3区1面の1号井戸とD4区1面の3号井戸、2面ではA3区2号井戸、D6区4号井戸の4基である。これらの井戸は検出面の違いにより掘方の形状に違いが認められる。1面より検出された井戸は、平面形がほぼ円形であることは2面検出井戸と共通しているが、掘方に関して言えば、楕円状に大きく掘り込まれている。一方2面検出の井戸は、2号井戸に代表されるように掘方の幅があまり大きくなく、ほぼ垂直に掘り込まれている。このことは、1面の井戸は、ある程度幅広に掘り込み、その後で礫を積むか、あるいは板材を組んだ構造をもっていたものと推測されるが、土層断面の観察では、自然埋没の様相を呈しており、またその根拠となる礫列の痕跡や構築物の出土をみていないことから、詳細は不明である。青磁碗片の出土は本井戸のみである。

D4区(1面) 3号井戸・土層断面A-A' B-B'

- | | | |
|-----|--------|----------------------------|
| I | 灰褐色土 | 現行の水田耕土。 |
| II | 茶褐色土 | 現行の水田床土。(鉄分沈着層) |
| III | 暗褐色土 | As-B混土。 |
| 1 | 暗褐色土 | As-B、As-Cを少量含む混土。 |
| 2 | 暗褐色砂礫層 | φ1~3cm大の円礫を斑点状に含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | 1層に近似するが、φ3cm程度の円礫を少量含む。 |
| 4 | 暗褐色土 | 暗褐色シルトにAs-Cを少量含む。 |
| 5 | 黄褐色シルト | φ1~2cm大の円礫を含む。 |
| 6 | 暗褐色砂礫層 | φ5~40cm大の円礫を多く含む。 |
| 7 | 茶褐色砂礫層 | φ3~5cm大の円礫を多量に含む。鉄分沈着痕を残す。 |



第37図 D4区1面 3号井戸平面図・土層断面図・エレベーション図・出土遺物

3. 2面の調査

概要 本調査区での古墳時代～平安時代(As-B)に相当する遺構確認面は、As-C混土下面であり、As-Cの降下年代が3世紀終末に位置づけられていることからみて、古墳時代～平安時代(As-B)の遺構及び遺物が該当する。この層の下位は旧利根川の河床礫層となり、溝底面及び堅穴住居の床面の調査時や掘方の段階で既に多数の円礫が露出している部分も認められる。

古墳時代の遺構として、A2区の微高地上を南東から北西方向に向かって延びる1号踏み分け道、A3・D5区の微高地上を南東から北西方向に向かって延びる2号踏み分け道、B2区の南側の微高地縁辺部を、北西から南東方向に緩やかに蛇行しながら横切る道幅約30cmの3号踏み分け道をそれぞれ検出し、2・3号踏み分け道はおそらく連続した同一の道と考えられる。これらの踏み分け道は、Hr-FAが踏み分け道の凹部分だけに残存することで削平を免れ、Hr-FAを覆土とする踏み分け道として検出されたものである。なお、該期の集落が確認されておらず、踏み分け道が目指す目的地などは残念ながら不明であるが、集落と集落、集落と水田や畠、或いは集落と水場などを結ぶものであることは明らかである。また、Bh-27グリッド内の道の付近では、6世紀代の円筒埴輪片がまとまって出土したが、周辺に該期の遺構は確認できず詳細は不明である(付図2 写図9参照)。

B2区では、As-C混土下面から3ヶ所の畝の畝間跡を検出した。これらもB1区の畝間跡と同様に、畝の耕作によって生じた「擬似畝」である。この畝の年代は明らかではないが、畝間跡を被覆していた土壌がHr-FAに伴うバミスとAs-Cを含んでいることからみて、少なくともHr-FA降下以降でおそらく6世紀代の遺構に伴う時期か、あるいは本遺跡の集落の年代である9・10世紀代の所産と考えられ、集落との位置的な関係から9・10世紀代の集落に伴う可能性が高いと言える。但し、B2区南西隅の低

位部で検出した9号畝の畝間跡は、被覆した土壌にHr-FAに伴うバミスを肉眼では確認できないことから、Hr-FA以前の可能性があり、仮にHr-FA以前であるとすれば6世紀初頭以前の集落が付近に存在することになる。

検出された溝や土坑などについては、遺物を伴うものが極めて少なく、また、規模の大きい溝以外については、狭小な調査区のために断片的な形状を確認したにとどまり、遺構そのものの機能的な詳細は不明である。

D1区の西端部で、寺沢川の旧河道を確認した。1面の調査でも旧河道が本調査区を通過しているのが確認されたが、今回の調査では、微高地から低地部へと移行する1面の旧河道下よりさらに古い旧河道面を検出した。多量の砂礫を含んだ旧河道の走向は、北西から南東方向へと向いており、1面の旧河道の流路とほぼ同様の位置で、蛇行しながら本調査区の微高地縁を通過していたものと思われる。

各区、各遺構の調査成果は以下のとおりである。

(1) 踏み分け道

◆A2区 1号踏み分け道

付図2 写図8

位置 Br-Bt-56、Bt-Ca-57グリッド

重複 12号土坑に先行し、4号畠に近接する。

走向 北西-南東

規模 調査長17.70m 幅0.25m～0.51m

形状 (傾斜 北西端91.88m 南東端91.97m)

極めて緩やかに蛇行し、道幅は均一ではない。上面からの削平によってHr-FAの残存状態が極めて悪く、北壁の土層断面の観察でもHr-FAの堆積は認められない。また、Hr-FA除去後の道両側縁部の立ち上がりも確認できない。

埋没土 Hr-FAの一次堆積層。

出土遺物 なし。

調査所見 遺構確認時にHr-FAが帯状に極めて薄く残存した部分であり、調査当初は溝と思われてい

たが、B2区で同様の状態でHr-FAの硬化面が検出されたことにより、Hr-FAの踏み分け道と断定した。なお、Hr-FAの遺存状態は不良であり、Hr-FA自体も硬化を喪失し、Hr-FA直下での硬化面の検出も確認されていない。検出された3つの道の走向は、どれも北西から南東方向であると言う点では共通している。

◆A3・D5区 2号踏み分け道

付図2 第38回 写真8・9

位置 Cr-54・55、Cs-55・56グリッド

重複 2号井戸、5号畝に先行する。

走向 北西-南東

規模 調査長11.70m 幅0.40m~0.75m

形状 (傾斜 北西端91.84m 南東端91.81m)

底面は幅広ではほぼ均一な道幅をもち平坦である。Hr-FA上面の道とHr-FA直下の道の両側縁部は、共に凹み状に填圧された道底面から傾斜をもって立ち上がる。1号踏み分け道と同様に、極めて緩やかな蛇行を呈する。

埋没土 Hr-FAに伴うパミスを含むHr-FAの一次堆積層が堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 調査の工程上、A3区の踏み分け道が最初に検出され、その後、D5区の調査段階で延長部分が検出された。同一の道ではあるが、D5区の方が残存状態は極めて良好であり、当初はB2区で検出された3号道と同様に、Hr-FA降下以降の間もない頃につくられた道とされていたが、D5区の精査では、硬化したHr-FAを丁寧に除去したところ、その直下と東側周辺部で新たな硬化面をもち、なおかつHr-FAの上位面にトレースされた道が検出されたことから、Hr-FA降下以降の間もない頃につくられた道ではなく、Hr-FA降下以前につくられ、Hr-FA降下以降も継続して使われた道と推測され、東側の硬化面の広がりには道の分岐を示唆している。なお、Hr-FAの上面でのレベルは、北西端、南東端共に91.84mであり、ほぼ平坦と言える。

◆B2区 3号踏み分け道

付図2 写真9

位置 Bh-26・27、Bi-27、Bl・Bm-28、Bl-Bo-29、Bo-Br-30、Br-Bt-31グリッド

重複 なし。

走向 北西-南東

規模 調査長(63.50)m 幅0.20m~0.60m

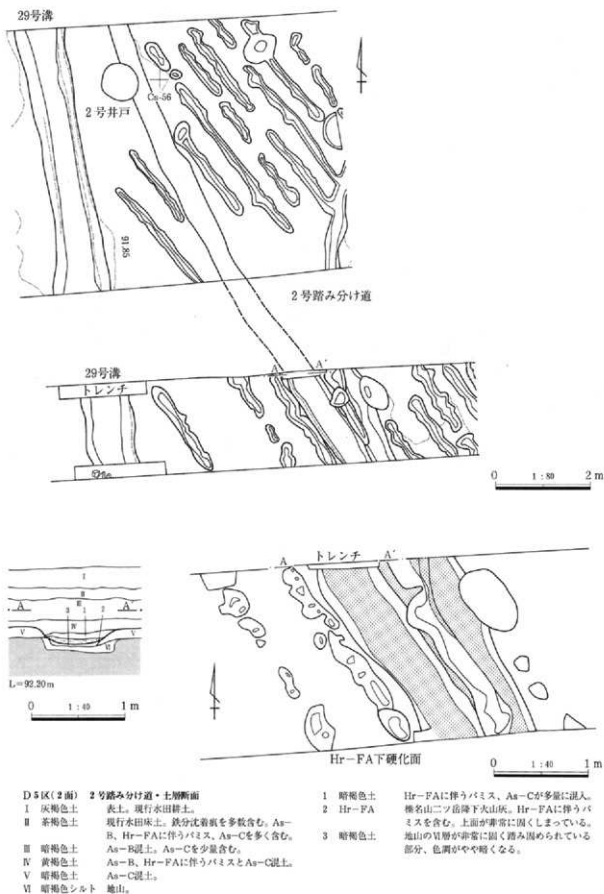
形状 (傾斜 北西端91.18m 南東端90.95m)

Bh-26グリッド内での道幅はやや広がるが、それ以外はほぼ均一な道幅をもち、極めて緩やかに蛇行を呈する。底面はほぼ平坦であり、上面からの削平によって道側縁部の立ち上がりは僅かに看取できる程度である。

埋没土 Hr-FAの一次堆積層。

出土遺物 なし。

調査所見 層厚約3cmのHr-FAによって被覆されている。調査区西壁での土層断面の観察からは、As-C混土を切り込む溝の立ち上がり部分が全く確認できないこと、Hr-FAの底面が緩やかな凹み状を呈すること、この部分を除いて周囲にHr-FAの一次堆積層が認められないこと、Hr-FA自体が硬化していることなどからみて、Hr-FA降下以降の間もない頃につくられた踏み分け道によって埋められ、この部分だけ残存したものと判断された。また、B区南側の遺構確認面からは、明確な遺構は伴わないものの6世紀代の円筒埴輪片がまとまって出土しており、道がHr-FA降下から近い年代の所産とすれば、この両者は極めて近接した時期のものになる(付図2 写真9参照)。なお、道の北西端の延長部は、台地縁を遡って西壁の土層断面で確認されたCd-33グリッド内西壁のHr-FA残存部分(標高90.39m)へと続く。A3・D5区で検出された2号道との接続関係は、両者の検出位置が離れているため不明である。Hr-FAの降下範囲は、第6図でも明らかにように、本遺跡周辺では約5cmの堆積が確認されており、Hr-FAの一次堆積層の残存状態が良好であったために道の検出が可能であった。



第38図 A3・D5区2面 2号踏み分け道平面図・土層断面図・Hr-FA下硬化面平面図

(2) 竪穴住居

◆A2区 14号竪穴住居

付図2 第39-40図 写図10・31 観望表P147

位置 Cf・Cg-56グリッド

方位 N-104°-E

規模 東西2.28m×南北3.10m

形状 隅丸長方形

面積 (6.6㎡)

埋没土 As-Cを含む灰黄褐色土・黒褐色土・暗褐色土・暗灰褐色土が自然堆積するが、残存状態は極めて不良である。

重複 なし。

壁高 北壁0.20m 南壁0.04m

貯蔵穴 南東隅に不定形の落ち込みを確認したが、遺物は伴わない。

柱穴 なし。

周溝 なし。

床面 多少の凹凸はみられるものの、概して平坦である。カマドの焚口周辺が黒く焦げ硬化している。

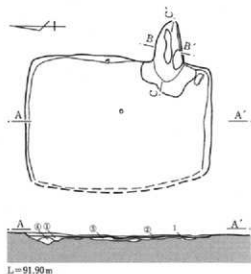
掘方 北半に大小様々な凹凸が顕著であり、中央部分を残してカマド部分から壁際を巡るように掘られた痕跡が窺える。

出土遺物 須恵器埴

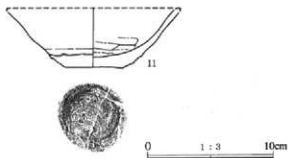
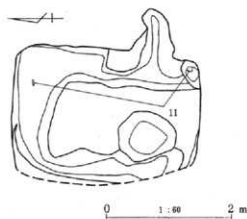
カマドの位置 東壁の中央よりやや南寄りに設置され、斜方向に延びる東カマド。

規模 焚口部幅0.45m 熱焼部奥行0.80m
熱焼部幅0.40m

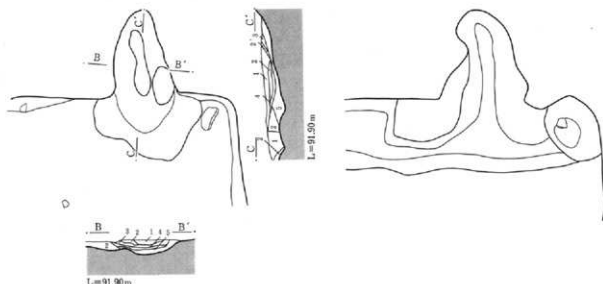
調査所見 住居の掘方の段階で、旧利根川の河床礫が少量認められた。また、南東隅の壁の立ち上がり付近で、円礫が検出されたが、おそらくカマドの軸石に使われたものと思われる。また、As-Bの降下時点では、住居の埋没が既に完了していたと思われる。住居の年代は、10世紀前半と推定される。



- A2区(2面) 14号竪穴住居・土層断面
- 1 灰黄褐色土 As-Cを含む。
- ① 黒褐色土 As-Cを含む。オリーブ色ブロックを少量混じる。
- ② 暗褐色土 白色粘土塊少量、オリーブ色ブロック少量、As-Cを僅かに混じる。固く締まる。
- ③ 暗灰褐色土 シルト質。固い。
- ④ 暗褐色土 オリーブ色ブロックを含む。As-Cを僅かに混じる。



第39図 A2区2面 14号竪穴住居平面図・土層断面図・掘方平面図・出土遺物



A 2区(2面) 14号堅穴住居・カマド土層断面

- 1 灰黄褐色土 住居の覆土。
- 2 褐色土 焼けた粘土。
- 2' 褐色土 2層に近似するが、色調がやや鈍くなる。焼土ブロックを含む。
- 3 暗灰色土 灰層。焼土粒を混じる。
- 4 暗褐色土 粘性が強い。焼土粒が混じる。
- 5 暗褐色土 炭化粒が混じる。しまりなし。

0 1:30 1 m

第40図 A 2区2面 14号堅穴住居カマド使用面・掘方平面図

◆A 3区 12号堅穴住居

付図2 第41図 写図10

位置 Db・De-55グリッド

方位 (N-92°-E)

規模 東西2.30m×南北(-)m

形状 一部調査範囲外のため不明。

面積 全形が不明なため計測不能。

埋没土 Hr-FAに伴うバミス・As-Cを含む黒褐色土・灰褐色土が自然堆積する。

重複 なし。

壁高 西壁0.14m 東壁0.18m

貯蔵穴 なし。

柱穴 なし。

周溝 なし。

床面 所々に地山がブロックで混入している。ほぼ平坦であり、僅かに締まっている。

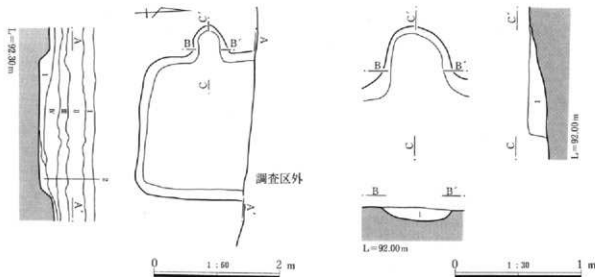
掘方 使用面と掘方との相違は認められない。

出土遺物 なし。

カマドの位置 西壁の中央部よりやや南寄りに設置され、斜方向に延びる西カマド。

規模 焚口部幅0.55m 燃焼部奥行0.49m
燃焼部幅0.45m

調査所見 住居の北半が調査区外で未調査なことから、遺物をまったく伴わないことから年代は不明である。ただ、西壁にカマドをもつものは本遺跡では本住居のみであり、他は圧倒的に東カマドである。また、土層断面の観察から、As-Bの降下時点では住居の埋没が既に完了していたものと思われることから、住居の年代が9世紀後半の可能性も考えられる。本遺跡検出の住居について言えば、年代の不明な本住居以外は、出土遺物からみて9世紀後半と10世紀前半の2つに分かれるが、仮に9世紀後半の住居だとすると、B 2区で検出された同年代の2・6・8・9・10号堅穴住居とは明らかに位置的に離れており、周辺にも同年代の住居がある可能性が高い。



A 3区(2面) 12号竪穴住居・土層断面

- I 暗褐色土 表土。現行水田耕土。
 II 茶褐色土 床土。As-Bを多く含む。固い。(鉄分沈着層)
 III 暗褐色土 As-C、Hr-FAに伴うバミスが混じる。鉄分を含む。
 IV 暗褐色土 As-BとAs-Cが中量、Hr-FAに伴うバミスが少量混じる。鉄分は少ない。
 1 黒褐色土 As-C、Hr-FAに伴うバミスを少量含む。
 2 灰褐色土 As-C、Hr-FAに伴うバミスを少量含む。

A 3区(2面) 12号竪穴住居・カマド土層断面

- I 黒褐色土 As-C、Hr-FAに伴うバミス、焼土粒を含む。

第41図 A 3区2面 12号竪穴住居平面図・土層断面図・カマド使用面平面図

◆B1区 1号竪穴住居

付図2 第42図 写図10・11・31・32 観察表P147

位置 Bd・Be-44グリッド

方位 N-64° -E

規模 東西2.50m×南北3.24m

形状 隅丸長方形

面積 8.0㎡

埋没土 Hr-FAに伴うバミス・As-Cを含む黒色土・黒灰色土・バミスを含まない黒灰色土が自然堆積する。

重複 なし。

壁高 北壁0.16m 南壁1.80m

貯蔵穴 なし。

柱穴 なし。

周溝 なし。

床面 床下からは旧寺沢川の河床礫の一部が露出するが、ほぼ平坦に床を構築している。

掘方 使用面と掘方との相違は認められない。

出土遺物 須恵器埴・須恵器羽釜

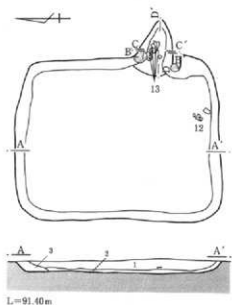
カマドの位置 東壁の中央部よりやや南寄りに設置され、斜方向に延びる東カマド。片側のカマドの袖石とカマドの燃焼部左側に支脚を残す。

規模 焚口部幅0.80m 燃焼部奥行0.77m

燃焼部幅0.29m

調査所見 南壁のやや東寄り、須恵器埴が出土している。B1区での住居の検出は1号住居のみであり、該期の住居の特徴として離れて1軒検出される場合があるが、B1区とB2区の間を通る用水路部分の未調査区域において、未検出の住居がある可能性も否定できない。また、As-Bの降下時点では、既に住居の埋没がほぼ完了していたと思われる。住居の年代は、3・11・13・14号竪穴住居と同様に10世紀前半と推定される。なお、本遺跡検出住居の年代は、出土した「コ」の字状口縁壺と灰袖陶器の共存関係から、9世紀後半と10世紀前半に分けられる。

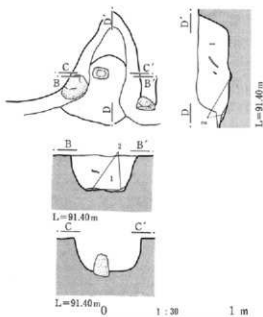
3. 2面の調査



B1区(2面) 1号竪穴住居・土層断面

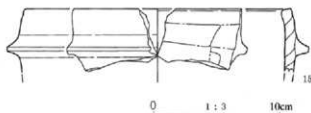
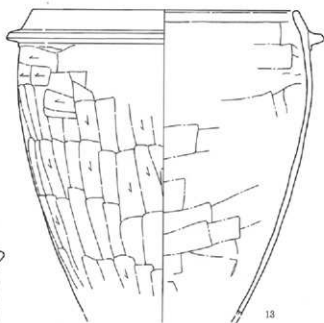
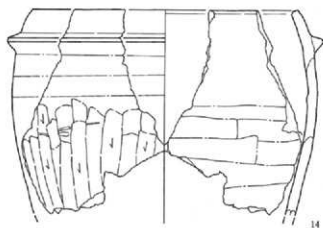
- 1 黒色土 As-C, Hr-FAに伴うパミスを含む。
- 2 黒灰色土 パミスを含まない。
- 3 黒褐色土 As-C, Hr-FAに伴うパミスを含む。

0 1:50 2 m



B1区(2面) 1号竪穴住居・カマド土層断面

- 1 黒色土 As-C, Hr-FAに伴うパミスを含む。
- 2 黒色土 焼土粒を含む。



0 1:3 10cm

第42図 B1区2面 1号竪穴住居平面図・土層断面図・カマド使用面平面図・出土遺物

◆B2区 2号竪穴住居

付図2 第43・44・45図 写図1・12・32・33 観照表P148

位置 Ca・Cb-38グリッド

方位 N-97°-E

規模 東西4.15m×南北3.23m

形状 隅丸長方形

面積 12.8㎡

埋没土 Hr-FAに伴うバミス・As-Cを含む暗褐色土が自然堆積する。As-B降下堆積時点で既に凹み状を呈する。

重複 なし。

壁高 北壁0.29m 南壁0.44m

貯蔵穴 なし。

柱穴 なし。

周溝 なし。

床面 旧利根川の河床礫を平らにして床面を構築し、

一部北西側で露出している。

掘方 大小様々な凹凸が認められ、特に床中央部で円形状の浅い掘り込み痕が看取できる。

出土遺物 須恵器坏・須恵器埴・灰釉陶器碗・灰釉陶器皿・土師器小型壺・土師器甕

カマドの位置 東壁の中央部よりやや南寄りの東カマドと南壁の中央部よりやや東寄りの南カマドが設置され、両カマド共に斜方向に延びる。東カマドで袖石や支脚に使われたと思われる円礫が多数残存する。

規模 (東カマド)

焚口部幅0.37m 燃焼部奥行0.75m

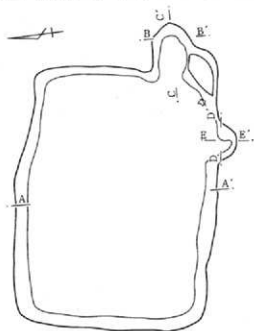
燃焼部幅0.45m

規模 (南カマド)

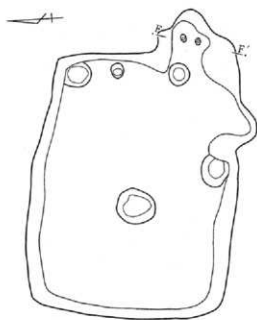
焚口部幅0.44m 燃焼部奥行0.40m

燃焼部幅0.38m

調査所見 比較的遺物が多く残存する。東と南にカマドがあり付け替えられたものと思われるが、南カ



L=91.40m



B2区(2面) 2号竪穴住居・土層断面

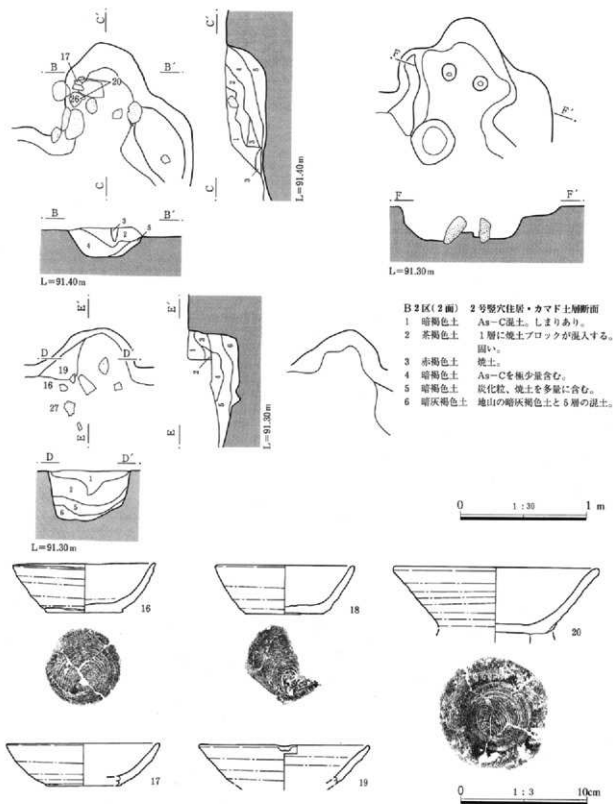
- 1 暗褐色土 Hr-FAに伴うバミスとAs-Cとの混土。しまりあり。
- 2 暗褐色土 As-C混土。しまりあり。
- 3 暗褐色土 2層に近似するが、As-Cの量が少ない。やや粘質でしまりあり。
- 4 暗褐色土 掘方の埋土。3層よりもAs-Cの量が少なくなる。

0 1:50 2 m

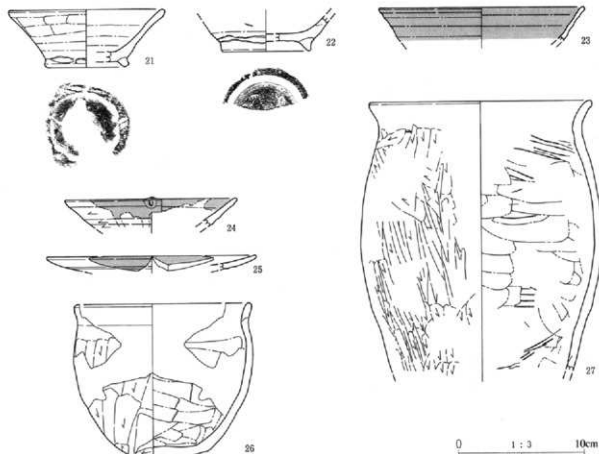
第43図 B2区2面 2号竪穴住居平面図・土層断面図・掘方平面図

マドは東カマドに比べ燃焼部の奥行が短い。なお、南にカマドを設置したものは、本遺跡では2号住居のみである。また、掘削段階でAs-Bの凹みとして

確認されている。住居の年代は、9世紀後半と推定される。



第44図 B2区2面 2号竪穴住居カマド使用面・掘方平面図・出土遺物(1)



第45図 B2区2面 2号竪穴住居出土遺物(2)

◆B2区 3号竪穴住居

付図2 第46・47・48図 写図12・13・33 観察表P148・149

位置 Bn-31・32グリッド

方位 N-102° - E

規模 東西3.56m×南北4.00m

形状 隅丸方形

面積 擾乱を受けているため計測不能。

埋没土 Hr-FAに伴うバミス・As-Cを含む黒褐色土が自然堆積する。As-B降下堆積時点で既に凹み状を呈する。

重複 7号土坑に先行する。

壁高 北壁0.22m 南壁0.24m

貯蔵穴 北東隅で円形状の落ち込みを検出したが、遺物は伴わない。

柱穴 なし。

周溝 なし。

床面 利根川の旧河床礫が北西側と南西側で露出している。

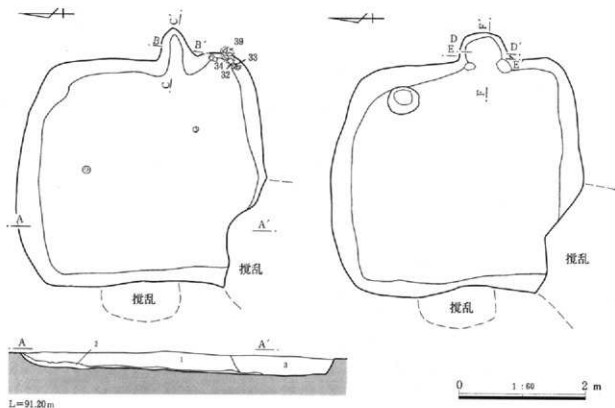
掘方 大小様々な凹凸が認められ、集中的に掘った痕跡も看取できる。

出土遺物 須恵器坏・須恵器罐・灰輪陶器碗・灰輪陶器皿・土師器甕

カマドの位置 東壁の中央部よりやや南寄りに設置され、斜方向に延びる東カマド。カマド内には袖石と支脚に使われたと思われる円礫が多数残存する。

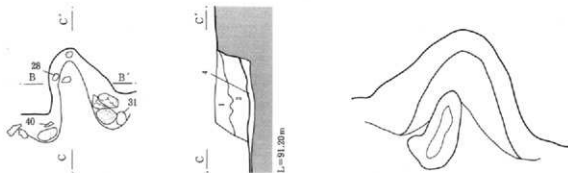
規模 焚口部幅0.35m 燃焼部奥行0.45m
燃焼部幅0.54m

調査所見 既に掘削段階ではAs-Bの凹みとして確認されている。カマド内及び周辺部に遺物を多く残し、遺物量も比較的多い。住居の年代は、10世紀前半と推定される。



B2区(2面) 3号壑穴住居・土層断面

- 1 黒褐色土 Hr-Faに伴うバミスとAs-Cを含む。焼土、炭化粒を極少量含む。
- 2 黒褐色土 As-Cを極少量含む。シルト質。
- 3 黒褐色土 7号土域の埋土。土質は1層に近似。



B2区(2面) 3号壑穴住居・カマド土層断面

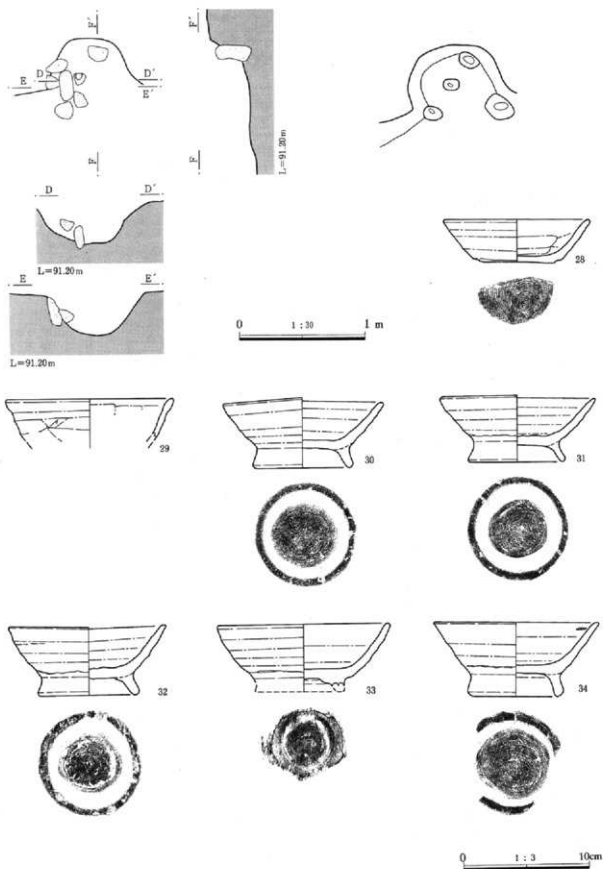
- 1 黒褐色土 焼土、炭化物をほとんど含まない。地山の灰黄色土をブロック状に含む。
- 2 黒褐色土 焼土を少量含む。
- 3 黒褐色土 2層よりも焼土を多く含む。炭化物を少量含む。
- 4 黒褐色土 炭化物を多量に含む。焼土を少量含む。掘方埋土。

L=91.20m

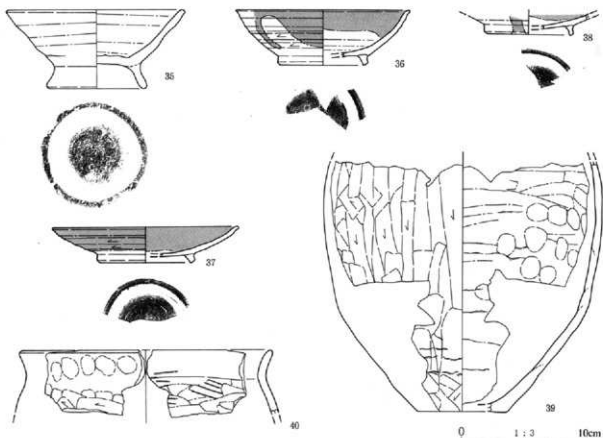
0 1:30 1m

第46図 B2区2面 3号壑穴住居平面図・土層断面図・掘方平面図・カマド使用面・掘方平面図

第3章 遺跡の概要



第47図 B 2区 2面 3号堅穴住居カマド掘方平面図・出土遺物(1)



第48図 B2区2面 3号竪穴住居出土遺物(2)

◆B2区 4号竪穴住居

巻頭カラー 付図2 第49図 写真13・34 観察表P149

位置 Bp・Bq-39・40グリッド

方位 N-111°-E

規模 東西3.30m×南北4.10m

形状 隅丸長方形

面積 12.6㎡

埋没土 上層よりAs-Bのスコリア・青灰色火山灰・小豆色火山灰を含む茶褐色土とAs-Kk・As-B・暗褐色土・茶褐色土・黒褐色土が自然堆積する。As-Bについては一次堆積層であり、As-B降下堆積時点で既に凹み状を呈する。

重覆 なし。

壁高 北壁0.38m 南壁0.24m

貯蔵穴 南東隅に円形状の凹みを検出したが、遺物は伴わず、旧利根川の河床礫が露出している。

柱穴 なし。

周溝 なし。

床面 所々に浅い凹みが認められるが、概して扁平である。

掘方 使用面と掘方との相違は認められない。

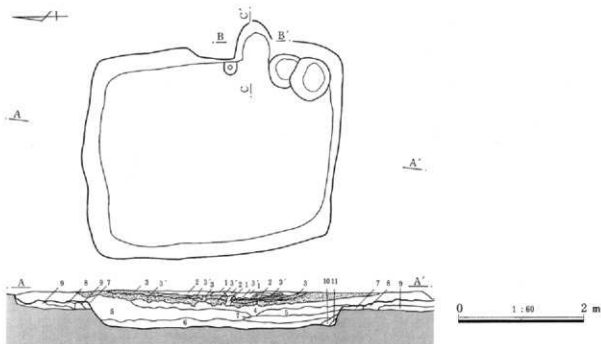
出土遺物 土師器残片・須恵器羽釜片

カマドの位置 東壁の中央部よりやや南寄りに設置され斜方向に延びる東カマド。肩軸に軸石が残存し、燃焼部中央に支脚に使ったと思われる礫を立てたピットを残す。

規模 焚口部幅0.45m 燃焼部奥行0.45m
燃焼部幅0.43m

調査所見 3号住居と同様にAs-B埋没過程の凹みにAs-Bが一次堆積している。As-Bの堆積状態も極めて良好であり、As-Bの堆積状況と9世紀後半の住居との比較から、この住居が埋没するのに約2世紀程度かかったことが見て取れる。住居の年代は、10世紀前半と推定される。

第3章 遺跡の概要

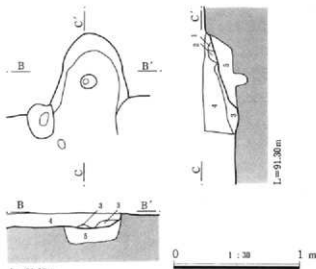


L=92.40m

B 2区(2面) 4号竪穴住居・土層断面

- 1 茶褐色土 As-Bの粗粒スコリア・青灰色火山灰・小豆色火山灰と暗褐色土との混土。しまりあり。
- 2 As-Kk 浅間-柏川テフラの一次埋積層。
- 3 As-B 浅間B軽石の小豆色火山灰
- 3' As-B 浅間B軽石の粗粒スコリア
- 4 暗褐色土 As-Bの粗粒スコリア・青灰色火山灰、Hr-FAに伴うバミス、As-Cの混土。しまりあり。
- 5 暗褐色土 4層に近似するが、茶褐色土ブロックを所々に含む。ややしまりに欠ける。

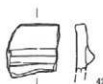
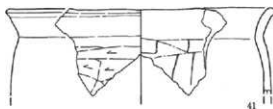
- 6 茶褐色土 5層に比べ混入バミスの比率が極端に低く、黄褐色シルトのブロック(地山)を少量含む。しまりに欠ける。
- 7 暗褐色土 5層に比べAs-Cが少なくなる。ややしまりあり。
- 8 黒褐色土 Hr-FAに伴うバミスとAs-Cとの混土。しまりあり。
- 9 茶褐色土 As-C混土。しまりあり。8層に比べ色調がやや茶色味を帯びる。
- 10 暗褐色土 粒子均一で細かい。As-Cを少量含む。
- 11 暗褐色土 10層に色調が近似するが、As-Cを全く含まない。



L=91.30m

B 2区(2面) 4号竪穴住居・カマド土層断面

- 1 赤褐色土 焼土。粒子細く均一。
- 2 暗褐色土 やや粘性あり。しまりあり。
- 3 暗褐色粘質土 粘性が強く。しまりあり。
- 4 暗褐色土 Hr-FAに伴うバミスとAs-Cとの混土。
- 5 黄褐色土 粒子均一で細かい。掘方の埋土。



0 1:3 10cm

第49図 B 2区2面 4号竪穴住居平面図・土層断面図・カマド掘方平面図・出土遺物

◆B2区 5号竪穴住居

付図2 第50・51・52図 写図14・34 観察表P149・150

位置 Bo-40、Bo・Bp-41グリッド

方位 N-105° -E

規模 東西3.20m×南北4.02m

形状 隅丸長方形

面積 12.9m²

埋没土 Hr-FAに伴うバミス・As-Cを含む黒褐色土が自然堆積する。As-B降下堆積時点で既に凹み状を呈する。

重複 なし。

壁高 北壁0.36m 南壁0.44m

貯蔵穴 南東隅と南西隅の2箇所で河床礫を掘り込んだ凹みを確認したが、両者共に遺物を伴わない。

柱穴 なし。

周溝 なし。

床面 地山と暗褐色土を混ぜ込んで床面を構築している。北東隅で旧利根川の河床礫が露出する。

掘方 一定の大きさのしっかりとした凹凸が認められ、集中的に掘り込んだ箇所も看取できる。

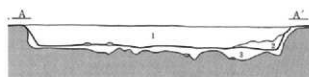
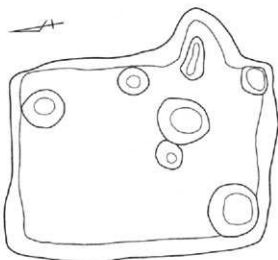
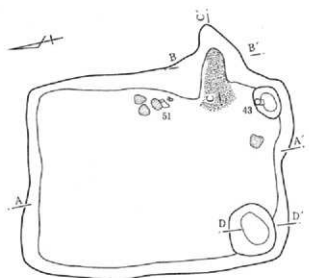
出土遺物 須恵器埴・黒色土器埴・灰軸陶器皿・土師器甕・須恵器甕・須恵器羽釜片

カマドの位置 東壁の中央部よりやや南寄りに設置され、斜方向に延びる東カマド。袖石や支脚に使われたと思われる円礫が多数残存する。燃焼部中央に焼土痕を残す。

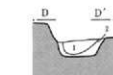
規模 焚口部幅0.50m 燃焼部奥行0.88m

燃焼部幅0.33m

調査所見 2・3・4号住居と同様に、As-B埋没過程の凹みにAs-Bが一次堆積している。住居の年代は、10世紀前半と推定される。



L=92.30m



L=91.30m

B2区(2面) 5号竪穴住居・土層断面

- 1 黒褐色土 As-CとHr-FAに伴うバミスを含む。
- 2 黒褐色土 As-Cを少量含む。地山の灰黄色土を少量含む。
- 3 黒褐色土 1層よりAs-Cが少ない。灰黄色土をブロック状に含む。

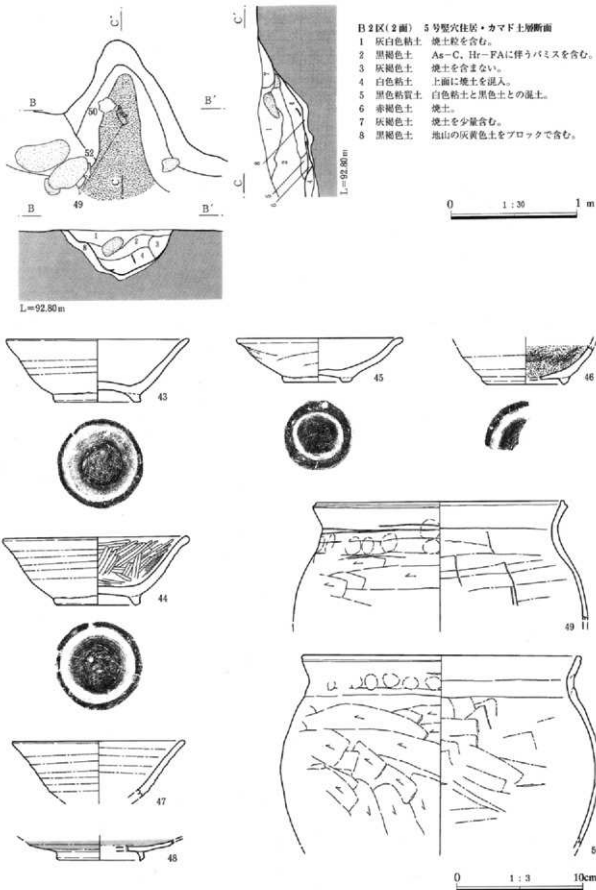
B2区(2面) 5号竪穴住居・貯蔵穴土層断面

- 1 黒褐色土 Hr-FAに伴うバミスとAs-Cを含む。
- 2 黒褐色土 バミスを全く含まない。炭化粒を少量含む。地山の灰黄色土をブロックで含む。

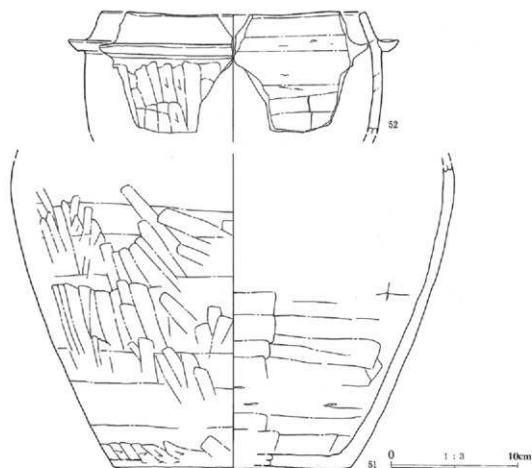
0 1:40 2m

第50図 B2区2面 5号竪穴住居平面図・土層断面図・掘方平面図

第3章 遺跡の概要



第51図 B2区2面 5号壑穴住居カマド平面図・出土遺物(1)



第52図 B2区2面 5号竪穴住居出土遺物(2)

◆B2区 6号竪穴住居

付図2 第53・54図 写真18・35 観察表P150

位置 Bm-31・32グリッド

方位 N-109° -E

規模 東西3.10m×南北3.78m

形状 隅丸長方形

面積 10.9m²

埋没土 Hr-FAに伴うバミス・As-Cを含む黒褐色土が自然堆積する。As-B降下堆積時点に既に凹み状を呈する。

重複 なし。

壁高 北壁0.32m 南壁0.36m

貯蔵穴 なし。

柱穴 なし。

周溝 なし。

床面 地山と暗褐色土との混土で平坦な床面を構築している。

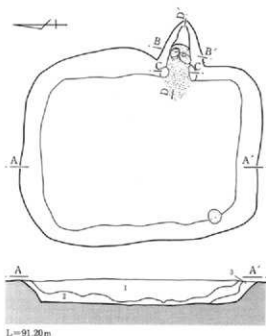
掘方 比較的凹凸が少なく浅いが、集中的に掘り込んだ箇所も看取できる。

出土遺物 土師器碗・須恵器碗・黒色土器碗・土師器壺

カマドの位置 東壁の中央部よりやや南寄りに設置され、斜方向にのびる東カマド。両袖石と支脚に使われたと思われる円礫が原位置をとどめて残存する。

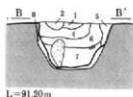
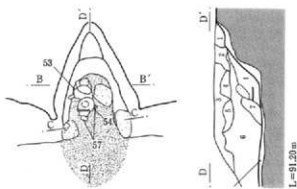
規模 焚口部幅0.35m 燃焼部奥行0.50m
燃焼部幅0.35m

調査所見 2・3・4・5号住居と同様に、As-Bの凹みとして確認されている。カマド燃焼部にある支脚は、左右2つが立ったまま検出された。住居の年代は、9世紀後半と推定される。



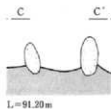
B2区(2画) 6号竪穴住居・土層断面

- 1 黒褐色土 As-CとHr-FAに伴うバミスを含む。
- 2 黒褐色土 As-Cを極少量含む、黄褐色シルトをブロックで含む。
- 3 黒褐色土 1層に近似するが、As-Cが少量となる。

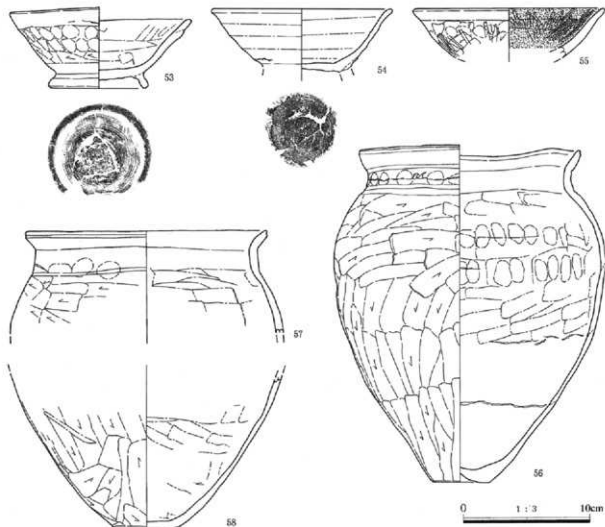


B2区(2画) 6号竪穴住居・カマド土層断面

- 1 黒色土 焼土、炭化物を含む。
- 2 褐色土 焼土を多量に含む。
- 3 黒褐色土 Hr-FAに伴うバミスとAs-Cを含む。
- 4 黒褐色土 焼土、炭化物を含むが、2層よりも少ない。
- 5 黒褐色土 焼土を少量含む。地山の黄色土をブロックで含む。
- 6 黒褐色土 焼土、炭化物を全体に含む。5層よりも地山の黄色土ブロックが少ない。
- 7 黒褐色土 焼土を多量に含む。
- 8 黒褐色土 掘方の粗土。焼土、炭化物を少量含む。地山の黄褐色シルトブロックを少量含む。



第53図 B2区2画 6号竪穴住居平面図・土層断面図・カマド使用面・掘方平面図



第54図 B2区2面 6号竪穴住居出土遺物

◆B2区 7号竪穴住居

付図2 第55・56・57図 写図15・16・35-37 観察表P150-151

位置 Bm・Bn-39・40グリッド

方位 N-105° - E

規模 東西3.66m×南北3.66m

形状 隅丸方形

面積 13.1m²

埋没土 Hr-FAに伴うバミス・As-Cを含む黒褐色土・灰褐色土が自然堆積する。

重複 なし。

壁高 北壁0.40m 南壁0.32m

貯蔵穴 南東隅と南西隅で円形状の凹みを検出したが、遺物は両者共に伴わない。

柱穴 なし。

周溝 なし。

床面 地山と暗褐色土との混土で床面を平らに構築している。地山部分と暗褐色土部分の色の違いが明白である。

掘方 大小様々な凹凸が認められ、北西隅で集中的に掘り込んだ箇所も取壊し、南側では旧利根川の河床礫が露出する。

出土遺物 須恵器坏・須恵器埴・黒色土器埴・墨書土器片・灰軸陶器皿・土師器甕・須恵器羽釜

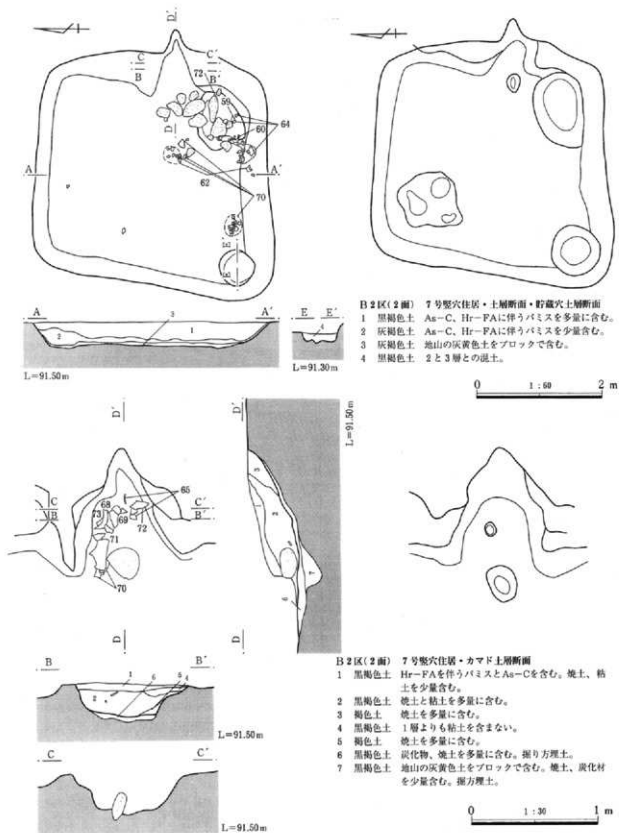
カマドの位置 東壁のほぼ中央部に設置され、斜方向に延びる東カマド。片側の軸石が残存し、燃焼部左側の位置に支脚が残存する。

規模 焚口部幅0.80m 燃焼部奥行0.77m

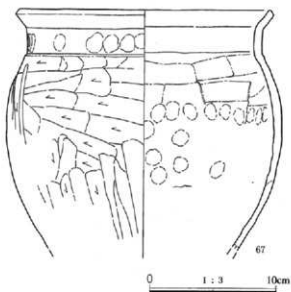
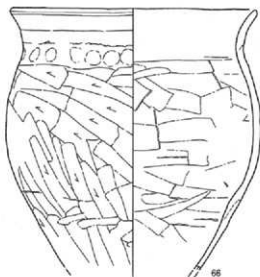
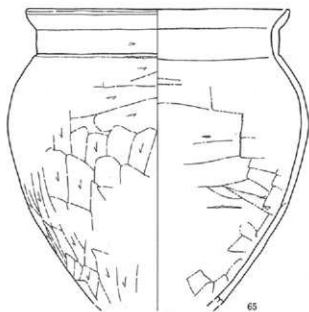
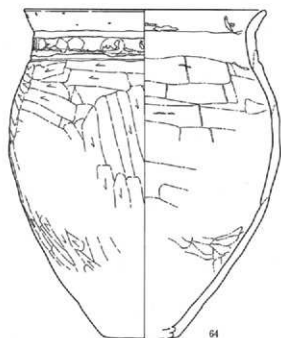
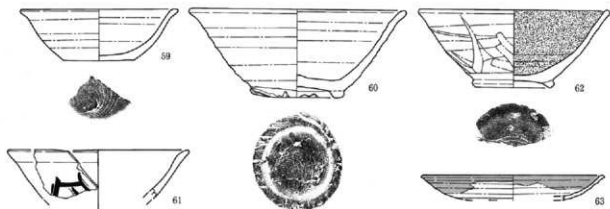
燃焼部幅0.48m

調査所見 As-Bの降下時点では既に住居の埋没が

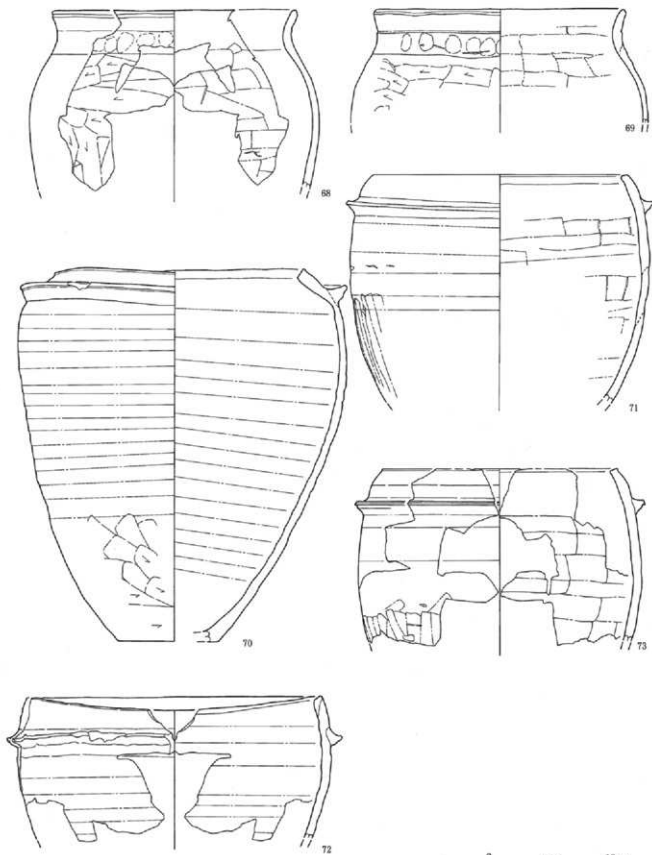
完了していたものと思われる。したがって、住居の年代は、出土遺物から10世紀前半と推定される。



第55図 B2区2面 7号壁穴住居平面図・土層断面図・掘方平面図・カマド使用面・掘方平面図



第56図 B 2区2面 7号竪穴住居出土物(1)



第57図 B2区2面 7号堅穴住居出土遺物(2)

◆B2区 8号竪穴住居

付図2 第58・59図 写真16・17・37 調査表P151

位置 Bs-46・47グリッド

方位 N-80°-E

規模 東西2.68×南北3.34m

形状 隅丸長方形

面積 8.7m²

埋没土 Hr-FAに伴うバミス・As-Cを含む黒褐色土・黒灰色土が自然堆積する。

重複 22号溝に先行する。

壁高 北壁0.11m 南壁0.12m

貯蔵穴 なし。

柱穴 なし。

周溝 なし。

床面 小円礫を多く含む暗褐色土で床面を構築し、

南側で田利根川の河床礫が一部露出している。

掘方 使用面と掘方の相違は認められない。

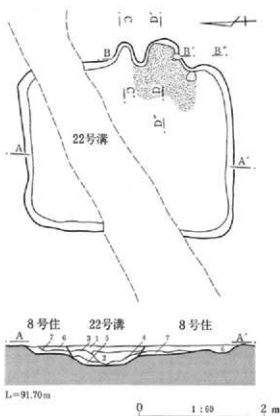
出土遺物 須志器埴

カマドの位置 東壁の中央部とその南寄りの2カ所に設置され、斜方向に延びる東カマド。カマド周辺に焼石と思われる円礫が残存する。

規模 焚口部幅0.60m 熱板部奥行0.35m

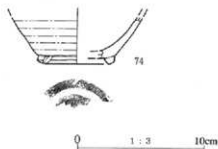
熱板部幅0.43m

調査所見 床面を22号溝に切られていることからみて、22号溝よりは古い。また、カマドは造り替えが認められ、南寄りのカマド焚口の周辺部に焼土、炭化物が多いことから、こちらのカマドの方が北側のカマドよりも新しいと考えられる。なお、As-Bの降下時点では、住居の埋没が既に完了していたものと思われる。住居の年代は、9世紀後半と推定される。

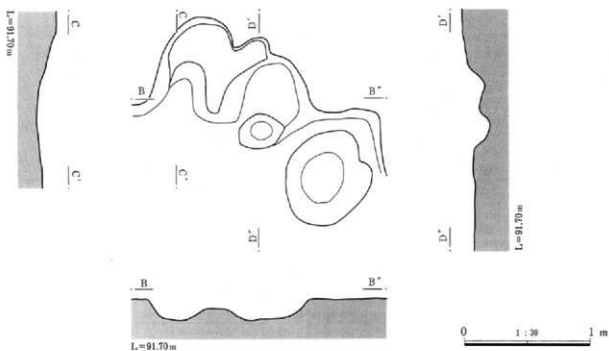
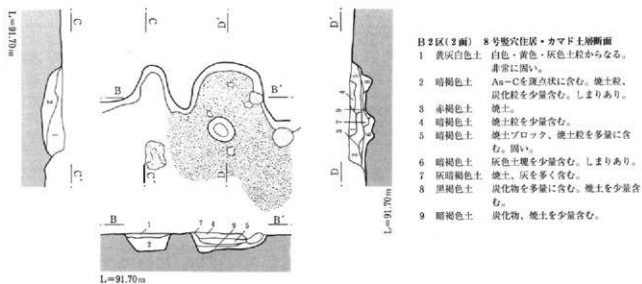


B2区(2面) 8号竪穴住居・22号溝・土層断面

- 1 黒褐色土 Hr-FAに伴うバミスを少量含み、As-Cを斑点状に含む。しまりあり。
- 2 暗褐色土 As-Cを多量に斑点状に含む。1層よりも色調が明るく、鉄分沈着痕を僅かに残す。しまりあり。
- 3 暗褐色土 2層に極めて近似するが、As-Cの量が少なくなる。しまりあり。
- 4 暗褐色土 3層よりもさらにAs-Cの量が少ない。しまりあり。
- 5 暗褐色土 4層よりもさらにAs-Cの量が少なく微量に含む。しまりあり。
- 6 暗褐色土 Hr-FAに伴うバミスとAs-Cの小粒を斑点状に多量に含む。色調がやや茶色味を帯び、しまりあり。鉄分沈着痕が少量認められる。
- 7 黒灰色土 鉄分沈着痕がブロック状に混入。As-Cも少量含まれる。固い。



第58図 B2区2面 8号竪穴住居平面図・土層断面図・出土遺物



第59図 B2区2面 8号竪穴住居カマド使用面平面図・掘方平面図

◆B2区 9号竪穴住居

付図2 第60・61図 写図17・37 観測表P151・152

位置 Bs・Bt-45グリッド

方位 N-96°-E

規模 東西2.54m×南北2.96m

形状 隅九方形

面積 7.4m²

埋没土 Hr-FAに伴うバミス・As-Cを含む暗褐色土が自然堆積する。

重複 なし。

壁高 北壁0.04m 南壁0.05m

貯蔵穴 なし。

柱穴 なし。

周溝 なし。

床面 小円礫を多量に含む暗褐色土で床面を構築し、旧利根川の河床礫が露出している。

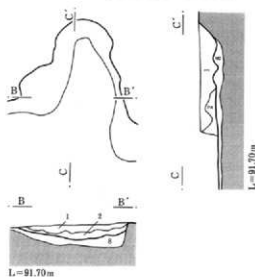
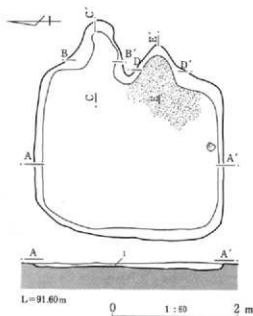
掘方 集中的に掘り込んだいくつかの凹みが看取でき、特に両カマド周辺で顕著である。

出土遺物 須恵器境・土師器甕

カマドの位置 東壁の中央部よりやや南寄りやや北寄りの2カ所に設置され、共に斜方向に延びる東カマド。

規模 (東カマド・南)

竈口部幅0.70m 燃焼部奥行0.50m



第60図 B 2区 2面 9号竈穴住居平面図・土層断面図・掘方平面図・カマド使用面平面図

燃焼部幅0.60m

規模 (東カマド・北)

竈口部幅0.85m 燃焼部奥行0.85m

燃焼部幅0.60m

調査所見 カマドは造り替えが認められ、8号住居同様に、南寄りのカマド竈口の周辺部に焼土、炭化物が多いことから、こちらのカマドの方が北隣りのカマドよりも新しいと考えられる。また、As-Bの降下時点では、住居の埋没が既に完了していたものと思われる。住居の年代は、9世紀後半と推定される。

B 2区(2面) 9号竈穴住居・土層断面A-A'

- 1 暗褐色土 Hr-F Aに伴うバミスとAs-Cを所々斑点状に含む。層中に ϕ 5cm程度の円礫を含む。 ϕ 1cmの炭化物も認められる。しまりあり。

B 2区(2面) 9号竈穴住居・カマド(南)土層断面

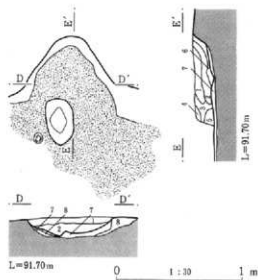
D-D' E-E'

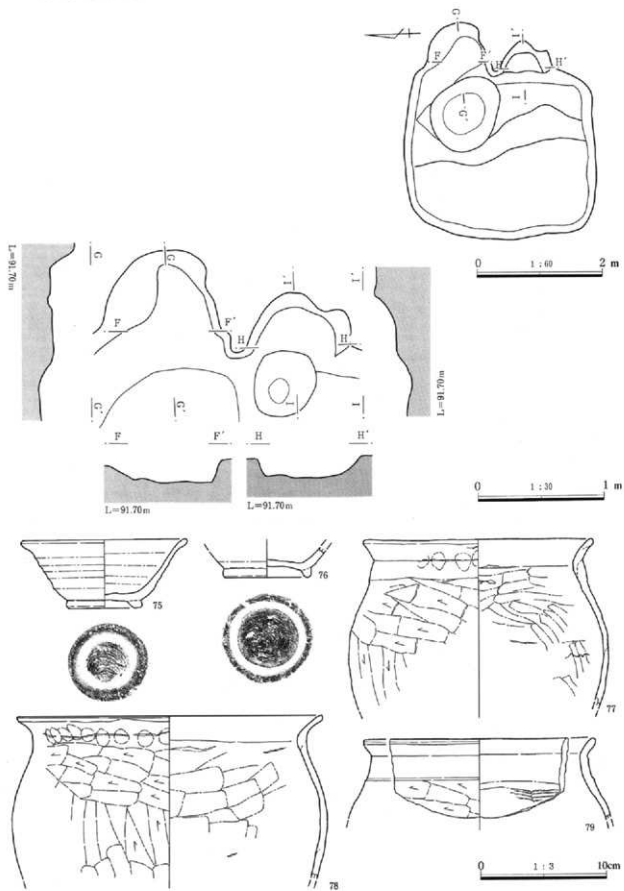
- 1 灰黄色土 炭化物、焼土を少量含む。シルト質。
- 2 灰黄色土 シルト、焼土を多量に含む。
- 3 灰黄色土 シルトを多量に含む。焼土を極少量含む。
- 4 黒褐色土 焼土を少量含む。
- 5 黒褐色土 炭化物、焼土を殆ど含まない。
- 6 灰黒色土 灰を多量に含む。
- 7 灰黒色土 灰層、焼土、炭化物を多く含む。掘り方埋土。
- 8 黒褐色土 焼土、炭化物を少量含む。掘り方埋土。

B 2区(2面) 9号竈穴住居・カマド(北)土層断面

B-B' C-C'

- 1 黒褐色土 As-C混土。As-Cを多量に含む。焼土極少量。
- 2 黒褐色土 As-Cを含まない。
- 3 黒褐色土 焼土、炭化物を少量含む。掘り方埋土。





第61図 B2区2面 9号竪穴住居掘方平面図・カマド掘方平面図・出土遺物

◆B2区 10号竪穴住居

付図2 第62・63図 写真17・18・37 観覧表P152

位置 Bs・Bt-44グリッド

方位 (N-95°-E)

規模 東西4.08m×南北(-)m

形状 南壁部分が攪乱を受けているため不明。

面積 攪乱を受けているため計測不能。

埋没土 Hr-FAに伴うバミス・As-Cを含む黒褐色土・暗灰褐色土が自然堆積する。

重複 なし。

壁高 西壁0.25m 東壁0.20m

貯蔵穴 南西隅で円形状の土坑を検出したが、遺物は出土していない。

柱穴 なし。

周溝 なし。

床面 小円礫を含む暗褐色土によって床面を構築し、僅かに北壁と西壁に沿って溝状に落ち込む。

掘方 河床礫の量が増えるが、使用面と掘方との相違はほとんど認められない。

出土遺物 灰軸陶器碗・土師器甕片

カマドの位置 東壁の中央部に隣接して2ヶ所設置され、共に斜方向に伸びる東カマド。カマド周辺部には、抽石と支脚に使われたと思われる円礫が多数残存し、南側のカマドには河抽石が残存し、焚口前には火床構築に関係したと思われる凹面が残る。

規模 (東カマド・南)

焚口部幅(0.48)m 燃焼部奥行0.50m

燃焼部幅(0.45)m

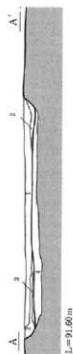
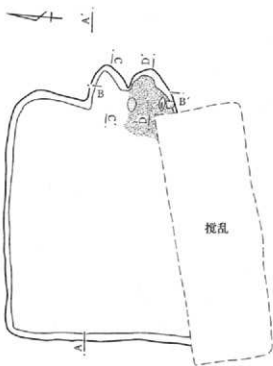
規模 (東カマド・北)

焚口部幅(0.50)m 燃焼部奥行0.70m

燃焼部幅(0.40)m

調査所見 住居の北側カマドから南側の壁立ち上がりにかけて、長方形の比較的新しい時期の攪乱を受けている。カマドは造り替えが認められ、南寄りのカマド焚口の周辺部に炭化物が多いことや両抽石が原位置をとどめていることからみて、こちらのカマドの方が北側のカマドよりも新しいと考えられる。また、As-Bの降下時点では、住居の掘設が既に完了していたものと思われることや、住居に伴って出

土した遺物などからみて、住居の年代は、同調査区で検出された2・6・8・9号竪穴住居と同様に9世紀後半と推定される。

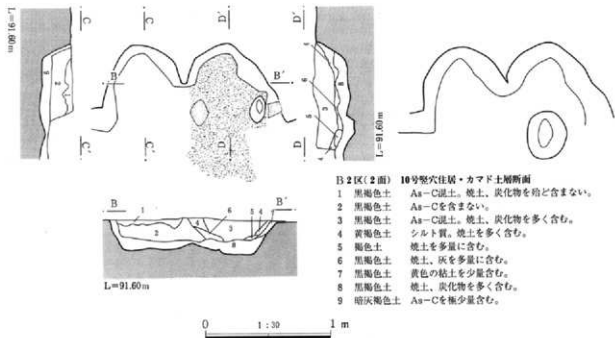
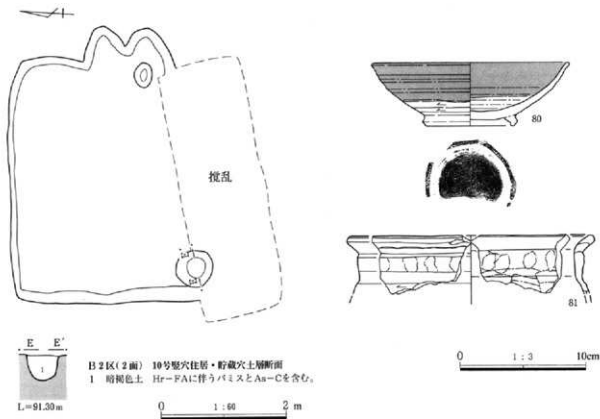


B2区(2面) 10号竪穴住居・土層断面

- 1 暗褐色土 Hr-FAに伴うバミスとAs-Cを多量に斑点状に含む。しまりあり。
- 2 暗褐色土 1層に近似するが、色調がやや暗くなる。炭化材を所々に含む。しまりあり。
- 3 黒褐色土 As-Cの割合が1・2層に比べ少なくなる。しまりあり。
- 4 暗灰褐色土 掘方埋土。As-Cを極少量含む。

0 1:60 2m

第62図 B2区2面 10号竪穴住居平面図・土層断面図



第63図 B 2区 2面 10号竪穴住居掘方平面図・出土遺物・カマド使用面・掘方平面図

◆B2区 11号竪穴住居

付図2 第64・65図 写真18・19・38 観察表P152

位置 B1-35・36グリッド

方位 N-95°-E

規模 東西2.85m×南北3.76m

形状 隅丸長方形

面積 10.7㎡

埋没土 Hr-FAに伴うバミス・As-Cを含む黒褐色土・灰黒色土が自然堆積する。

重複 なし。

壁高 北壁0.18m 南壁0.25m

貯蔵穴 北東隅と南西隅に円形状の浅い落ち込みが認められる。

柱穴 なし。

周溝 なし。

床面 地山と暗褐色土との混土によって、床面を構築し、床面中央部に僅かな凹みが看取できる。

掘方 大小様々な凹凸が看取でき、部分的に凹凸が目立つ箇所が認められ、所々に旧利根川の河床礫が露出している。

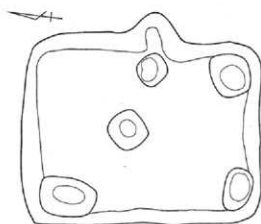
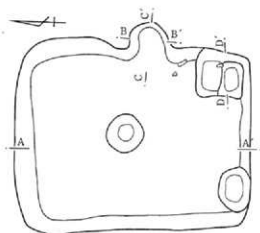
出土遺物 須恵器坏・須恵器塊・土師器壺片・須恵器羽釜片

カマドの位置 東壁の中央部に設置され、斜方向に延びる東カマド。焼土、炭化物を多く含むカマド周辺部に、袖石と支脚に使われたと思われる円礫や遺物が多数残存する。

規模 焚口部幅0.75m 燃焼部奥行0.61m

燃焼部幅0.52m

調査所見 As-B降下時点では、既に住居の埋没が完了していたものと思われる。住居の年代は、10世紀前半と推定される。



L=91.50m



L=91.40m

B2区(2面) 11号竪穴住居・貯蔵穴土層断面

1 黒褐色土 Hr-FAを伴うバミスとAs-Cを含む。

B2区(2面) 11号竪穴住居・土層断面

1 黒褐色土 Hr-FAを伴うバミスとAs-Cを含む。
2 黒褐色土 As-Cを極少量含む。
3 灰黒色土 炭化物、灰を多く含む。焼土粒を少量含む。

0 1:60 2m

第64図 B2区2面 11号竪穴住居平面図・土層断面図・掘方平面図

第3章 遺跡の概要

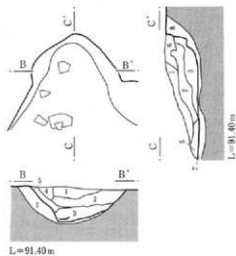
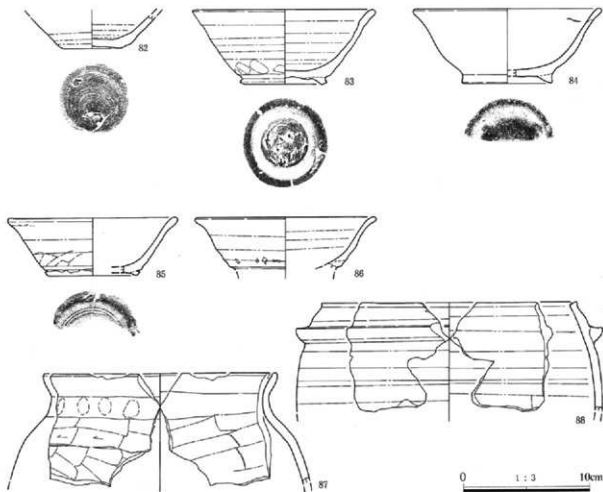


図2区(2面) 11号竪穴住居・カマド上部断面

- 1 黒褐色土 Hr-FAに伴うバミスとAs-Cを含む。焼土を極少量含む。
- 2 暗褐色土 カマドの粘土を多く含む。焼土、炭化物を多く含む。
- 3 灰黒色土 2層よりも焼土を多く含む。
- 4 黒色土 焼土、炭化物を含まない。

- 5 黒色土 焼土、炭化物を少量含む。
- 6 灰黒色土 粘土を多く含む。焼土、炭化物を少量含む。
- 7 黒褐色土 炭化物、灰を多量に含む。焼土も少量含む。掘り方埋土。
- 8 黒褐色土 粘土の焼土化したものを含む。炭化物は7層よりも少ない。掘り埋土。



第65図 B2区2面 11号竪穴住居カマド使用面・掘り方平面図・出土遺物

◆B2区 13号竪穴住居

付図2 第66・67図 写真19・38 観察表P152

位置 B1-39グリッド

方位 N-125° -E

規模 東西2.86m×南北3.15m

形状 隅丸方形

面積 8.6㎡

埋没土 Hr-FAに伴うバミス・As-Cを含む黒褐色土が自然堆積する。

重複 なし。

壁高 北壁0.22m 南壁0.18m

貯蔵穴 なし。

柱穴 なし。

周溝 なし。

床面 地山と暗褐色土との混土によって、床面が構築されている。

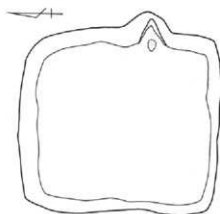
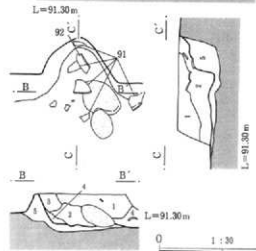
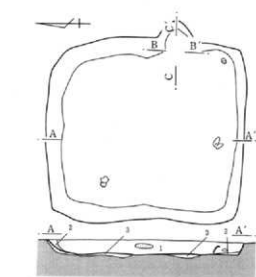
掘方 大小様々な凹凸が床一面に残存する。

出土遺物 土師器埴・須恵器埴・土師器甕・須恵器羽釜・須恵器坏片

カマドの位置 東壁の中央部よりやや南寄りに設置され、斜方向に延びる東カマド。袖石と燃焼部中央に支脚が残存し、遺物も多く出土する。

規模 焚口部幅0.65m 燃焼部奥行0.40m
燃焼部幅0.39m

調査所見 As-B降下時点では既に住居が埋没していたものと思われる。住居の年代は、10世紀前半と推定される。



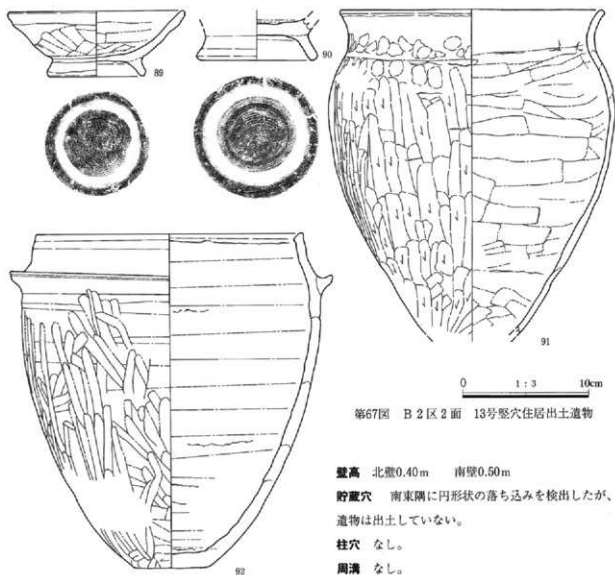
B2区(2面) 13号竪穴住居・土層断面

- 1 黒褐色土 Hr-FAを伴うバミスとAs-Cを含む。
- 2 黒褐色土 Hr-FAを伴うバミスとAs-Cを少量含む。
- 3 黒褐色土 地山の灰黄色土をブロックで含む。2層よりもA s-Cの量が少なくなる。掘り埋土。

B2区(2面) 13号竪穴住居・カマド土層断面

- 1 黒褐色土 Hr-FAに伴うバミスとAs-Cを含む。
- 2 黒褐色土 1層よりも色調がやや明るい。焼土、炭化物が少量。
- 3 黒褐色土 焼土を少量含む。
- 4 黒褐色土 バミスを含まない。地山の灰黄色土を含む。
- 5 黒褐色土 焼土、炭化物を多く含む。掘り埋土。

第66図 B2区2面 13号竪穴住居平面図・土層断面図・掘方平面図・カマド使用面・掘方平面図



第67図 B 2区 2面 13号竪穴住居出土遺物

◆D 5区 16号竪穴住居

付図2 第68・69・70図 写図19・20・39 観察表P152・153

位置 Cl・Cm-54・55グリッド

方位 N-83° - E

規模 東西2.84m×南北3.90m

形状 隅丸長方形

面積 10.9m²

埋没土 暗褐色土・As-B・Hr-FA・As-Cを含んだ褐灰色土・黒褐色土・灰褐色土・白色粘土・黒灰色土が自然堆積する。

重複 5号倉に先行する。

壁高 北壁0.40m 南壁0.50m

貯蔵穴 南東隅に円形状の落ち込みを検出したが、遺物は出土していない。

柱穴 なし。

周溝 なし。

床面 地山と暗褐色土との混土によって床面を構築し、一部白色の粘土塊が混入する。

掘方 大小様々な凹凸が認められる。特に壁際に集中的に掘り込んだ痕跡を残し、住居南側中央部からは円形状の床下土坑が確認された。

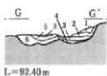
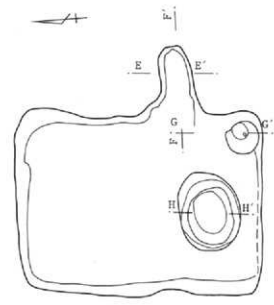
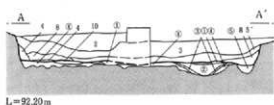
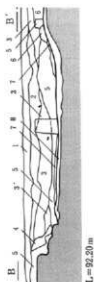
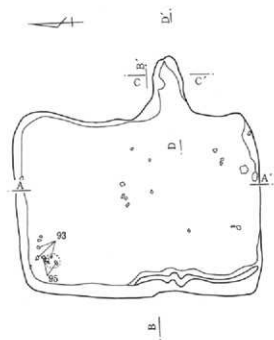
出土遺物 須恵器埴・須恵器羽釜

カマドの位置 東壁の中央部よりやや南寄りに設置され、斜方向に延びる東カマド。カマド先端部に扁平な円礫を残す。

規模 焚口部幅0.45m 燃焼部奥行0.35m
燃焼部幅0.80m

調査所見 検出された住居の中では比較的大きな規模をもつ。床面以外の付近の確認面で、硬化した箇

所が認められ、当初、時期を異にした住居の重複が予想されたが、調査区内において他の住居の検出は確認されていない。また、As-B降下時点では既に住居の埋没が完了していたものと思われる。住居の年代は、出土した遺物からみて、A3区14号竪穴住居、B1区1号竪穴住居、B2区3・4・5・7・11・13号竪穴住居と同様に、10世紀前半と推定される。



D5区(2面) 16号竪穴住居・土層断面

- 1 暗褐色土 As-B混土。
- 2 暗灰色土 As-B、Hr-FA、As-Cの混土。
- 3 暗灰色土 Hr-FAの混土。
- 3' 暗灰色土 キメが細かく粘性が強い。
- 4 黒褐色土 As-C混土。
- 5 暗灰色土 3層に近似するが、焼土粒、粘土粒、炭化物、灰を含む。
- 5' 暗灰色土 5層に近似するが、焼土粒、粘土粒、炭化物、灰を多く含む。
- 6 暗灰色土 5層に近似するが、焼土、粘土が約2~5cmの塊で含まれる。
- 7 暗灰色土 黒色の灰を主体とし、炭化物粒、粘土粒を含む。
- 8 暗灰色土 5層と同系の土に、4層の塊が混入する。
- ① 灰褐色土 白色粘土を多量に含む。粘り床、固い。
- ② 暗褐色土 地山の黄色土塊と暗褐色土が混じり合う。貯蔵穴の6層に近似。
- ③ 白色粘土 床下土塊の縁から底まで全体に貼られている。
- ④ 暗褐色土 ②層に近似するが、地山土塊の一つ一つが大きくはっきりと判別できる。

D5区(2面) 16号竪穴住居・貯蔵穴土層断面

- 1 黄褐色土 地山。
- 2 暗褐色土 黄褐色の地山土塊が若干混じる。
- 3 黒灰色土 炭化物を主体に、白色粘土粒も混じる。
- 4 白色粘土 粒子均一で細かい。
- 5 暗灰褐色粘質土 混入物なし。
- 6 暗褐色土 地山土塊が多く混じる。

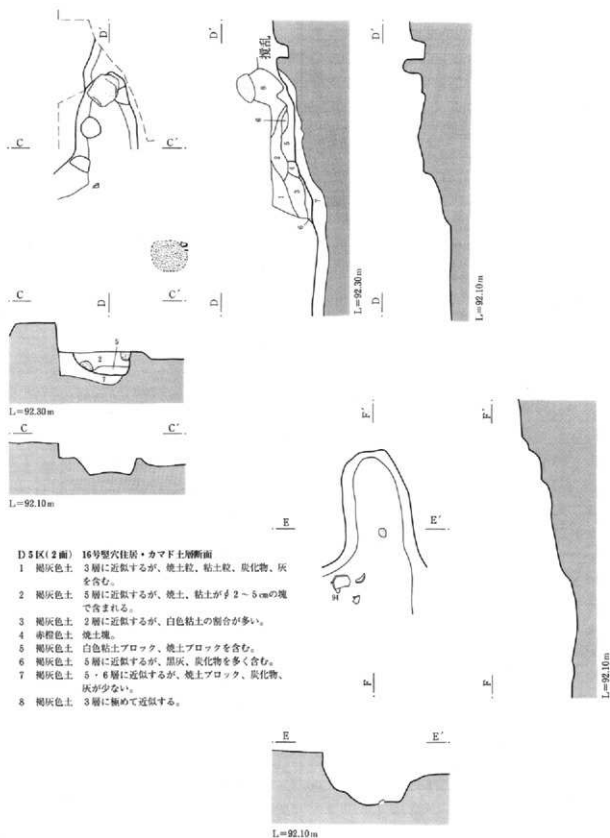
D5区(2面) 16号竪穴住居・床下土塊土層断面

- 1 暗灰褐色粘質土 混入物なし。
- 2 暗褐色土 地山土塊が多く混じる。
- 3 白色粘土 粒子均一で細かい。

0 1:60 2 m

第68図 D5区2面 16号竪穴住居平面図・土層断面図・掘方平面図

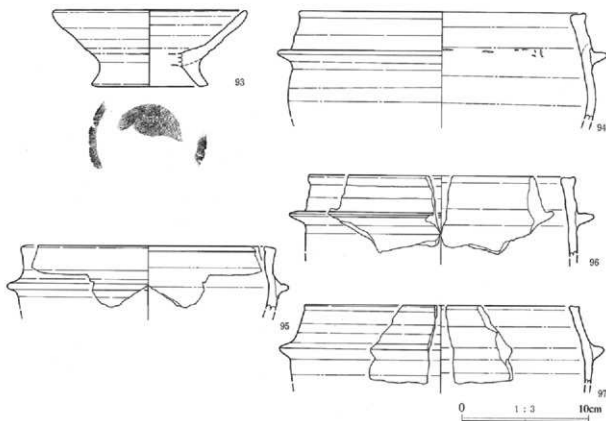
第3章 遺跡の概要



D5区(2面) 16号竪穴住居・カマド土層断面

- 1 褐灰色土 3層に近似するが、焼土粒、粘土粒、炭化物、灰を含む。
- 2 褐灰色土 5層に近似するが、焼土、粘土が厚2~5cmの塊で含まれる。
- 3 褐灰色土 2層に近似するが、白色粘土の割合が多い。
- 4 赤褐色土 焼土塊。
- 5 褐灰色土 白色粘土ブロック、焼土ブロックを含む。
- 6 褐灰色土 5層に近似するが、黒灰、炭化物を多く含む。
- 7 褐灰色土 5・6層に近似するが、焼土ブロック、炭化物、灰が少ない。
- 8 褐灰色土 3層に極めて近似する。

第69図 D5区2面 16号竪穴住居カマド使用面・掘方平面図



第70図 D5区2面 16号竪穴住居出土遺物

◆D6区 15号竪穴住居

付図2 第71図 写真20

位置 Cf-52グリッド

方位 (N-93° - E)

規模 東西(-)m×南北(-)m

形状 不明。

面積 カマドのみの検出のため計測不能。

埋没土 As-Cを含む黒褐色土が自然堆積する。

重覆 なし。

壁高 南壁0.18m 北壁(-)m

貯蔵穴 不明。

柱穴 なし。

周溝 なし。

床面 不明。

掘方 不明。

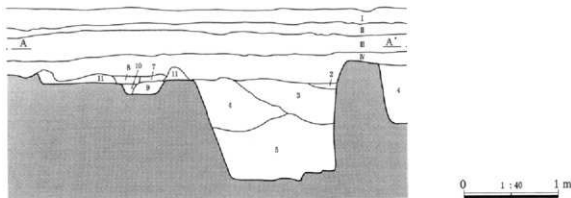
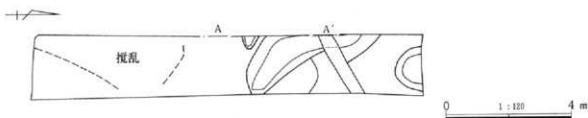
出土遺物 なし。

カマドの位置 東壁の斜方向に延びる東カマド。

規模 焚口部幅(-)m 燃焼部奥行(-)m

燃焼部幅0.40m

調査所見 カマド燃焼部以外のほとんどが調査区外の未調査部分にあたるため住居の全形は不明であり、出土遺物をまったく伴わないために住居の年代も特定することができない。おそらくは14号竪穴住居と位置的にも近いことから、一連の住居とみることができ、周辺の未調査部分にも同年代の住居がある可能性が考えられる。また、土層断面の観察では、As-B降下時点では既に住居の埋没が完了していたものと思われることから、年代の判明している2・6・8・9・10号住居と同年代の9世紀後半の住居とみることができる。なお、D6区4号井戸と住居との関係は、本住居同様に井戸からの出土遺物がないうえに不明である。

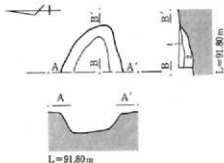


L=92.10m

D6区(2面) 15号堅穴住居・西壁土層断面

- I 暗褐色土 表土。現行水田耕土。As-Aを含む。
- II 茶褐色土 現行水田床土。鉄分沈着層。As-Aを含む。
- III 赤褐色土 II層に色調が近似する。As-A、As-Bの混土。鉄分沈着面を多数残す。Hr-FAに伴うパミスが少量混入。
- IV 黒褐色土 As-C混土。
- 1 黒褐色土 As-C混土であるが、As-Cの混入が多い。
- 2 As-C 浅間C軽石の一次堆積。
- 3 暗褐色シルト 地山にφ5~10cm大の円礫を混入する。

- 4 砂礫層 φ1~10cm大の円礫を多量に含む。
- 5 砂礫層 φ20~50cm大の円礫を多量に含む。
- 6 黒色砂礫層 砂礫に礫が多量に混入。
- 7 黒褐色土 As-Cを微量に含む。
- 8 黒褐色土 As-Cと焼土ブロックを少量含む。
- 9 赤褐色土 15号住のカマドの焼土。
- 10 黒褐色土 8層に近似するが、焼土ブロックが細かく分散して混入。
- 11 黒褐色土 地山シルトにAs-Cを少量含む。



L=91.80m

D6区(2面) 15号堅穴住居・カマド土層断面

- 1 赤褐色土 焼土。
- 2 黒褐色土 地山シルトに焼土ブロックを少量含む。

第71図 D6区2面 15号堅穴住居カマド位置図・土層断面図・カマド使用面平面図

(3) 畠

◆A2区 3号畠

付図2 第72図 写図20

位置 Bh・Bi-57・58, Bj~Bl-56~58, Bm-57
グリッド

重複 Bj-57・58グリッド内で、1面の25号溝の底面によって一部削平を受けていることから、明らかに25号溝に先行する。

被覆層と残存状況 畝間耕作痕にHr-FAに伴うバミス・As-Cを含んだ暗褐色土が単層堆積する。畝間の残存状況は良好であるが、畝間の耕作痕列のみの検出である。

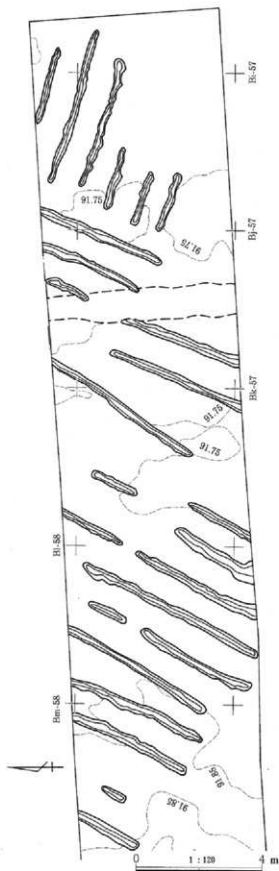
畠域の地形 4号畠と同様に平坦な微高地上に位置する。

畝間の走向と数 北東-南西の畝間が15条、北西-南東の畝間が6条残存する。

耕作土 地山は暗褐色シルトであるが、上位からの攪拌を受けているために不明である。

出土遺物 なし。

調査所見 北東-南西方向と北西-南東方向のそれぞれ走向を異にする畝間耕作痕があり、お互いに重複していないことからみて、同時期に方向を異にする畠があった可能性が考えられる。また、畝間がほぼ等間隔であることから畝のつくり変えは行われなかったものと思われる。同調査区から検出された4号畠と走向を共にする畝間耕作痕があることから、調査区域外北側でつながる同時期でしかも一連の畠が存在する可能性が高いものと思われる。なお、A2区1面の1号畠の所見でも記述したが、調査区の北側域は、A1区24号溝の北西端の続きが微高地縁辺部を走り、そこを境にして北側が低地部になる可能性が極めて高く、本畠は4号畠と同様に、地形的には低地部に移行する間の平坦部に営まれた畠と考えられる。他にA2区とB2区との調査区域外にも畠もしくはそれに伴った時期の住居がある可能性が高い。



第72図 A2区2面 3号畠平面図

◆A2区 4号畠

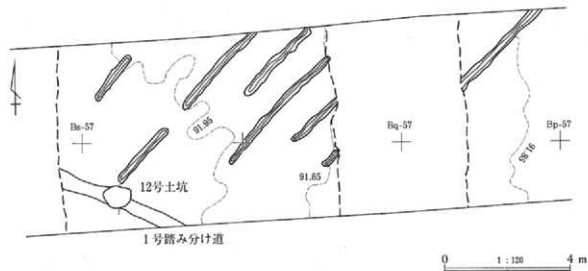
付図2 第73図

位置 Bp-57、Bq・Br-56・57グリッド**重複** 1面の26号溝によって、畝間耕作痕列が割断されている。また、1号踏み分け道に近接する。**被覆層と残存状況** 畝間耕作痕にHr-FAに伴うバミス・As-Cを含んだ暗褐色土が単層堆積する。畝間の残存状況は良好であるが、畝間の耕作痕列のみの検出である。**畠域の地形** 3号畠と同様に平坦な微高地上に位置する。**畝間の走向と数** 北東-南西の畝間耕作痕が7条残存する。**耕作土** 地山は暗褐色シルトであるが、上位からの搅拌を受けているため不明である。**出土遺物** なし。**調査所見** 3号畠と同様の北東-南西の走向をもつ畝間耕作痕があることからみて、同時期でしかも一連の畠と考えられる。また、畝間がほぼ等間隔で並んでいることからみて、畝のつくり変えは行われなかったものと思われる。また、3号畠と同様に調査区域外北側でつながる同時期でしかも一連の畠が存在する可能性が高いものと思われ、広い畠域が想定される。なお、畠の営まれた区域は、地形的には3

号畠を含めた微高地部から低地部に移行する間の平坦部に営まれた畠と考えられ、他にA2区とB2区との未調査部分にも畠もしくはそれに伴った時期の住居跡がある可能性が高い。

畠の営まれた時期は、この地点でのプラント・オパール分析を実施していないので明らかではないが、A3・D5区2面5号畠のB地点(付図2参照)で行ったプラント・オパール分析の結果では、イネは検出されていないことが報告されている。このことからみて、5号畠と覆土が極めて近似し、同一のテフラを含んでいる本畠と近接する3号畠も同様の結果であることが予想でき、このことから3・4・5号畠は時期を同じくする一連の畠であった可能性が高いと考えられる。なお、本遺跡においてイネが検出された畠は、C区2面の11号畠だけである(第4章自然科学分析参照)。

畠からイネが検出されたことについて言及すれば、他遺跡からも調査例が報告されており、低地部での水田土壌からのイネの検出は因果関係が認められるが、畠からのイネの検出はやはり陸稲とみることが自然と思われる。このことは、当時は畠でも頻繁にイネを栽培していたということであり、イネの栽培が低地部の水田に限ったことではないことを窺わせるものである。



第73図 A2区2面 4号畠平面図

◆A3・D5区 5号畠

付図2 第74図 写0020

位置 Cl-55・56、Cm-Cs-54~56グリッド

重複 28号溝に先行し、2号踏み分け道より新しい。

被覆層と残存状況 畝間耕作痕にHr-FAに伴うパミス・As-Cを含んだ黒褐色土が単層堆積する。畝間の残存状況は良好であり、耕作痕列の凹凸が明瞭である。

畠地の地形 平坦な微高地上に位置する。

畝間の走向と数 ほほは北東-南東の畝間耕作痕が40条残存する。

耕作土 地山は暗褐色シルトであるが不明。

出土遺物 なし。

調査所見 畝間耕作痕の方向は、ほほは北東-南東で共通しているが、畝間が近接及び密接している箇所が認められることから、畝の造り替えが行われたことが窺える。本調査区からは12号堅穴住居が検出されており、畠の耕作時期はこの住居に比較的近いと思われる。また、A3区の畝間の覆土から採取した土壌のプラント・オパール分析の結果ではイネは検出されなかった(第4章 自然科学分析参照)。

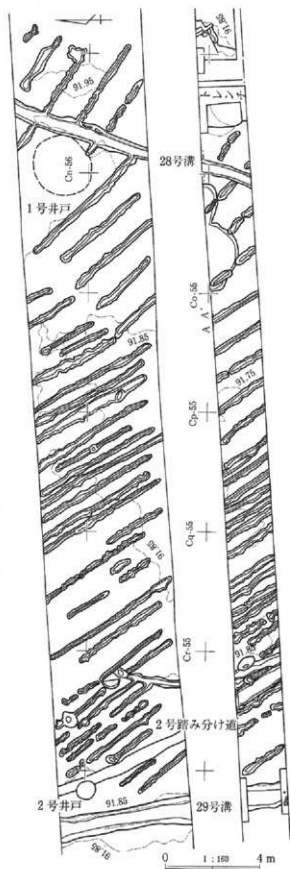


L=92.00m

0 1:40 1m

D5区(2面) 5号畠・土層断面

- I 灰褐色土 表土。現行水田耕土。
 II 茶褐色土 現行水田床土。鉄分沈着面を多数含む。As-B、Hr-FAに伴うパミス、As-Cを多く含む。
 III 暗褐色土 As-B混土。As-Cを少量含む。
 IV 暗褐色土 As-B混土。Hr-FAに伴うパミス混じり。
 V 黄褐色土 Hr-FAに伴うパミスとAs-C混土。
 VI 暗褐色土 As-C混土。
 VII① 暗褐色シルト 地山。
 VII② 黄褐色シルト 地山。



第74図 A3・D5区2面 5号畠平面図・土層断面図

◆A3区 6号畠

付図2 第75図

位置 Df~Dh-54・55、Di-54グリッド

重複 なし。

被覆層と残存状況 畝間耕作痕にHr-FAに伴うバミス・As-Cを含んだ黒褐色土が単層堆積する。畝間の残存状況は極めて不良であり、畝間の耕作痕列のみの検出である。

畠域の地形 調査区のDd-55グリッド付近から微高地が西方向に向かって緩やかに傾斜し、低位部を挟んで再び立ち上がる東向き斜面上に位置する。

畝間の走向と数 北東-南西の畝間耕作痕が6条残存する。

耕作土 地山は暗褐色シルトであるが不明。

出土遺物 なし。

調査所見 C区11号畠と同様の緩斜面につくられた畠である。本調査区からは12号壘穴住居が検出されており、畠の耕作時期はこの住居に比較的近いもの

と思われる。

◆B1区 7号畠

付図2 第75図 写図20

位置 Ar-49・50、As・At-50、Ba-49・50グリッド

重複 なし。

被覆層と残存状況 畝間耕作痕にHr-FAに伴うバミス・As-Cを含んだ黒褐色土が単層堆積する。畝間の残存状況は極めて不良であり、畝間の耕作痕列のみの検出である。

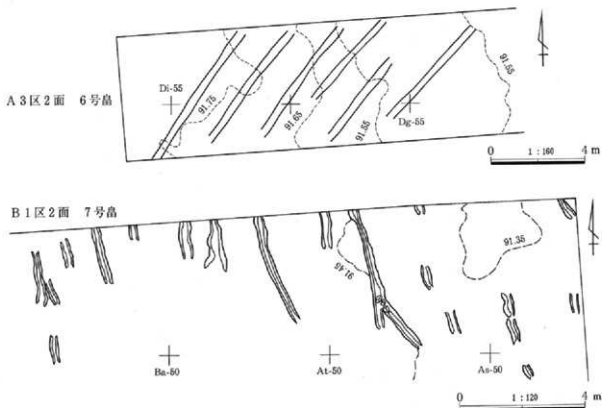
畠域の地形 平坦な微高地上に位置する。

畝間の走向と数 ほぼ南北方向の畝間耕作痕が12条残存する。

耕作土 地山は暗褐色シルトであるが、上位からの攪拌を受けているために不明である。

出土遺物 なし。

調査所見 残存状態が極めて不良なために、時期的な詳細は不明である。



第75図 A3区2面 6号畠、B1区2面 7号畠平面図

◆B2区 8号畝

付図2 第76図

位置 Cd・Ce-48・49グリッド

重複 なし。

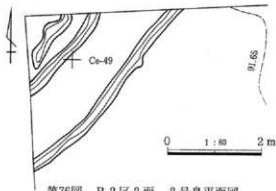
被覆層と残存状況 畝間耕作痕にHr-FAに伴うバミス・As-Cを含んだ黒褐色土が単層堆積する。畝間の残存状況は比較的良好であるが、畝間の耕作痕列のみの検出である。

畝域の地形 平坦な微高地上に位置する。

畝間の走向と数 北東-南西方向の畝間耕作痕が3条残存する。

耕作土 地山は暗褐色シルト土であるが不明。

出土遺物 なし。



第76図 B2区2面 8号畝平面図

調査所見 畝間耕作痕の検出範囲が極めて狭いため詳細は不明であるが、本調査区検出の竪穴住居と時期的には近接しているものと思われる。また、畝間の覆土から採取した土壌のプラント・オパール分析の結果ではイネは検出されなかった(第4章 自然科学分析参照)。

◆B2区 9号畝

付図2 第77図 写図21

位置 Br~Bt-32・33グリッド

重複 なし。

被覆層と残存状況 畝間耕作痕にHr-FAに伴うバミス・As-Cを含んだ黒褐色土が単層堆積する。畝間の残存状況は比較的良好であるが、畝間の耕作痕列のみの検出である。

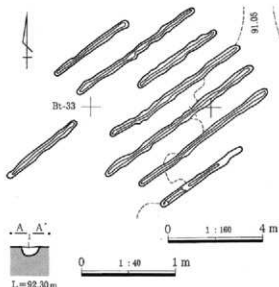
畝域の地形 南西方向に向かって緩やかに傾斜する微高地上に位置し、耕作面はほぼ平坦である。

畝間の走向と数 北東-南の畝間耕作痕が7条残存する。

耕作土 地山は暗褐色シルト土であるが不明。

出土遺物 なし。

調査所見 本調査区における微高地上の畝間痕は8号畝に続いて2箇所目である。畝間耕作痕の間隔が均一でしかも重複していない状況からみて、畝のつくり変えはされていないことが窺える。なお、本調査区検出の竪穴住居と時期的には近接しているものと思われる。また、畝間の覆土から採取した土壌のプラント・オパール分析の結果ではイネは検出されなかった(第4章 自然科学分析参照)。



B2区(2面) 9号畝・土層断面(中央部)
1 黒褐色土 Hr-FAに伴うバミスとAs-Cとの混土。

第77図 B2区2面 9号畝平面図・土層断面図

◆B2区 10号畝

付図2 第78図 写図21

位置 Bt-26, Ca-26~28, Cb-25~29, Cc-26~30グリッド

重複 なし。

被覆層と残存状況 畝間耕作痕にHr-FAに伴うバミス・As-Cを含んだ黒褐色土が単層堆積する。畝間の残存状況は比較的良好であるが、畝間の耕作痕列のみの検出である。

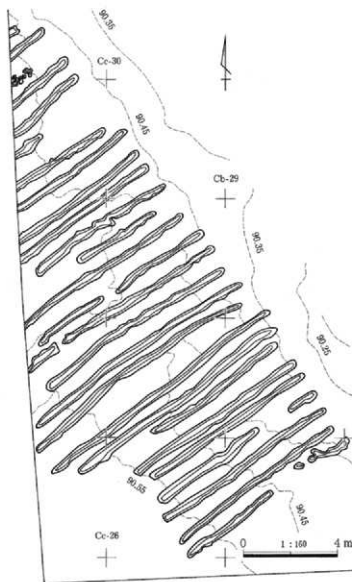
畝域の地形 微高地縁辺部から南西方向に向かって緩やかに傾斜し、低地を挟んで再び緩やかに微高地に移行する平坦面に位置する。

畝間の走向と数 北東-南西の畝間耕作痕が26条残存する。

耕土 地山は黄褐色シルトであるが不明。

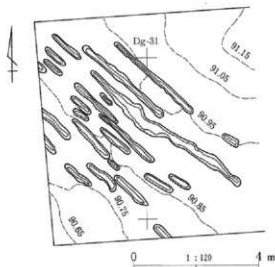
出土遺物 なし。

調査所見 畝間耕作痕の間隔が均一でしかも重複し



第78図 B2区2面 10号畠平面図

ていない状況からみて、畝のつくり変えはされていないことが窺える。なお、本調査区検出の堅穴住居と時期的には近接しているものと思われる。



第79図 C区2面 11号畠平面図

◆C区 11号畠

付図2 第79図 写図21

位置 Df-29・30、Dg-30・31グリッド

重複 なし。

被覆層と残存状況 畝間耕作痕にHr-FAに伴うバミス・As-Cを含んだ黒褐色土が単層堆積する。畝間の残存状況は比較的良好であるが、畝間の耕作痕列のみの検出である。

畝域の地形 微高地上から南西方向に向かって落ち込む緩傾斜面に位置する。

畝間の走向と数 畝間耕作痕が10条残存する。

耕土 地山は暗褐色シルトであるが不明。

出土遺物 なし。

調査所見 A3区の6号畠と同様に、緩傾斜面の等高線に平行して営まれた畠である。畝間耕作痕が近接している状況からみて、畝の造り替えが窺われる。時期的な詳細は不明であるが、畝間の覆土より採取した土壌のプラント・オパール分析の結果では、密度が3,000個/gと比較的高いイネの数値が得られており、陸稲が作られていた可能性が高い(第4章1)。

(4) 溝

◆A2区 32号溝

付図2 第80図 写真21

位置 Ce-56・57グリッド

重複 13号土坑に近接するが不明。

走向 北-南方向

規模 調査長5.84m 幅1.56~1.90m

深さ0.22~0.33m

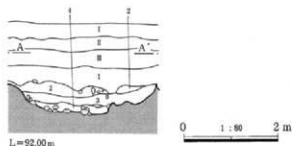
形状 (傾斜 北端91.62m 南端91.58m)

溝幅はほぼ均一であり直線的に延びる。底面は大小の凹凸をもつがほぼ平坦であり、溝底面から法面にかけて小円礫が散在する。両法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 As-B・As-Cを含む暗褐色土・黒色土・オリーブ色土が自然堆積する。

出土遺物 土師器片

調査所見 狭い調査区内での検出であるが、流水方向は北から南方向である。溝の南端延長部が他の調査区にあるどの溝に接合するかは明らかではないが、近接するD6区の調査では、溝の延長部は検出されておらず、おそらくはD6区以東に延長部があるものと思われる。



A2区(2面) 32号溝・土層断面

- I 黒灰~暗灰色シルト 表土。現行水田耕土。
- II 暗褐色土 表土。現行水田床土。(鉄分沈着層)
- III 暗灰褐色土 As-B、As-C、Hr-FAが混じり合う。鉄分を含む。
- 1 暗褐色土 As-Bを含む。As-Cも少量混じる。
- 2 暗褐色土 As-Cが少量、19層の地山ブロックが混入。
- 3 黒色土 シルト質で粘性、 $\phi 2 \sim 5$ mmの礫を少量含む。
- 4 オリーブ色土 地山と3層の混土。底面に小円礫を多数混入。

◆A2区 33号溝

付図2 第81図 写真21

位置 Cf-55・56グリッド

重複 なし。

走向 北東-南方向

規模 調査長3.94m 幅1.04~1.34m

深さ0.15~0.21m

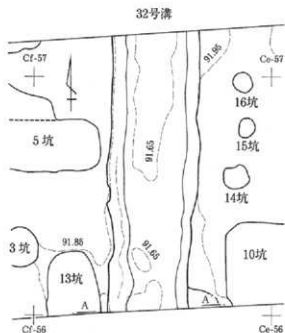
形状 (傾斜 北東端91.68m 南端91.67m)

溝幅は不規則でありCf-56グリッド内で途切れる。底面は平坦であり、両法面ともに立ち上がりは不明瞭である。

埋没土 As-Cを少量含む暗褐色土・黒褐色土がレンズ状に堆積する。

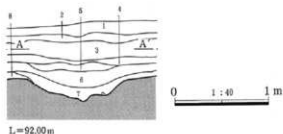
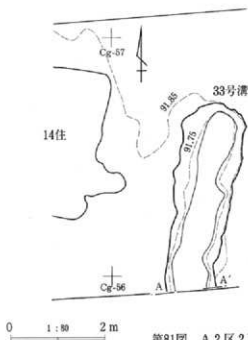
出土遺物 なし。

調査所見 北東部と南端部の高低差はあまりなく、Cf-56グリッド内で北東部が途切れていることや、南端の延長部にあたるD6区で同様の溝が検出されていない状況からみて、溝としての機能的詳細は不明であり、隅丸長方形の土坑である可能性も否めない。



第80図 A2区2面 32号溝平面図・土層断面図

第3章 遺跡の概要



- A 2区(2面) 33号溝・土層断面
- 1 黒灰-暗灰色シルト 表土。現行水田耕上。
 - 2 暗褐色土 現行水田床土。(鉄分沈着層)
 - 3 暗褐色土 As-B、As-C、Hr-FAが混じり合う。鉄分を含む。
 - 4 暗黄褐色土 Hr-FA、As-Cを含む。As-Bも少量含む。
 - 5 暗褐色土 As-Cを含む。Hr-FAを少量含む。
 - 6 黒褐色土 As-Cを多く含む。
 - 7 黒褐色土 As-Cを少量含む。粘性あり。
 - 8 黒褐色土 As-Cを僅かに含む。粘性が強いシルト質。

第81図 A 2区 2面 33号溝平面図・土層断面図

◆A 3・D 5区 28号溝

付図2 第82図 写図22

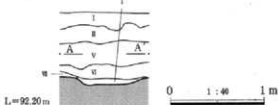
位置 Cm-54~56、Cn-54グリッド

重複 5号高の畝間耕作痕を削平していることか
みて、5号高よりも時期的に新しい。

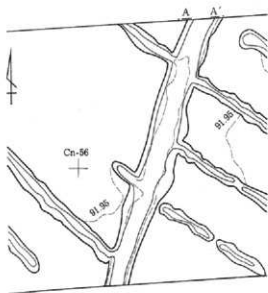
走向 北東-南西方向

規模 調査長10.60m 幅0.48~0.80m

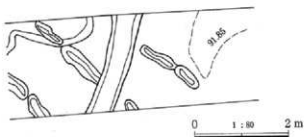
深さ0.09~0.18m



- A 3・D 5区(2面) 28号溝・土層断面
- I 暗褐色土 表土。
 - II 茶褐色土 As-Bを多量に含む。As-Cが少量混じる。鉄分沈着層。固い。
 - III 暗褐色土 As-B混土。固い。
 - IV As-B 浅黒目軽石粗粒のスコリア。
 - V 暗褐色土 As-Bを少量とHr-FAに伴うパミスとの混土。
 - VI 黒褐色土 Hr-FAに伴うパミスとAs-Cとの混土。
 - VII 黒褐色土 V層よりもやや色調が暗くなる。As-C混土。
 - VIII 茶褐色土 粒子均一で細かい。パミスを全く含まない。
 - I 黒褐色土 VII層に比べ色調がやや暗く、As-Cを少量含む。しまりあり。



28号溝



第82図 A 3・D 5区 2面 28号溝平面図・土層断面図

形状 (傾斜 北東端91.87m 南西端91.61m)
溝幅はほぼ均一であるが流水方向に向かって先細り、僅かに彎曲する。底面は幅広で平坦であり、両法面は傾斜をもって立ち上がる。

埋没土 As-Cを含む黒褐色土が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 A3区で検出された溝の延長部が、D5区においても同一の溝として検出されたものである。流水方向は、溝底面のレベルの高低差から北東から南西方向とみることができる。また、D5区の南西端の延長部が調査区外で未調査なために、他のどの溝に接続するのかなどの詳細は不明であるが、明らかに同調査区検出の29・30号溝とは引水方向が異なる。なお、規模や走向などからみて、同調査区検出の29号溝と調査区南側域で接続する可能性も考えられる。

◆A3・D5区 29号溝

付図2 第83図 写図22

位置 Cs-54-56グリッド

重複 D5区のCs-54グリッド内において、5号畝の一部耕作痕の北西端が溝に近接するが、溝が耕作痕を削平していたのはA3区とD5区の調査範囲外にかかるため不明である。

走向 北-南方向

規模 調査長9.56m 幅0.82-1.22m

深さ0.15-0.24m

形状 (傾斜 北端91.70m 南端91.67m)

溝幅はほぼ均一であり直線的に延びる。底面は半円形で、両法面は傾斜をもって緩やかに立ち上がる。

埋没土 As-Cを含む黒褐色土が自然堆積する。

出土遺物 土師器片

調査所見 28号溝と同様に、A3区で検出された溝の延長部が、D5区においても同一の溝として検出されたものである。流水方向は、溝底面のレベルの高低差から30号溝と同じ北から南方向とみることができ、明らかに同調査区検出の28号溝とは引水方向が異なる。また、南端の延長部が調査区外で未調査

なために、他の調査区との溝に接続するのかなどの詳細は不明である。なお、覆土より土師器片が一点出土しているが、年代を特定するまでには至っていない。A3区で検出された溝は28・29・30溝の3条であるが、近接して併走する30号溝とは異なり、上位覆土にAs-Bの一次堆積層が認められることである。その堆積層中には小豆色火山灰の堆積も明瞭に認められ、本調査区においてAs-Bの一次堆積層が明瞭に残存しているのは本溝の上位のみであり、他はAs-B混土層となっている。本溝の上位にAs-Bが良好に残存していたのは、溝が埋没していく過程で凹みが生じ、その凹みにAs-Bが堆積したものである。このことは、B2区の4号堅穴住居や22・23号溝などの凹みの埋没過程と同様であり、特に22・23号溝と本溝とは、年代的に極めて近いことが窺える。

◆A3・D5区 30号溝

付図2 第83図 写図22

位置 Cs-54・55、Ct-54-56グリッド

重複 なし。

走向 北-南方向

規模 調査長9.47m 幅2.26-2.84m

深さ0.40-0.61m

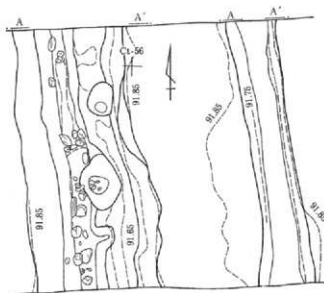
形状 (傾斜 北端91.46m 南端91.27m)

溝幅はほぼ均一であり直線的に延びる。底面中央部に一段低い流れを残し、両法面はテラスをもって緩やかに立ち上がる。

埋没土 Hr-FAに伴うバミス・As-Cを含む黒褐色土・暗褐色砂質土が自然堆積する。

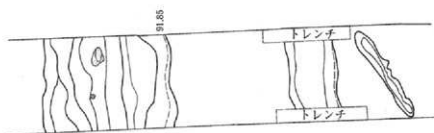
出土遺物 なし。

調査所見 28・29号溝と同様に、A3区で検出された溝の延長部が、D5区においても同一の溝として検出されたものである。流水方向は、溝底面のレベルの高低差から29号溝と同じ北から南方向とみることができ、同調査区検出の28号溝とは溝の走向からみて引水方向が異なり、28・29号溝とは明らかに規模を異にする。また、溝底面に残る小円礫や砂質土の残存状況や流水の影響と思われる溝底面の凹みの



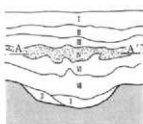
30号溝

29号溝



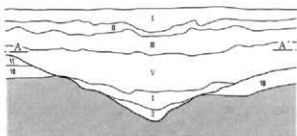
0 1:80 2 m

29号溝



L=92.20m

30号溝



L=92.20m

0 1:40 1 m

A3・D5区(2面) 29号溝・土層断面

- I 暗褐色土 表土。
- II 茶褐色土 As-Bを多量に含む。As-Cが少量混じる。鉄分沈着層。固い。
- III 暗褐色土 As-B混土。固い。
- IV As-B 浅間目軽石。
- V 暗褐色土 As-Bを少量とHr-FAに伴うパミスとの混土。
- VI 黒褐色土 Hr-FAに伴うパミスとAs-Cとの混土。
- VII 黒褐色土 V層よりもやや色調が暗くなる。As-C混土。
- VIII 茶褐色土 粒子均一で細かい。パミスを全く含まない。
- I 黒褐色土 As-Cを疎点状に含む。
- 2 黒褐色土 粒子の細かい黄色砂を多量に含む。

A3・D5区(2面) 30号溝・土層断面

- I 暗褐色土 表土。
- II 茶褐色土 As-Bを多量に含む。As-Cが少量混じる。鉄分沈着層。固い。
- III 暗褐色土 As-B混土。固い。
- IV As-B 浅間目軽石。
- V 暗褐色土 As-Bを少量とHr-FAに伴うパミスの混土。
- VI 黒褐色土 Hr-FAに伴うパミスとAs-Cとの混土。
- VII 黒褐色土 V層よりもやや色調が暗くなる。As-C混土。
- VIII 茶褐色土 粒子均一で細かい。パミスを全く含まない。
- I 黒褐色土 As-CとHr-FAに伴うパミスを少量含む混土。しまりあり。
- 2 暗褐色砂質土 As-Cを上層に少量含む砂質土。

第83図 A3・D5区2面 29・30号溝平面図・土層断面図

◆B1・2区 3号溝

付図2 第84図 写図22

位置 Bd-26-28・50、Be-27-29・48-50、Bf-31・32・46-49、Bg-31-34・43-45、Bh-33-45グリッド

重複 なし。

走向 北東-南東方向

規模 調査長(157.44)m 幅(0.98~2.44)m

深さ(0.10~0.26)m

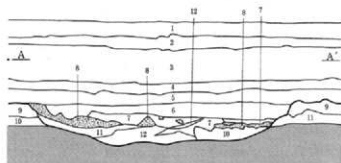
形状 (傾斜 北東端91.19m 南東端90.42m)

底面は凹凸をもつがやや中央部が低く、両面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 上層にはAs-Bを含む暗褐色土・As-Bの一次堆積層が乗り、覆土としてHr-FAに伴うパミス・As-Cを含む黒褐色土・灰黄色土・灰白色砂層が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 B1区からB2区にかけて、彎曲しながら南北に抜ける溝である。22・23号溝の覆土と類似していることからみて、同時期に存在した可能性が高い。流水方向は両端の溝底面での高低差からみて、北東から南東方向と考えられるが、機能的な詳細は不明である。なお、D2区のBi・Bj-5グリッド内において、砂礫層を覆土とする河道が南北方向に走向しているのが確認されており、3号溝南東端部の延長部分になる可能性も否めず、位置的にみて、B2区22号溝、C区34号溝、A3・D5区30号溝との一連の溝である可能性も否めない。



L=91.30m

第84図 B1・2区2面 3号溝土層断面図

◆B2区 22号溝

付図2 第85図 写図22・39 観察表P153

位置 Bn-Bq-49、Bp-Br-48、Br-Bt-47、Bs-Cc-46、Ca-Ce-45、Cc-Cd-44、Cd-43グリッド

重複 8号竅穴住居よりも新しく、23号溝と交差する。

走向 北東-南西方向

規模 調査長57.20m 幅0.88~2.20m

深さ0.24~0.45m

形状 (傾斜 北東端91.23m 南西端91.10m)

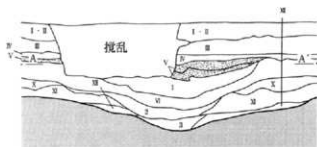
埋没土 Hr-FAに伴うパミスを少量含む黒褐色土・As-Cを多量に含む暗褐色土・黄褐色砂質土が自然堆積する。

出土遺物 灰釉陶器碗・土師器瓦片・土師器小皿片

調査所見 遺構確認時では、溝はAs-Bによって覆われやや凹み状に形状を残していた。Cb-45・46グリッド内で23号溝と交差する。両端部底面の高低差からみて、流水方向は北東から南西方向とみられるが、機能的な詳細は不明である。なお、位置の関係からみて、A3・D5区30号溝、B1・2区3号溝、C区34号溝との一連の溝であった可能性も否定できない。

B1・2区(2面) 3号溝・南壁土層断面

- 1 暗褐色土 表土。非常に固くばさついている。As-Bを少量含む。
- 2 茶褐色土 鉄分沈着層。非常に固い。As-Bを含む。
- 3 暗褐色土 As-Bを多量に含む混土。固い。
- 4 茶褐色土 3層に近似するが、鉄分沈着層を多量に含む。固い。
- 5 暗褐色土 3層に近似するが、As-Bを多量に含む。固い。
- 6 暗褐色土 As-Bを塊状に含み、所々に小豆色火山灰のプロットを含む。固い。
- 7 黒褐色土 As-B、小豆色火山灰と暗褐色土の混土。固い。
- 8 As-B スコリアと小豆色火山灰からなる。
- 9 黒褐色土 Hr-FAに伴うパミスとAs-Cとの混土。しまりあり。
- 10 黒褐色土 As-C混土。
- 11 灰黄色土 やや砂質で粒子細かく均一。しまりあり。
- 12 砂層 ϕ 0.5mm程度の細礫を含む。灰白色砂層。しまりなし。



L=91.80m

- B2区(2面) 22号溝・土層断面
- | | | |
|------|--------|--------------------------------------|
| I | 暗褐色土 | 表土。 |
| II | 暗褐色土 | I層に近似。As-Aを少量含む。 |
| III | 茶褐色土 | φ3mm程度の白色パミスを少量含む。 |
| IV | 暗褐色土 | As-B混土。 |
| V | As-B | 浅間B軽石。 |
| VI | 茶褐色土 | Hr-FAに伴うパミスとAs-Cとの混土。 |
| VII | 茶褐色土 | VI層に近似するが、Hr-FAに伴うパミス少量。 |
| VIII | 茶褐色土 | Hr-FAとAs-Cとの混土。 |
| IX | Hr-FA | 横名山二ツ岳降下火山灰。 |
| X | 黒褐色土 | As-C混土。 |
| XI | 灰褐色シルト | 上層にAs-Cを少量含む。 |
| XII | 黄褐色シルト | 稜子均一で細かい。 |
| 1 | 黒褐色土 | 少量のHr-FAに伴うパミスを含ん入る。固い。 |
| 2 | 暗褐色土 | As-Cを多量に含む。 |
| 3 | 黄褐色砂層 | φ0.1mm程度の砂を多量に含む。一部、As-Cが混入する。しまりあり。 |

第85図 B2区2面 22号溝土層断面図・出土遺物

◆B2区 23号溝

付図2 第86図 写図23

位置 Bt-Cb-45、Cb-Cd-46、Cc-Cd-47グリッド

重複 22号溝にCb-45・46グリッド内で交差する。

走向 北西-南東方向

規模 調査長25.20m 幅0.60~1.72m

深さ0.08~0.24m

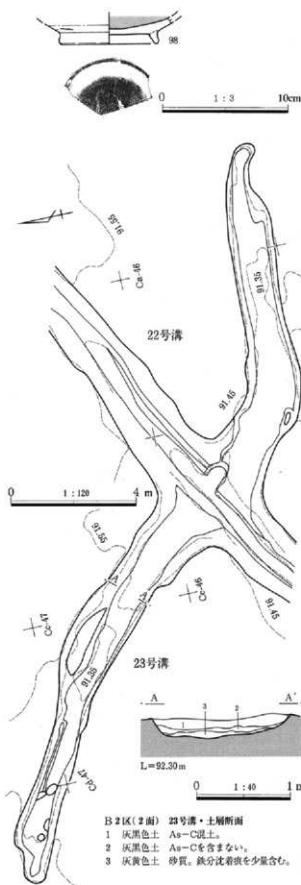
形状 (傾斜 北西端91.46m 東端91.41m)

溝幅は不規則であり大きく彎曲する。底面はほぼ平坦であり、両法面は傾斜をもって立ち上がる。

埋没土 As-Cを含んだ灰黒色土・灰黄色土が自然堆積する。

出土遺物 灰軸陶器片・須恵器破片・土師器羽釜片

調査所見 Cd-47グリッド内で北西端が、Bt-44・45グリッド内で東端が不明瞭となる。Cb-45・46グリッド内で22号溝と交差するが、22号溝同様に機能的な詳細は不明である。流水方向は北西から東方向である。



- B2区(2面) 23号溝・土層断面
- | | | |
|---|------|----------------|
| 1 | 灰黒色土 | As-C混土。 |
| 2 | 灰黒色土 | As-Cを含まない。 |
| 3 | 灰黄色土 | 砂質。鉄分沈着痕を少量含む。 |

第86図 B2区2面 23号溝平面図・土層断面図

◆C区 34号溝

付図2 第87図 写図23

位置 Cs・Ct-30・31グリッド

重複 なし。

走向 北-南方向

規模 調査長7.00m 幅3.94~4.82m

深さ0.50~0.67m

形状 (傾斜 北端90.45m 南端90.41m)

溝幅はほぼ均一であり直線的に延びる。底面中央部に一段低い平坦な流路をもち、東側法面は西側法面に比べやや緩やかにテラスをもって立ち上がる。

埋没土 Hr-FAに伴うバミス・As-Cを含む暗褐色土・灰褐色砂層・茶褐色砂層が自然堆積する。

出土遺物 須恵器片・土師器片

調査所見 A3・D5区内で検出された30号溝と走向位置が近似し、他の調査区内で同程度の溝が見当たらないことから、同一の溝である可能性が高い。

また、B1・2区3号溝、B2区22号溝との一連の溝である可能性も否めない。流水方向は北から南方向である。

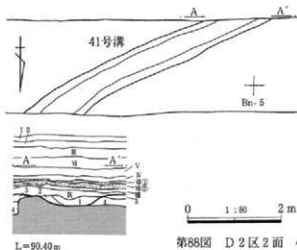
◆D2区 41号溝

付図2 第88図 写図24

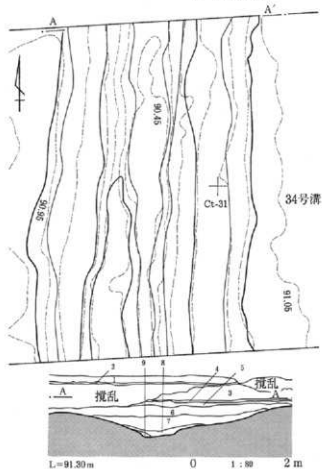
位置 Bm-5、Bn-4・5グリッド

重複 なし。

走向 北東-南西方向



第88図 D2区2面 41号溝平面図・土層断面図



C区(2面) 34号溝・土層断面

- 1 灰褐色土 表土。現行水田の耕土。
- 2 茶褐色土 現行水田床土。鉄分沈着層。
- 3 鈍褐色土 As-B混土。Hr-FAに伴うバミスを少量含む。
- 4 茶褐色土 水田耕土の鉄分沈着層。
- 5 黒褐色土 As-CにHr-FAに伴うバミスを重点状に含む。
- 6 暗褐色土 5層に比べて色調がやや明るくなる。As-CにHr-FAに伴うバミスを少量含む。
- 7 暗褐色土 6層と色調が近似するが、As-CとHr-FAに伴うバミスの量が激減する。固い。
- 8 灰褐色砂層 ϕ 0.5mm程度の砂層。
- 9 茶褐色砂層 粒子が均一で細かい灰色砂層。固い。

第87図 C区2面 34号溝平面図・土層断面図

D2区(2面) 41号溝・土層断面

- I 暗褐色土 表土。現行水田耕土。As-Aを含む。
- II 茶褐色土 現行水田床土。鉄分沈着層。As-Aを含む。
- III 暗褐色土 As-Aを重点状に含む。
- IV 茶褐色土 As-Aを含み、鉄分沈着層を多数残す。
- V 暗褐色土 やや灰色を呈す。As-B混土。
- VI 黒色粘質土 As-B上の水田耕土に比定。
- Ⅶ①As-B 浅間白軽石の小豆色火山灰。
- Ⅶ②As-B 浅間白軽石のスコリア。
- Ⅷ 黒色粘質土 As-B直下の水田耕土に比定。
- Ⅷ 黒褐色土 As-C混土。
- I 暗褐色粘質土 As-Cを少量含む。鉄分沈着痕あり。
- 2 暗褐色粘質土 1層に近似するが、色調がやや明るい。
- 3 黄褐色シルト 地山。
- 4 青灰色シルト 3層直下の粒子均一で細かい砂層。

規模 調査長4.08m 幅0.54~0.76m

深さ0.12~0.19m

形状 (傾斜 北東端69.68m 南西端89.57m)

溝幅はほぼ均一であり僅かに彎曲する。底面は幅広く平坦であり、両法面は傾斜をもって立ち上がる。

埋没土 As-Cを含む暗褐色粘質土が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 地山を掘りぬいて微高地から低地部に移行する縁部分につくられた溝である。流水方向は傾斜からみて北東から南西方向であるが、狭い調査区内での検出のため、溝そのものの機能的な詳細は不明である。

◆D4区 35号溝

付図2 第89図 写図24

位置 Di-47、Dj-47グリッド

重複 なし。

走向 南西-北東方向

規模 調査長2.00m 幅0.60~0.82m

深さ0.10~0.14m

形状 (傾斜 南西端91.75m 北東端91.74m)

溝幅は不規則である。底面はほぼ平坦であり、両法

面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 As-B・As-Cを含む暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 流水方向は南西から北東方向とみることができ、36号溝と近接して併走するが、機能的な詳細は不明である。

◆D4区 36号溝

付図2 第89図 写図24

位置 Di-46グリッド

重複 なし。

走向 南西-東方向

規模 調査長1.90m 幅1.08~1.38m

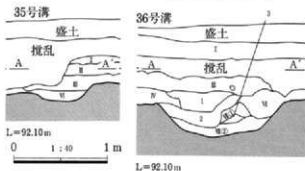
深さ0.32~0.40m

形状 (傾斜 南西端91.40m 東端91.38m)

溝幅は不規則である。底面中央部から両法面下部にかけて緩やかに立ち上がり、両法面は傾斜をもって立ち上がる。

埋没土 As-B・Hr-FAに伴うバミスを含む暗褐色土・暗褐色シルトが自然堆積する。

出土遺物 なし。



D4区(2面) 35号溝・土層断面

- I 灰褐色土 表土。現行水田耕土。
- II 茶褐色土 現行水田床土。鉄分沈着面を多数残す。As-B、Hr-FAに伴うバミスを多く含む。
- III 暗褐色土 As-B混土。As-Cを少量含む。
- IV 暗褐色土 As-BとAs-Cとの混じり。
- V 黄褐色土 Hr-FAに伴うバミスとAs-Cとの混土。
- VI 暗褐色土 As-C混土。
- VII 暗褐色シルト 地山。
- VIII 黄褐色シルト 地山。

D4区(2面) 36号溝・土層断面

- I 灰褐色土 表土。現行水田耕土。
- II 茶褐色土 現行水田床土。鉄分沈着面を多数残す。As-B、Hr-FAに伴うバミスを多く含む。
- III 暗褐色土 As-B混土。As-Cを少量含む。
- IV 暗褐色土 As-BとAs-Cとの混じり。
- V 黄褐色土 Hr-FAに伴うバミスとAs-Cとの混土。
- VI 暗褐色土 As-C混土。
- VII 暗褐色シルト 地山。
- VIII 黄褐色シルト 地山。
- IX 暗褐色土 As-Bを少量含む。1層に近似するが、Hr-FAに伴うバミスを含まず。
- X 暗褐色土 地山に少量の砂が混入する。

第89図 D4区2面 35・36号溝平面図・土層断面図

調査所見 流水方向は西から東方向とみることができ、35号溝と近接して併走するが、機能的な詳細は不明である。

◆D4区 37号溝

付図2 第90図 写図24

位置 Di-43グリッド

重複 なし。

走向 南西-北東方向

規模 調査長1.82m 幅0.46~0.74m

深さ0.19~0.26m

形状 (傾斜 南西端91.14m 北東端91.21m)

溝幅は不規則である。底面はほぼ平坦であり、両法面は傾斜をもって立ち上がる。

埋没土 As-Cを含む暗褐色土・暗褐色シルトが自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 流水方向は南西端と北東端の2箇所の溝底面との高低差からみて、北東から南西方向とみることができるが、西から東方向と考えるのが妥当である。機能的な詳細は不明である。

◆D4区 38号溝

付図2 第90図 写図25

位置 Di-42グリッド

重複 20号土坑に先行する。

走向 西-東方向

規模 調査長1.83m 幅0.80~1.12m

深さ0.24~0.25m

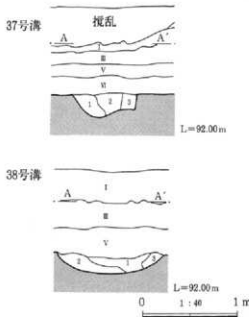
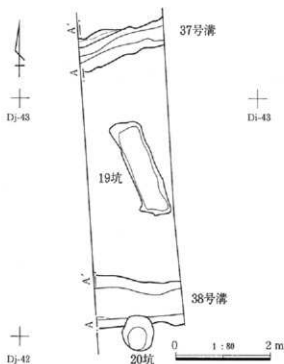
形状 (傾斜 西端91.21m 東端91.20m)

溝幅は不規則である。底面は幅広く平坦であり、両法面は傾斜をもって立ち上がる。

埋没土 As-Cを含む暗褐色土と暗褐色砂質土・暗褐色シルトが自然堆積する。

出土遺物 須恵器甕片

調査所見 流水方向は西から東方向とみることができ、機能的な詳細は不明である。



D4区(2面) 37・38号溝・土層断面

- I 灰褐色土 表土。現行水田耕土。
- II 茶褐色土 現行水田床土。鉄分沈着層。
- III 暗褐色土 As-B混土。
- IV 暗褐色土 As-BとHr-FAとの混土。
- V 黄褐色土 Hr-FAとAs-Cとの混土。
- VI 暗褐色土 As-C混土。
- Ⅶ 暗褐色シルト 池山。
- Ⅷ 黄褐色シルト 池山。
- 1 暗褐色土 As-Cを多量に含む。
- 2 暗褐色土 1層に近似するが、As-Cが少ない。
- 3 暗褐色シルト 池山にAs-Cが少量混入。

第90図 D4区2面 37・38号溝平面図・土層断面図

◆D4区 39号溝

付図2 第91図 写025

位置 Dg・Dh-17グリッド

重複 なし。

走向 西-東方向

規模 調査長2.00m 幅1.80~2.44m

深さ0.53~0.64m

形状 (傾斜 西端90.33m 東端90.22m)

溝幅は不規則である。底面は半円形で、北側法面は緩やかに立ち上がり、南側法面は段差をもって立ち上がる。

埋没土 Hr-FAに伴うバミス・As-Cを含む暗褐色土・砂礫層・褐色砂層が自然堆積する。

出土遺物 土師器片

調査所見 流水方向は西から東方向である。東端部と西端部の延長線上が共に調査区外で未調査なため、他溝との接合関係や溝そのものの機能的な詳細は不明である。

◆D4区 40号溝

付図2 第91図 写025

位置 Dg-11グリッド

重複 なし。

走向 西-東方向

規模 調査長1.88m 幅0.62~0.70m

深さ0.05~0.11m

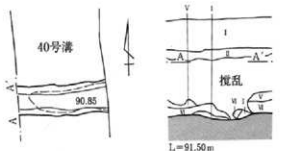
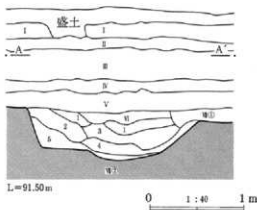
形状 (傾斜 西端90.95m 東端90.88m)

溝幅はほぼ均一であり直線的に延びる。底面は平坦であり、両法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 As-Cを少量含む暗褐色シルトが単層体積する。

出土遺物 なし。

調査所見 両端部底面の高低差からみて、流水方向は西から東方向である。東端部の延長線上が調査区外で未調査なため、39号溝と同様に他溝との接合関係や溝そのものの機能的な詳細は不明である。



D4区(2面) 40号溝・土層断面
 I 灰褐色土 表土。現行水田耕土。
 II 茶褐色土 現行水田床土。鉄分沈着層。
 V 黄褐色土 Hr-FAとAs-Cとの混土。
 VI 暗褐色土 As-C混土。
 VII 黄褐色シルト 地山。
 VIII 暗褐色シルト As-Cを少量含む。

第91図 D4区2面 39・40号溝平面図・土層断面図

(5) 土坑

◆A2区 3号土坑

付図2 第92図 写図25

位置 Ce・Cf-56グリッド

重複 なし。

規模 0.80m×0.68m 深さ0.20m

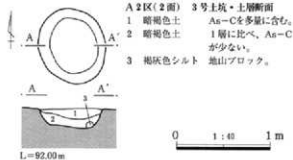
形状 平面形 楕円形

断面形 底面はほぼ平坦であり、法面はほぼ直角に立ち上がる。

埋没土 As-Cを多量に含む暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 32・33号溝の中間に位置する土坑であり、周辺でもいくつかの土坑が単独あるいは重複して検出されているが、土坑そのものの機能的な詳細は不明である。



第92図 A2区2面 3号土坑平面図・土層断面図

◆A2区 4号土坑

付図2 第93図 写図26

位置 Ce・Cf-56、Cf-57グリッド

重複 5号土坑よりも新しい。

規模 2.16m×0.82m 深さ0.06m

形状 平面形 隅丸長方形

断面形 底面には凹凸があり、法面の立ち上がりも浅く不明瞭である。

埋没土 As-C混じりの暗褐色土が単層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 周辺でもいくつかの土坑が単独あるいは重複して検出されているが、土坑そのものの機能的な詳細は不明である。

◆A2区 5号土坑

付図2 第93図 写図26

位置 Ce・Cf-56グリッド

重複 4号土坑に先行する。

規模 2.55m×1.08m 深さ0.15m

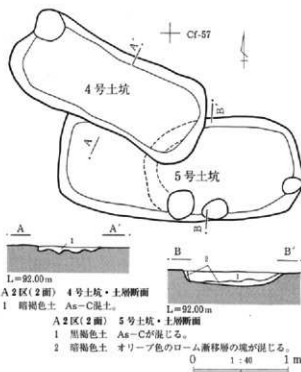
形状 平面形 隅丸長方形

断面形 底面はほぼ平坦である。法面は北側の方が南側よりも立ち上がりが緩い。

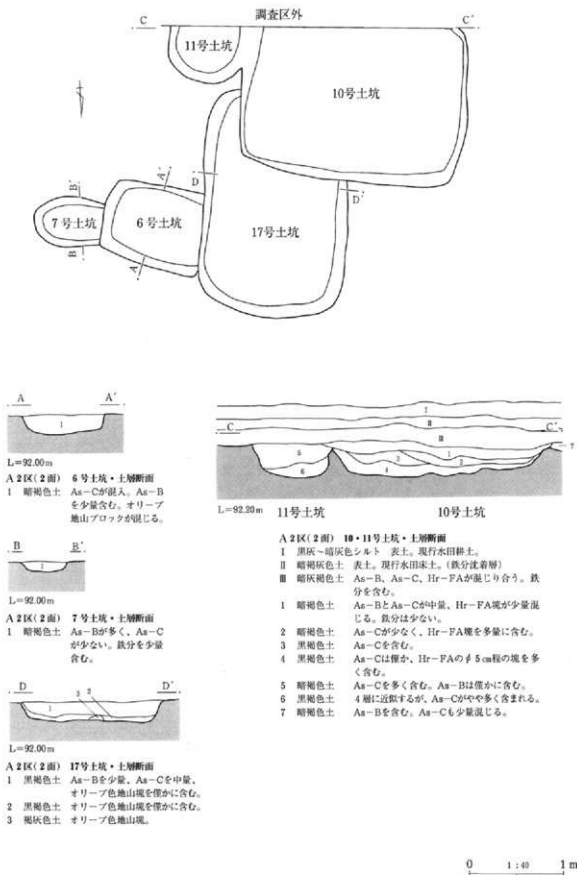
埋没土 As-C混じりの黒褐色土と地山混じりの暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 土坑底面に一段深い隅丸長方形の落ち込みが認められるが、機能的な詳細は不明である。



第93図 A2区2面 4・5号土坑平面図・土層断面図



第94図 A 2区 2面 6・7・10・11・17号土坑平面図・土層断面図

◆A2区 6号土坑

付図2 第94図 写図26

位置 Cd-56グリッド

重複 17号土坑に先行する。

規模 (一)m×0.85m 深さ0.19m

形状 平面形 長方形

断面形 底面は平坦であり、法面は直角に立ち上がる。

埋没土 As-B、As-C混じりの暗褐色土が単層堆積する。

出土遺物 土師器片

調査所見 周辺でもいくつかの土坑が単独あるいは重複して検出されているが、土坑そのものの機能的な詳細は不明である。

◆A2区 7号土坑

付図2 第94図 写図26

位置 Cd-56グリッド

重複 6号土坑に先行する。

規模 (0.80)m×0.52m 深さ0.11m

形状 平面形 6号土坑と重複しているため不明。

断面形 底面中央が一番低く、法面は南側が北側よりも緩やかな傾斜をもつ。

埋没土 As-B、As-C混じりの暗褐色土が単層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 周辺でもいくつかの土坑が単独あるいは重複して検出されているが、土坑そのものの機能的な詳細は不明である。

◆A2区 8号土坑

付図2 第95図 写図27

位置 Cd-57グリッド

重複 なし。

規模 (一)m×0.53m 深さ0.23m

形状 平面形 全形が確認できないため不明。

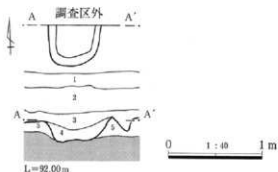
断面形 底面はほぼ平坦であり、法面は西側

よりも東側の方が緩やかに立ち上がる。

埋没土 Hr-FAに伴うバミス、As-C混じりの黒褐色土が単層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 一部調査区外で未調査のため、全容は不明である。土坑そのものの機能的な詳細は不明である。



A2区(2面) 8号土坑・土層断面

- 1 黒灰～暗灰色シルト 表土。
- 2 暗褐色土。表土。(鉄分沈着層)
- 3 暗褐色土 Hr-FAに伴うバミス、As-C混土、As-Cが多く、As-Bも少量混入。
- 4 黒褐色土 Hr-FA、As-C混じり。3層よりも混入量は少ない。
- 5 黒褐色土 ややシルト質。

第95図 A2区2面 8号土坑平面図・土層断面図

◆A2区 9号土坑

付図2 第96図 写図27

位置 Cd-56・57グリッド

重複 なし。

規模 1.89m×0.98m 深さ0.08m

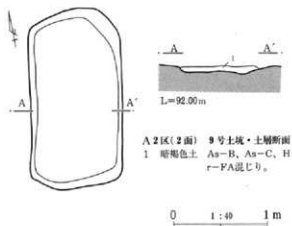
形状 平面形 隅丸長方形

断面形 底面には凹凸があり、法面は浅く不明瞭に立ち上がる。

埋没土 As-B、Hr-FAに伴うバミス、As-C混じりの暗褐色土が単層堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 周辺でもいくつかの土坑が単独あるいは重複して検出されているが、土坑そのものの機能的な詳細は不明である。



第96図 A 2区 2面 9号土坑平面図・土層断面図

◆A 2区 10号土坑

付図2 第94図 写図27

位置 Cd・Co-56グリッド

重複 11・17号土坑よりも新しい。

規模 2.40m×(-)m 深さ0.24m

形状 平面形 全形が確認できないため不明。

断面形 底面には凹凸があり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 Hr-FAに伴うパミス、As-Cを含む暗褐色土とHr-FA、As-Cを含む黒褐色土が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 調査区外に一部遺構が分かっているため、形状は明らかではないが、おそらく長方形を呈するものと思われる。比較的大きな規模からみて、当初は住居と思われたが、床面の硬度、カマド、焼土の有無などからみて、土坑として扱った。土坑そのものの機能的な詳細は不明である。

◆A 2区 11号土坑

付図2 第94図 写図27

位置 Cd-56グリッド

重複 10号土坑に先行する。

規模 (0.86)m×(-)m 深さ0.31m

形状 平面形 全形が確認できないため不明。

断面形 底面はほぼ平坦であり、法面は一部袋状に立ち上がる。

埋没土 As-B、As-Cを含む暗褐色土と黒褐色土が自然堆積する。

出土遺物 小円礫

調査所見 調査区外に一部遺構が分かっているため、形状は明らかではない。また、土坑そのものの機能的な詳細も不明である。

◆A 2区 12号土坑

付図2 第97図 写図27・28

位置 Br-56グリッド

重複 1号踏み分け道よりも新しい。

規模 0.80m×0.64m 深さ0.12m

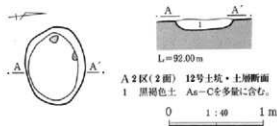
形状 平面形 楕円形

断面形 底面はほぼ平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 As-Cを大量に含む黒褐色土が単層堆積する。

出土遺物 小円礫

調査所見 底面中央部と縁辺部に小円礫が残存しているが、土坑そのものの機能的な詳細は不明である。



第97図 A 2区 2面 12号土坑平面図・土層断面図

◆A 2区 13号土坑

付図2 第98図 写図28

位置 Ce-55・56グリッド

重複 なし。

規模 (-)m×1.10m 深さ0.50m

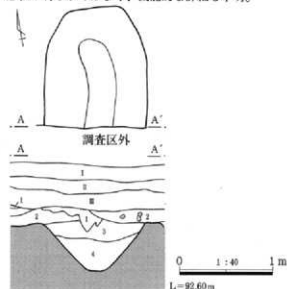
形状 平面形 全形が確認できないため不明。

断面形 底面は中央部が深く落ち込み、そこから法面がほぼ45°で立ち上がる。

埋没土 粗いシルトの黒褐色土と黒色土が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 調査区外に一部遺構が切かっているため、形状は明らかではなく、機能的な詳細も不明。



A 2区(2面) 13号土坑・土層断面

- 1 黒灰～暗灰色シルト 表土。現行水田跡土。
 2 暗褐色土 表土。現行水田表土。(鉄分沈着層)
 Ⅲ 暗灰褐色土 As-B、As-C、Hr-FAが混じり合う。鉄分を含む。
 1 黒色土 As-Cを非常に多く含む混土。
 2 黒色土 細粒シルト質で粘性が強い。
 3 黒褐色土 2層より粗いシルト。
 4 黒色土 サラサラなシルト。

第98図 A 2区 2面 13号土坑平面図・土層断面図

◆A 2区 14号土坑

付図2 第99図 写図28

位置 Ce-56グリッド

重複 なし。

規模 0.52m×0.40m 深さ0.47m

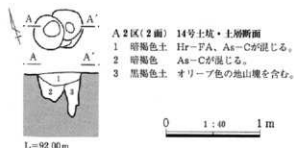
形状 平面形 ひょうたん形

断面形 底面は二つに落ち込み、法面は直角に立ち上がる。

埋没土 Hr-FA、As-C混じりの暗褐色土と地山塊を含む黒褐色土が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 29・30号溝と南北ラインを共にし、32号溝の東側縁辺部と平行な位置にある。低部の落ち込みからみて植物の根株痕とも考えられるが、機能的な詳細は不明である。



- A 2区(2面) 14号土坑・土層断面
 1 暗褐色土 Hr-FA、As-Cが混じる。
 2 暗褐色土 As-Cが混じる。
 3 黒褐色土 オリーブ色の地山塊を含む。

第99図 A 2区 2面 14号土坑平面図・土層断面図

◆A 2区 15号土坑

付図2 第100図 写図28

位置 Ce-56グリッド

重複 なし。

規模 0.40m×0.33m 深さ0.33m

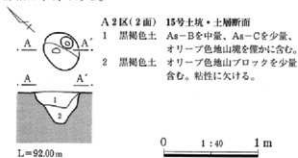
形状 平面形 ほぼ円形

断面形 底面は中段片側に2段のテラス状の段をもち、法面は直角に立ち上がる。

埋没土 As-B、As-Cを含む黒褐色土が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 28・30号溝と南北ラインを共にし、32号溝の東側縁辺部と平行な位置にある。低部の落ち込みからみて植物の根株痕とも考えられるが、機能的な詳細は不明である。



- A 2区(2面) 15号土坑・土層断面
 1 黒褐色土 As-Bを中量、As-Cを少量、オリーブ色地山塊を僅かに含む。
 2 黒褐色土 オリーブ色地山ブロックを少量含む。粘性に欠ける。

第100図 A 2区 2面 15号土坑平面図・土層断面図

◆A2区 16号土坑

付図2 第101図 写図28・29

位置 Ce-56・57グリッド

重複 なし。

規模 0.36m×0.35m 深さ0.45m

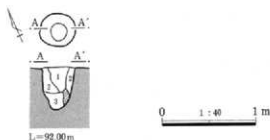
形状 平面形 円形

断面形 底面は円形状で狭く、法面は直角に立ち上がる。

埋没土 As-B、As-Cを含む黒褐色土と暗褐色土・黒褐色土が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 28・29号溝と南北ラインを共にし、32号溝の東側縁辺部と平行な位置にある。低部の落ち込みからみて柱穴とも考えられるが、機能的な詳細は不明である。



A2区(2面) 16号土坑・土層断面

- 1 黒褐色土 As-Bを中量、As-Cを少量、オリーブ色地山塊を僅かに含む。
- 2 暗褐色土 オリーブ色地山ブロックを少量含む。粘性があり、ややしまる。
- 3 黒褐色土 オリーブ色地山ブロックを少量含む。粘性に欠ける。

第101図 A2区2面 16号土坑平面図・土層断面図

◆A2区 17号土坑

付図2 第94図 写図29

位置 Cd-56グリッド

重複 10号土坑に先行し、6号土坑よりも新しい。

規模 (2.31)m×1.53m 深さ0.20m

形状 平面形 (隅丸長方形)

断面形 底面は平坦であり、法面はほぼ直角に立ち上がる。

埋没土 As-B、As-Cを含む黒褐色土が自然堆積

する。

出土遺物 須恵器片・土師器片

調査所見 形状は10号土坑に切られ明らかではないが、隅丸長方形を呈するものと思われる。周辺でもいくつかの土坑が検出されているが、機能的な詳細は不明である。

◆B1区 1号土坑

付図2 第102図 写図29・39 観察表P163

位置 Bf-47・48グリッド

重複 なし。

規模 0.86m×0.67m 深さ0.26m

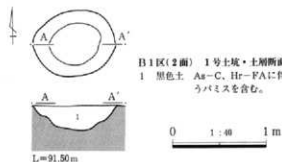
形状 平面形 卵円形

断面形 中段にテラス状の段をもち、底面はほぼ平坦。

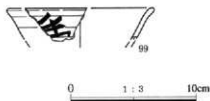
埋没土 Hr-FAに伴うバミス、As-Cを含む黒色土が単層堆積する。

出土遺物 須恵器坏片(墨書土器)

調査所見 地山を掘り抜く単独の土坑であるが、機能的な詳細は不明である。なお、出土遺物として墨書土器が出土しているが、文字は解読不能である。



B1区(2面) 1号土坑・土層断面
1 黒色土 As-C、Hr-FAに伴うバミスを含む。



第102図 B1区2面 1号土坑平面図・土層断面図・出土遺物

◆D 2区 22号土坑

付図2 第103図 写真29・39 観察表P153

位置 Bb-5グリッド

重複 なし。

規模 (1.32)m×(-)m 深さ0.20m

形状 平面形 全形が確認できないため不明。

断面形 底面は平坦であり、法面は緩やかに立ち上がる。

埋没土 As-Cを含む黒褐色土と暗褐色砂質土が自然堆積する。

出土遺物 黒色土器片・炭化材片・小円礫

調査所見 底面縁辺部に小円礫を残す。一部が調査区画外にかかっているために全形は不明である。土坑内から遺物と共に炭化材片が出土した例は、本遺跡ではこれが最初であり、火葬に関係した土坑の可能性も否めないが、土坑そのものの機能的な詳細は不明である。

◆D 4区 18号土坑

付図2 第104図 写真29

位置 Di-43グリッド

重複 なし。

規模 1.19m×0.52m 深さ0.24m

形状 平面形 歪んだ長方形

断面形 底面は中央部が深く落ち込み、そこから法面がほぼ45°で立ち上がる。

埋没土 As-Cを含む暗褐色土と暗褐色シルトが自然堆積する。

出土遺物 なし。

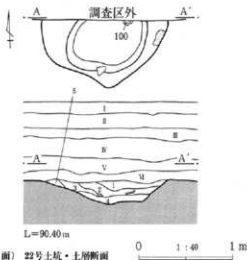
調査所見 埋没土の状況から、北東側からの埋没過程が看取れる。土坑そのものの機能的な詳細は不明である。

◆D 4区 19号土坑

付図2 第105図 写真20

位置 Di-42グリッド

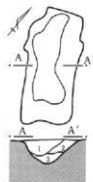
重複 なし。



- D 2区(2面) 22号土坑・土層断面
- I 暗褐色土 表土。現行水田耕土。
II 茶褐色土 現行水田床土。鉄分沈着層。
III 暗褐色土 As-Aを含む。
IV 茶褐色土 As-B、As-Cを斑点状に含む。鉄分沈着痕を多く残す。
V 黒褐色土 As-B、As-Cを多量に含む混土。φ1cm程度の円礫を含む。
VI 黒褐色土 As-C混土。
1 黒褐色土 VI層に比べやや粘質。
2 黒褐色土 As-Cの量が少なくなる。
3 黒褐色土 As-Cを含まない。
4 黒褐色土 色調が暗くなり炭化物を含む。
5 暗褐色砂質土 地山に小礫を含む。



第103図 D 2区 2面 22号土坑平面図・土層断面図・出土遺物



- D 4区(2面) 18号土坑・土層断面
- 1 暗褐色土 As-C混土。
2 暗褐色土 As-Cを斑点状に少量含む。
3 暗褐色シルト 地山にAs-Cを少量含む。

第104図 D 4区 2面 18号土坑平面図・土層断面図

規模 2.05m×0.61m 深さ0.16m

形状 平面形 歪んだ長方形

断面形 底面は平坦であり、法面は直角に立ち上がる。

埋没土 As-Cを含む暗褐色土が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 土層断面の観察から自然埋没が窺えるが、土坑そのものの機能的な詳細は不明である。



第105図 D4区2面 19号土坑平面図・土層断面図

◆D4区 20号土坑

付図2 第106図 写図30

位置 Di-41・42グリッド

重複 なし。

規模 0.74m×0.67m 深さ0.60m

形状 平面形 乱れた円形

断面形 底面はほぼ平坦であり、法面は直角に立ち上がる。

埋没土 As-B・As-Cを含む暗褐色砂質土とAs-Cを含む暗褐色土・褐色土が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 土層断面の観察から自然埋没が窺えるが、土坑そのものの機能的な詳細は不明である。



第106図 D4区2面 20号土坑平面図・土層断面図

◆D4区 21号土坑

付図2 第107図 写図30

位置 Dg-12・13グリッド

重複 なし。

規模 (-)m×(0.60)m 深さ0.17m

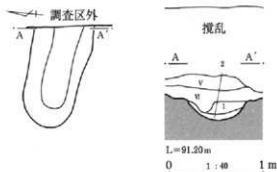
形状 平面形 全形が確認できないため不明。

断面形 底面中央から確認面まで緩やかに立ち上がる。

埋没土 As-Cを少量含む暗褐色シルトが自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 土層断面の観察から自然埋没が窺えるが、土坑そのものの機能的な詳細は不明である。



D4区(2面) 21号土坑・土層断面
 I 灰褐色土 表土。現行水田耕土。
 II 茶褐色土 現行水田床土。鉄分沈着層。
 III 暗褐色土 As-B混土。
 IV 暗褐色土 As-BとHr-FAとの混土。
 V 黄褐色土 Hr-FAとAs-Cとの混土。
 VI 暗褐色土 As-C混土。
 1 暗褐色シルト 地山にAs-Cを少量斑点状に含む。
 2 暗褐色シルト 1層に近似するが、やや土質が粘質。

第107図 D4区2面 21号土坑平面図・土層断面図

(6) 井戸

◆A3区 2号井戸

付図2 第108図 写真30

位置 Cs-55・56グリッド

重複 なし。

規模 0.81m×0.78m 深さ1.57m

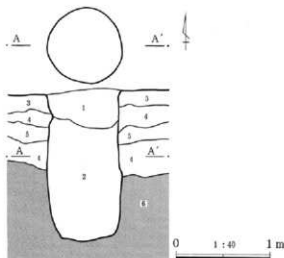
形状 平面形 ほぼ円形

断面形 底面は円形状で平坦であり、法面は直角に立ち上がる。

埋没土 As-Cを多量に含む暗褐色土とφ5~50cm大の円礫と灰色砂層を含む暗褐色砂礫層が堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 旧利根川の河床礫層を掘り抜いている。井戸底部は一気に埋没したことが窺えるが、遺物が伴わないために時期的な詳細は不明である。



L=91.20m

A3区(2面) 2号井戸・土層断面

- 1 暗褐色土 As-Cを多量に含む。φ2~3cmの小円礫を含む。
- 2 暗褐色砂礫層 φ5~10cm大の円礫を多量に含む。間に灰色砂層を挟む。
- 3 暗褐色砂質土 粒子均一で細かい。
- 4 黄褐色砂質土 粒子均一で細かい。
- 5 黄褐色砂質土 4層より色調がやや暗くなる。
- 6 砂礫層 φ5~50cm大の円礫を多く含む砂礫層。旧利根川の河床礫。

第108図 A3区2面 2号井戸平面図・土層断面図

◆D6区 4号井戸

付図2 第109図 写真30

位置 Ce・Cf-53グリッド

重複 なし。

規模 1.36m×(-)m 深さ0.82m

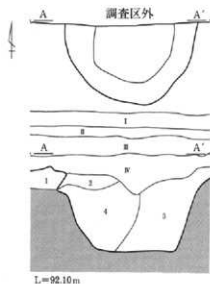
形状 平面形 (ほぼ円形)

断面形 底面はほぼ平坦であり、東側法面は西側法面に比べ、ほぼ直角に立ち上がる。

埋没土 φ1~50cm大の円礫を多量に含む砂礫層が自然堆積する。

出土遺物 なし。

調査所見 北半が水道管埋設部分にかかっているために、全形は明らかではないがほぼ円形とみることができる。本遺跡検出の井戸は、1面の1・3号井戸と2面の2・4号井戸であるが、明らかに形状や規模に違いがみられる。なお、遺物を伴わないために、2号井戸同様に時期的な詳細は不明である。



L=92.10m

D6区(2面) 4号井戸・土層断面

- I 暗褐色土 表土。現行水田耕土。As-Aを含む。
 - II 黄褐色土 現行水田床土。鉄分沈着帯。As-Aを含む。
 - III 黄褐色土 II層に色調が近似する。As-A、As-Bの混土。鉄分沈着痕を多数残す。Hr-F(A)に作らバミスが少量混入。
 - IV 暗褐色土 As-C混土。
- 1 暗褐色シルト 地山にφ5~10cm大の円礫を混入する。
 - 2 砂礫層 φ1~10cm大の円礫を多量に含む。
 - 3 砂礫層 φ20~50cm大の円礫を多量に含む。
 - 4 黒色砂礫層 砂礫に礫が多量に混入。

0 1:40 1m

第109図 D6区2面 4号井戸平面図・土層断面図

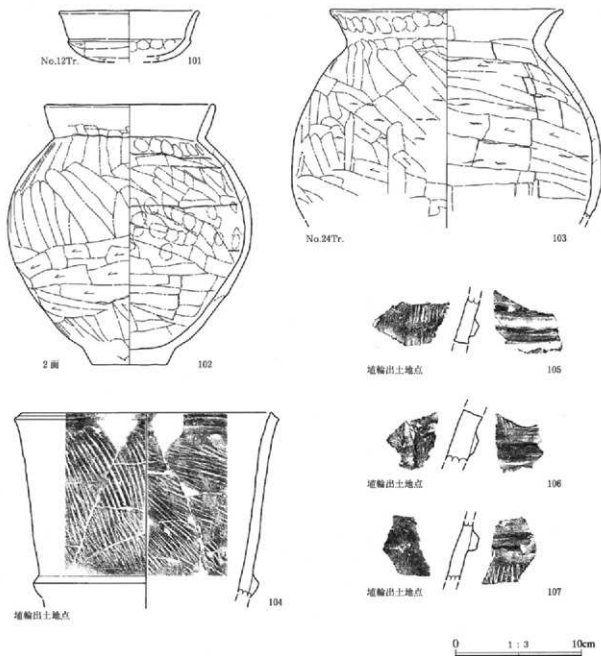
4. 遺構外出土遺物

付図2 第2・110・111図 写真39・40 観察表P153・154

本遺跡においては、遺構を伴わない遺物も出土している。それはB2区2面の埴輪片集中箇所での円筒埴輪や、遺構確認作業中における表土中からの出土遺物などである。他にも41本設定した試掘トレンチ内からの出土遺物などがあり(第2図試掘トレン

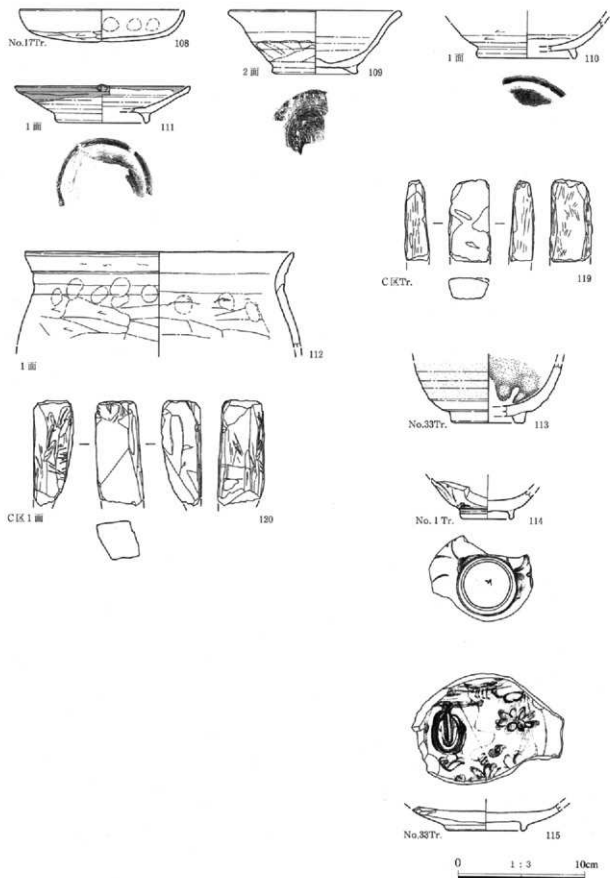
チ設定図参照)、破片を含めて遺物の年代が特定できるものについては本文に掲載した。

特にB2区2面の表土中から出土した土師器甕(No.102)と、No.12トレンチ内出土の土師器甕(No.101)、同じくNo.24トレンチ内出土の土師器甕(No.103)は、その年代が6世紀代(古墳時代後期)とみられることから、本遺跡における該期住居跡の存在を示唆する資料となるものである。



第110図 遺構外出土遺物(1)

4. 遺構外出土遺物



第111図 遺構外出土遺物 (2)

第4章 自然科学分析

1. 石関西田Ⅱ遺跡の土層とテフラ分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

前橋市域とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっていく。

そこで、年代が不明な土層や遺構が検出された石関西田Ⅱ遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、土層や遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、A（A1区北壁）、B（A3区5号高）、C（B2区東壁）、D（B2区東壁）、E（B2区9号高）、F（B2区西壁）、G（B2区南壁）、H（D1区西端）、I（D2区第2トレンチ）、J（D3区北壁）、K（D6区西壁）、L（C区11号高）の12地点である（サンプリング地点は付図2参照）。

2. 土層層序

(1) A地点

A地点では、下位より白色軽石混じり灰色土（層厚10cm以上、軽石の最大径11mm）、黒褐色粘質土（層厚3cm）、成層したテフラ層（層厚13.4cm）、暗褐色土（層厚0.8cm）、成層したテフラ層（層厚5.5cm）、暗灰色土（層厚4cm）、灰色砂質シルト層（層厚0.3cm）、暗灰色土（層厚11cm）、黄灰色砂層（層厚6cm）、褐色砂質土（層厚8cm）、暗灰褐色土（層厚10cm）、黄灰色砂層（層厚5cm）、炭化物混じり灰色土（層厚9cm）、鉄分を多く含む褐色土（層厚4cm）、灰色土（層厚14cm）、盛土（層厚47cm）が認められる（第112図）。

これらのうち、下位の成層したテフラ層は、下位より灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、褐色粗粒火山灰層（層厚2cm）、青灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚6cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚2cm）、桃色細粒火山灰層（層厚3cm）からなる。このテフラ層は、その層相から、1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B、荒牧、1968、新井、1979）に同定される。上位の成層したテフラ層は、下部の灰色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）と上部の青灰色細粒火山灰層（層厚1cm）からなる。このテフラ層は、層位や層相などから1128（大治3）年に浅間火山から噴出したと推定されている浅間柏川テフラ（As-Kk、早田、1991、1996）に同定される。

(2) C地点

C地点では、下位より砂混じり若干色調が明るい黒褐色土（層厚10cm以上）、砂混じり黒褐色土（層厚16cm）、褐灰色粗粒火山灰層（層厚4cm）、暗褐色砂質土（層厚16cm）、灰色土（層厚18cm）、灰色作土（層厚18cm）が認められる（第112図）。これらのうち、褐灰色粗粒火山灰層は、その層相からAs-Bの下部に対比される。

(3) D地点

D地点では、下位より暗褐色土（層厚10cm以上）、色調が若干暗い暗灰色土（層厚20cm）、成層したテフラ層（層厚5.2cm）、砂混じり暗灰褐色土（層厚18cm）、鉄分を多く含む褐色土（層厚2cm）、灰色土（層厚41cm）、灰色作土（層厚6cm）が認められる（第112図）。これらのうち成層したテフラ層は、下部の灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）と、上部の褐灰色粗粒火山灰層（層厚5cm）からなる。このテフラ層は、その層相からAs-Bの下部に対比される。

(4) E地点

E地点では、As-Bより下位のサク状遺構が検出された。ここではサク状遺構の覆土について、テフラ検出分析が行われた（後述）。

(5) F地点

F地点でも、サク状の遺構が検出された（第113図）。サク状の遺構は、下位より灰白色軽石を少量含む灰色粘質土（層厚13cm、軽石の最大径4mm）、灰白色軽石を多く含む暗灰褐色土（層厚9cm、軽石の最大径5mm）、灰白色軽石（最大径4mm）や白色軽石（最大径5mm）を含む灰色土（層厚5cm以上）などから埋没している。

(6) G地点

G地点では、下位より亜円礫層（層厚30cm以上、礫の最大径288mm）、黄灰色砂層（層厚35cm）、灰色砂層（層厚22cm）、若干色調が暗い灰色土（層厚12cm）、灰色土（層厚12cm）、灰白色軽石（最大径5mm）や白色軽石（最大径17mm）を含む灰色土（層厚12cm）、暗灰色土（層厚10cm）、成層したテフラ層（層厚6cm）、砂混じり暗灰褐色土（層厚5cm）、灰色土（層厚11cm）、若干黄色がかかった灰色土（層厚14cm）、若干色調が暗い灰色土（層厚13cm）、暗灰色表土（層厚12cm）が認められる（第113図）。

これらのうち、成層したテフラ層は、下部の褐灰色粗粒火山灰層（層厚5cm）と上部の桃色細粒火山灰層（層厚1cm）からなる。このテフラ層は、その層相からAs-Bに同定される。

(7) H地点

H地点では、下位より亜円礫層（層厚10cm以上、礫の最大径214mm）、暗灰色砂質土（層厚10cm）、暗灰色土（層厚38cm）、黒灰色土（層厚4cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚2cm）、暗灰色土（層厚23cm）、鉄分に富む棕色土（層厚2cm）、暗灰色土（層厚11cm）、黄灰色砂層（層厚2cm）、白色細粒軽石混じりで若干黄色がかかった灰色土（層厚13cm、白色軽石の最大径3mm）、灰色土（層厚10cm）、黄灰色土（層厚17cm）、暗灰褐色表土（層厚20cm）が認められる（第114図）。

(8) I地点

I地点では、下位より黒褐色泥炭層（層厚10cm以上）、灰色シルト層（層厚5cm）、暗灰褐色泥層（層厚4cm）、成層したテフラ層（層厚4.4cm）、暗褐色泥層（層厚2cm）、青灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、暗褐色泥層（層厚0.1cm）、若干桃色がかかった灰色シルト層（層厚4cm）、黒灰色泥層（層厚29cm）、砂混じり暗灰色土（層厚17cm）、黄灰色砂質シルト層（層厚16cm）、黒灰褐色泥層（層厚6cm）、成層したテフラ層（層厚13

第4章 自然科学分析

cm)、黒褐色泥層(層厚0.3cm)、青灰色細粒火山灰層(層厚1cm)、黒褐色土(層厚5cm)、灰色砂質土(層厚5cm)、暗灰色土(層厚17cm)、白色軽石混じり灰色土(層厚5cm、軽石の最大径10mm)、白色軽石混じり灰色土(層厚14cm、軽石の最大径11mm)、黄灰色土(層厚8cm)、灰色土(層厚14cm)、暗灰褐色土(層厚9cm)、暗灰色表土(層厚13cm)が認められる(第114図)。

2層の成層したテフラ層のうち、下位の成層したテフラ層は、下部の青灰色細粒火山灰層(層厚0.4cm)と上部の青灰色粗粒火山灰層(層厚4cm)からなる。また上部の成層したテフラ層は、下位より黄灰色粗粒火山灰層(層厚3cm)、橙色粗粒火山灰層(層厚2cm)、黄色細粒軽石層(層厚3cm、軽石の最大径2mm)、かすかに成層した暗灰色粗粒火山灰層(層厚3cm)、桃色細粒火山灰層(層厚2cm)からなる。この上位の成層したテフラ層は、その層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B、荒牧, 1968、新井, 1979)に同定される。またその上位の青灰色細粒火山灰層は、層位や層相などから1128(大治3)年に浅間火山から噴出したと推定されている浅間柏川テフラ(As-Kk、早田, 1991, 1996)に同定される。このAs-Bの直下からは、畦畔が検出されている。

(9) J地点

J地点では、下位より灰色砂層(層厚10cm以上)、暗灰色砂質土(層厚11cm)、灰色軽石混じり暗灰色土(層厚14cm、軽石の最大径3mm)、黄色細粒火山灰層(層厚2cm)、褐色土(層厚3cm)、灰色土(層厚22cm)、淘汰の良い灰色砂層(層厚10cm)、灰色砂質土(層厚5cm)、暗灰色土(層厚7cm)、成層したテフラ層(層厚10cm)、白色軽石混じり灰褐色砂質土(層厚24cm)、暗灰色表土(層厚21cm)が認められる(第115図)。これらのうち、成層したテフラ層は、下部の成層した黄灰色粗粒火山灰層(層厚8cm)と、上部の桃色細粒火山灰層(層厚2cm)からなる。

(10) K地点

K地点では、下位より重円礫層(層厚50cm以上、礫の最大径138mm)、黄灰色軽石層(層厚11cm、軽石の最大径11mm、石質岩片の最大径2mm)、砂混じり暗灰色土(層厚21cm)、黄灰色砂質土(層厚17cm)、若干黄色がかかった灰色土(層厚12cm)、暗灰色表土(層厚17cm)が認められる(第115図)。

(11) L地点

L地点では、サク状遺構を覆って灰色粗粒火山灰を含み若干色調が暗い灰色土(層厚2cm、試料1)が認められる。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

テフラの特徴とその降伏層準を把握するために、上述11地点において採取された試料のうち、64点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1と表2に示す。A地点では、いずれの試料からも、スポンジ状によく発泡した灰白色軽石（最大径3mm）が検出される。軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。これらのことから、この軽石については、4世紀中葉¹⁾に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C、荒牧、1968、新井、1979）に由来すると考えられる。試料3および試料2には、さほど発泡の良くない白色軽石（最大径0.8mm）が少量ずつ含まれている。軽石の班品には、斜方輝石や角閃石が認められる。この軽石は、その岩相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳洪川テフラ（Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）に由来すると思われる。さらに試料1には、比較的良好に発泡した淡褐色軽石（最大径2.1mm）が比較的多く含まれている。この軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相から上位のAs-Bに由来すると考えられる。

B地点では、いずれの試料からも、比較的良好に発泡した淡褐色軽石（最大径3.3mm）が検出される。軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相から上位のAs-Bに由来すると考えられる。試料3には、ほかにスポンジ状によく発泡した灰白色軽石（最大径2mm）が含まれている。班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。これらのことから、この軽石はAs-Cに由来すると考えられる。

C地点では量に違いはあるものの、いずれの試料からも比較的良好に発泡した淡褐色軽石（最大径3.6mm）が検出される。軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。最下位の試料8については、屈折率測定を行って示標テフラとの同定精度を向上させることにした。

D地点では、試料6、試料5、試料3から、スポンジ状によく発泡し、班品に斜方輝石や単斜輝石をもつ灰白色軽石（最大径1.5mm）や、さほどよく発泡しておらず、班品に斜方輝石や角閃石をもつ白色軽石（最大径1.9mm）が少量ずつ検出される。これらの軽石は、岩相から各々As-CとHr-FAに由来すると考えられる。試料1には、比較的良好に発泡した淡褐色軽石（最大径5.1mm）が多く含まれている。軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。これらの特徴は、層相からこのテフラ層がAs-Bに同定されることを支持する。

E地点では、試料5、試料2、試料1に、スポンジ状によく発泡し、班品に斜方輝石や単斜輝石をもつ灰白色軽石（最大径1.4mm）が含まれている。この軽石は、その岩相からAs-Cに由来すると考えられる。また試料2には、さほどよく発泡しておらず、班品に斜方輝石や角閃石をもつ白色軽石（最大径0.9mm）が少量含まれている。この軽石は、その岩相からHr-FAに由来すると考えられる。

G地点では、試料6より上位の試料から、スポンジ状によく発泡し、班品に斜方輝石や単斜輝石をもつ灰白色軽石（最大径5.3mm）や、さほどよく発泡しておらず、班品に斜方輝石や角閃石をもつ白色軽石（最大径3.0mm）が検出された。岩相から、前者はAs-Cに、また後者はHr-FAに由来すると考えられる。

H地点では、試料29から試料19にかけて、スポンジ状によく発泡し班品に斜方輝石や単斜輝石をもつ灰白色軽石（最大径6.3mm）や、さほど発泡が良くなく班品に斜方輝石や角閃石をもつ白色軽石（最大径4mm）が比較的多く含まれている。試料18のテフラ層には、比較的良好に発泡した淡褐色軽石（最大径3.1mm）がとくに多く含まれている。この軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

I地点では、試料34と試料33をのぞくいずれの試料からも、スポンジ状によく発泡し班品に斜方輝石や単斜輝石をもつ灰白色軽石（最大径5mm）が検出される。また試料34から試料23にかけて、試料11や試料9には、さほど発泡が良くなく班品に斜方輝石や角閃石をもつ白色軽石が認められる。とくに試料34のテフラ層に多く含まれており、試料33には、（最大径10.1mm）に達する粗粒の軽石も含まれている。試料17より上位

では、比較的良好に発達した淡褐色軽石（最大径5.7mm）が含まれている。この軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。さらに試料1には、若干光沢をもつ白色軽石（最大径3.1mm）が少量含まれている。

J地点では、試料11を除くいずれの試料からも、スポンジ状によく発達し班品に斜方輝石や単斜輝石をもつ灰白色軽石（最大径7.7mm）が含まれている。この軽石は、とくに試料13に多く認められる。また試料11から試料3にかけて、さほど発泡が良くなく班品に斜方輝石や角閃石をもつ白色軽石（最大径6.7mm）が認められる。この軽石は、とくに試料11のテフラ層に多く含まれている。

K地点の試料1のテフラ層には、スポンジ状によく発達し班品に斜方輝石や単斜輝石をもつ灰白色軽石（最大径7.1mm）がとくに多く含まれている。さらにL地点の試料1には、スポンジ状によく発達し班品に斜方輝石や単斜輝石をもつ灰白色軽石（最大径4.3mm）や、さほど発泡が良くなく班品に斜方輝石や角閃石をもつ白色軽石（最大径2.5mm）が比較的多く含まれている。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

A地点の試料9、試料5、試料3、さらにE地点の試料3および試料1の5点とI地点の試料9およびL地点の試料1に含まれるテフラ粒子の起源を明らかにするために、屈折率測定を試みた。屈折率測定方法は、温度一定型屈折率測定法（新井, 1972, 1993）による。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表3と表4に示す。A地点の試料9に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は、1.525-1.531である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が含まれている。斜方輝石（ γ ）の屈折率は、1.706-1.711である。ただし、microliteが多く含まれており、精度はさほど高くない。以上のことから、この試料には、As-Bによく似たテフラ粒子が多く含まれている。

A地点の試料5に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は1.501-1.531（modal range: 1.524-1.531, 1.501-1.520）である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が含まれている。斜方輝石（ γ ）と角閃石（ n_2 ）の屈折率は、1.706-1.711および1.673-1.676である。以上のことから、この試料にはAs-Bのほか、As-CやHr-FAに由来するテフラ粒子が多く含まれていると推定される。さらに、1783（天明3）年に浅間火山から噴出した浅間A軽石（As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979）がごく少量含まれている可能性も考えられる。

A地点の試料3に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は1.508-1.530（modal range: 1.525-1.530, 1.508-1.520）である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が含まれている。斜方輝石（ γ ）と角閃石（ n_2 ）の屈折率は、1.707-1.712および1.673-1.676である。以上のことから、この試料にはAs-Bのほか、As-CやHr-FAに由来するテフラ粒子が多く含まれていると推定される。さらにAs-Aがごく少量含まれている可能性も考えられる。

E地点の試料1に含まれる火山ガラス（n）の屈折率は、1.515-1.520である。重鉱物としては、斜方輝石のほか、単斜輝石や角閃石が含まれている。斜方輝石（ γ ）と角閃石（ n_2 ）の屈折率は、1.708-1.711および1.672-1.677である。これらのことから、この試料にはAs-C起源の粒子が多く含まれており、ほかに若干Hr-FAに由来するテフラ粒子が混入していると考えられる。以上のことから、E地点のサク状遺構の覆土は、Hr-FA降灰後でAs-B降灰前に形成された可能性が考えられる。

F地点の試料3に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.514-1.520である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.708-1.711である。以上のことから、この試料はAs-Cに同定される。したがって、F地点のサク状遺構の覆土については、As-B降灰前で、As-C降灰前後に形成された可能性が考えられる。

I地点の試料9に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は1.510-1.530(modalrange: 1.525-1.529)である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.707-1.710である。またL地点の試料1に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.515-1.520である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が含まれている。斜方輝石(γ)と角閃石(n_s)の屈折率は、1.707-1.710と1.673-1.677である。

5. 考察

テフラ検出分析で認められた軽石のうち、スポンジ状によく発泡し、斑晶に斜方輝石や単斜輝石をもつ灰白色軽石は、その岩相から4世紀中葉*1に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に由来すると考えられる。また、さほど発泡が良くなく、斑晶に斜方輝石や角閃石をもつ白色軽石の多くは、その岩相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳洪川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に由来すると思われる。比較的よく発泡し、斑晶に斜方輝石や単斜輝石をもつ淡褐色軽石(最大径5.7mm)については、その岩相からAs-Bに由来すると考えられる。さらに光沢をもつ白色軽石については、その特徴から1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に由来すると考えられる。

野外での層相観察や、テフラ検出分析の結果を合わせると、H地点では、試料29以下の層位にAs-CやHr-FAの降灰層があると考えられる。また試料18のテフラ層は、含まれる軽石の特徴からAs-Bに同定される。

I地点では、試料37以下の層位にAs-Cの降灰層があると考えられる。そして下部の成層したテフラについては、層相や含まれるテフラの特徴からHr-FAに同定される。このことから、その上位の青灰色細粒火山灰層については、6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井, 1962, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)の最上部の火山灰層(早田, 1993)に同定される。さらにそのすぐ上位にある、シルト層については、層位や層相からHr-FPの噴火に伴って発生した火山泥流堆積物(早田, 1989)に対比される。試料1に含まれる光沢をもつ白色軽石については、その特徴からAs-Aに由来する可能性が高い。なお、Hr-FP火山泥流の上位で、As-Bの下位にある黄灰色砂質シルト層については、その層位から818(弘仁9)年の地震に伴って発生した洪水堆積物(能登ほか, 1990)の可能性が考えられる。

J地点において試料13付近に降灰層があると考えられる軽石は、As-Cと考えられる。また試料11のテフラ層は、Hr-FAに同定される。このことから、Hr-FAの上位で、As-Bより下位に認められる灰色砂層については、その層位から818(弘仁9)年の地震に伴って発生した洪水堆積物の可能性が考えられる。K地点の試料1のテフラ層は、層相や含まれる軽石の特徴から、As-Cに同定される。

さらに、L地点(C区I1号島の覆土(試料1))に含まれる軽石については、軽石の岩相や、重鉱物の組み合わせ、さらに火山ガラスや斜方輝石の屈折率などから、As-CやHr-FAに由来すると考えられる。したがって、C区I1号島の層位については、Hr-FAより上位にある可能性が考えられよう。

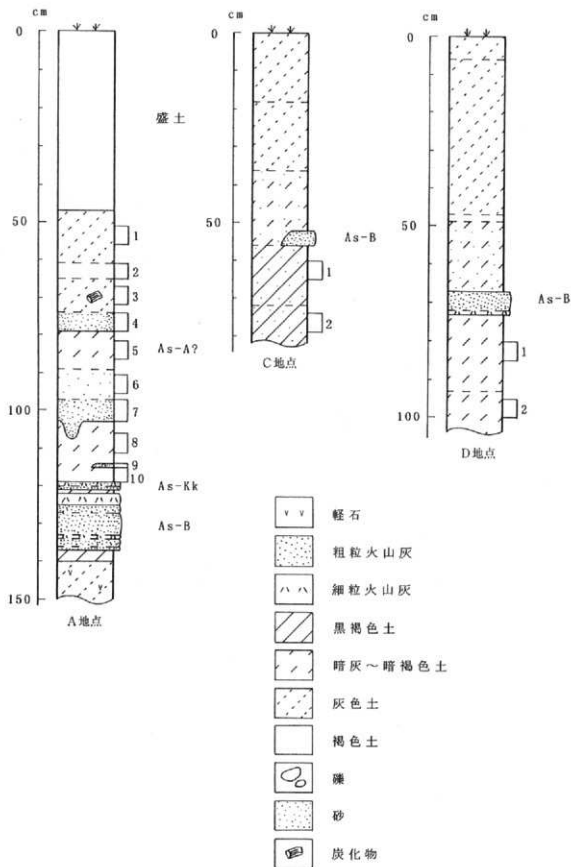
6. 小結

石岡西田II遺跡において、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行った。その結果、下位より浅間C軽石（As-C, 4世紀中葉*1）、榛名ニツ岳洪川テフラ（Hr-FA, 6世紀初頭）、榛名ニツ岳伊香保テフラ（Hr-FP, 6世紀中葉）とそれに伴って発生した火山記流堆積物、浅間Bテフラ（As-B, 1108年）、浅間柏川テフラ（As-Kk, 1128年）、浅間A軽石（As-A, 1783年）などのテフラ層やテフラ粒子を認めることができた。さらに818（弘仁9）年の地震に伴って発生した可能性がある洪水堆積物も検出された。発掘調査で検出された遺構のうち、E地点とF地点のサク状遺構の覆土は、各々Hr-FA降灰後でAs-B降灰前と、As-B降灰前でAs-C降灰前後に形成された可能性が考えられる。水田遺構については、As-Bの直下に層位がある。また高状遺構については、Hr-FAより上位にある可能性が推定される。

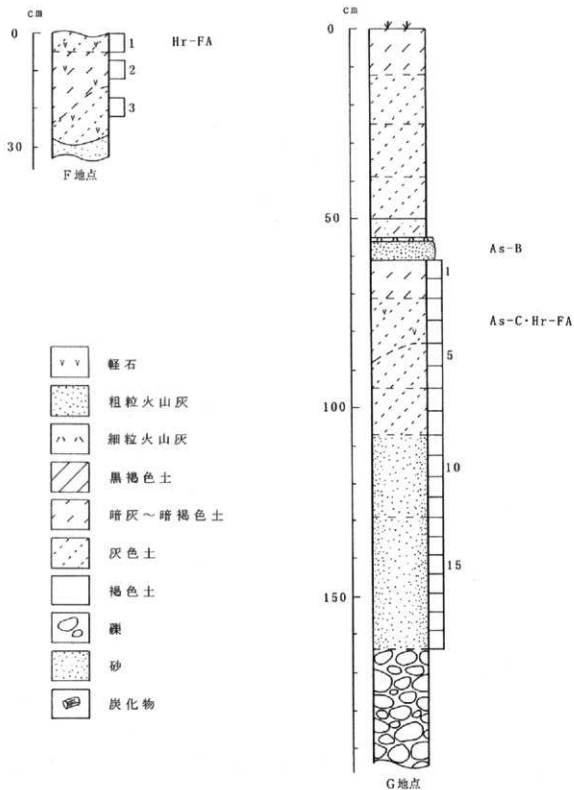
*1 現在では4世紀を遡るとする説が有力になっているようである（たとえば、若狭, 2000）。しかし、具体的な年代観が示された研究報告例はまだない。現段階においては「3世紀後半」あるいは「3世紀終末」と考えておくのが妥当なのかも知れないが、土器をもとにした考古学的な年代観の変更については、考古学研究者による明確な記載を待ちたい。

文献

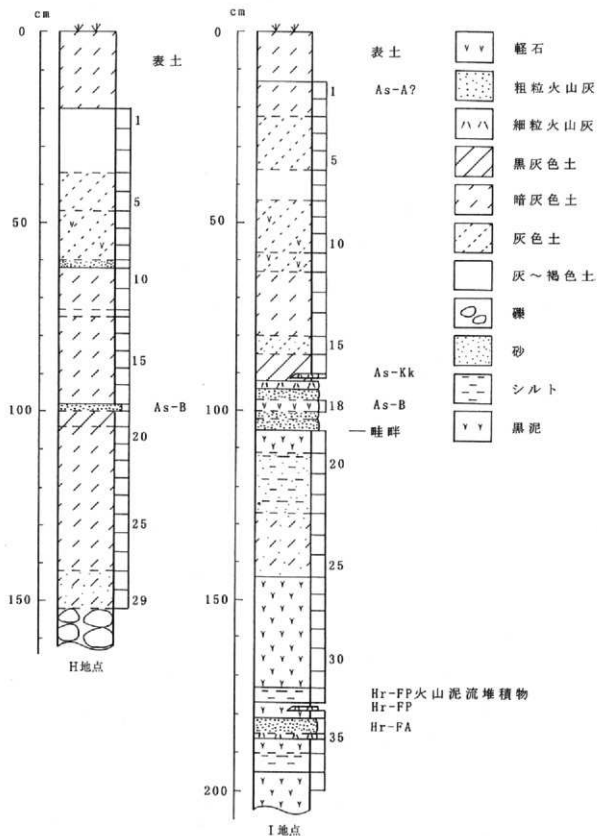
- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフラクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
- 新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2—研究対象別分析法」, p.138-149.
- 荒牧重雄（1968）浅間火山の地質。地団研専報, no.45, 65p.
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
- 坂口 一（1986）榛名ニツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井 神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 早田 勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉（1991）浅間火山の生い立ち。佐久考古通信, no.53, p.2-7.
- 早田 勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて—。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.
- 若狭 徹（2000）群馬の弥生土器が終わるとき。かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く—古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.



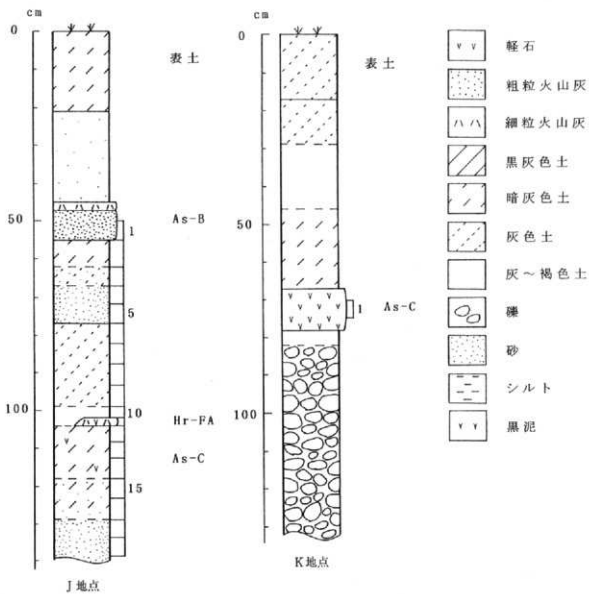
第112図 A・C・D地点の土層柱状図



第113図 F・G地点の土層柱状図



第114図 H・I地点の土層柱状図



第115図 J・K地点の土層柱状図

表1 テフラ検出分析結果(1)

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
A地点	1	++	淡褐	2.7
	2	+	淡褐	2.6
	3	++	淡褐, 白	1.8, 2.1
	4	+	淡褐	1.9
	5	++	淡褐>白	1.8, 3.1
	6	++	淡褐>白	3.6, 3.2
	7	++	淡褐>白	3.0, 1.6
	8	-	-	-
	9	+	淡褐	1.3
	10	+	淡褐	1.2
B地点	1	+++	灰白, 白	4.0, 2.2
C地点	1	+++	灰白>白灰	4.8, 1.8
	2	+++	灰白>白	6.0, 3.2
D地点	1	++	灰白>白灰	4.1, 3.7
	2	+++	灰白>白	5.1, 2.3
E地点	1	++	灰白>白	3.8, 2.1
F地点	1	+++	灰白>白	4.4, 3.1
	2	+++	灰白	6.1
	3	++	灰白	3.8
G地点	2	+	灰白>白	3.3, 1.7
	4	++	灰白>白	5.3, 3.0
	6	+	灰白>白	1.1, 1.6
	8	-	-	-
	10	-	-	-
	12	-	-	-
	14	-	-	-
	16	-	-	-
	18	-	-	-

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない,

() はとくに少ないことを示す, 最大径の単位は, mm.

表2 テフラ検出分析結果(2)

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
H地点	18	++++	淡褐	3.1
	19	++	灰白>白	3.1,1.3
	21	++	灰白, 白	3.1,2.1
	23	++	灰白, 白	5.9,2.8
	25	++	灰白, 白	7.2,4.0
	27	++	灰白, 白	6.3,2.4
	29	++	灰白, 白	3.2,2.0
I地点	1	+	淡褐, 白	2.0,1.9
	3	+	淡褐	2.1
	5	+	淡褐	3.6
	7	+	淡褐	3.1
	9	++	淡褐>白	3.7,2.6
	11	++	淡褐>白	3.3,3.1
	13	++	淡褐	2.7
	15	++	淡褐	3.0
	17	++	淡褐	5.7
	19	+	灰白	1.5
	23	++	灰白>白	5.0,1.8
	25	++	灰白>白	4.3,4.0
	27	++	灰白>白	3.7,4.3
	29	++	灰白, 白	3.7,2.8
	31	++	白, 灰白	2.3,2.6
	33	++	白	10.1
	34	+++	白	5.2
35	+	白, 灰白	2.4,1.3	
37	+	灰白>白	2.3,2.2	
J地点	2	+	灰白	1.9
	3	++	灰白, 白	4.9,2.1
	5	+	灰白, 白	1.3,1.1
	7	++	白, 灰白	2.2,3.2
	9	++	白, 灰白	4.1,2.8
	11	+++	白	6.7
	13	+++	灰白	7.7
	15	+	灰白	6.7
K地点	1	++++	灰白	7.1
L地点	1	++	灰白, 白	4.3,2.5

+++ : とくに多い, ++ : 多い, + : 中程度, - : 少ない, - : 認められない。最大径の単位は, mm。

表3 屈折率測定結果(1)

地点	試料	火山ガラス (n)	重鉱物	斜方輝石 (γ)	角閃石 (n_s)
A	3	1.508-1.530 (1.525-1.530, 1.508-1.520)	opx > cpx, (ho)	1.707-1.712	1.673-1.676
A	5	1.501-1.531 (1.524-1.531, 1.501-1.520)	opx > cpx, (ho)	1.706-1.711	1.673-1.676
A	9	1.525-1.531	opx > cpx, (ho)	1.706-1.711	—
E	1	1.515-1.520	opx > cpx, ho	1.708-1.711	1.672-1.677
F	3	1.514-1.520	opx > cpx	1.708-1.711	—

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)による。(): modal range.

opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石。()は量が少ないことを示す。

表4 屈折率測定結果(2)

地点	試料	火山ガラス (n)	重鉱物	斜方輝石 (γ)	角閃石 (n_s)
I地点	9	1.510-1.530 (1.525-1.529)	opx > cpx, (ho)	1.707-1.710	—
L地点	1	1.515-1.520	opx > cpx, (ho)	1.707-1.710	1.673-1.677

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)による。(): modal range.

opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石。()は量が少ないことを示す。

2. 石関西田Ⅱ遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。

2. 試料

分析試料は、A（A1区北壁）、B（A3区5号高）、C（B2区東壁）、D（B2区東壁）、E（B2区9号高）、F（B2区西壁）地点の6地点から採取された計17点とH地点（D1区西端）、I地点（D2区第2トレンチ）、J地点（D3区北壁）、L地点（C区11号高）の4地点から採取された計19点である（サンプリング地点は付図2参照）。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-3}g ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、H・I・J地点については、水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。その結果を表5および第116図～第

121図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、オオムギ族（ムギ類の類の表皮細胞由来）、キビ族型、ジュズダマ属、ヌマガヤ属型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）、シバ属、Aタイプ（くさび型）

〔イネ科—タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科—その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

多角形板状（ブナ科コナラ属など）、その他

5. 考察

（1）稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) A地点（第116図）

As-A混層（試料1）からAs-Bの下層（試料7）までの層準について分析を行った。その結果、As-A混層（試料1）からAs-Kk直上層（試料4）までの各層、およびAs-B直下層（試料6）とその下層（試料7）からイネが検出された。このうち、As-B直下層（試料6）とその下層（試料7）では密度が5,100~5,900個/gと高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。As-Kk直上層からAs-A混層にかけては、密度が700~2,200個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) B地点（第119図）

As-Bより下位のサク状遺構の覆土（試料1）について分析を行った。その結果、イネは検出されなかった。

3) C地点（第117図）

As-B直上層（試料1）からAs-Bの下層（試料3）までの層準について分析を行った。その結果、As-B直上層（試料1）とAs-B直下層（試料2）からイネが検出された。密度は前者で2,200個/g、後者でも700個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

第4章 自然科学分析

4) D地点(第118図)

As-B直上層(試料1)からAs-Bの下層(試料3)までの層準について分析を行った。その結果、As-B直上層(試料1)とAs-B直下層(試料2)からイネが検出された。密度は前者で1,800個/g、後者でも2,000個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

5) E地点(第119図)

As-Bより下位のサク状遺構の覆土(試料1)について分析を行った。その結果、イネは検出されなかった。

6) F地点(第119図)

As-Bより下位のサク状遺構の覆土(試料1、2)について分析を行った。その結果、イネは検出されなかった。

7) H地点(第120図)

As-B直下層(試料1)について分析を行った。その結果、イネが検出されたが密度は800個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および土層や他所からの混入などが考えられる。

8) I地点(第121図)

As-A混層(試料1)からHr-FAの下層(試料17)までの層準について分析を行った。その結果、As-Kk直下層(試料9)を除く各試料からイネが検出された。このうち、As-A直下層(試料2)、As-Kkの上層(試料6)、As-Bの下層(試料12)、Hr-FPの上層(試料13)、Hr-FP混層(試料14)では、密度が5,000個/g以上と高い値であり、As-A混層(試料1)、As-Aの下位層(試料4)、As-B直下層(試料10、畦畔遺構検出)でも、3,000個/g以上と比較的高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。その他の層準では、密度が700~2,300個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

9) J地点(第120図)

As-B直下層(試料1)からAs-C直下層(試料6)までの層準について分析を行った。その結果、As-B直下層(試料1)からHr-FA直下層(試料5)までの各層からイネが検出された。このうち、As-Bの下層(試料2)では密度が5,000個/g以上と高い値であり、As-B直下層(試料1)およびAs-Bの下位層(試料3)でも3,000個/g以上と比較的高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。Hr-FA直下層(試料5)では、密度が800個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

10) L地点(表5)

Hr-FAより上位と考えられる鳥状遺構の覆土(試料1)について分析を行った。その結果、イネが検出された。密度は3,000個/gと比較的高い値である。したがって、同遺構では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはオオムギ族とジュズダマ属が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

1) オオムギ族

オオムギ族（穎の表皮細胞）は、A地点のAs-B直下層（試料6）から検出された。ここで検出されたのは、ムギ類（コムギやオオムギ）と見られる形態のものである（杉山・石井, 1989）。密度は700個/gと低い値であるが、穎（初穀）は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、As-B直下層の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

2) ジュズダマ属型

ジュズダマ属型は、A地点のAs-B直下層（試料6）およびD地点のAs-B直上層（試料1）から検出された。ジュズダマ属型には食用や薬用となるハトムギが含まれるが、現時点では栽培種と野草のジュズダマとを完全に識別するには至っていない。また、密度も600~1,500個/gと比較的低い値であることから、ここでハトムギが栽培されていた可能性は考えられるものの、野草のジュズダマに由来するものである可能性も否定できない。

3) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したものも含まれており、ウシクサ族B（大型）の中にはサトウキビ属に近似したものが含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畝作物は分析の対象外となっている。

(3) 酸体分析から推定される植生と環境

1) A地点

As-Bの下層では、上記以外にもネザサ節型が比較的多く検出され、ススキ属型、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型なども検出された。As-B直下層では、ヨシ属が多量に検出され、スマガヤ属型なども出現している。As-Bの上層では、各分類群とも減少しており、ススキ属型やウシクサ族Aは見られなくなっている。As-A混層にかけては、ネザサ節型が次第に増加している。おもな分類群の推定生産量によると、As-B直下層とAs-B直上層ではヨシ属が卓越しており、As-A混層ではネザサ節型が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、As-B直下層からAs-B直上層にかけては、ヨシ属などが多く生育する湿地的な環境であったと考えられ、As-B直下層の時期にはそこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。なお、水田内でヨシ属が繁茂していたことは考えにくいことから、ヨシ属が施肥などの目的で水田内に持ち込まれたこ

とや、休閑期間中にヨシ属が繁茂していたことなども想定される。

As-A混層の堆積当時は、ネザサ節などが生育する草原的な環境であったと考えられ、ヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

2) C地点・D地点

上記以外の分類群では、ススキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型が比較的多く検出され、部分的にヨシ属なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねススキ属型が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、As-Bの下層から上層にかけては、ススキ属やチガヤ属などが生育する草原的な環境であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

(2) オオムギ族について

I地点のAs-A直下層(試料2)では、オオムギ族(穎の表皮細胞)が検出された。ここで検出されたのは、ムギ類(コムギやオオムギ)と見られる形態のものである(杉山・石井, 1989)。密度は800個/gと低い値であるが、穎(初穀)は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。このことから、同層ではムギ類が栽培されていた可能性が高いと考えられる。

(3) ヒエ属型について

I地点のAs-B直下層(試料10)とその下位層(試料13)、およびD-3区のAs-B直下層(試料1)では、ヒエ属型が検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点ではこれらを識別することは困難である(杉山ほか, 1988)。また、密度も800~1,500個/gと低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

(4) 堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。イネ以外の分類群では、下位層を中心にヨシ属が比較的多く検出され、上位層ではタケ亜科が比較的多く検出された。おもな分類群の推定生産量によると、Hr-FPの下位およびAs-Bの上下層ではヨシ属が卓越していることが分かる。

以上のことから、Hr-FPの下位層およびAs-Bの上下層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。なお、イネの増加後もヨシ属が多く検出されることから、施肥などの目的でヨシ属が水田内に持ち込まれたことや、休閑期間中にヨシ属が繁茂していたことなども想定される。

6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、A地点では浅間Bテフラ(As-B, 1108年)直下層とその下層からイネが多量に検出され、それぞれ稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、A地点の浅間柏川テフラ(As-

Kk, 1128年)直上層-浅間A軽石(As-A, 1783年)混層の各層、およびC地点とD地点のAs-B直下層とAs-B直上層でも、やや少量ながらイネが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。さらに、A地点のAs-B直下層では、ムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

As-Bより下位のサク状遺構(B地点、E地点、F地点)の覆土では、イネ科栽培植物に由来する植物珪酸体は検出されなかった。

D2・D3区の水田遺構が検出された浅間Bテフラ(As-B, 1108年)直下層からは、イネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、浅間A軽石(As-A, 1783年)混層とその下位層、As-Bの下層、標名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 6世紀中葉)混層、およびHr-FAより上位と考えられるC区2面高状遺構でもイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。さらに、標名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)直下層などでも、稲作が行われていた可能性が認められた。I地点のAs-A直下層では、オオムギ族(穎の表皮細胞)が検出され、ムギ類が栽培されていた可能性が認められた。

Hr-FPの下位層およびAs-Bの上下層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。

文献

- 杉山真二(1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体, 富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.
- 杉山真二・石井克己(1989) 群馬県子持村、F P直下から検出された灰化物の植物珪酸体(プラント・オパール)分析, 日本第四紀学会要旨集, 19, p.94-95.
- 杉山真二(2000) 植物珪酸体(プラント・オパール), 考古学と植物学, 同成社, p.189-213.
- 藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究[1]-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-, 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究[5]-プラント・オパール分析による水田址の探索-, 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表5 群馬県、石巻西田II遺跡におけるプラント・オパール分析結果
検出密度(単位: ×100個/g)

分類群	地点・試料					
	1	1	2	3	5	6
イネ	30	8	38	52	45	8
ヒエ属型			8			
エチノシホ属	8	23	15	7	22	38
Phragmites (reed)	30	30	23	30	22	23
ススキ属型			45	97	120	38
Miscanthus type	83	60				30
タケ亜科						
Bambusoideae (Bamboo)						
オオムギ属(葉の表皮細胞)						
Wheat husk Phytolith						

推定生産量(単位: kg/m²・cm)

イネ	0.89	0.22	1.11	1.54	1.32	0.22
ヒエ属型			0.63			
Echinochloa type	0.48	1.42	0.95	0.47	1.42	2.37
Phragmites (reed)	0.37	0.37	0.28	0.37	0.28	0.46
ススキ属型			0.29	0.22	0.47	0.18
Miscanthus type	0.40	0.29	0.22	0.47	0.57	0.18
タケ亜科						
Bambusoideae (Bamboo)						

※試料の検出量を1.0と仮定して算出。

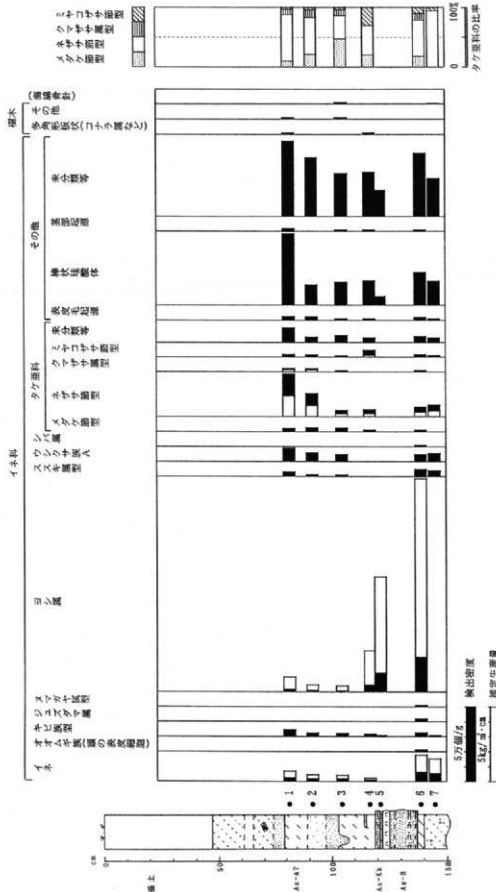
検出密度(単位: ×100個/g)

分類群	地点・試料													
	1	2	4	5	6	8	9	10	10	12	13	14	15	17
イネ	38	53	37	75	15	15		30	52	90	52	7	23	
ヒエ属型								15		8				
Echinochloa type	8	15		15	37	90		90	23	187	105	204		
Phragmites (reed)	15		37	68	15	8		8	22	15	15	22	30	
ススキ属型								30	52	15	15	52	30	
Miscanthus type	151	68	97	128	90									
タケ亜科														
Bambusoideae (Bamboo)														
オオムギ属(葉の表皮細胞)														
Wheat husk Phytolith														

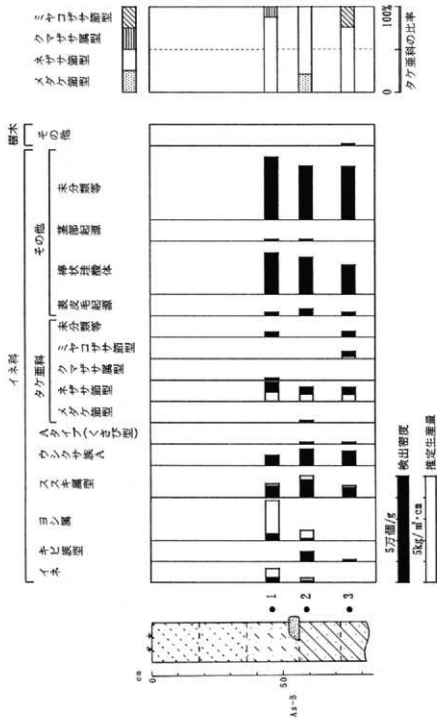
推定生産量(単位: kg/m²・cm)

イネ	1.11	1.56	1.10	2.22	0.44		0.89	1.54	2.65	1.54	0.22	0.67		
ヒエ属型							1.27		0.63					
Echinochloa type	0.48	0.96		0.95	2.36	5.69	5.71	1.42	11.82	6.61	12.89			
Phragmites (reed)	0.19		0.46	0.84	0.19	0.09	0.09	0.28	0.19	0.19	0.28	0.38		
ススキ属型								0.14	0.25	0.07	0.25	0.15		
Miscanthus type	0.73	0.33	0.47	0.62	0.43		0.14	0.25	0.07					
タケ亜科														
Bambusoideae (Bamboo)														

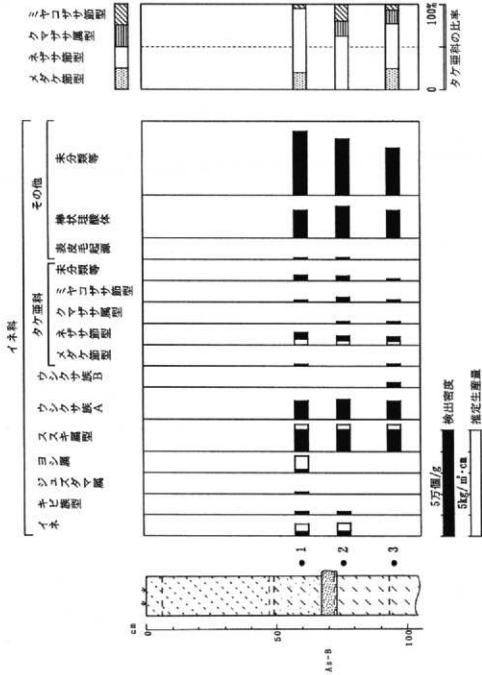
※試料の検出量を1.0と仮定して算出。



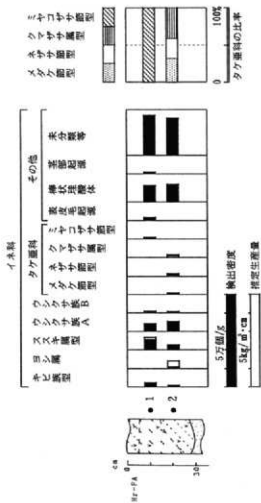
第116図 A地点における植物炭酸体分析結果



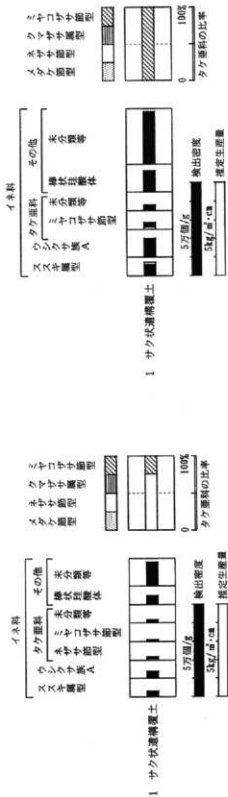
第117図 C地点における植物柱層体分析結果



第118図 D地点における植物珪酸体分析結果



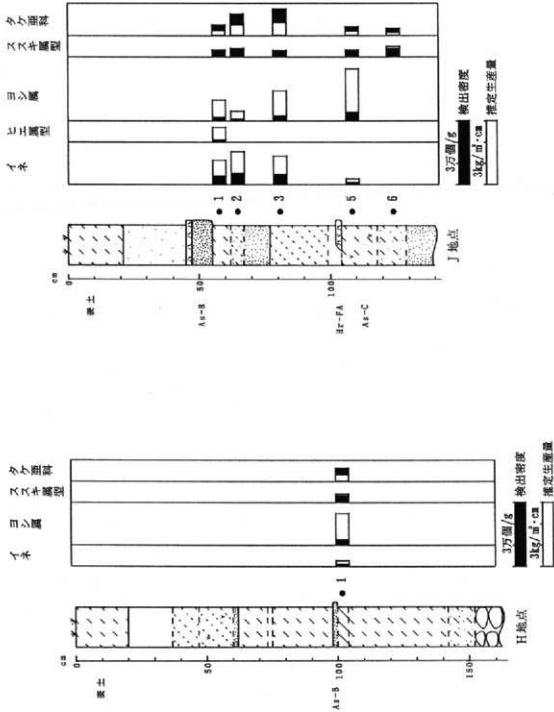
石岡西田遺跡、F地点における植物珪酸体分析結果



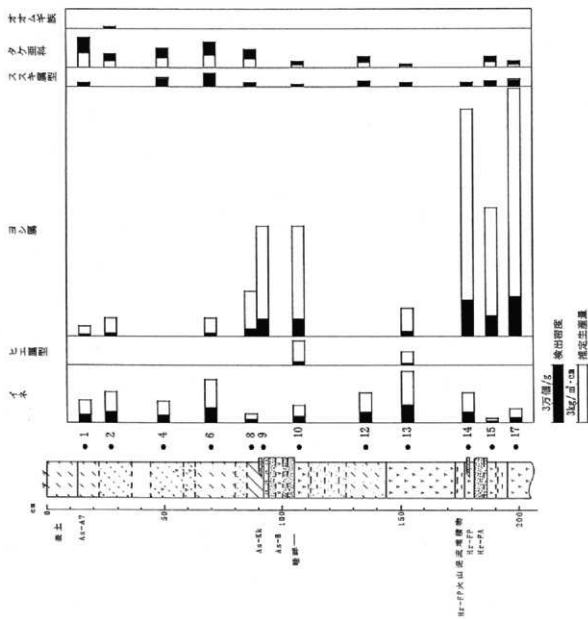
石岡西田遺跡、B地点における植物珪酸体分析結果

石岡西田遺跡、E地点における植物珪酸体分析結果

第119図 F・B・E地点における植物珪酸体分析結果

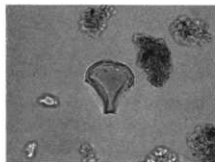


第120図 H・J地点における植物珪酸体分析結果

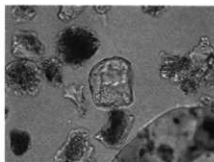


第121図 I地点における植物柱体分析結果

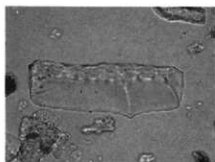
2. 石岡西田II遺跡の植物珪酸体分析



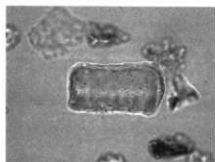
1. イネ D地点2



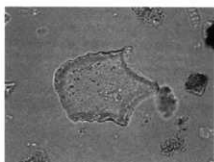
2. イネ(側面) D地点1



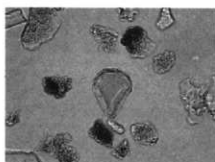
3. キビ族型 A地点6



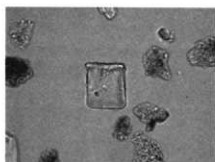
4. キビ族型 A地点3



5. ヨシ属 A地点5



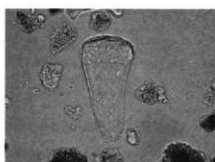
6. ススキ属型 C地点1



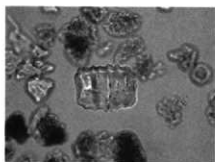
7. ウシクサ族A C地点3



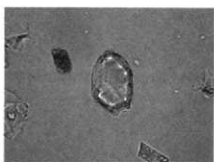
8. シバ属 A地点6



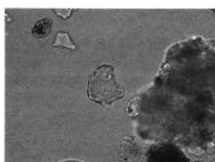
7. イネ科Aタイプ C地点2



10. ネザサ節型 A地点1



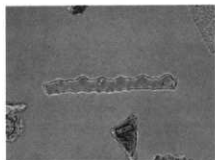
11. クマザサ属型 C地点1



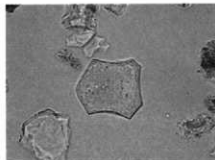
12. ミヤコザサ節型 C地点3

植物珪酸体の顕微鏡写真 ————— 50 μm

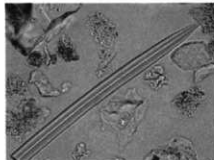
植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真(1)



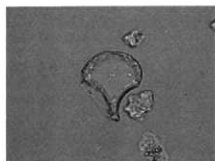
13. 棒状珪酸体 A地点3



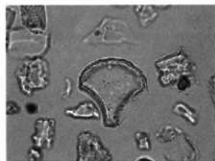
14. 多角形板状(コナラ属など) A地点1



15. 海綿骨針 A地点7



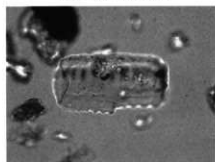
16. イネ I地点12



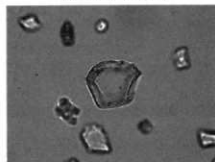
17. イネ J地点3



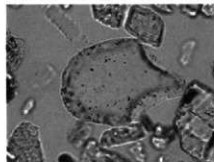
18. オオムギ族(穎の表皮細胞) I地点2



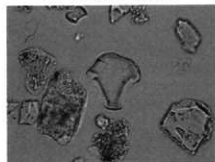
19. ヒエ属型 J地点1



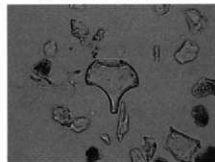
20. ジュズダマ属 I地点14



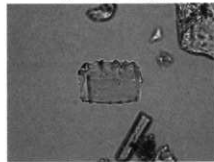
21. ヨシ属 I地点13



22. ススキ属型 I地点6



23. シバ属 I地点4



24. ネザサ節型 H地点1

植物珪酸体の顕微鏡写真

————— 50 μm

植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真(2)

3. 石関西田II遺跡の旧河道礫について

飯島 静男（群馬地質研究会）

〔A地点〕

100個は拳大以下の円礫で、すべて粗粒輝石安山岩である。採取地点の東側約100mに寺沢川が流れており、同川が赤城山麓より流れ出していることから、A地点（付図2参照）の礫は同川よりもたらされたものと考えられる。

〔B地点〕

粗粒輝石安山岩が約3分の1、次いで変質安山岩、溶結凝灰岩、石英閃緑岩、ひん岩等が多い。また、計15種類におよび石種がみられた。これらの特徴は、現在の前橋付近における利根川の河床礫の礫種および組成に等しい。B地点（付図2参照）の礫は利根川の旧河道の河床礫と考えられる。

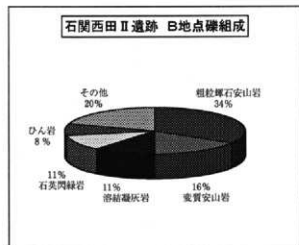
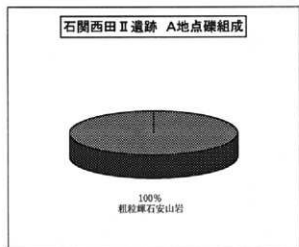
＊礫の採取は、B1区のA・Bの2地点で行い、それぞれ無作為に100点を抽出して鑑定した。

表6 石関西田II遺跡におけるA地点・B地点の礫組成

地点	石質	個数	率
A地点	粗粒輝石安山岩	100	100%
B地点	粗粒輝石安山岩	34	34%
B地点	変質安山岩	16	16%
B地点	溶結凝灰岩	11	11%
B地点	石英閃緑岩	11	11%
B地点	ひん岩	8	8%
B地点	変玄武岩	3	3%
B地点	流紋岩	3	3%
B地点	変質玄武岩	3	3%
B地点	珪質頁岩	2	2%
B地点	花崗岩	2	2%
B地点	砂岩	2	2%
B地点	珪質変質岩	2	2%
B地点	輝緑岩	1	1%
B地点	変はんれい岩	1	1%
B地点	粗粒輝石安山岩	1	1%
	計	100	100%
B地点	粗粒輝石安山岩	34	34%
B地点	変質安山岩	16	16%
B地点	溶結凝灰岩	11	11%
B地点	石英閃緑岩	11	11%
B地点	ひん岩	8	8%
B地点	その他	20	20%
	計	100	100%

石関西田II遺跡 旧河道礫調査(01.1.12 飯島静男氏鑑定)

第122図 A地点・B地点における礫組成



第5章 まとめ

第2章で記したように、本遺跡の東側にあたる赤城山麓の末端部の台地上においては、発掘調査も数多く行われ、時代を異にする多くの遺跡が存在する。一方、広瀬川低地帯内での調査例は極めて少なく、最近になってようやく調査の機会が増えてきたのが実情である。本遺跡は、そのような数少ない調査の一つであり、約20,000㎡の調査対象地内を全掘ではないにしろ広範囲に調査することができたことにより、各遺構はもちろんのこと、以下の4つの観点についての資料を得ることができた。

1. 水田について

本遺跡で検出された水田は、B1区1面のAs-B混土下水田とA1・D2・D3区1面より検出されたAs-B下水田であり、As-B下水田は平安時代の住居が立地する微高地と微高地との間にある低地部に営まれている。また、擬似畦畔として確認したB1区における2号As-B混土下水田の年代は明らかではないが、擬似畦畔の水田耕土であるAs-B混土より出土した遺物などからみて、As-B降下以降～中世頃と推定される。

以上のことから、本遺跡内ではA1区東側の低地部とD2区西半部、D3区東半部の低地を除いてAs-B直下の水田は存在せず、微高地部の全体的な水田開発はおそらく中世以降と考えられる。この水田開発に伴ってAs-Bが上位から攪拌され、As-B

混土へと変化したものと考えられる。

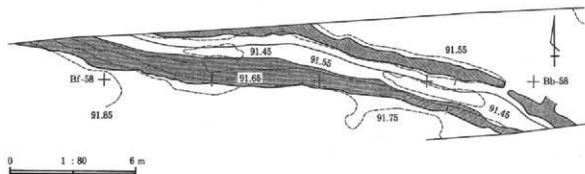
A1区で検出された1号As-B下水田は、微高地部から低地部にかけてAs-Bの一次堆積層が良好な状態で認められ、その中ほどにAs-Bによって被覆された用水路とみられる24号溝を検出した。この溝より東側では寺沢川の旧河道の浸食によって畦畔は確認できなかったものの、水田面の存在が想定できる。この溝を用水路として、それよりも東側を水田域と想定した理由は以下のとおりである。

①As-B直下の溝は北西から南東方向にかけて走行し、地形はこの溝を境にして全体に北東方向へと緩やかに傾斜している。したがって、この溝は微高地と低地の境部分を走行していることになり、微高地縁辺際を通る用水路としての一般的な位置を示している。

②この溝は土手状の高まりを両側に築くことによって形成されているが(第123図網点部分)、1カ所でのこの高まりが低地側だけ途切れる部分が存在し、これは用水路から水田面への取水口としての機能をもつ可能性が高い。

③溝より東側のAs-B直下の黒色粘質土より、イネのプラント・オブールが高い数値で検出されている(第4章 自然科学分析参照)。

なお、As-B下水田が営まれた低地部は、A1区24号溝以東とD2区1号畦以西からD3区Ct-3グリッド以東に挟まれた低地部であり、D3区Ct-3グリッド内北壁の土層断面の観察では、微高地部



第123図 A1区 24号溝平面図

から低地部に移行する地山地形の緩傾斜している様子が看取できる。また、As-Bの直上に暗褐色粘質土が堆積しており、プラント・オパール分析の結果、稲作を証明し得る数値が報告されている(第4章自然科学分析参照)。

2. 集落の継続性について

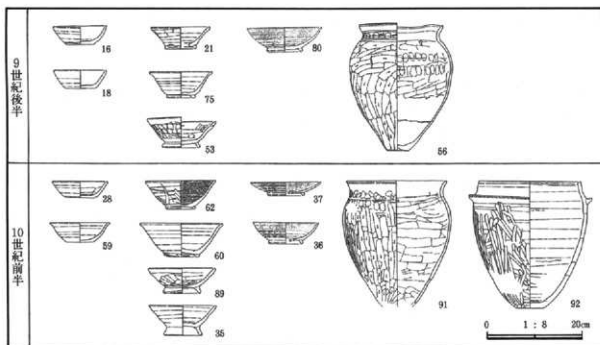
本遺跡で検出した集落に関わる遺構は、古い順から6世紀代と考えられる踏み分け道、6世紀代と9・10世紀代と考えられる畝間跡、9・10世紀代の竪穴住居跡である。これらのうち、踏み分け道については6世紀代の可能性が高いが、畝間跡の年代については前述したように被覆した土壌のテフラ分析に依拠するしかなく、しかも、仮に被覆した土壌内に二次堆積としてHr-FAなどのテフラの存在が明らかとなり、Hr-FA降下以降であることが確定したとしても、それが6世紀代なのか9・10世紀代なのかという判断は、上位からの攪拌を受けている限り難しい。

これに対して、検出数16軒を数えた竪穴住居跡は、伴出遺物が皆無であったA3区の12号竪穴住居を除

くすべてが、9世紀後半から10世紀前半にかけてのものであった。これらのうち、煮沸形態の土器についてみると、9世紀後半の竪穴住居には終末期の「コ」の字状口縁甕を伴い、10世紀前半の竪穴住居には古い形式の羽釜を伴っている。

一方、これらに伴出する灰軸陶器は、9世紀後半の「コ」の字状口縁甕に美濃における灰軸陶器編年の光が丘1号窯式に比定される灰軸陶器が伴い、10世紀前半の古い形式の羽釜には大原2号窯式に比定される灰軸陶器が伴っている。このことは、県下の一般的な土師器・須恵器と灰軸陶器との共伴関係と一致した現象を示している(坂口・三浦 1986「奈良・平安時代の土器編年」『群馬県史研究24』参照)。

また、10世紀前半の竪穴住居の一部には、最終末期の「コ」の字状口縁甕と古い形式の羽釜の共伴例があり、「コ」の字状口縁甕から羽釜への変遷過程を如実に示すとともに、集落が9世紀後半から10世紀前半にかけて時間的に断絶することなく継続していることを示していることになる(第124図参照)。

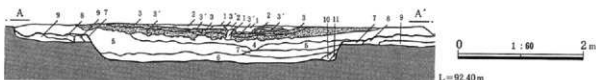


第124図 石関西田Ⅱ遺跡の土器編年図

3. 竪穴住居の埋没に要する時間について

本遺跡では1面のAs-Bが、A1区の東側とB2区の南側などを除くほとんどで上位からの攪拌を受けてAs-B混土となっている。しかし、B2区2面で検出した竪穴住居のうち、10世紀前半の4号竪穴住居と22・23号溝の覆土内には、As-Bの一次堆積が認められた。これらの竪穴住居と溝は、As-B降下時点ではまだ埋没を完了せずに凹みとして残っていたことを示し、この凹みにAs-Bが一次堆積したために、住居外に水平堆積したAs-Bがその後の水田耕作などによって上位から攪拌されたのに対して、As-Bが凹んだ分だけ攪拌から免れて保存され

たものである。また、9世紀後半の竪穴住居にはAs-Bの一次堆積がほとんど認められないことから、これらはAs-B降下時点では既に埋没を完了し平坦化していたものと推定することができる。つまり、9世紀後半の竪穴住居はAs-B降下時点では平坦化しており、一方、10世紀前半の竪穴住居は凹みとして残っていたことから、この遺跡における竪穴住居の自然埋没に要した時間は、住居の年代である9世紀後半からAs-Bが降下した12世紀初頭(1108年)までの約200年間と想定することができる。これらは、竪穴住居の埋没に要した時間を想定し得る貴重な資料と言える。

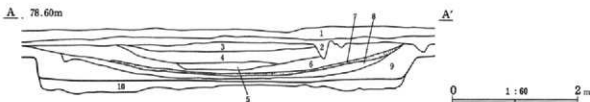


B2区(2面) 4号竪穴住居・土層断面

- 1 茶褐色土 As-Bの粗粒スコリア・青灰色火山灰・小豆色火山灰と暗褐色土との混土。しまりあり。
2 As-Kk 浅間-船川テフラの一次堆積層。
3 As-B 浅間B軽石の小豆色火山灰
3' As-B 浅間B軽石の粗粒スコリア
4 暗褐色土 As-Bの粗粒スコリア・青灰色火山灰、Hr-FAに伴うバミス、As-Cの混土。しまりあり。
5 暗褐色土 4層に近似するが、茶褐色土ブロックを所々に含む。ややしまりに欠ける。
6 茶褐色土 5層に比べ混入バミスの比率が極端に低く、黄褐色シルトのブロック(龜山)を少量含む。しまりに欠ける。

- 7 暗褐色土 5層に比べAs-Cが少なくなる。ややしまりあり。
8 黒褐色土 Hr-FAに伴うバミスとAs-Cとの混土。しまりあり。
9 茶褐色土 As-C混土。しまりあり。8層に比べ色調がやや茶色味を帯びる。
10 暗褐色土 粒子均一で細かい。As-Cを少量含む。
11 暗褐色土 10層に色調が近似するが、As-Cを全く含まない。

第125図 B2区 4号竪穴住居・土層断面図



波志江中野面遺跡 A区41号住居・土層断面

- 1 褐色土 耕作土。
2 褐色土 2層よりやや黒色が強い。
3 黒色土 細かい灰白色粒が混入。
4 黒褐色土 褐色の砂粒、灰白色軽石粒を含む。
5 黒褐色土 4層と同じ成分である。赤色の鉄分と思われる粒子を多く含む。

- 6 黒褐色土 白色粒とHr-FAの塊が混入。
7 黄褐色土 Hr-FA層
8 黒色土 灰白色軽石粒が多く含まれる。
9 黒褐色土 黄褐色の大きい粒、白色粒を含む。
10 灰黒褐色土 黒褐色土中に多くの灰黄褐色土を含む層。灰黄褐色土をブロック(1cm内外)状に多く含む。

第126図 波志江中野面遺跡 A区41号住居・土層断面図

因みに、北関東自動車道に伴う発掘調査である液志江中野面遺跡において、4世紀代の竪穴住居の中心にHr-FAがレンズ状に一次堆積した41号住居がある。この住居は中心まで埋没するのに、4世紀から6世紀初頭までの約1.5世紀間の埋没時間を要したものと考えられる。平坦化するまでにはもう少し時間がかかると考えられることから、全体ではその埋没に約2世紀程を要したことが想定できる。本遺跡検出の住居と年代も立地場所も異なるが、本遺跡の埋没時間と近似する例である。

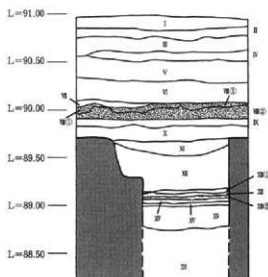
4. 旧利根川の流路について

D2区西側に広がる低地部下層における土層断面の観察の結果、現地表面よりも1.7m下で、還元された層厚4cmのHr-FAと、その上位に4cmの間層を挟んで層厚4cmのHr-FPに伴う泥流を確認した(巻頭カラー・第5・127図参照)。特に注目されるのは、Hr-FPに伴う泥流である。Hr-FPに伴う泥流は榛名山麓の小河川から利根川に流下していることから、広瀬川低地帯を流れる現桃ノ木川の一部

を、Hr-FPの降下年代である6世紀中葉に泥流が南流することを可能にした河川が存在した可能性を示唆している。そして、その後の確認調査では、Fr-FPに伴う泥流とHr-FAはD3区の東端部と本トレンチの東隣の第1トレンチでは確認されず、本トレンチの僅か10mの範囲にしか残存しないことが明らかとなった。さらに、地形的にこの位置は1・2面ともに低地部にあたり、微高地と微高地に挟まれた低地形となっている。これらのことからみて、古墳時代において旧利根川の流路の一部は、6世紀中葉にこの地のこの位置を流れていた可能性があり、広瀬川低地帯内における旧利根川の流路を解明するための極めて貴重な資料と考えられる。(根岸)

<参考文献>

- 『群馬県史研究24』「奈良・平安時代の土器編年」坂口・三浦 1986
『液志江中野面遺跡(1) -古墳時代以降編-』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001



- <基本土層> 注記の詳細はP6参照。
I 暗褐色土 II 茶褐色土 III 暗褐色土 IV 茶褐色土
V 暗褐色土 VI 暗褐色土 VII 黒色粘質土
VIII Aa-B火山灰 IX Aa-B粗粒スコリア
X 黒色粘質土 XI 暗灰色シルト XII 暗灰色土
XIII 黒色粘質土 XIV Hr-FPに伴う泥流
XV Hr-FA XVI 黒色泥炭層 XVII 灰色シルト
XVIII 黄色砂質土

第127図 D2区低地部確認地点・土層断面図

遺物觀察表

<土器> ◇=1面の遺構 ◆=2面の遺構

遺物番号 種別番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	器形・成形・整形の特徴、その他
1 第21回 写図31	磁器 鉢	B 2区 ◇4号溝	口縁部～体部 1/4残存	器高 (5.1) 口径 (16.3) 底径 -	① 緻密 ② 良好 ③ 明青灰色	外面：印版染付け。 内面：印版染付け。
2 第27回 写図31	灰釉陶器 皿	B 2区 ◇12号溝	体部～高台部 1/3残存	器高 (2.4) 口径 - 底径 (7.0)	① 緻密 ② 還元 ③ 灰白色	外面：轆轤成形、付高台回転彫り調整、施釉。 内面：轆轤成形、施釉。
3 第27回 写図31	土師器 羹	B 2区 ◇12号溝	口縁部～肩部 1/6残存	器高 (7.2) 口径 (18.8) 底径 -	① 細粒、細砂 ② 酸化 ③ 橙色	外面：口縁部横撫で、胴部傾位置撫で、口縁部と肩部に指遺痕。器面磨耗、「コ」の字状口縁変。 内面：口縁部横撫で、胴部傾位置撫で。
4 第28回 写図31	灰釉陶器 皿	B 2区 ◇13号溝	1/3残存	器高 3.1 口径 (17.0) 底径 (6.8)	① 緻密 ② 還元 ③ 灰白色	外面：轆轤成形後回転彫り調整、付高台回転彫り調整、施釉。 内面：轆轤成形、施釉。
5 第33回 写図31	陶器 鉢鉢	B 2区 ◇21号溝	底部破片	器高 (2.1) 口径 - 底径 (12.0)	① 緻密 ② 良好 ③ 灰白色	外面：底部右回転糸切り、使用により摩滅。肩戸・美濃系か。
6 第33回 写図31	須恵器 羽釜	B 2区 ◇21号溝	口縁部破片	器高 (6.0) 口径 (20.2) 底径 -	① 細粒、小礫 ② 還元 ③ 灰白色	外面：口縁部は内傾し、肩部に平坦面をもち肥厚する。轆轤成形、器面磨耗、鈎断面は三角形で僅かに上反する。 内面：口縁部横撫で、轆轤成形、器面磨耗。
7 第36回 写図31	陶器 碗	A 3区 ◇1号弁戸	体部下半～底部	器高 (2.7) 口径 - 底径 5.0	① 緻密 ② 良好 ③ 淡黄色	外面：轆轤成形後回転彫り調整、底部右回転糸切り後付高台、施釉。 内面：施釉。
8 第36回 写図31	軟質陶器 鉢鉢	A 3区 ◇1号弁戸	口縁部～体部 破片	器高 (5.8) 口径 (31.0) 底径 -	① 細粒 ② 普通 ③ 灰色	外面：轆轤調整。 内面：襷目なし。
9 第36回 写図31	軟質陶器 内耳罎	A 3区 ◇1号弁戸	口縁部～体部 破片	器高 (10.6) 口径 (31.4) 底径 -	① 細粒 ② 普通 ③ 灰色	外面：体部縦撫で。 内面：横撫で。
10 第37回 写図31	青磁 碗	D 4区 ◇3号弁戸	体部破片	器高 - 口径 - 底径 -	① 緻密 ② 良好 ③ 灰色	外面：還元。産地は龍泉原系？
11 第39回 写図31	須恵器 埴	A 2区 ◆14号壺穴住居	体部～底部	器高 (4.3) 口径 - 底径 4.5	① 細粒、細砂 ② 還元 ③ 灰白色	外面：轆轤成形、底部右回転糸切り、付高台欠損、器面磨耗。 内面：轆轤成形後横撫で。
12 第40回 写図31	須恵器 埴	B 1区 ◆1号壺穴住居	ほぼ定形	器高 5.6 口径 14.8 底径 6.8	① 細粒、砂粒、小礫 ② 還元 ③ 灰白色	外面：体部轆轤成形、底部右回転糸切り。 内面：体部轆轤成形。
13 第42回 写図32	須恵器 羽釜	B 1区 ◆1号壺穴住居	口縁～胴部 1/3残存	器高 (23.8) 口径 21.0 底径 -	① 細粒 ② 酸化 ③ 灰白色	外面：口縁部は内傾し、横撫で、胴部縦位置撫で。肩部に平坦面をもち、僅かに上反する。 内面：胴部傾位置撫で。
14 第42回 写図32	須恵器 羽釜	B 1区 ◆1号壺穴住居	口縁～胴部 上半	器高 (16.0) 口径 (21.0) 底径 -	① 粗砂粒 ② 酸化 ③ にぶい黄褐色	外面：口縁部は僅かに内傾し、横撫で、轆轤成形後胴部縦位置撫で。鈎断面は三角形で下面に沈線。 内面：胴部傾位置撫で。
15 第42回 写図32	須恵器 羽釜	B 1区 ◆1号壺穴住居	口縁部破片	器高 (4.9) 口径 (21.0) 底径 -	① 細粒 ② 酸化 ③ 橙色	外面：口縁部は僅かに内傾し、横撫で。鈎断面に平坦面をもち、僅かに下反する。 内面：口縁部横撫で。

遺物調査表

16 第44回 写真32	須恵器 坏	B 2区 ◆2号壺穴住居	2/3残存	器高 3.9 口径 11.2 底径 6.0	① 粗砂粒 ② 酸化 ③ にぶい黄褐色	外面：体部轆轤成形、底部右回転糸切り り歪みあり。 内面：体部轆轤成形。
17 第44回 写真32	須恵器 坏	B 2区 ◆2号壺穴住居	口縁～体部 1/4残存	器高 3.3 口径 (12.0) 底径 (5.8)	① 細粒 ② 酸化 ③ にぶい橙色	外面：体部轆轤成形。 内面：体部轆轤成形。
18 第44回 写真32	須恵器 坏	B 2区 ◆2号壺穴住居	1/6残存	器高 3.8 口径 (10.7) 底径 (6.2)	① 細粒、黒雲母 ② 酸化 ③ 橙色	外面：体部轆轤成形、底部右回転糸切り。 内面：体部轆轤成形。
19 第44回 写真32	須恵器 坏	B 2区 ◆2号壺穴住居	口縁～体部 1/4残存	器高 (3.1) 口径 (13.4) 底径 -	① 細粒 ② 酸化 ③ にぶい褐色	外面：体部轆轤成形。 内面：体部轆轤成形。
20 第44回 写真32	須恵器 埴	B 2区 ◆2号壺穴住居	ほぼ完形	器高 (5.2) 口径 15.8 底径 -	① 粗砂粒、黒雲母 器面磨耗。 ② 酸化 ③ 明赤褐色	外面：体部轆轤成形、付高台欠損。 内面：体部轆轤成形。
21 第45回 写真32	須恵器 埴	B 2区 ◆2号壺穴住居	1/3残存	器高 4.6 口径 (12.4) 底径 6.0	① 細粒 ② 酸化 器面磨耗。 ③ 橙色	外面：口縁部強で、体部轆轤成形。 内面：轆轤成形。
22 第45回 写真32	須恵器 埴	B 2区 ◆2号壺穴住居	体部下位 ～底部 1/3残存	器高 (2.7) 口径 - 底径 (6.9)	① 細粒 ② 還元 ③ 灰黄色	外面：体部轆轤成形、付高台接合痕あり。 内面：轆轤成形。
23 第45回 写真32	灰釉陶器 碗	B 2区 ◆2号壺穴住居	口縁～体部 1/5残存	器高 (2.6) 口径 (16.0) 底径 -	① 緻密 ② 還元 ③ 灰白色	外面：体部轆轤成形、施釉。 内面：体部轆轤成形、施釉。
24 第45回 写真32	灰釉陶器 皿	B 2区 ◆2号壺穴住居	口縁～体部 1/4残存	器高 (2.2) 口径 (13.4) 底径 -	① 緻密 ② 還元 ③ 灰白色	外面：体部轆轤成形、回転施削り調整、 縁在2カ所残存、施釉。 内面：轆轤成形、施釉。
25 第45回 写真32	灰釉陶器 皿	B 2区 ◆2号壺穴住居	口縁～体部 破片	器高 (1.1) 口径 (16.6) 底径 -	① 緻密 ② 還元 ③ 灰白色	外面：体部轆轤成形、施釉。 内面：体部轆轤成形、施釉。
26 第45回 写真32	土師器 小型壺	B 2区 ◆2号壺穴住居	2/5残存	器高 11.9 口径 (14.0) 底径 6.0	① 細粒 ② 酸化 ③ 灰褐色	外面：口縁部横撫で、胴部斜毛目後斜 縦位施削り。 内面：口縁部横撫で、胴部斜位施削り。
27 第45回 写真33	土師器 壺	B 2区 ◆2号壺穴住居	口縁～胴部 1/4残存	器高 (21.1) 口径 (17.4) 底径 -	① 細粒 ② 酸化 ③ にぶい赤褐色	外面：口縁部横撫で、胴部斜位施削り、 「コ」の字状口縁変。 内面：口縁部横位斜毛目後横撫で、胴 部斜位施削り。
28 第47回 写真33	須恵器 坏	B 2区 ◆3号壺穴住居	2/3残存	器高 3.3 口径 11.6 底径 7.0	① 細粒 ② 酸化 ③ 浅黄褐色	外面：轆轤成形、底部右回転糸切り。 器面磨耗。 内面：口縁部強で、体部轆轤成形後施 削り。
29 第47回 写真33	須恵器 坏	B 2区 ◆3号壺穴住居	口縁～体部 1/3残存	器高 (3.3) 口径 (13.0) 底径 -	① 細粒 ② 還元 ③ 灰白色	外面：口縁部横撫で、体部轆轤成形後 施削り。 内面：口縁部横撫で、体部轆轤成形。
30 第47回 写真33	須恵器 埴	B 2区 ◆3号壺穴住居	完形	器高 5.6 口径 12.4 底径 7.4	① 粗砂粒、細礫 ② 還元 ③ 灰黄色	外面：轆轤成形、器面磨耗。 内面：轆轤成形、器面磨耗。
31 第47回 写真33	須恵器 埴	B 2区 ◆3号壺穴住居	完形	器高 5.2 口径 12.0 底径 7.3	① 細粒 ② 酸化 ③ 橙色	外面：轆轤成形、底部右回転糸切り。 付高台接合痕あり、器面磨耗。 内面：轆轤成形、器面磨耗。
32 第47回 写真33	須恵器 埴	B 2区 ◆3号壺穴住居	完形	器高 5.4 口径 12.2 底径 7.5	① 粗粒、黒雲母 器面磨耗。 ② 還元 ③ にぶい黄褐色	外面：轆轤成形、付高台接合痕あり。 器面磨耗。 内面：轆轤成形、器面磨耗。
33 第47回 写真33	須恵器 埴	B 2区 ◆3号壺穴住居	高台部欠損	器高 (4.9) 口径 13.6 底径 -	① 細粒 ② 還元 ③ 浅黄色	外面：轆轤成形、底部右回転糸切り。 付高台欠損、器面磨耗。 内面：轆轤成形、器面磨耗。
34 第47回 写真33	須恵器 埴	B 2区 ◆3号壺穴住居	1/4残存	器高 5.8 口径 (13.0) 底径 7.6	① 細粒 ② 酸化 ③ 灰黄褐色	外面：轆轤成形、底部右回転糸切り。 内面：轆轤成形。

遺物観察表

35 第48回 写図33	須忠器 埴	B 2区 ◆3号壺穴住居	2/3残存	器高 6.2 口径 (13.7) 底径 7.8	① 細粒 ② 還元 ③ にぶい黄色	外面: 轆轤成形、底部右回転糸切り。 内面: 轆轤成形。
36 第48回 写図33	灰釉陶器 埴	B 2区 ◆3号壺穴住居	1/3残存	器高 4.3 口径 (13.7) 底径 (6.6)	① 緻密 ② 還元 ③ 灰白色	外面: 轆轤成形、回転範囲り調整、付高台回転範囲り調整、施釉。 内面: 轆轤成形、施釉。
37 第48回 写図33	灰釉陶器 皿	B 2区 ◆3号壺穴住居	1/4残存	器高 2.8 口径 (14.6) 底径 (7.2)	① 緻密 ② 還元 ③ 灰白色	外面: 轆轤成形、底部右回転糸切り、付高台回転範囲り調整後撫で調整、施釉。 内面: 轆轤成形、施釉。
38 第48回 写図33	灰釉陶器 皿	B 2区 ◆3号壺穴住居	底部~高台部 破片	器高 (1.6) 口径 - 底径 (6.6)	① 緻密 ② 還元 ③ 灰黄色	外面: 轆轤成形、付高台回転範囲り調整後撫で調整、施釉。 内面: 轆轤成形、施釉。
39 第48回 写図33	土師器 甕	B 2区 ◆3号壺穴住居	胴部~底部 1/4残存	器高 (19.6) 口径 - 底径 (7.0)	① 細粒 ② 酸化 ③ 暗褐色	外面: 胴部傾位範囲り。 内面: 胴部傾位範囲り、指頭痕あり。
40 第48回 写図33	土師器 甕	B 2区 ◆3号壺穴住居	口縁部 1/6残存	器高 (5.0) 口径 (20.0) 底径 -	① 細粒 ② 酸化 ③ 棕色	外面: 口縁部横撫で、胴部傾位範囲り後施撫で。 内面: 口縁部横撫で、胴部傾位範囲り指頭痕あり。
41 第49回 写図34	土師器 甕	B 2区 ◆4号壺穴住居	口縁部破片	器高 (6.8) 口径 (21.2) 底径 -	① 細粒 ② 酸化 ③ にぶい黄褐色	外面: 口縁部横撫で、胴部傾位範囲り。 内面: 口縁部横撫で、胴部傾位範囲り。
42 第49回 写図34	須忠器 羽蓋	B 2区 ◆4号壺穴住居	口縁部破片	器高 - 口径 - 底径 -	① 粗砂粒 ② 還元 ③ にぶい黄褐色	外面: 口縁部横撫で、跨接合痕あり。跨断面は扁平な三角形。 内面: 口縁部横撫で。
43 第51回 写図34	須忠器 埴	B 2区 ◆6号壺穴住居	4/5残存	器高 4.9 口径 14.0 底径 6.6	① 粗粒 ② 還元 ③ にぶい黄色	外面: 轆轤成形、底部右回転糸切り、付高台接合痕あり。器面磨耗。 内面: 口縁部横撫で、体部轆轤成形、器面磨耗。
44 第51回 写図34	須忠器 埴	B 2区 ◆6号壺穴住居	2/3残存	器高 5.3 口径 14.6 底径 6.5	① 粗粒、細粒 ② 還元 ③ 灰白色	外面: 轆轤成形、付高台接合痕あり。器面磨耗。 内面: 轆轤成形後施撫で磨き、器面磨耗。
45 第51回 写図34	須忠器 埴	B 2区 ◆6号壺穴住居	2/3残存	器高 3.5 口径 (13.0) 底径 5.2	① 細粒 ② 酸化 ③ 明赤褐色	外面: 口縁部横撫で、体部轆轤成形後撫で調整、底部右回転糸切り、付高台接合痕あり。 内面: 轆轤成形後撫で調整。
46 第51回 写図34	黑色土師 埴	B 2区 ◆6号壺穴住居	体部~高台部 1/5残存	器高 (3.0) 口径 - 底径 (6.0)	① 細粒 ② 酸化 ③ にぶい黄褐色	外面: 体部轆轤成形、底部右回転糸切り。 内面: 轆轤成形後斜傾位範囲り、内裏。
47 第51回 写図34	須忠器 埴	B 2区 ◆6号壺穴住居	口縁部~体部 1/4残存	器高 (4.4) 口径 (13.2) 底径 -	① 細粒、細粒 ② 還元 ③ 灰色	外面: 轆轤成形。 内面: 轆轤成形。
48 第51回 写図34	灰釉陶器 皿	B 2区 ◆6号壺穴住居	体部~高台部 破片	器高 (1.5) 口径 - 底径 6.4	① 緻密 ② 還元 ③ 灰白色	外面: 轆轤成形、付高台撫で調整、施釉。 内面: 轆轤成形、施釉。
49 第51回 写図34	土師器 甕	B 2区 ◆6号壺穴住居	口縁部~胴部 1/3残存	器高 (9.3) 口径 (19.2) 底径 -	① 細粒 ② 酸化 ③ 赤褐色	外面: 口縁部横撫で、胴部傾位範囲り。指頭痕あり。 内面: 口縁部横撫で、胴部傾位範囲り。
50 第51回 写図34	土師器 甕	B 2区 ◆6号壺穴住居	口縁部~胴部 上半 1/2残存	器高 (18.0) 口径 (21.8) 底径 -	① 細粒 ② 酸化 ③ 明褐色	外面: 口縁部横撫で、胴部傾位範囲り。口縁部指頭痕あり。 内面: 口縁部横撫で、胴部傾位範囲り。
51 第52回 写図34	須忠器 甕	B 2区 ◆6号壺穴住居	胴部下半~底部 1/4残存	器高 (24.0) 口径 - 底径 (18.8)	① 粗粒 ② 酸化 ③ にぶい黄褐色	外面: 胴部横撫で後斜傾位範囲り、器面磨耗。 内面: 胴部傾位範囲り、器面磨耗。

遺物観察表

52 第52回 写真34	須忠器 羽釜	B 2区 ◆6号壺穴住居	口縁部～胴部 上位 破片	器高 (9.4) 口径 (20.8) 底径 -	① 細粒 ② 酸化 ③ におい黄褐色	外面：口縁部は内傾し、肩部に平坦面をもつ。口縁部横撫で、轆轤成形後胴部斜縦位発掘り。肩上面は僅かに凹み、上反する。 内面：口縁部横撫で、轆轤成形後胴部横撫で。
53 第54回 写真35	土師器 埴	B 2区 ◆6号壺穴住居	完形	器高 6.3 口径 14.2 底径 7.6	① 細粒 ② 酸化 ③ 明褐色	外面：口縁部横撫で、体部斜位発掘り、底部横撫で、体部指頭痕。 内面：口縁部～底部横撫で。
54 第54回 写真35	須忠器 埴	B 2区 ◆6号壺穴住居	上部欠損	器高 (5.0) 口径 14.0 底径 -	① 細粒、小礫 ② 還元 ③ におい褐色	外面：轆轤成形、付高台欠損、器面磨鈍。 内面：轆轤成形、器面磨鈍。
55 第54回 写真35	黒色土師 埴	B 2区 ◆6号壺穴住居	口縁部～体部 1/4残存	器高 (3.9) 口径 (14.8) 底径 -	① 粗粒 ② 還元 ③ におい黄褐色	外面：口縁部横撫で、轆轤成形後胴部斜縦位発掘り後発掘り。体部指頭痕あり。 内面：轆轤成形後斜縦位発掘り、内面。
56 第54回 写真35	土師器 甕	B 2区 ◆6号壺穴住居	4/6残存	器高 26.4 口径 (17.3) 底径 4.5	① 細粒 ② 酸化 ③ 明赤褐色	外面：口縁部横撫で、3本の沈線、胴部斜位発掘り、口縁部指頭痕、「コ」の字状口縁裏。 内面：口縁部横撫で、胴部斜位発掘り、胴部指頭痕あり。
57 第54回 写真35	土師器 甕	B 2区 ◆6号壺穴住居	口縁部～肩部 1/4残存	器高 (8.0) 口径 (19.0) 底径 -	① 粗粒 ② 酸化 ③ 浅黄色	外面：口縁部横撫で、2本の沈線、胴部斜位発掘り、口縁部指頭痕、「コ」の字状口縁裏。 内面：口縁部横撫で、胴部斜位発掘り、No58と同一個体か？
58 第54回 写真35	土師器 甕	B 2区 ◆6号壺穴住居	胴部下～底部	器高 (12.0) 口径 - 底径 5.2	① 細粒 ② 酸化 ③ 灰黄褐色	外面：胴部斜縦位発掘り。 内面：胴部斜縦位発掘り。 No57と同一個体か？
59 第56回 写真35	須忠器 坏	B 2区 ◆7号壺穴住居	1/6残存	器高 4.1 口径 (12.4) 底径 (5.6)	① 細粒 ② 還元 ③ 浅黄色	外面：轆轤成形、底部右回転糸切り。 内面：轆轤成形。
60 第56回 写真35	須忠器 埴	B 2区 ◆7号壺穴住居	1/3残存	器高 7.0 口径 (16.8) 底径 7.0	① 細粒、細礫 ② 還元 ③ 浅黄色	外面：轆轤成形、底部右回転糸切り、付高台接合痕あり、器面磨鈍。 内面：轆轤成形。
61 第56回 写真35	須忠器 埴	B 2区 ◆7号壺穴住居	口縁部～体部 破片	器高 (3.8) 口径 (14.4) 底径 -	① 粗粒 ② 還元 ③ 浅黄色	外面：轆轤成形、「唐書土器」文字は解決不能。 内面：轆轤成形。
62 第56回 写真35	黒色土師 埴	B 2区 ◆7号壺穴住居	1/3残存	器高 6.1 口径 (15.0) 底径 (5.8)	① 細粒 ② 還元 ③ におい黄褐色	外面：口縁部横撫で、体部轆轤成形後撫で調整、付高台磨鈍。 内面：轆轤成形、内面。
63 第56回 写真35	灰釉陶器 皿	B 2区 ◆7号壺穴住居	口縁部～体部 1/4残存	器高 (1.9) 口径 (14.0) 底径 -	① 緻密 ② 還元 ③ 灰白色	外面：轆轤成形、回転発掘り調整、施釉。 内面：轆轤成形、施釉。
64 第56回 写真35	土師器 甕	B 2区 ◆7号壺穴住居	1/2残存	器高 25.8 口径 (19.0) 底径 (5.9)	① 粗粒、細礫 ② 酸化 ③ におい黄褐色	外面：口縁部横撫で、肩部に2本の沈線と指頭痕、胴部斜位発掘り。 内面：口縁部横撫で、胴部斜位発掘り。
65 第56回 写真36	土師器 甕	B 2区 ◆7号壺穴住居	1/3残存	器高 (23.0) 口径 (20.5) 底径 -	① 細粒 ② 酸化 ③ におい褐色	外面：口縁部横撫で、胴部斜位発掘り、「コ」の字状口縁裏。 内面：口縁部横撫で、胴部斜位発掘り。
66 第56回 写真36	土師器 甕	B 2区 ◆7号壺穴住居	口縁部～胴部 1/3残存	器高 (20.4) 口径 (19.4) 底径 -	① 粗粒 ② 酸化 ③ におい褐色	外面：口縁部横撫で、胴部斜位発掘り、肩部指頭痕、「コ」の字状口縁裏。 内面：口縁部横撫で、胴部斜位発掘り。

遺物観察表

67 第66回 写1836	土師器 甕	B 2区 ◆7号整穴住居	口縁部~胴部 上半 1/3残存	器高 (18.8) 口径 (19.8) 底径 -	① 粗粒、細砂 ② 酸化 ③ 棕色	外面：口縁部横撫で、胴部縦横位剝削り、口縁部指頭痕、「コ」の字状口縁変。 内面：口縁部横撫で、胴部横位剝撫で、胴部指頭痕。
68 第67回 写1836	土師器 甕	B 2区 ◆7号整穴住居	口縁部~胴部 上半 1/2残存	器高 (14.0) 口径 (19.2) 底径 -	① 細粒、黒雲母 ② 酸化 ③ 棕色	外面：口縁部横撫で、胴部縦横位剝削り、頸部指頭痕、「コ」の字状口縁変。 内面：口縁部横撫で、胴部横位剝撫で。
69 第67回 写1836	土師器 甕	B 2区 ◆7号整穴住居	口縁部~胴部 1/3残存	器高 (8.9) 口径 (19.4) 底径 -	① 粗粒、細砂 ② 酸化 ③ 棕色	外面：口縁部横撫で、胴部斜横位剝削り、口縁部指頭痕、「コ」の字状口縁変。 内面：口縁部横撫で、胴部横位剝撫で。
70 第67回 写1836	須恵器 羽蓋	B 2区 ◆7号整穴住居	2/3残存	器高 29.0 口径 19.5 底径 (7.8)	① 粗粒 ② 還元 ③ にぶい黄褐色	外面：口縁部は大きく内傾し、端部に平坦面をもち肥厚する。口縁部横撫で、胴部下位横位剝削り、器面磨耗。跨断面は三角形で大きく上反する。 内面：横位剝削り、器面磨耗。
71 第67回 写1837	須恵器 羽蓋	B 2区 ◆7号整穴住居	口縁部~胴部 上半 1/3残存	器高 (17.8) 口径 (20.0) 底径 -	① 細粒 ② 還元 ③ 浅黄色	外面：口縁部は内傾し、端部に平坦面をもつ。口縁部横撫で、胴部横位剝削り、器面磨耗。跨断面に平坦面をもつ。 内面：口縁部横撫で、胴部横位剝削り、器面磨耗。
72 第67回 写1837	須恵器 羽蓋	B 2区 ◆7号整穴住居	口縁部~胴部 上半 1/4残存	器高 (11.1) 口径 (23.0) 底径 -	① 粗粒、細砂 ② 還元 ③ 浅黄褐色	外面：口縁部は内傾し、端部に平坦面をもつ。横位剝削り、口縁部歪みあり、器面磨耗。跨断面は三角形で、上反と下反が混じる。跨先端は平坦。 内面：横位剝削り、器面磨耗。
73 第67回 写1837	須恵器 羽蓋	B 2区 ◆7号整穴住居	口縁部~胴部 上半 1/4残存	器高 (13.5) 口径 (18.4) 底径 -	① 細粒 ② 還元 ③ にぶい黄褐色	外面：口縁部は内傾し、端部に平坦面をもつ。口縁部横撫で、胴部横位剝削り、器面磨耗。跨断面は三角形で僅かに上反し、端部は平坦。 内面：横位剝削り、器面磨耗。
74 第68回 写1837	須恵器 埴	B 2区 ◆8号整穴住居	体部下半~高 台部 1/4残存	器高 (3.5) 口径 - 底径 (6.0)	① 粗粒、細砂 ② 酸化 ③ 棕色	外面：横位剝削り、行高台接合痕あり、器面磨耗。 内面：横位剝削り、器面磨耗。
75 第61回 写1837	須恵器 埴	B 2区 ◆9号整穴住居	2/8残存	器高 5.4 口径 (13.0) 底径 6.0	① 細粒 ② 還元 ③ 灰色	外面：横位剝削り、底部回転糸切り、行高台接合痕あり、器面磨耗。 内面：横位剝削り、器面磨耗。
76 第61回 写1837	須恵器 埴	B 2区 ◆9号整穴住居	体部下位~高 台部	器高 (2.3) 口径 - 底径 6.5	① 細粒、黒雲母 ② 還元 ③ にぶい棕色	外面：横位剝削り、底部糸切り後撫で調整、器面磨耗。 内面：横位剝削り、器面磨耗。
77 第61回 写1837	土師器 甕	B 2区 ◆9号整穴住居	口縁部~胴部 上位 1/3残存	器高 (13.3) 口径 (18.0) 底径 -	① 細粒、黒雲母 ② 酸化 ③ にぶい黄褐色	外面：口縁部横撫で、胴部縦横位剝削り、頸部指頭痕、器面磨耗、「コ」の字状口縁変。 内面：口縁部横撫で、胴部斜横位剝撫で。
78 第61回 写1837	土師器 甕	B 2区 ◆9号整穴住居	口縁部~胴部 上位 1/8残存	器高 (12.9) 口径 (24.0) 底径 -	① 細粒、細砂 ② 酸化 ③ 棕色	外面：口縁部横撫で、胴部斜横位剝削り、頸部指頭痕、器面磨耗、「コ」の字状口縁変。 内面：口縁部横撫で、胴部横位剝撫で、器面磨耗。

遺物観察表

79 第61回 写図37	土師器 甕	B 2区 ◆9号整穴住居	口縁部破片	器高 (6.4) 口径 (18.0) 底径 -	① 細粒、細砂 ② 酸化 ③ にぶい橙色	外面：口縁部横撫で、側部斜横位丸削り、器面磨耗、「コ」の字状口縁塗。 内面：口縁部横撫で、側部横位丸撫で。
80 第62回 写図37	灰結陶器 碗	B 2区 ◆10号整穴住居	1/3残存	器高 5.0 口径 (15.4) 底径 7.0	① 緻密 ② 還元 ③ 灰白色	外面：輪軸成形後体部回転丸削り調整、付高台回転丸削り調整、施釉。 内面：輪軸成形、施釉。
81 第62回 写図37	土師器 甕	B 2区 ◆10号整穴住居	1口縁部破片	器高 (4.6) 口径 (19.0) 底径 -	① 細粒、黒雲母 ② 酸化 ③ にぶい赤褐色	外面：口縁部横撫で、側部丸削り、頸部指頭痕、「コ」の字状口縁塗。 内面：口縁部横撫で、頸部指頭痕、側部横撫で。
82 第65回 写図37	須志器 坏	B 2区 ◆11号整穴住居	体部下半～底部	器高 (2.5) 口径 - 底径 5.0	① 緻密 ② 還元 ③ 灰白色	外面：輪軸成形、底部右回転糸切り。 内面：輪軸成形。
83 第65回 写図38	須志器 瓿	B 2区 ◆11号整穴住居	ほぼ完成形	器高 5.9 口径 14.0 底径 5.8	① 緻密、小礫 ② 還元 ③ 灰白色	外面：輪軸成形、底部右回転糸切り、付高台横撫で。 内面：輪軸成形。
84 第65回 写図38	須志器 瓿	B 2区 ◆11号整穴住居	1/4残存	器高 5.9 口径 (14.6) 底径 (7.0)	① 細粒、細砂 ② 還元 ③ にぶい橙色	外面：輪軸成形後横撫で、器面磨耗。 内面：輪軸成形、器面磨耗。
85 第65回 写図38	須志器 瓿	B 2区 ◆11号整穴住居	1/4残存	器高 4.5 口径 (13.2) 底径 7.0	① 細粒 ② 還元 ③ 灰黄色	外面：輪軸成形後横撫で調整、付高台接合痕あり。 内面：輪軸成形。
86 第65回 写図38	須志器 瓿	B 2区 ◆11号整穴住居	口縁部～体部 1/4残存	器高 (4.2) 口径 (14.0) 底径 -	① 細粒、小礫 ② 還元 ③ にぶい黄褐色	外面：輪軸成形、器面磨耗。 内面：輪軸成形。
87 第66回 写図38	土師器 甕	B 2区 ◆11号整穴住居	口縁部～肩部 破片	器高 (8.7) 口径 (18.4) 底径 -	① 細粒、細砂 ② 酸化 ③ 浅黄褐色	外面：口縁部横撫で、側部斜横位丸削り、頸部指頭痕、器面磨耗、「コ」の字状口縁塗。 内面：口縁部横撫で、側部斜横位丸撫で。
88 第66回 写図38	須志器 羽釜	B 2区 ◆11号整穴住居	口縁部～胴部 上位 破片	器高 (8.6) 口径 (20.0) 底径 -	① 細粒、細砂 ② 還元 ③ 灰白色	外面：輪軸成形、器面磨耗。跨断面は三角形で僅かに上面が上反する。 内面：輪軸成形後丸撫で、器面磨耗。
89 第67回 写図38	土師器 瓿	B 2区 ◆13号整穴住居	1/3残存	器高 5.1 口径 (13.8) 底径 7.3	① 粗粒、細砂 ② 酸化 ③ にぶい赤褐色	外面：口縁部横撫で、体部丸撫で、付高台横撫で調整、器面磨耗。 内面：口縁部横撫で、体部丸撫で、輪積み痕あり。
90 第67回 写図38	須志器 瓿	B 2区 ◆13号整穴住居	底部～高台部	器高 (3.2) 口径 - 底径 9.6	① 細粒、細砂 ② 酸化 ③ 灰黄色	外面：付高台横撫で調整、器面磨耗。 内面：底部輪軸成形。
91 第67回 写図38	土師器 甕	B 2区 ◆13号整穴住居	1/3残存	器高 (25.5) 口径 (20.6) 底径 -	① 細粒、細礫 ② 酸化 ③ にぶい橙色	外面：口縁部横撫で、側部縦位丸削り、頸部指頭痕、器面磨耗、「コ」の字状口縁塗。 内面：口縁部横撫で、側部横位丸撫で。
92 第67回 写図38	須志器 羽釜	B 2区 ◆13号整穴住居	1/2残存	器高 26.2 口径 (21.0) 底径 6.0	① 細粒、細砂 ② 還元 ③ にぶい黄褐色	外面：口縁部は内傾し、僅かに肥厚する。肩部は平坦。口縁部横撫で、胴部輪軸成形後縦横位丸撫で、器面磨耗。跨下面に沈線、上面は大きく上反する。 内面：輪軸成形。
93 第70回 写図39	須志器 瓿	D 5区 ◆16号整穴住居	2/3残存	器高 6.0 口径 (15.0) 底径 (9.2)	① 細粒、細砂 ② 還元 ③ 灰色	外面：輪軸成形、付高台横撫で調整。 内面：輪軸成形。

遺物観察表

94 第70回 写839	須志器 羽釜	D 5 区 ◆16号型穴住居	口縁部～胴部 上位 1/5残存	器高 (8.4) 口径 (22.4) 底径 -	① 粗粒、繊維 ② 酸化 ③ 棕色	外面：口縁部は内傾し、肥厚する。胴部は平皿、輪轆成形。器面磨耗。跨断面は三角形で僅かに上反する。 内面：輪轆成形、器面磨耗。
95 第70回 写839	須志器 羽釜	D 5 区 ◆16号型穴住居	口縁部破片	器高 (5.0) 口径 (20.0) 底径 -	① 細粒 ② 還元 ③ 黄灰色	外面：口縁部は直立し、肥厚する。胴部は平皿、輪轆成形。跨断面は三角形で、僅かに上反する。 内面：輪轆成形。
96 第70回 写839	須志器 羽釜	D 5 区 ◆16号型穴住居	口縁部破片	器高 (6.2) 口径 (21.0) 底径 -	① 細粒、繊維 ② 酸化 ③ にぶい棕色	外面：口縁部は僅かに内傾し、肥厚する。胴部は平皿、輪轆成形。器面磨耗。跨断面は三角形で、僅かに上反する。 内面：輪轆成形、器面磨耗。
97 第70回 写839	須志器 羽釜	D 5 区 ◆16号型穴住居	口縁部破片	器高 (6.0) 口径 (21.6) 底径 -	① 細粒、細砂 ② 還元 ③ 灰白色	外面：口縁部は僅かに内傾し、肥厚する。胴部は平皿、輪轆成形。跨断面は三角形で、僅かに上反する。 内面：輪轆成形。
98 第88回 写839	灰輪陶器 碗	B 2 区 ◆22号溝	底部～高台部 1/3残存	器高 (2.0) 口径 - 底径 (7.6)	① 緻密 ② 還元 ③ 灰白色	外面：輪轆成形、付高台回転強で調整。 内面：塗輪。
99 第102回 写839	須志器 杯	B 1 区 ◆1号土坑	口縁部破片	器高 (2.5) 口径 (11.4) 底径 -	① 細粒、細砂 ② 還元 ③ 灰色	外面：輪轆成形。「墨書土器」文字は解説不能。 内面：輪轆成形。
100 第103回 写839	黒色土器 埴	D 2 区 ◆22号土坑	底部 2/3残存	器高 (4.3) 口径 - 底径 (7.5)	① 細粒、細砂 ② 還元 ③ 暗灰黄色	外面：輪轆成形、底部右回転糸切り、器面磨耗。 内面：輪轆成形後磨き、器面・付高台磨耗、内里。
101 第110回 写839	土師器 杯	◆%12トレンチ	1/3残存	器高 (4.0) 口径 (11.0) 底径 丸底	① 細粒、細砂 ② 酸化 ③ 棕色	外面：口縁部横撫で、体部彫削り、器面磨耗。 内面：底部撫で、指頭痕あり、器面磨耗。
102 第110回 写839	土師器 罌	◆2面	2/3残存	器高 20.4 口径 (13.2) 底径 (6.2)	① 細粒、細砂 ② 酸化 ③ にぶい黄棕色	外面：口縁部横撫で、胴部のくびれに調整、胴部斜縦位置削り。 内面：口縁部横撫で、胴部斜縦位置撫で、指頭痕あり。
103 第110回 写839	土師器 罌	◆%24トレンチ	口縁部～胴部 上半	器高 (16.4) 口径 18.2 底径 -	① 細粒、細砂 ② 酸化 ③ にぶい黄棕色	外面：口縁部横撫で、胴部のくびれに調整、胴部斜縦位置削り、口縁部に指頭痕あり。 内面：口縁部横撫で、胴部斜縦位置撫で。
104 第110回 写839	埴輪 円筒埴輪	B 2 区 ◆埴輪出土地点	口縁部 1/4残存	器高 (14.5) 口径 (20.7) 底径 -	① 細粒 ② 酸化 ③ 棕色	外面：縁やかに外反して立ち上がる。縦方向の調整、突帯上下刷毛撫で、口縁部調整。 内面：口縁部刷毛調整。
105 第110回 写840	埴輪 円筒埴輪	B 2 区 ◆埴輪出土地点	突帯部破片	器高 - 口径 - 底径 -	① 細粒 ② 酸化 ③ 棕色	外面：突帯上下撫で調整、突帯上位に透孔痕残存。 内面：調整。
106 第110回 写840	埴輪 円筒埴輪	B 2 区 ◆埴輪出土地点	突帯部破片	器高 - 口径 - 底径 -	① 細粒 ② 酸化 ③ にぶい棕色	外面：突帯上下撫で調整、突帯上位に透孔痕残存。 内面：撫で。
107 第110回 写840	埴輪 円筒埴輪	B 2 区 ◆埴輪出土地点	突帯部破片	器高 - 口径 - 底径 -	① 細粒 ② 酸化 ③ 棕色	外面：縦方向の刷毛目、突帯上下撫で調整。 内面：撫で。
108 第110回 写840	土師器 杯	◆%17トレンチ	1/4残存	器高 2.5 口径 (13.0) 底径 丸底	① 緻密 ② 酸化 ③ 棕色	外面：口縁部横撫で、底部彫削り、器面磨耗。 内面：口縁部横撫で、指頭痕あり、器面磨耗。

遺物観察表

109 第1108回 写真40	須志砂 埴	◆2面	1/2残存	器高 5.0 口径 (13.4) 底径 (6.5)	① 細粒、細砂、小礫 ② 酸化 ③ 棕色	外面：口縁部横撫で、底部右回転糸切り残付高台、器面磨耗。 内面：縦輪成形。
110 第1108回 写真40	灰釉陶器 碗	◇1面	体部下半～高台部 1/4残存	器高 (3.0) 口径 - 底径 (7.6)	① 緻密 ② 還元 ③ 灰白色	外面：縦輪成形後回転磨削調整、付高台横撫で。 内面：縦輪成形。
111 第1108回 写真40	灰釉陶器 皿	◇1面	1/4残存	器高 2.8 口径 (13.5) 底径 (7.0)	① 緻密 ② 還元 ③ 灰白色	外面：縦輪成形、付高台横撫で、輪花1か所、捺輪。 内面：縦輪成形、捺輪。
112 第111回 写真40	土師器 壺	◇1面	口縁部 1/4残存	器高 (7.4) 口径 (21.2) 底径 -	① 細粒、細砂 ② 酸化 ③ にいり褐色	外面：口縁部横撫で、胴部斜横位磨削り、頸部に指頭痕、器面磨耗、「コ」の字状口縁変。 内面：口縁部横撫で、胴部横位磨削り、胴部に指頭痕。
113 第111回 写真40	陶器 碗	◇No.33トレンチ	体部～高台 1/3残存	器高 (4.7) 口径 - 底径 (5.4)	① 緻密 ② 良好 ③ 灰白色	外面：縦輪成形後回転磨削り調整、底部回転糸切り残付高台、捺輪。 内面：磨耗。
114 第111回 写真40	磁器 碗	◇No.1トレンチ	体部～高台部 1/3残存	器高 (2.2) 口径 - 底径 4.0	① 緻密 ② 良好 ③ 灰白色	外面：草花文染付け、高台に二重圈線。
115 第111回 写真40	磁器 皿	◇No.33トレンチ	体部～高台部	器高 (2.0) 口径 - 底径 5.8	① 緻密 ② 良好 ③ 灰白色	内面：草花文染付け。

<石類>

遺物番号 検出番号 写真図版	器種	出土位置	計測値 (cm・g)	石材	特徴・その他
116 第218回 写真31	砥石	B2区 ◇4号溝	長 (8.8) 幅 4.2 厚 2.7 重 164.0	砥沢石	4面とも良く研磨され、研着面は平らである。研着面以外は研着回数が少ない。上・下面と1側面に溝状に刃溝痕が残る。置紙。端部欠損。
117 第218回 写真31	砥石	B2区 ◇4号溝	長 (6.7) 幅 6.1 厚 4.0 重 255.0	砥沢石	平面1面と側面1面が面幅全体に良く研磨され、研着面は平らである。他に平面1面に幅約1.5cmと約2cmの研着面が認められる。他面は研着回数が少ない。置紙。端部欠損。
118 第368回 写真31	砥石	A3区 ◇1号井戸	長 (11.0) 幅 5.0 厚 4.1 重 237.0	砥沢石	4面とも良く研磨されている。研着面は1面と側面は彎曲した凹状である。置紙。両端部と1平面の一部欠損。
119 第111回 写真40	砥石	C区 ◇トレンチ	長 (6.4) 幅 3.3 厚 1.9 重 53.0	砥沢石	1平面が良く研磨され、他面は研着回数が少ない。研着面はほぼ平らであるが一部側面に緩やかに彎曲した凹状の研着面を残す。小型で部分研着用の提紙か。両端部欠損。
120 第111回 写真40	砥石	C区 ◇1面	長 (8.2) 幅 3.7 厚 3.0 重 113.0	砥沢石	1平面のみ良く研磨され、他面は未研磨。研着面は平らな面と斜方向に研着されている面が同一面に認められる。小型で部分研着用の提紙か。先端部欠損。

写真図版



1. 調査区から浅間山を望む（東から）



2. 調査区から権名山を望む（南東から）



3. 調査区から正円寺古墳を望む（南西から）



4. 重機による表土掘削作業風景（西から）



5. B1区1画 全景（上空北から）

写真図版 2



1. D2区1面 2号畦検出状況(西から)



2. D2区1面 1号畦検出状況(北西から)



3. D3区1面 3号畦検出状況(北西から)



4. D3区1面 3号畦土層断面(北から)



5. A2区1面 1号畵全景(南西から)



1. B1区1面 2号畠全景 (北西から)



2. B1区1面 2号畠近景 (北から)



3. A1区1面 24号溝全景 (北西から)



4. A1区1面 24号溝全景 (南東から)

写真図版 4



1. A 1区1面 24号溝土層断面 (南東から)



2. A 1区 北壁土層断面 (南西から)



3. A 2区1面 25号溝全景 (南から)



4. A 2区1面 25号溝土層断面 (南から)



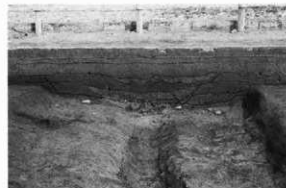
5. A 2区1面 26号溝全景 (南から)



6. A 2区1面 26号溝土層断面 (南から)



7. A 2区1面 27号溝全景 (南から)



8. A 2区1面 27号溝土層断面 (南から)



1. B1区1面 1号溝全景(南西から)



2. B1区1面 1号溝北壁土層断面(南から)



3. B1区1面 2号溝全景(北西から)



4. B1区1面 2号溝土層断面(南から)



5. B2区1面 4号溝土層断面(南から)



6. B2区1面 4号溝土層断面(南から)



7. B2区1面 5号溝土層断面(北から)



8. B2区1面 6号溝土層断面(南から)

写真図版 6



1. B 1区1面 8号溝土層断面(南から)



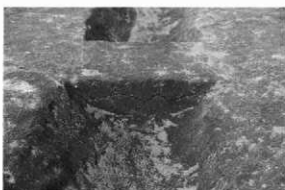
2. B 2区1面 9号溝全景(北から)



3. B 2区1面 9号溝土層断面(南から)



4. B 2区1面 10号溝土層断面(西から)



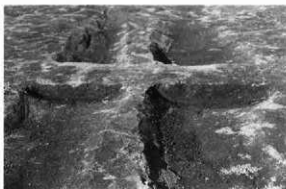
5. B 2区1面 11号土層断面(南西から)



6. B 2区1面 13(右)・14(左)号溝土層断面(東から)



7. B 2区1面 15(右)・16(左)号溝土層断面(東から)



8. B 2区1面 17(右)・18(左)号溝土層断面(東から)



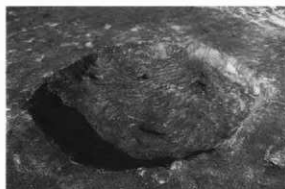
1. B 2区1面 19号溝土層断面 (東から)



2. B 2区1面 21号溝土層断面 (南西から)



3. B 2区1面 31号溝全景 (北から)



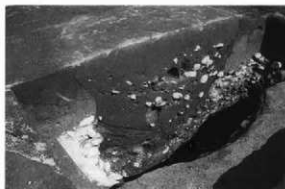
4. B 2区1面 2号土坑全景 (南から)



5. B 2区1面 2号土坑土層断面 (南から)



6. B 2区1面 2号土坑遺物出土状況 (南から)



7. A 3区1面 1号井戸土層断面 (南西から)



8. D 4区1面 3号井戸全景 (南から)

写真図版 8



1. A 2区2面 1号踏み分け道全景 (南東から)



2. A 3区2面 2号踏み分け道全景 (南東から)



3. A 3区2面 2号踏み分け道土層断面 (南から)



4. D 5区2面 2号踏み分け道土層断面 (南から)



5. D 5区2面 2号踏み分け道検出状況 (南東から)



1. D5区2面 2号踏み分け道Hr-FAF硬化面検出状況(南東から)



2. D5区2面 2号踏み分け道検出作業風景(南東から)



3. B2区2面 3号踏み分け道全景(北西から)



4. B2区2面 3号踏み分け道全景(南東から)



5. B2区2面 円筒埴輪片出土状況(南東から)

写真図版10



1. A 2区2面 14号竪穴住居全景(西から)



2. A 2区2面 14号竪穴住居カマド全景(西から)



3. A 2区2面 14号竪穴住居カマド掘方全景(西から)



4. A 2区2面 14号竪穴住居掘方全景(西から)



5. A 3区2面 12号竪穴住居全景(東から)



6. A 3区2面 12号竪穴住居土層断面(南から)



7. A 3区2面 12号竪穴住居カマド土層断面(南西から)



8. B 1区2面 1号竪穴住居凹み状況(西から)



1. B1区2面 1号竪穴住居全景(南西から)



2. B1区2面 1号竪穴住居土層断面(南西から)



3. B1区2面 1号竪穴住居遺物出土状況(西から)



4. B1区2面 1号竪穴住居カマド全景(南西から)



5. B1区2面 1号竪穴住居カマド土層断面(南西から)



6. B1区2面 1号竪穴住居カマド遺物出土状況(北西から)



7. B2区2面 2号竪穴住居門み状況(西から)



8. B2区2面 2号竪穴住居全景(西から)

写真図版12



1. B2区2面 2号壑穴住居土層断面(西から)



2. B2区2面 2号壑穴住居カマド全景(西から)



3. B2区2面 2号壑穴住居カマド土層断面(北から)



4. B2区2面 2号壑穴住居カマド土層断面(南から)



5. B2区2面 2号壑穴住居掘方全景(西から)



6. B2区2面 3号壑穴住居全景(西から)



7. B2区2面 3号壑穴住居土層断面(西から)



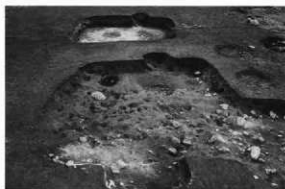
8. B2区2面 3号壑穴住居遺物出土状況(北西から)



1. B 2区2面 3号壑穴住居カマド全景 (西から)



2. B 2区2面 3号壑穴住居カマド土層断面 (南西から)



3. B 2区2面 3号壑穴住居掘方全景 (西から)



4. B 2区2面 4号壑穴住居凹み状況 (北西から)



5. B 2区2面 4号壑穴住居全景 (西から)



6. B 2区2面 4号壑穴住居土層断面 (西から)



7. B 2区2面 4号壑穴住居カマド全景 (北西から)



8. B 2区2面 4号壑穴住居貯蔵穴全景 (西から)

写真図版14



1. B2区2面 5号壑穴住居全景(西から)



2. B2区2面 5号壑穴住居土層断面(西から)



3. B2区2面 5号壑穴住居カマド全景(西から)



4. B2区2面 5号壑穴住居カマド土層断面(北東から)



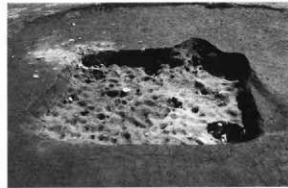
5. B2区2面 5号壑穴住居カマド遺物出土状況(西から)



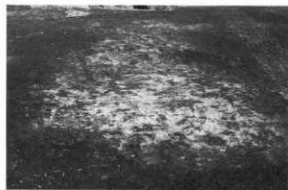
6. B2区2面 5号壑穴住居カマド掘方全景(北西から)



7. B2区2面 5号壑穴住居貯蔵穴土層断面(北から)



8. B2区2面 5号壑穴住居掘方全景(西から)



1. B2区2面 6号竪穴住居凹み状況(西から)



2. B2区2面 6号竪穴住居全景(北西から)



3. B2区2面 6号竪穴住居土層断面(北西から)



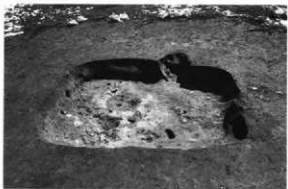
4. B2区2面 6号竪穴住居カマド全景(北西から)



5. B2区2面 6号竪穴住居カマド遺物出土状況(北から)



6. B2区2面 6号竪穴住居カマド掘方全景(西から)



7. B2区2面 6号竪穴住居掘方全景(西から)



8. B2区2面 7号竪穴住居全景(北西から)

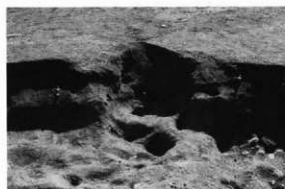
写真図版16



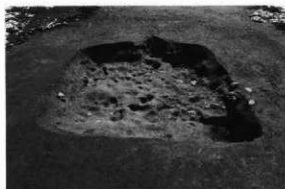
1. B2区2面 7号整穴住居土層断面(北西から)



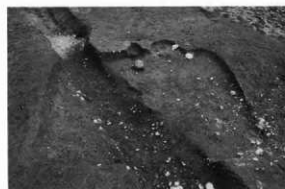
2. B2区2面 7号整穴住居カマド土層断面(東から)



3. B2区2面 7号整穴住居カマド掘方全景(北西から)



4. B2区2面 7号整穴住居掘方全景(北西から)



5. B2区2面 8号整穴住居全景(西から)



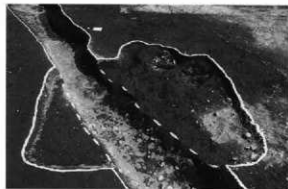
6. B2区2面 8号整穴住居土層断面(西から)



7. B2区2面 8号整穴住居カマド全景(西から)



8. B2区2面 8号整穴住居カマド掘方全景(西から)



1. B2区2面 8号竪穴住居掘方全景(西から)



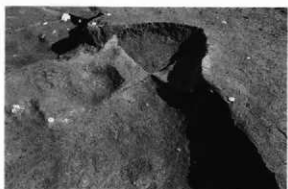
2. B2区2面 9号竪穴住居全景(北西から)



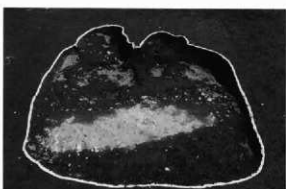
3. B2区2面 9号竪穴住居土層断面(北西から)



4. B2区2面 9号竪穴住居カマド土層断面(南から)



5. B2区2面 9号竪穴住居カマド掘方全景(南から)



6. B2区2面 9号竪穴住居掘方全景(北西から)



7. B2区2面 10号竪穴住居全景(西から)



8. B2区2面 10号竪穴住居土層断面(南西から)

写真図版18



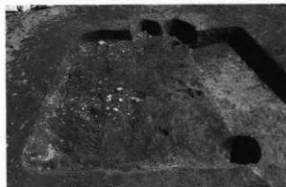
1. B2区2面 10号竪穴住居カマド全景(西から)



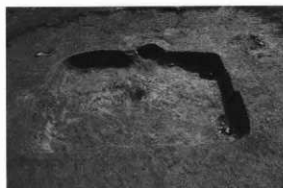
2. B2区2面 10号竪穴住居カマド土層断面(南西から)



3. B2区2面 10号竪穴住居カマド掘方全景(西から)



4. B2区2面 10号竪穴住居掘方全景(西から)



5. B2区2面 11号竪穴住居全景(西から)



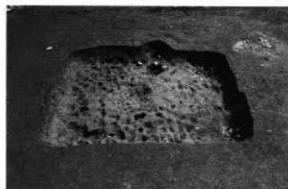
6. B2区2面 11号竪穴住居土層断面(西から)



7. B2区2面 11号竪穴住居遺物出土状況(西から)



8. B2区2面 11号竪穴住居カマド全景(西から)



1. B 2区2面 11号竪穴住居掘方全景 (西から)



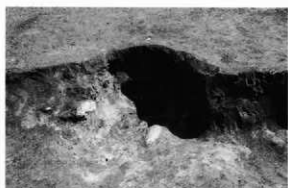
2. B 2区2面 13号竪穴住居全景 (西から)



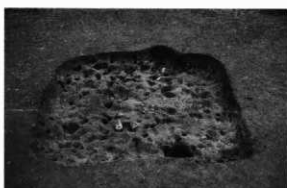
3. B 2区2面 13号竪穴住居土層断面 (西から)



4. B 2区2面 13号竪穴住居カマド掘遺物出土状況 (西から)



5. B 2区2面 13号竪穴住居カマド掘方全景 (西から)



6. B 2区2面 13号竪穴住居掘方全景 (西から)

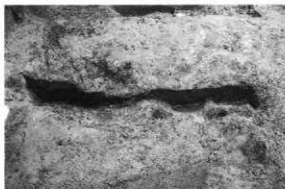


7. D 5区2面 16号竪穴住居全景 (西から)

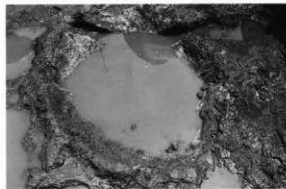


8. D 5区2面 16号竪穴住居カマド土層断面 (南から)

写真図版20



1. D5区2面 16号竪穴住居貯蔵穴土層断面(南から)



2. D5区2面 16号竪穴住居床下土坑全景(西から)



3. D5区2面 16号竪穴住居掘方全景(西から)



4. D6区2面 15号竪穴住居カマド掘方全景(東から)



5. A2区2面 3号竪穴全景(西から)



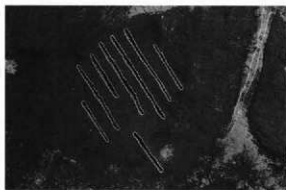
6. A3区2面 5号竪穴全景(南から)



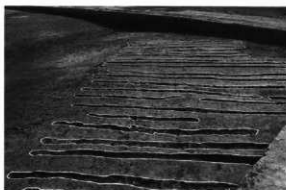
7. D5区2面 5号竪穴全景(西から)



8. B1区2面 7号竪穴全景(東から)



1. B 2区2面 9号畠全景 (上空から)



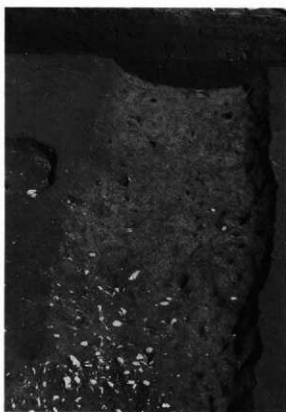
2. B 2区2面 10号畠全景 (北西から)



3. B 2区2面 10号畠全景 (南西から)



4. C区2面 11号畠全景 (南東から)



5. A 2区2面 32号溝全景 (南から)

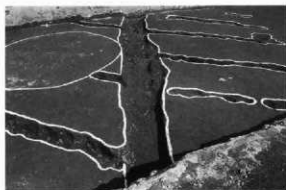


6. A 2区2面 32号溝土層断面 (北から)



7. A 2区2面 33号溝土層断面 (北から)

写真図版22



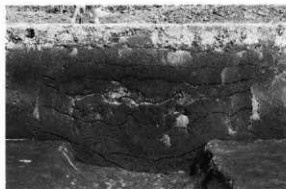
1. A3区2面 28号溝全景(南西から)



2. A3区2面 28号溝土層断面(南から)



3. A3区2面 29号溝全景(南から)



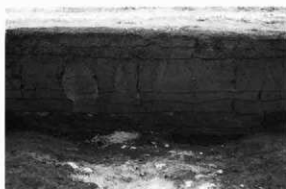
4. A3区2面 29号溝土層断面(南から)



5. A3区2面 30号溝全景(南から)



6. A3区2面 30号溝土層断面(南から)



7. B1区2面 3号溝全景・土層断面(北から)



8. B2区2面 22号土層断面(東から)



1. B 2区2面 22・23号溝全景（北東から）



2. B 2区2面 23号溝全景（北西から）



3. B 2区2面 23号溝土層断面（南から）



4. C区2面 34号溝全景（南から）



5. C区2面 34号溝土層断面（南から）

写真図版24



1. D 2区2面 41号溝全景 (南西から)



2. D 2区2面 41号溝土層断面 (北東から)



3. D 4区2面 35号溝全景 (東から)



4. D 4区2面 35号溝土層断面 (東から)



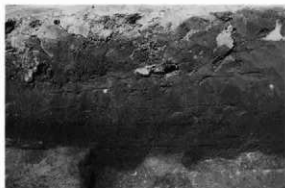
5. D 4区2面 36号溝全景 (東から)



6. D 4区2面 36号溝土層断面 (東から)



7. D 4区2面 37号溝全景 (東から)



8. D 4区2面 37号溝土層断面 (東から)



1. D4区2面 38号溝全景(東から)



2. D4区2面 38号溝土層断面(東から)



3. D4区2面 39号溝全景(東から)



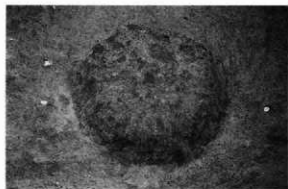
4. D4区2面 39号溝土層断面(東から)



5. D4区2面 40号溝全景(南東から)



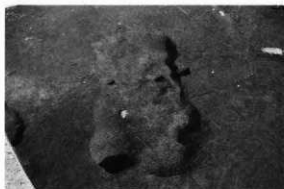
6. D4区2面 40号溝土層断面(東から)



7. A2区2面 3号土坑全景(南から)



8. A2区2面 3号土坑土層断面(南から)



1. A2区2面 4号土坑全景(北西から)



2. A2区2面 4号土坑土層断面(東から)



3. A2区2面 5号土坑全景(南から)



4. A2区2面 5号土坑土層断面(東から)



5. A2区2面 6号土坑全景(西から)



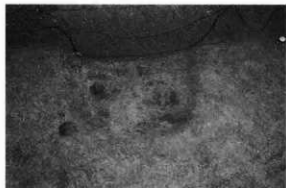
6. A2区2面 6号土坑土層断面(西から)



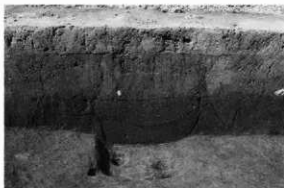
7. A2区2面 7号土坑全景(北から)



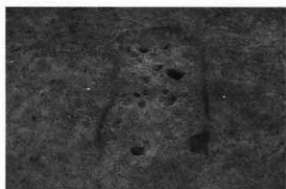
8. A2区2面 7号土坑土層断面(西から)



1. A 2区2面 8号土坑全景(南から)



2. A 2区2面 8号土坑土層断面(南から)



3. A 2区2面 9号土坑全景(南から)



4. A 2区2面 9号土坑土層断面(南から)



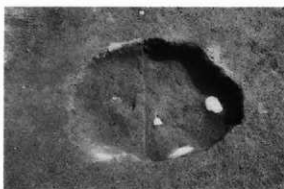
5. A 2区2面 10号土坑全景・土層断面(北から)



6. A 2区2面 11号土坑全景(北から)



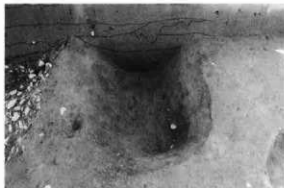
7. A 2区2面 11号土坑基本土層(北から)



8. A 2区2面 12号土坑全景(北から)



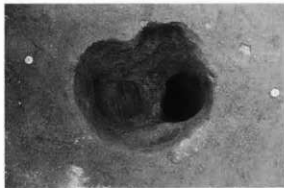
1. A 2区2面 12号土坑土層断面(西から)



2. A 2区2面 13号土坑全景(北から)



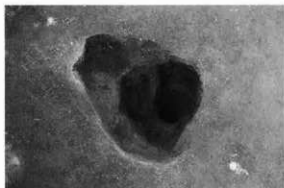
3. A 2区2面 13号土坑土層断面(北から)



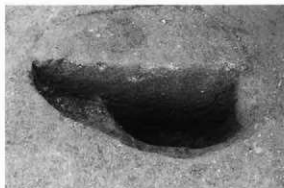
4. A 2区2面 14号土坑全景(南から)



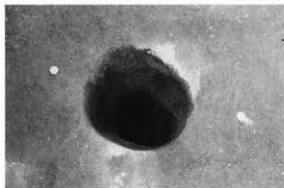
5. A 2区2面 14号土坑土層断面(南から)



6. A 2区2面 15号土坑全景(南から)



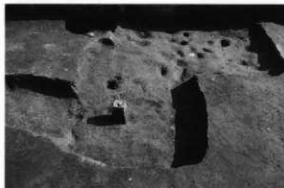
7. A 2区2面 15号土坑基本土層(南から)



8. A 2区2面 16号土坑全景(南から)



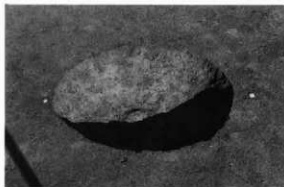
1. A 2区 2面 16号土坑土層断面 (南から)



2. A 2区 2面 17号土坑全景 (北から)



3. A 2区 2面 17号土坑土層断面 (南から)



4. B 1区 2面 1号土坑全景 (南から)



5. B 1区 2面 1号土坑土層断面 (南から)



6. D 2区 2面 22号土坑全景・土層断面 (南から)



7. D 4区 2面 18号土坑全景 (南東から)



8. D 4区 2面 18号土坑土層断面 (南東から)

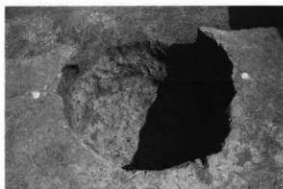
写真図版30



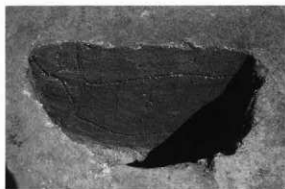
1. D4区2面 19号土坑全景(南東から)



2. D4区2面 19号土坑土層断面(南東から)



3. D4区2面 20号土坑全景(南から)



4. D4区2面 20号土坑土層断面(南から)



5. D4区2面 21号土坑全景(西から)



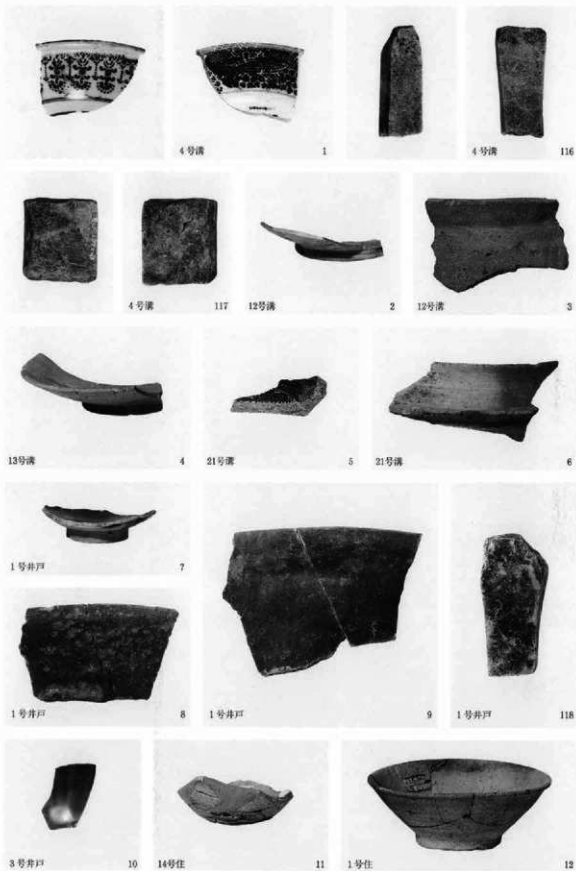
6. D4区2面 21号土坑土層断面(西から)



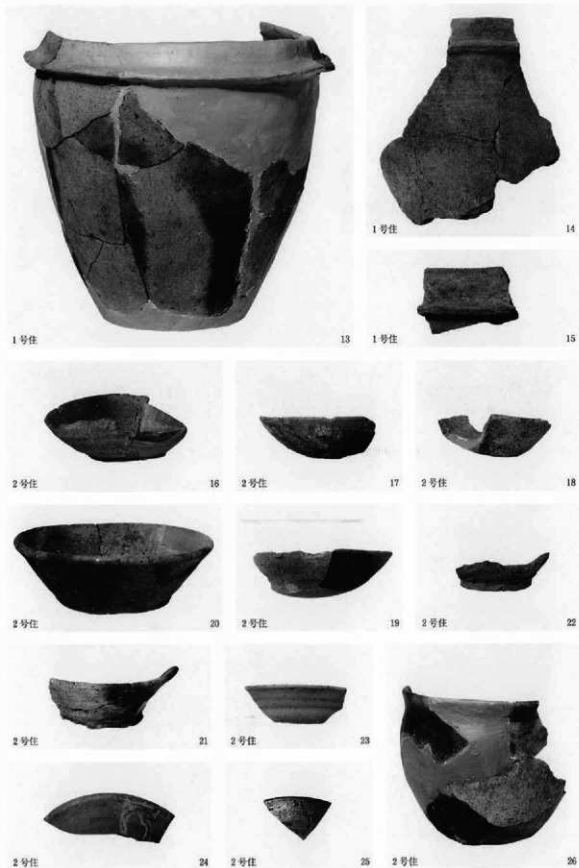
7. A3区2面 2号井戸土層断面(南西から)



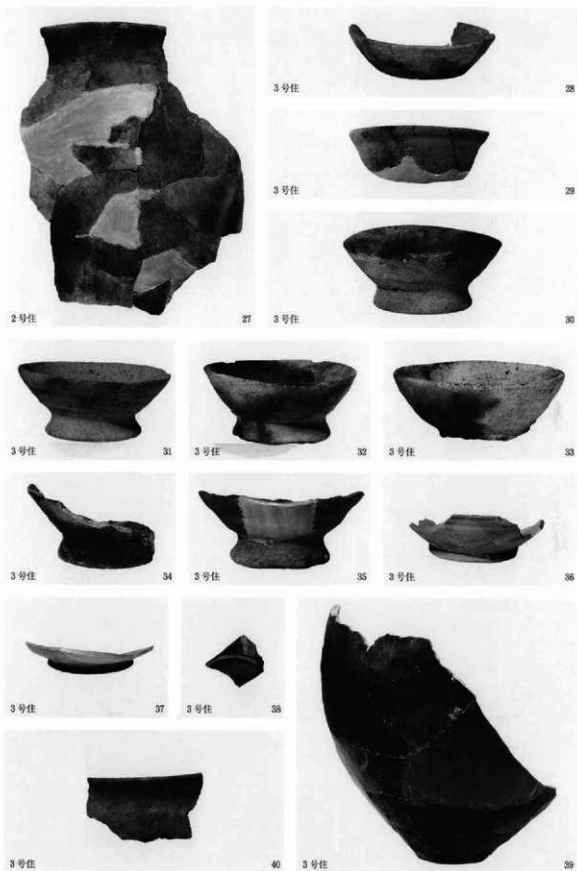
8. D6区2面 4号井戸土層断面(南から)



4・12・13・21号溝、1・3号井戸、14・1号壑穴住居出土遺物

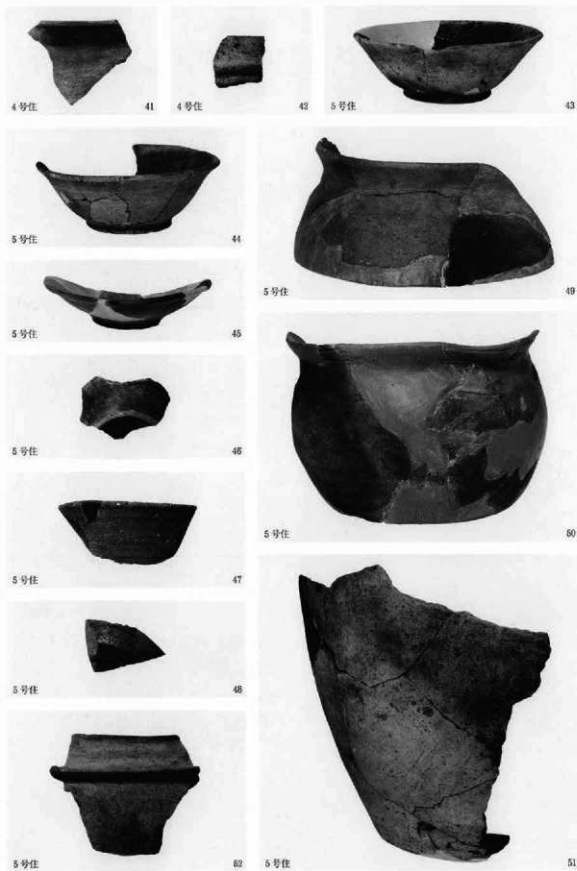


1・2号竪穴住居出土遺物



2・3号竪穴住居出土遺物

写真图版34



4·5号整穴住居出土遺物



6号住

53



6号住

55



6号住

57



6号住

54



6号住

58



7号住



7号住

60



7号住

62



7号住 61



7号住

63



6号住

56



7号住

64



7号住

65



7号住

67



7号住

66



7号住

69



7号住

68



7号住

70



7号住



71 7号住

72



7号住

73



8号住

74



9号住

76



9号住

76



9号住

79



9号住

77



9号住

78



10号住

80



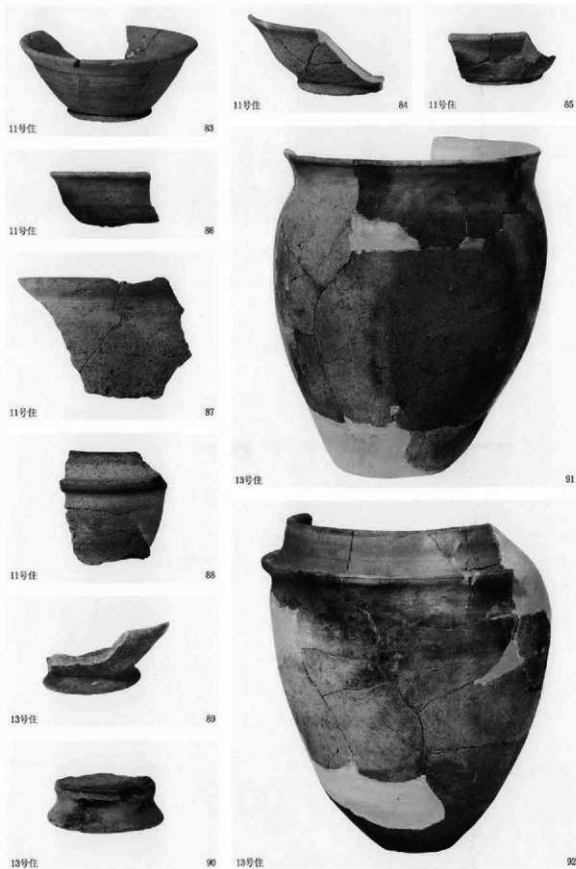
10号住

81

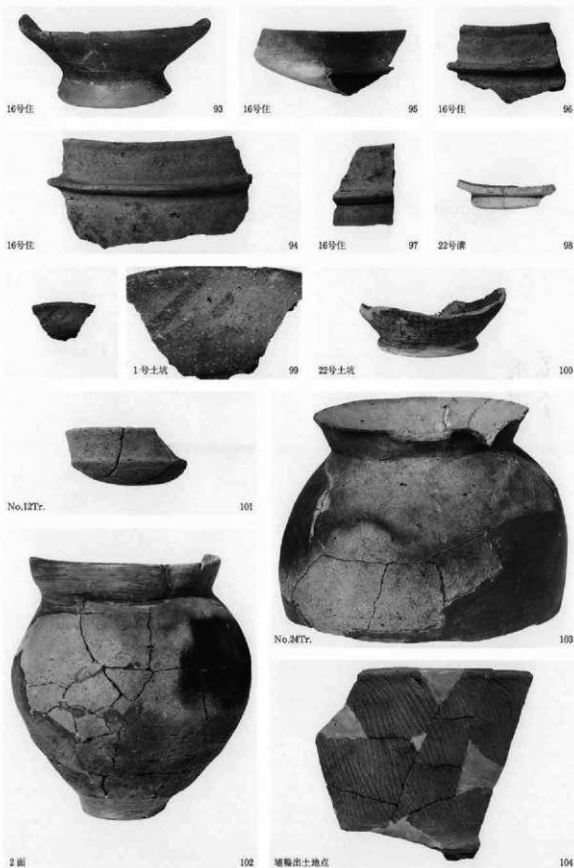


11号住

82



11・13号竪穴住居出土遺物



16号窑穴住居、22号溝、1・22号土坑、遺構外出土遺物(1)

写真図版40



埴輪出土地点 105



埴輪出土地点 106



埴輪出土地点 107



No.17Tr. 108



2面 109



1面 110



1面 111



1面 112



C区Tr. 119



C区1面 120



No.33Tr. 113



No. 1 Tr. 114



No.33Tr. 115

報告書抄録

フリガナ	イシゼキニシダニイセキ
書名	石関西田Ⅱ遺跡
副書名	県立前橋工業高等学校移転整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第306集
編著者名	根岸 仁
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 TEL 0279-52-2511 FAX 0279-52-2904
発行年月日	2002年9月30日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード	北緯 東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村				
いしぜきにしだにいせき 石関西田Ⅱ遺跡	前橋市石関町	10201	36° 23' 08"	20001115	19,772㎡	県立前橋工業高等学校移転整備 工事
	76番地1	遺跡番号	139° 07' 13"	～		
	113番地		(日本測地系)	20010630		
	137番地1					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石関西田Ⅱ遺跡	集落 生産	古墳時代 平安時代 ～ 中・近世	踏み分け道3・旧河道1 竪穴住居16・As-B下水田3 As-B混土下水田1・畠11 溝41・土坑22・井戸4 旧河道3	土師器・埴輪 須恵器・土師器 灰釉陶器・黒色 土器・磁器・陶 器・砥石	6世紀中葉(古墳 時代後期)の旧利 根川の流路の一部 を確認した可能性 あり。



(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第306集

石関西田Ⅱ遺跡

県立前橋工業高等学校移転整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14年(2002年)9月27日 印刷

平成14年(2002年)9月30日 発行

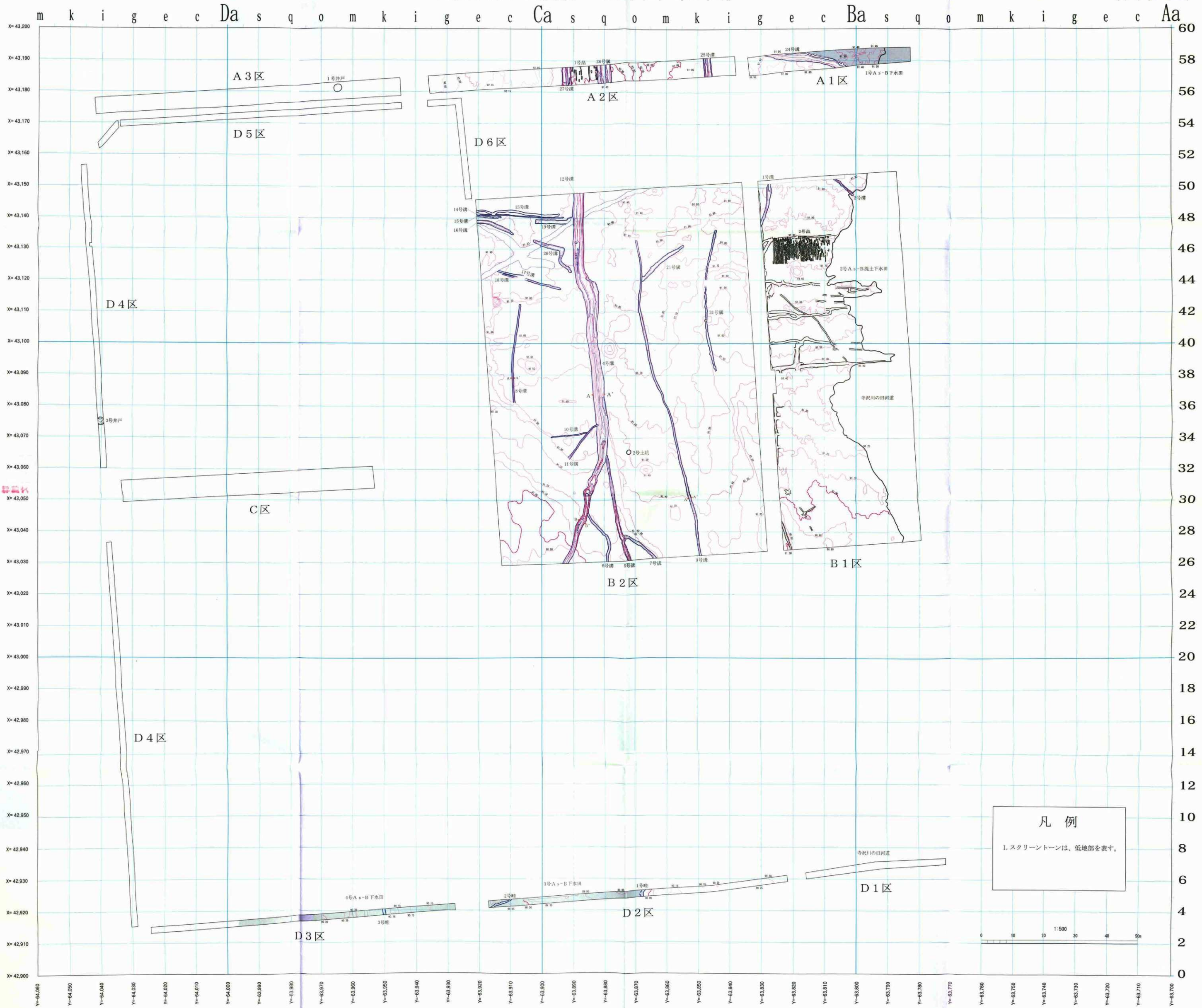
編集/発行 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 0279(52)2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷/松本印刷工業株式会社

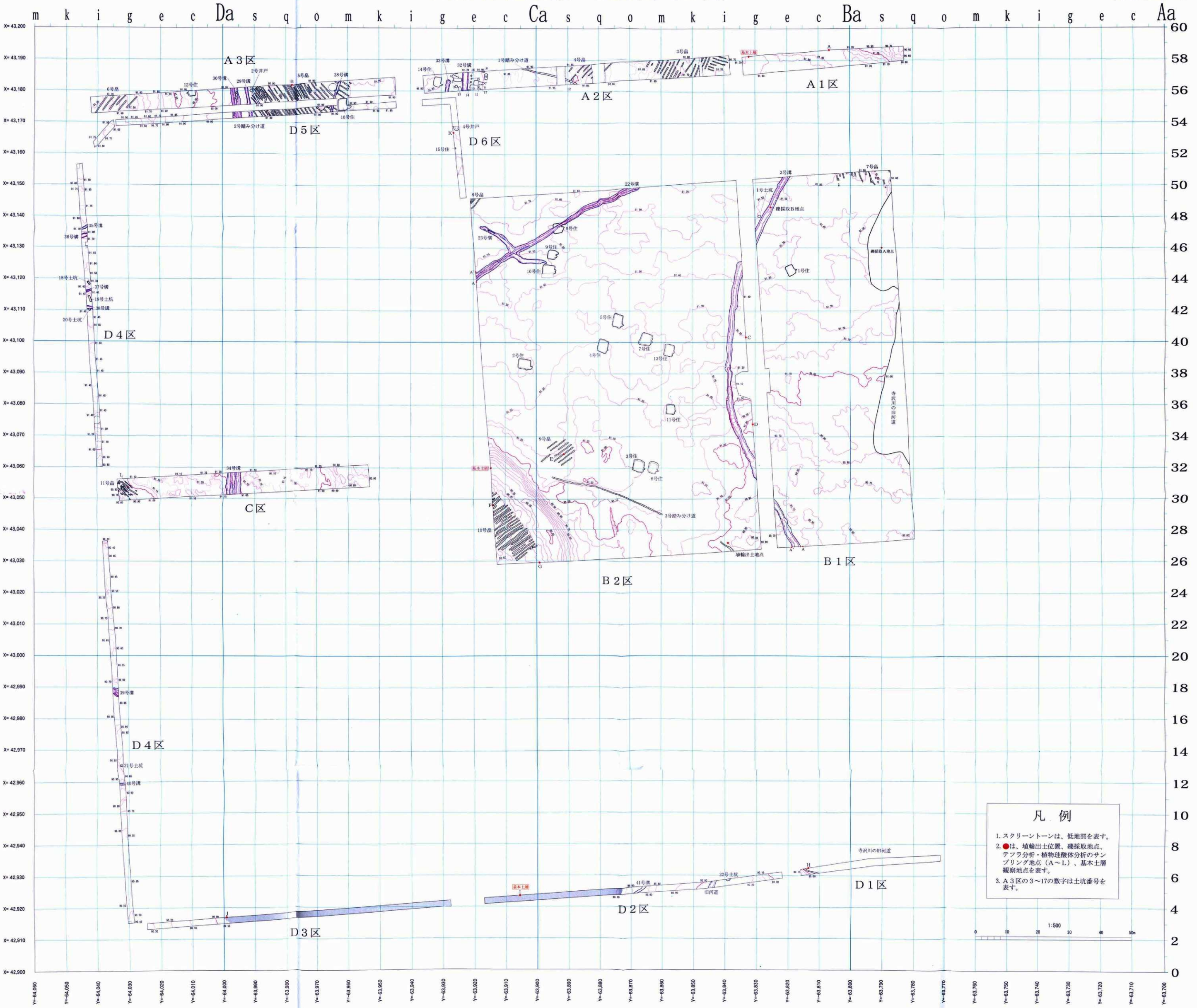
石関西田Ⅱ遺跡 全体図 (1面)

(付図1)



石関西田Ⅱ遺跡 全体図 (2面)

(付図2)



凡例

1. スクリーントーンは、低地部を表す。
2. ●は、埋出土位置、礎採取地点、テフラ分析・植物珪酸体分析のサンプリング地点 (A~L)、基本土層観察地点を表す。
3. A3区の3~17の数字は土坑番号を表す。